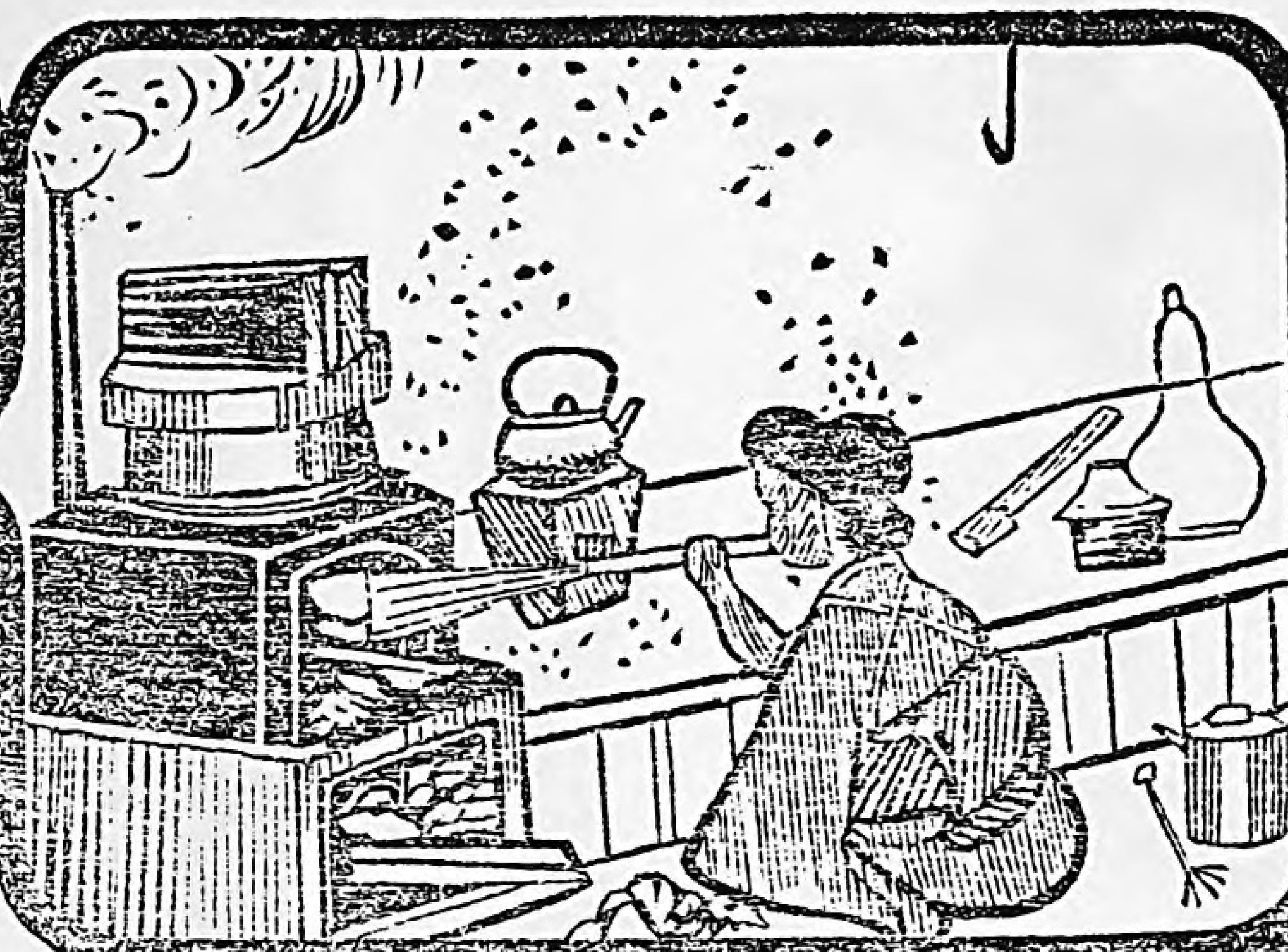
十月號

女子文壇

第七年第十二號



薪炭臺所



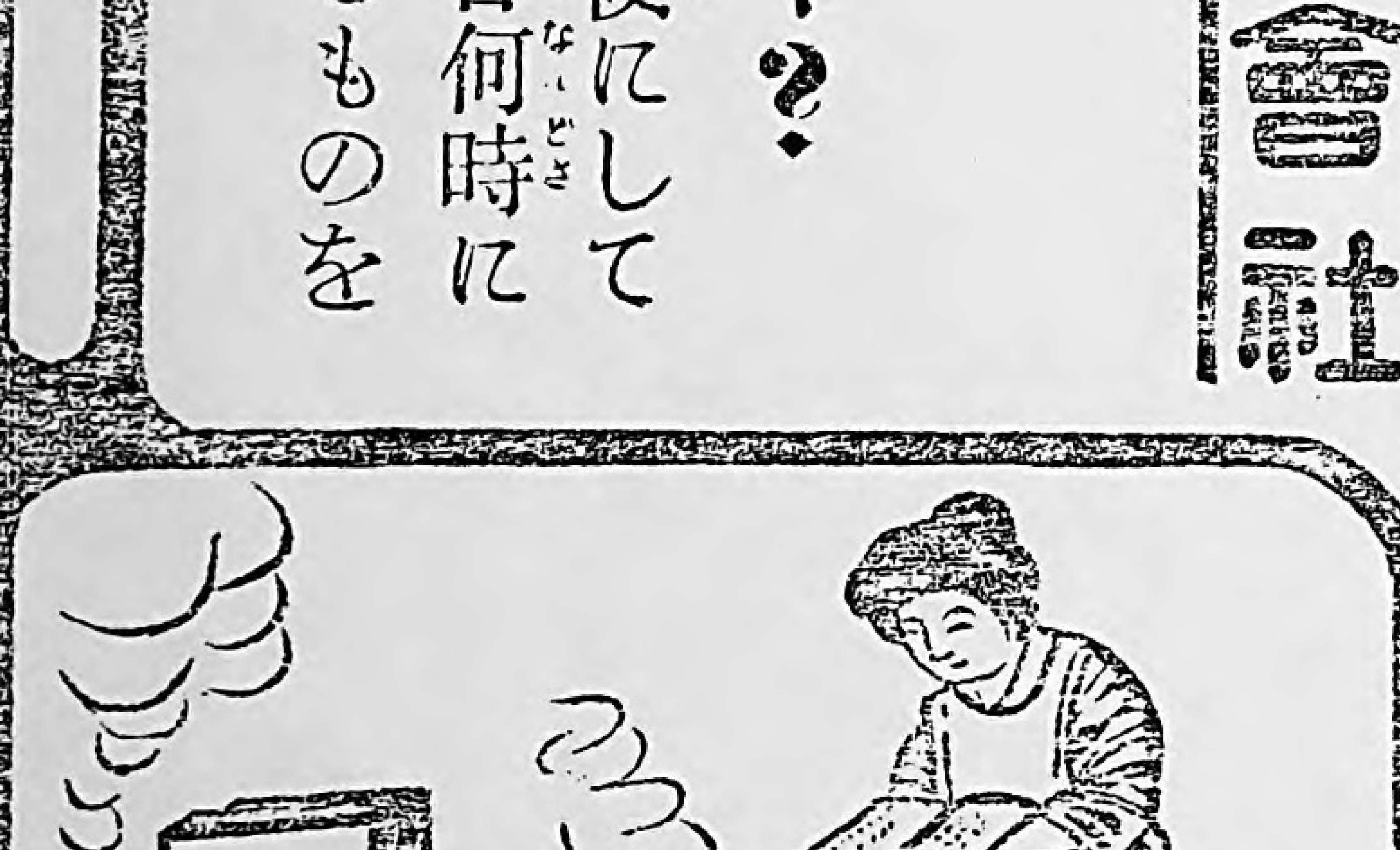
猶。在來の臺所を保存すべき必要ありや？

煙に咽び、塵に塗れ、家を燻し、汗を浴び、皮膚毛髪衣服を汚し、火災を慮り、時間を徒費しても、

東京瓦斯株式會社

瓦斯竈の使用を遲疑し給ふ理由ありや？

煙なく、塵なく、清潔にして安全、輕便にして經濟場所を取らず、時間を費さず、何日何時にてもマッチ一本にて用を辨ぜられ得るものを



瓦斯臺所

最も進歩せる子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦痛なく且つ局所の痾に醫師の診察を受くる事の厭はしきより隱蔽放任して治療を怠るより病勢昂進して身心共に衰弱し遂に不妊娠早産流産の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て有効簡便に使用する適當の婦人藥なきに因る一大缺點なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進歩は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて治療の目的を達するなり

獨乙の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は是等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮內膜炎にて下腹痛み産前産後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は直に輕快全癒する驚くべき卓效ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は一度是非使用して病氣を根治し給ふべし

尚梅毒消渇の疑ある人は唯一丸を併用せば其の効最も大なり

定價
八球入金五十錢〇
十八球入金一圓〇
四十球入金二圓〇
特製百十球入金五圓〇
內地遞送無料

唯一丸發行所 中西葆光堂藥局
東京市本郷區湯島天神町壹丁目五拾參番地
振替貯金東京口座二千五百番 電話下谷五四七番

◎全國到る所の有名なる藥店にて販賣す

女子文壇拾月號（第七年第拾貳號）目次


壽美禮おしろい
◎壽美禮おしろいは即座の化粧に適し使用最も簡便にして濃くも淡くも自由にして殊に多量の花精を含有し温雅なる芳香を放ち湯上り等に用ひて爽快を覺へ美は益々艶を發揮すべし
◎煉製水製粉製其他各種純白の外肉色種々有れば如何なる人の如何なる化粧にも適す
◎壽美禮洗粉は西洋色白くなる洗劑にして朝夕用ふれば皮膚のあれる事なく滑に汚を落し色白く美しきに至るべし髮洗ひに用ひ髮のねばりを取り油あか等を生ぜず凡て半襟を洗ひてよごれを落し總て物を漂白する性あり
◎賣捌處は全國到る處有名の小間物化粧品店及藥店にあり
水（大壜廿五錢 中壜十五錢 小壜十錢）
ねり製（極大壜四十錢 大壜廿錢 小壜十貳錢）
洗粉（別製箱入 金五十錢 緑、紫、紅彩紙香ひ箱入 八錢 大袋入 貳錢 小袋入 壹錢）
壽美禮煉白粉
壽美禮水白粉
壽美禮粉白粉
壽美禮打白粉
壽美禮はらひ粉
東京東西國元町
製造本舖 壽美禮堂
電話浪花二七六五番

秋の東京灣



大下藤次郎筆

（大江製版）

新刊　滑稽奇拔の珍本　大好評

二人やんちやん

いたづら小僧日記の著者
佐々木邦君著

製本　賣出し



新聞評判記

▲東京日々新聞曰く　「二人やんちゃん」初め「あまのじやく」「お猿さん」「仙ポコ」「昔と今」等五篇を收め、惡戯小僧にはお馴染々き著書の筆なれば面白いこと請合ひ、中には子供に解る樣な諷刺や、教訓を含むだ話も交つて居る。

▲中央新聞曰く　いたづら小僧日記を出してより此著者の名は頗に坊ちやん孃ちやんの間に知られたり、此の書はあの樣なおもしろい得意な文章にて書きし少女小説「二人やんちやん」「あまのじやく」「お猿さん」「仙ポコ」「昔と今」の五篇を蒐めたるものにて既御馴染の坊ちやん孃ちやんもあらんが初秋の讀物としてはこよなくおもしろきものなり。

▲帝國新聞曰く　二人やんちやん・お猿さんの外、あまのじやく、仙ポコ、昔と今、等雜誌「少女」に掲載したもの。斯う纏めてみると一氣に讀むことも出來れば忙しき人も亦樂むを得可し。僕は試みに「あまのじやく」を讀みたるが、傳説依存の上よりも、著者に謝すべきものあるを覺えたり。文は輕快平明。

▲やまと新聞曰く　二人やんちやん、あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の五篇を收む太郎と花子とのやんちやん愈々出でて愈々甚だしく、而も一點邪氣を存せざる流石子供神子たるを思はしむ少年少女の讀物として極めて面白きのみならず藥になればとて毒になる氣遣ひ無し

▲都新聞曰く　本、二人やんちやん、いたづら小僧で子供衆に御馴染の佐々木邦氏の作である、滑稽の裡に諷刺あり而白味の間に教訓を籠めてあるよい本。

（まだある追々掲ぐ）

全一冊美装石版木版挿畫數葉入

正價金參拾五錢

送本料金六錢

東京　京橋區大鋸町　振替一七二九　女子文壇社出版

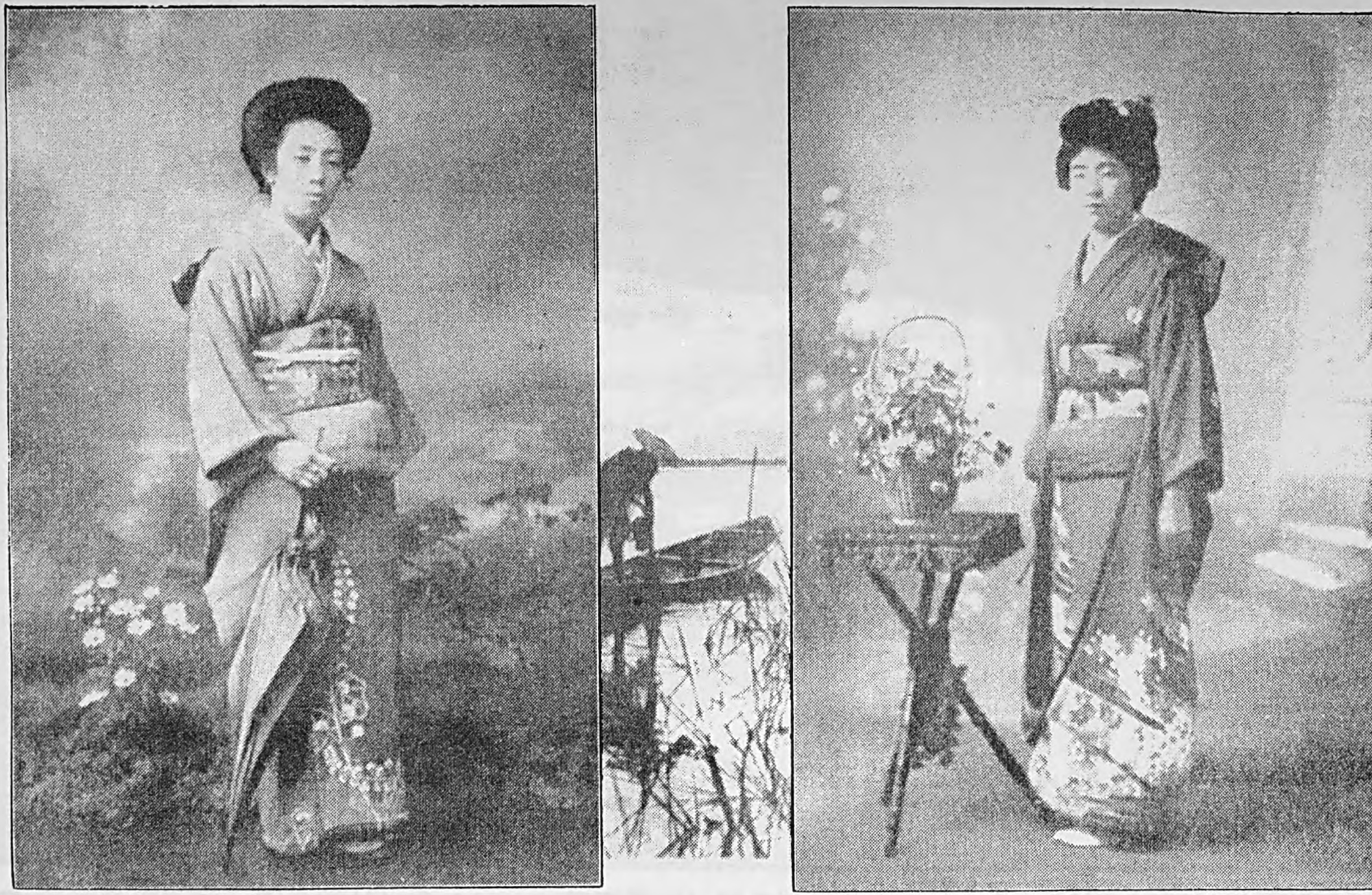
どこの本やでも取次販賣す

東伏見宮妃周子殿下



此寫眞は英國戴冠式に臨ませられし際彼の地にて御撮影ありしを特に本誌の爲に御貸下ありしものなり

野菊



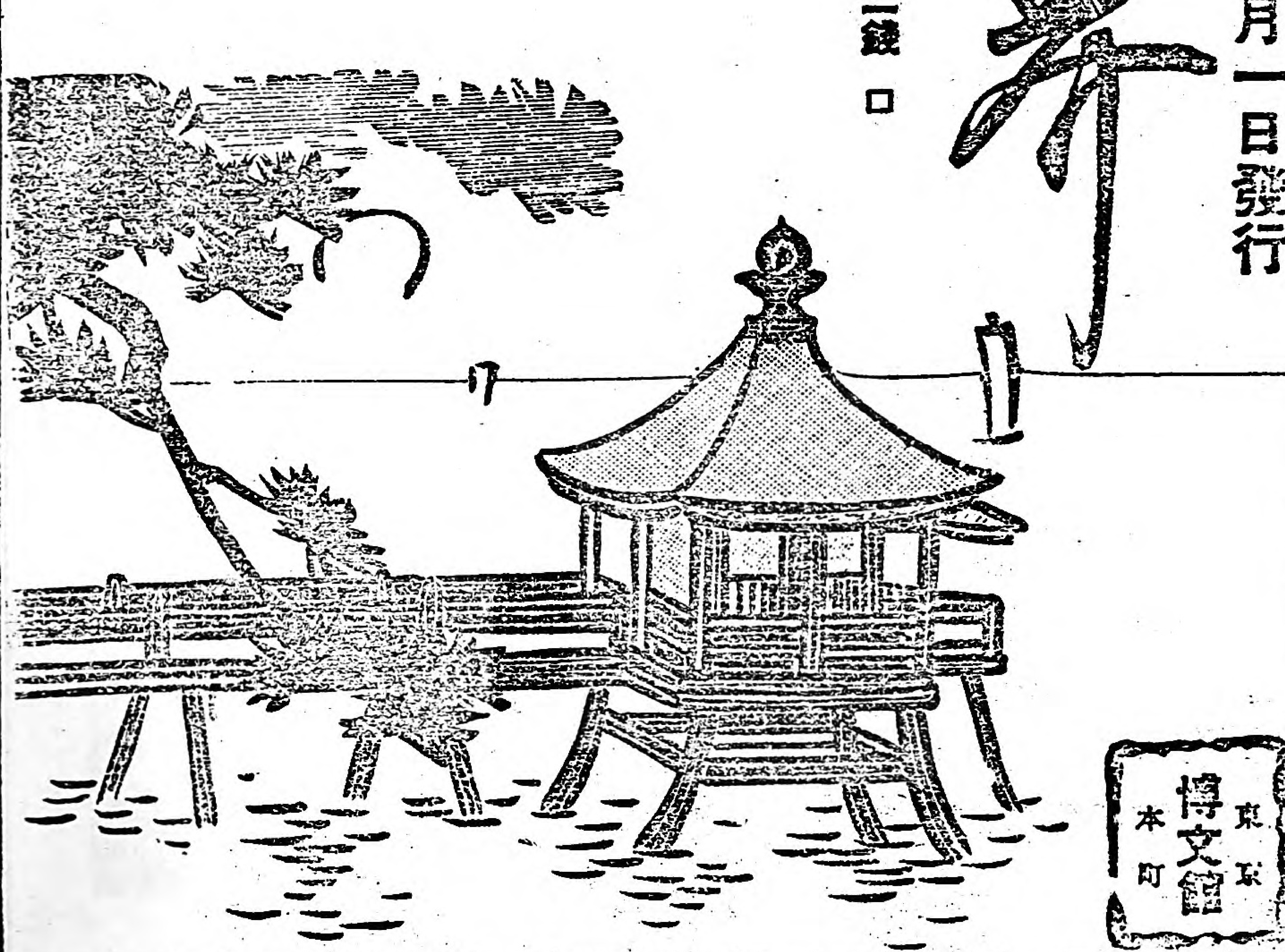
時事新報社長福澤捨次郎氏令嬢 その子

東京醫科大學助教授醫學士橋本節齋氏令妹

□第拾壹卷第拾二號……十月一日發行

女學世界

□菊判大判紙數二百八頁 口繪木版寫眞版澤山 正價二十錢 郵稅二錢□



東京本町 博文館

簡易殺鼠劑

Common Sense Rat Exterminator.

コンモンセンスラツトエキスターミネートル

本劑は北米加奈太コンモンセンス製造會社の製造に係るものにて曩きに同國農務大臣ジヨンドライデン氏が其効力の卓絶なるを賞賛の餘り世界公益の爲め各國政府に是れが試用を勸奬紹介せられ我日本政府も亦之れが配付を受け西ケ原農事試驗場に於て試驗せしに其効力著しく其後本社發賣以來一般使用者の實驗上孰れも豫想外の効果を得て驚嘆せざるものなし故に本劑の効力に就ては今更玆に喋々せず大方の諸彥邦家の爲め速に本劑を使用し鼠族の撲滅に努められん事を切望す



半オンス入 五十五錢
一オンス入 一圓
三オンス入 二圓九十錢

女子文壇愛讀者に限り送費無料

●使用法は現品に添付せるも參考の爲め御入用の方は本劑に關する詳細なる說明書進呈すべし

本社發賣品 蠶具製絲諸器械詳細圖解目錄 無代進呈

東京市下谷區仲御徒士町三ノ五九

東洋一手販賣元 日本蠶業株式會社藥品部

電話下谷一二五四番
振替口座東京五一二六番

蠶具問屋

蠶業諸器械何でも有ます
圖解目錄無料で差上ます

東京市下谷區仲御徒士町三丁目五十九

日本蠶業株式會社

振替貯金東京五一二六番
電話下谷一二五四番

悪筆は大損

新學期開始

本會獨特の通信教授法の効果顯著なることは既に定評があります。如何なる悪筆の方にても本會の獨特通信教授法に依れば直に上達致します、論より證據入會してお試しなさい。



書者 小野鵞堂先生
書者 稲川雲谿先生
書者 玉木愛石先生

見本 詳細會則 無代進呈

東京本郷區大學正門前 **帝國習字速成學會** 電下三〇一一番 電下三二一〇番

婦人文庫

皇后陛下
賜台覽

1 花月草紙
2 三草集 明倫歌集

麗美なる本書は婦人の精神的美裝也

3 大鏡
4 姬鑑
5 假名烈女傳

全五十冊
三六判形三百頁
天金付頗美本
各冊正價卅五錢
送料四錢

東京本郷森川町
文成社
振替一九四六七番
電下三二一〇番

帝劇の森律子孃





林田書記翰長夫人令妹好子（女學館卒業）



實業家中村増雄氏令嬢増子



和田春子嬢（女子商業優等卒業）

肺結核全治之奇法

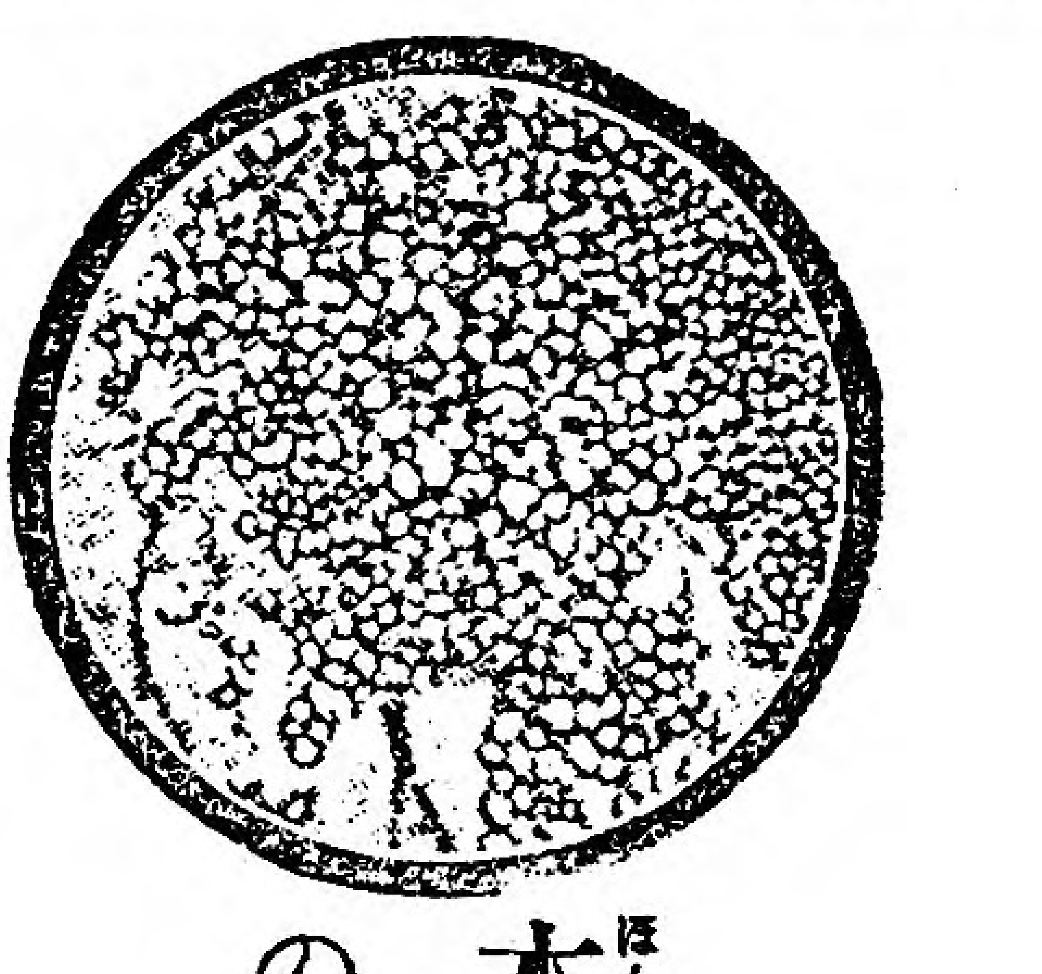
全治者數千人に達す
所謂新藥に非ず

近時肺病の治療藥として續出する新劑は其數幾百千然も人體内に於て殺菌の効力あるものは本療法の外之を認めずとは有名なる細菌學の大家古弗博士の證言なり宜なる哉肺結核治療上の學理的見地より論及せば能く結核菌を殺滅するに足る濃度の劇劑は人間の臓器細胞を害するや論なし現に患者は所謂大家の新藥が其効果を奏せしもの幾何かありしぞ余は曩に仁義に富める多くの學者先輩の援助を得て肺結核競爭療法を企て歐洲各地病院溫泉地療養所等より多くの新材料を收集し茲に空前の新療法を發見し肺病患者寳典なる書物と全治の證據を刊行し五千卷を限り無代にて之を患者に分つ事とせり

大勳位伯爵東郷閣下題字
從一位侯爵久我閣下題字
正二位伯爵東久世閣下題字
正二位伯爵土方閣下題字

肺病患者寳典 全

世に不治の難病と稱せらるゝ肺勞患者が本療法の奇効に浴し全快の幸福を得し實例は既に數千の多きに達す抑々肺病の醫藥甚だ多けれど悲かな現今にては攝生的本治療法の如く大効を奏するものは他に之ある無しとは北里醫學博士柴山醫學博士鈴木醫學博士が極力唱導されし處にして如何に本治療法が最も進歩せる唯一の療法たるを知に足らん



本療法の奇効

○發熱盜汗　○血管破裂　○血痰不眠　○食慾不進　○呼吸困難　○咯痰咳嗽　○胸部疼痛　○下痢貧血　○喉頭痛　○心臓衰弱　○肋膜滲潤　○胃腸障害

然れば肺結核、肺炎、肋膜炎、氣管支加答兒等に罹り前記の症狀を呈し醫藥効なく煩悶の人は決して失望悲嘆を要せず直に郵券二錢添東京日本橋呉服町二番地順天堂藥院安原尙親宛申込ば全治の秘術を盡せる前記の大書冊無代送呈す

日本一少女

口繪原色版
寫眞版挿畫美

拾月號發刊（第三卷第十號）

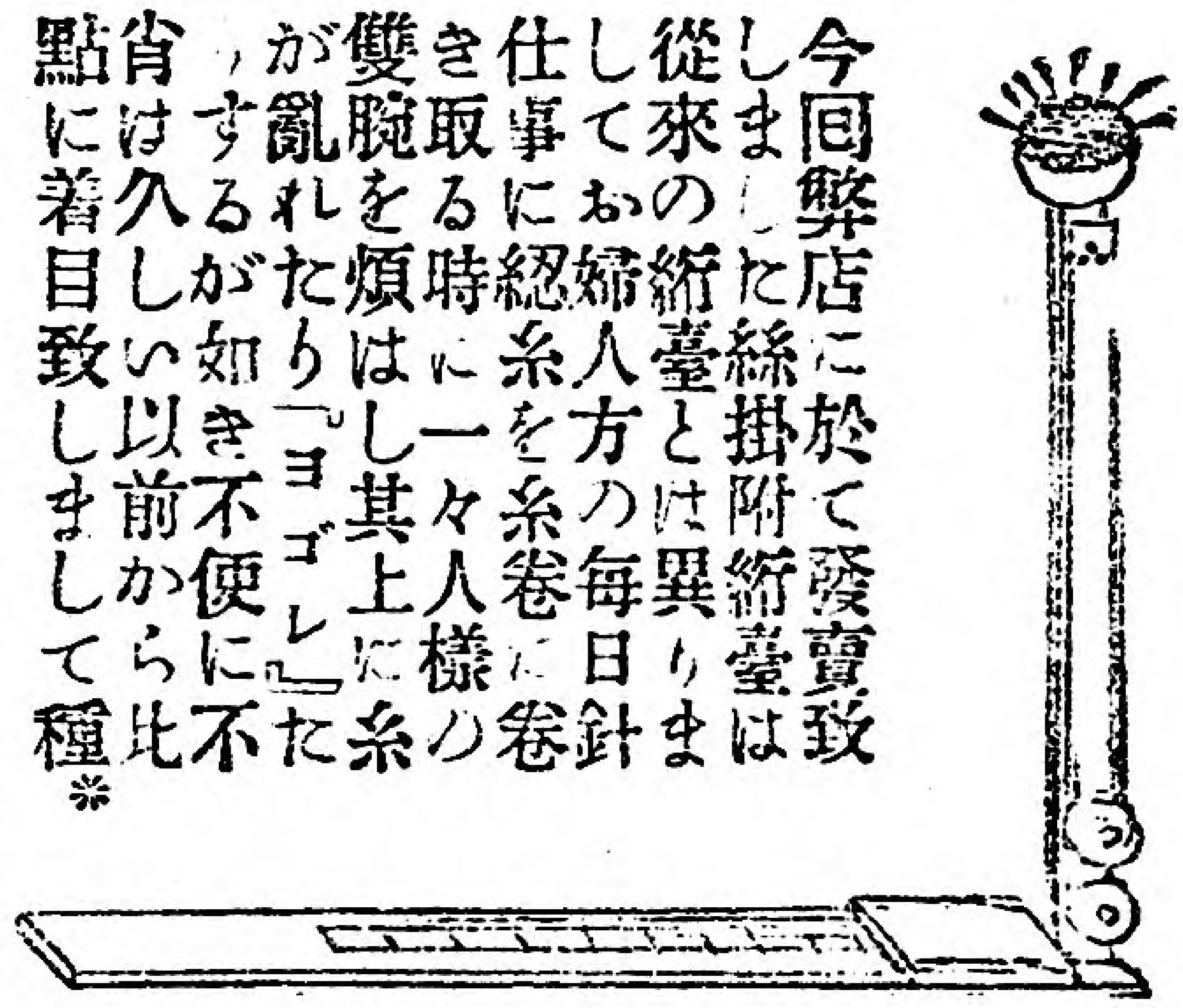
定價（一冊金十錢 送料一錢）（半年分前金六十三錢 送料共）

毎號賣切の盛況

東京市京橋大鋸町 女子文壇社出版（振替東京壹七貳九） 賣捌到處書店

特許竹中式 絲掛附絎臺

御婦人方の新福音



今回弊店に於て發賣致しました絲掛附絎臺は從來の絎臺とは異りまして御婦人方の毎日針仕事に綛糸を糸巻に巻き取る時に一々人様の雙腕を煩はし其上に糸が亂れたり『ヨゴレ』たりするが如き不便に不肖は久しい以前から此點に着目致しまして種※

※々苦心しました結果上圖の如き人手を煩はさず單獨にて糸巻へ自由に巻き取ることを得る絲掛附絎臺を發明致し特許局の特許を得て廣く賣出すことに致しました右絲掛附絎臺を御使用の節は從來の絎臺の様に決して不便もなく御使用後は『ヲリタヽミ』も輕便で且つ針差しや尺度を自由に『シマイ』得る様に出來て居りますから一般の家庭用並に女學生諸君の學校用としては輕便此上もありません

使用法

右絲掛附絎臺は下圖の如く下部にある二個の糸掛車を糸の輪の長短に因りて『ネジ』鋲を以て自由に『シメ』糸口を中央にある輪に通して糸巻に巻く時は二個の糸掛車自由に廻轉して他人のお手を煩はさず糸の亂れるが如き心配なく單獨にて容易に糸巻に巻くことを得て輕便此上もありません是非御使用を願ひます

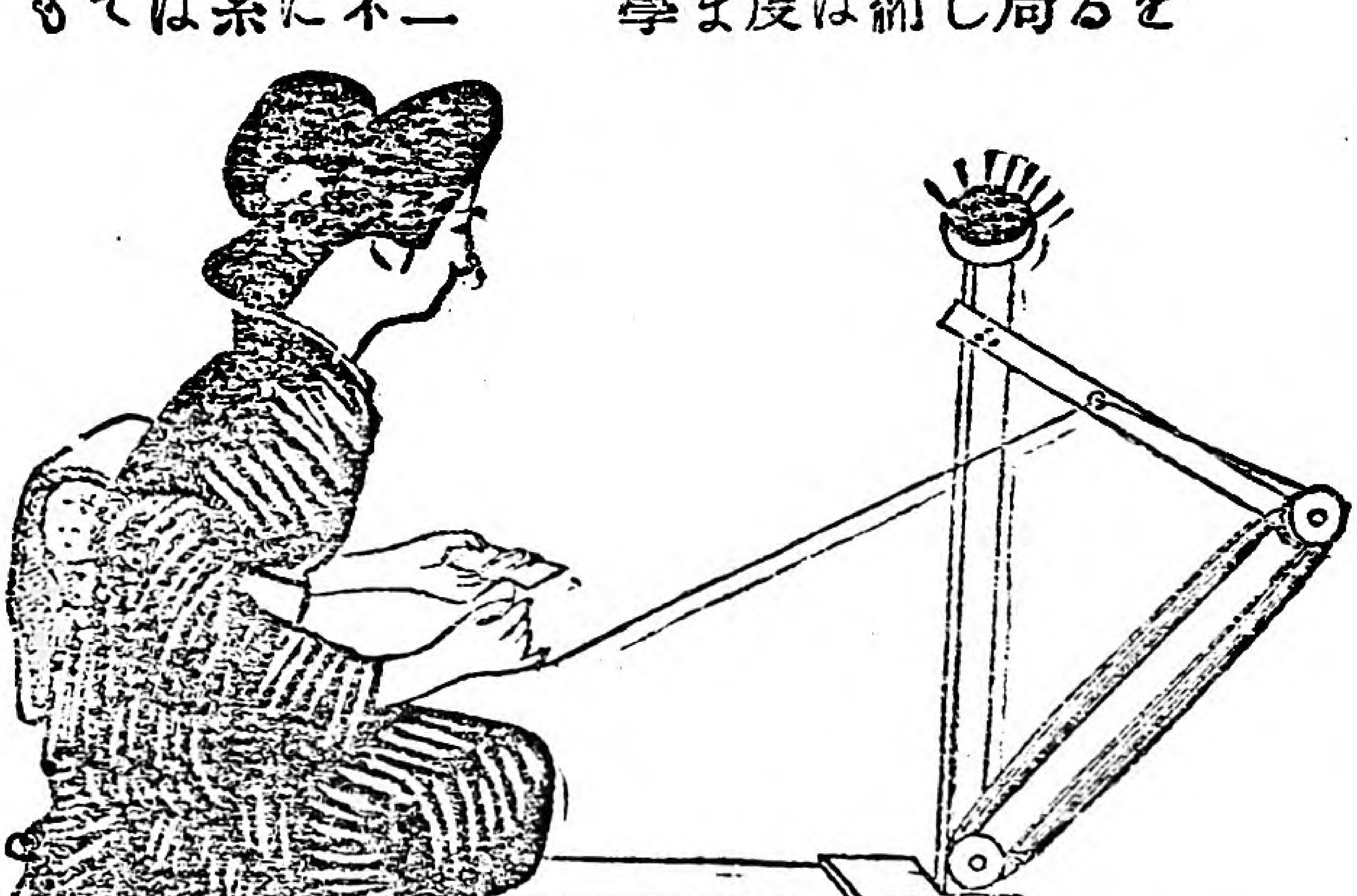
●販賣所は有名なる呉服店及び組糸店、荒物店にあります

【定價】

御誂黒塗製(美麗箱入) 金六拾錢
特製(同) 金參拾錢
上製(同) 金廿五錢
並製 金貳拾錢

地方は送料八錢 市内は無料

●特約販賣お望の方は至急御來談あれ



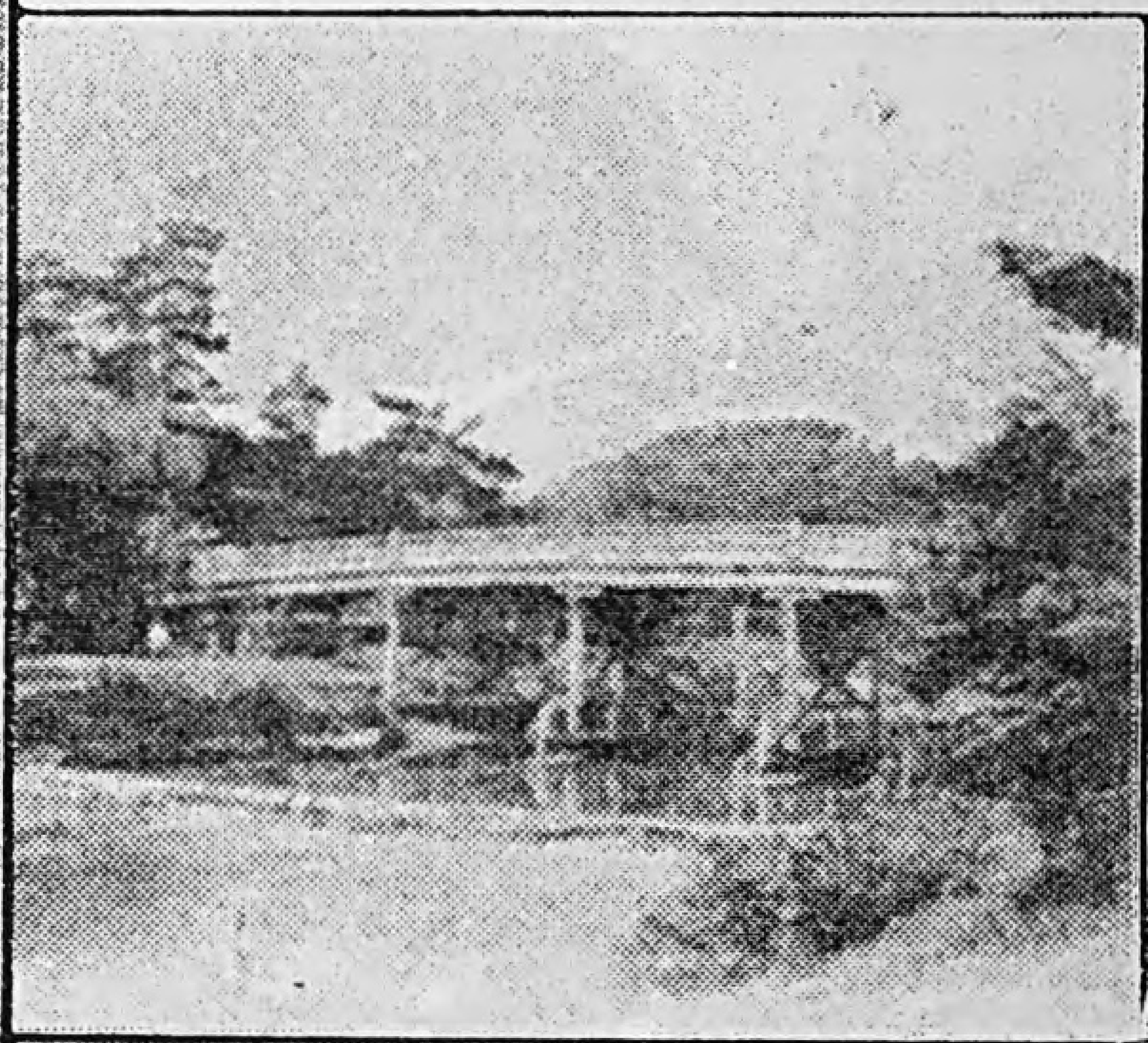
製造發賣元 竹中商店
東京市赤坂區青山南町二丁目十六番地
電話芝二八百八十四番
振替貯金口座東京三二二三番

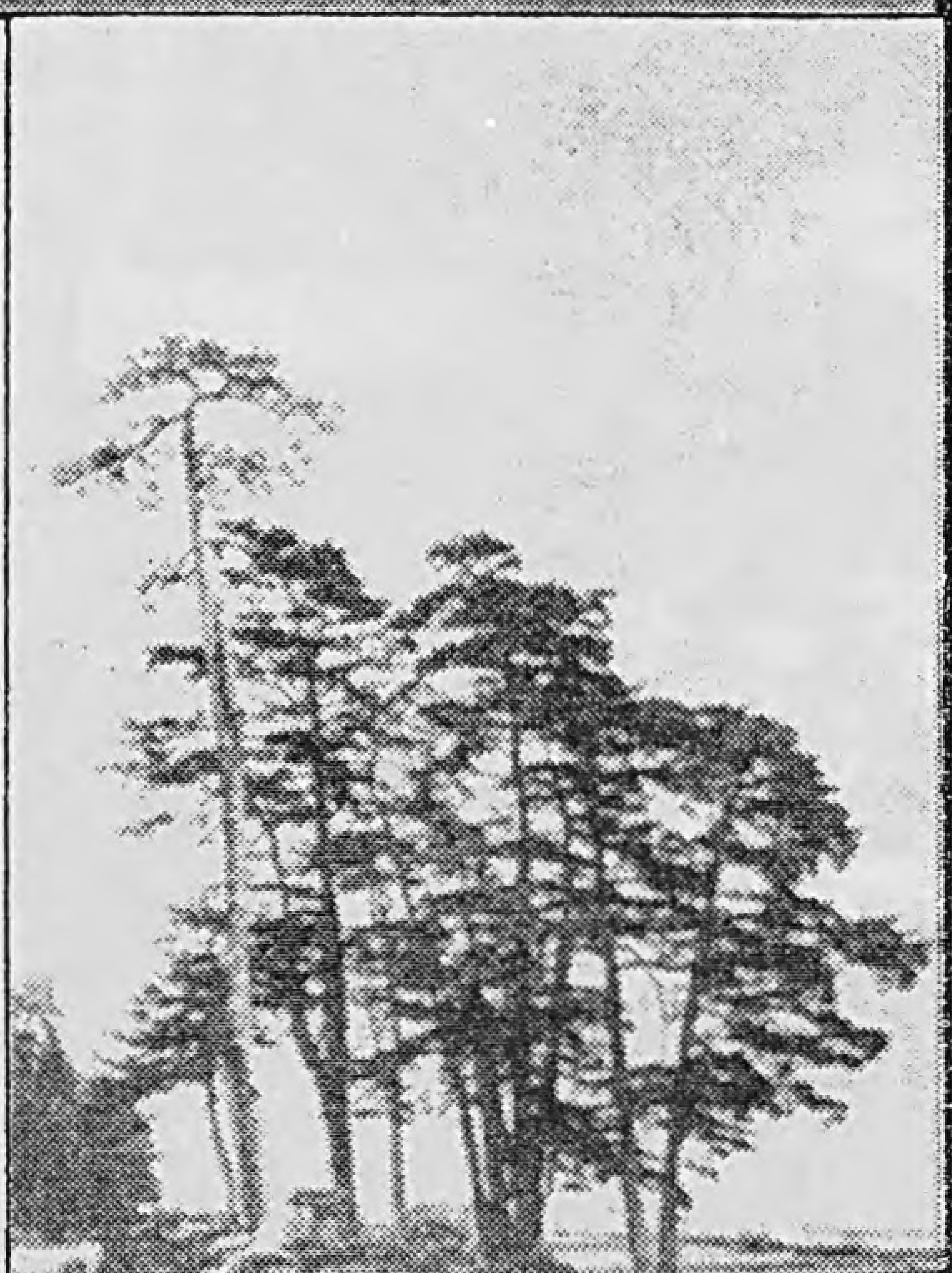
販賣店 竹中賣店
東京市京橋區銀座二丁目發明館内
電話京橋三三七番・三三八番

秋晴



中原ふみ子孃（女學館出身）







中御門經恭侯令妹佐保子孃


法學士鳩山秀夫氏と夫人千代子


法學士鳩山一郎氏と夫人かほる子

丘の人著　落合芳麿畫

新刊

家庭小説 **勇ましき少女**

定價金三十五錢　郵税金六錢

本書は、最も新らしい思想の下に成つた、家庭の絶好讀物である

巖谷小波題句
鏑木清方畫　△わらび山人作

好評十六版

家庭小説 **孝女白菊**

定價金四拾錢　郵税金六錢

鏑木清方畫　△阿蘇の人作

好評六版

家庭小説 **後の孝女白菊**

定價金卅五錢　郵税金六錢

落合直文先生の『歌』、井上文學博士の『詩』とに依つて夙に喧傳せられたる孝女白菊は著者の流麗なる筆に清き家庭の小説となりて江湖に見ゆ。

發兌元　東京市淺草區下平右衛門町九　**岡村書店**　振替口座東京一九〇六五番

ちぢれもくせも
一大奇法
もはへらけあい

本法は女髪結師安部歌子女史の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり照會者は往復はがきにて申込あれ

東京麹町區三番町六十七　小林濟世園

ぢ

●イボ痔　●脱肛痔　●裂痔　●痒ゝ痔

●痔核　●痔出血　●痔瘻　●痔一切

にて御困難の方は二錢郵券を添へ御照會あらば病原理由全癒説明書を送附す

東京市京橋區疊町　小松盛林堂

▽皮膚病患者の一大福音△

●あざ●にきび●ほくろ●そばかす●たむし等



害なく短時日に除去し根治再發せざる事は責任を帶びて保證し實に驚くべき世界に類なき奇効あり尚郵券三錢封入御申込あれば數百人が全治せられし證據と自宅治療法の道を報知仕候

東京府大森停車場上　**棚橋博濟院**

毛ぬき 新劑

從來脱毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脱毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脱毛劑ヘルーピンを發明せるに多數實驗の成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脱毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘルーピン
定價 壹圓
特製 參圓
內地送料 十五錢
海外 三十五錢

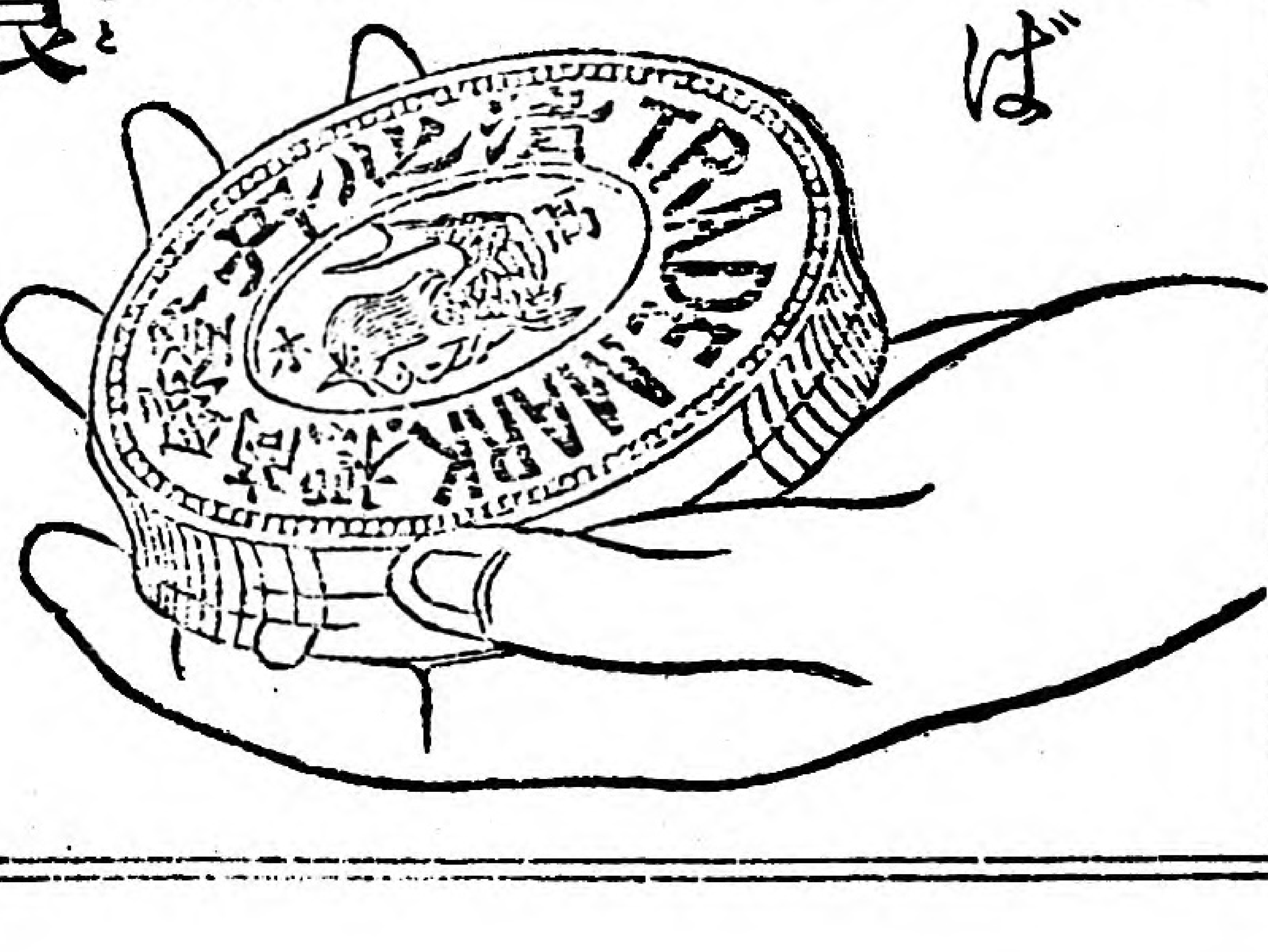
飲んで色白くなる藥

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確効あるものなく色黒き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し內服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ピオール錠は極て强度の清血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を清淨となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

藥名ピオール錠
壹劑 壹圓
參劑半 參圓
內地送費十五錢

東京市牛込區北山伏町壹番地
百合園製藥所

人若し藥を需めんとせば須く撰擇を要す
清心丹の三大特色は
一 効能の確實
二 品質の善良
三 價格の低廉



主治効能

心思鬱憂、頭痛眩暈、胸痛腹痛、
過酒過食、惡心嘔吐、溜飲宿食、
中暑中寒、下痢疝痢、舟車不快、
咯痰咳嗽、咽喉不調、齒痛口臭、

定價 壹圓箱入 五拾錢箱入 參拾錢鑵入 拾五錢鑵入
拾貳錢瓶入 貳拾錢紙包 拾錢紙包 五錢紙包

本舖 東京市日本橋區元大阪町八番地 高木與兵衛

流水



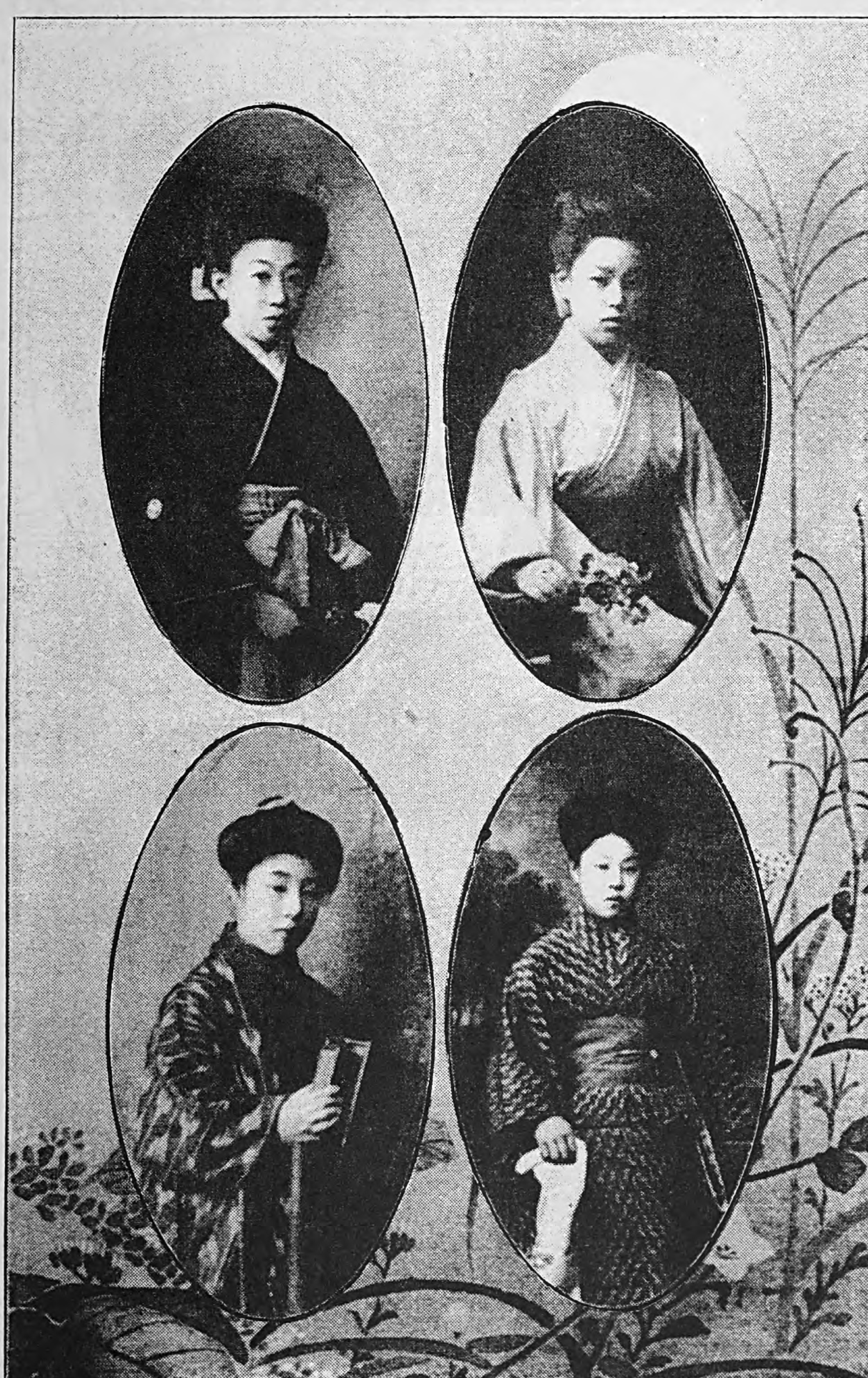
山田うめ子嬢（横濱生絲會社長山田氏令嬢）

黒田きよ子嬢（東京女學館出身）

樋下田千代子嬢仝富子嬢（跡見女學校出身）

松本澄子嬢（スミス女學校出身）

月かげ



永田よし子嬢

黒澤信子嬢

蓮見うめ子嬢

久佐賀満子嬢

東京六大新聞が小說『盲闘』に就いて如何に稱讃の辭を惜まざるかを見よ!!

●『やまと』曰、盲闘は氏が最近の作にして最も苦心を極めたるもの、其布置構想文章の洗練を經たる事近時流行のだらしなき小說と全く其選を異にす。……人生の紆餘曲折して轉變極りなきもの愈よ出で、愈々奇に怖しく怪しき運命に弄ばるゝ多くの男女を寫し、近來稀に見る面白き小說なり。

●『讀賣』曰、場所は相模野の一農村と其附近、時は明治十年前後、著者得意の筆は宛も一幅の繪巻物として當時の狀態を麗しく眼前に展開す…… 農村事情を知る點に於て此篇は一種の社會的歷史小說と云ふを得べきか…… 著者の筆は例によりて力强し。

●『萬朝』曰、波瀾あり曲折に富み……筆致漸く圓熟の境に達し健全なる文學として推奬に價す。

●『二六』曰、深刻痛烈の點は現代多くの作家企及し得ざる所が多いと思ふ。唯盲闘に耽り人生の到達する窮局を知らぬ現代人に向つて此くの如きの著は確に一大警鐘を亂打せるものと云ふべきである。

●『國民』曰、人情の葛籐あり家庭の衝突あり人生の姿を寫し人情の機微を捉へて舞臺も廣く凡てに作者の老熟を思はしむ。

●『日本』曰、剛欲爺の期待と結果の大きな矛盾それに深い重い人生の味がある。殊に全篇に亙りて情緒の霑ひが滴る許りであつたのは嬉しい。

小說 盲闘

◎後藤宙外新作 ●鰭崎英朋口繪 ●野生司香雪裝畫

菊判全一冊
二百五十頁
裝釘頗優美
定價八拾錢
郵稅金八錢

東京市日本橋區通油町
(振替口座三三四二番)
水野書店

婦人畫報

十一月一日 十月の發卷 本號に限 卅八錢

郵二五二一五六一〇一十卅八錢
稅錢厘冊十錢冊五錢二一八

◎東伏見宮兩殿下英皇戴冠式御參列御服裝御眞影
◎姿見ハ前◎單騎旅行の婦人……
◎女の富士登山◎諸國婦人風俗……
◎白き傘◎田舍乙女
◎梨本宮二王女殿下最近御眞影……
◎佛光寺裏方◎牛播の觀光……
◎令孃と書◎若葉會幹事諸孃
◎柳原典侍と和歌◎節婦かゞみ……
◎よみ賣の孝女…◎風流な蟲放ち…
◎踊の手振◎如花令孃鑑
◎新任各大臣夫人の面影……
◎女工生活◎母ハ愛◎井戸端…
◎新婚の土屋子爵夫妻……
◎黑田邸ハ客間◎秋の植物園……
◎京坂の女學校◎盆栽のいろ〳〵……
◎燈下可親 長夜美人の書見
◎畫室に於ける岡田氏と夫人
◎三井夫人と令孃其他……

秋季特別號

鏡 中澤弘光筆 二頁大三色版

夜 井川洗厓筆 廿度刷美人畫

紙數增加 光彩燦爛

◎婦人が家庭を離るゝ罪……添田博士
◎新大臣夫人にお目にかゝる記……
◎新婚の披露にまねかれて…みつ子
◎蟲干の半日……野上八重子
◎琴と婦人の體…榊博士
◎秋の感想 跡見花溪、三輪田眞佐子 柳橋絢子、下田歌子
◎萬引をする婦人……杉江學士
◎秋の化粧は如何にすべき……
◎新時代の夫婦の關係……福來博士
◎德川時代の女ハ躾……關根博士
◎男女競爭…今井學士◎踊 田邊學士
◎其日々々 三宅花圃
◎一本杉 小金井喜美子
◎家庭運命論……遠藤博士
◎婦人と子供の食物……井上秀子
◎月見の話し……篠懸學士
◎自分と責任 安井哲◎泣…源學士
◎女權擴張……榊博士
◎我寫眞帖 時雨
◎番町使 晶子
◎この頃のお惣菜色々…里々子
◎利己と利他の交際 中島德藏
◎十月の趣味と物語……しづか

東京麴町區飯田町四丁目四番地

東京社

電話番町二三三九番
振替口座一一八一八番

新學期開始

◎本會は眞面目に短歌を研究し試作せんとする初學者の爲に現代詩歌壇の名家が特に講演せられたる平易簡明なる和歌講義錄を發行し、懇切なる作歌の指導と、短歌に關する專門的智識を供給する。短歌に趣味を有する人、短歌を眞面目に試作せんと欲する人、現に作りつゝある人々の入會を待つ！

本會執筆講師

尾上柴舟　○金子薰園　○水野葉舟

太田水穗　○岩野泡鳴　○三木露風

窪田空穗　○若山牧水　○前田夕暮

其他有名大家數名擔任

和歌講義錄

此際至急入會者に限り入會金を免除す

見よ!!! 舶來ラフ紙印刷は本講義錄唯一也

全國新聞批評一斑

◎近年敷島の道を學ぶ者都鄙益々多きを加へ來れるは喜ぶ可き事なるも其作往々杜撰に流れて傑作を得るに難きは斯界の通弊たり今や大日本短歌會なる者設立され之が好指導たらんとす、其內容に輯錄せる材料悉く時代の要求を滿し、講述叮嚀眞簡初學者の良師友たり（小樽）◎新派和歌を學ばんとする者の好楷梯たるべし（山梨）◎苟くも和歌研究者には無二の良師友たり（北海 イムス）◎中學生程度の短歌初心者に便利なる點多し（新每）◎和歌講義錄として斯程新しく面白きは類ひ稀なり（福民）◎我國歌壇の名士が揃へて講義振り頗る親切なり（根室）◎作歌法の指導に頗る懇切を極む、國風に志す者の是非とも必讀すべきものなり（北國）

見本附き會則往復端書申込次第無代送呈

東京市神田區旅籠町一丁目

大日本短歌會

振替東京一九五五番



青年實用 讀書作文辭典

小山左文二先生編

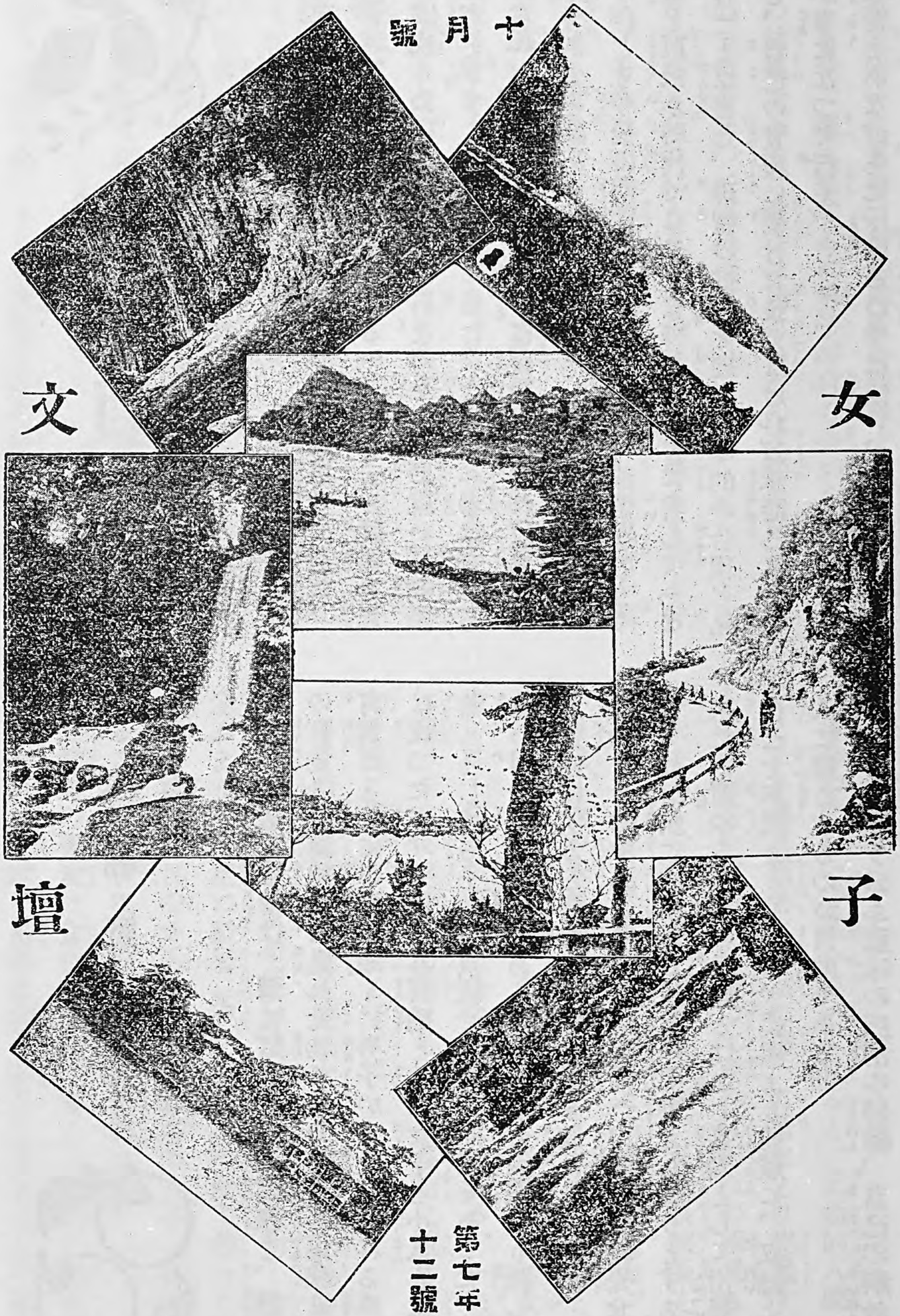
美本函入菊半截紙數六百八十頁定價金八拾錢送料拾錢

本書は最新式の辭書編纂法に據り青年學生諸君が讀書作文の良師友たり好侶伴たらしめんことを目的として編纂したるものなり故に現今における中等各學校に用ひらるる國語漢文教科書青年用國語漢文讀本竝に小學校教科書等に載せられたる日常實用の漢字五千餘を選びてこれが音訓を示し更に該漢字を首字として構成せられたる熟語一萬五千餘をその下に附記して一々その讀み方及び意義を解說せるものなり又本書には畫引索引の外總畫索引及び五十音索引等を加へて檢索上の用意親切周到を極む從つて書中の難字難句を索出するの容易なること恰も物を嚢中に探るに似たり今や金風授衣の候燈火正に親しむべし大方の青年學生諸君請ふ速かに一本を備へて諸君が讀書作文の一大進步を期せられよ

東京市京橋區南傳馬町 **目黑書店** 振替貯金口座二八〇九番

十月號

女子文壇



第七年十二號

私の貞操觀（上）

與謝野晶子

☆

従來は貞操と云ふ事を感情ばかりで取扱つて居た。

「女子がなぜに貞操を尊重するか。」斯う云ふ疑問を起さねば成らぬ程、昔の女は自己の全生活に就いて細緻な反省を下すことを缺いて居た。女と云ふ者は昔から定められた然う云ふ習慣の下に盲動して居れば其れで十分であると諦めて居た。

けれども今後の女は然うは行かない。感情ばかりで物事を取扱ふ時代ではなくなつた。總てに對して「なぜに」と反省し、理智の批判を經て科學的の合理を見出し、自己の實證に繫けた後でなければ承認しないと云ふ事になつて行く。

感情をあながちに斥けるのでは無い、女が唯一の賴みとして居た感情は、謂はば元始的の偏狹と、歷史的の盲動とで海綿狀に亂れた物であつた。其偏狹は時に可憐だとして小鳥の如くに男子から愛せられる原因とは成つたが、大抵は其盲動と共に女子と小人とは養ひ難しとして男子から蔑視せられる所以であつた。今は女の目の開く世紀である。其感情を偏狹より脫して深大豐富にすると同時に、其盲動を改めるために、其れに軸または中心となる理智を備へ、理智に統覺せられつゝ放射狀に秩序ある感情の明動をしようとする時が來た。謂ゆる女子の自覺とは之を基礎として出發し、自己を卑屈より高明に、柔順より健順に、奴隸より個人に解放するのが目的である。

男子は斯う云ふ意味の感情の修練、自己の解放を古

くから氣附いて居た。希臘印度の哲學より近世の科學に到るまで、總て要するに男子が自ら全からうとする努力の結果である。女子は殆ど是等の文明に與つて、居なかつたと云つてよい。

初な女だと云はれることは最早何の名譽でも誇りでもない。それは元始的な感情の域に彷徨して進歩の無い女と云ふ意味である。野蠻な女と云ふ意味である。氣が附いて見ると、男子は大股に潤い文明の第一街を歩いて居る。哀れなる女よ。男と對等に歩まうとするには餘りに遲れて居る、我々は早く此徑より離れて追ひ縋りたい。

☆

總てに無自覺であつた從來の女に貞操の合理的根據を考へた者の無いのは當然であるとして、あれ丈女子の貞操を嚴しく云ふ我國の男子に、今日まで未だ貞操を守らねばならぬ理由を說明した人の無いのは不思議である。

貞操の起原に就いても亦我等は何の敎へられる所も無かつた。

自分の乏しい智識で考へて見ると、元始的人間に貞操と云ふ樣な感念を自然に備へて居たとは想像することが出來ない、古代に溯つて見れば何れの國民も一婦多夫であり、又一夫多妻であつた、又家長族長としての權利を男よりも女の方が多數に所有して居た。今でも西藏其他の未開國には一婦多夫と女の家長權とが古代の俤を遺して居る、文明國に於ても娼婦や妓女のたぐいは一種の公認せられた一婦多夫である、一夫多妻に到つては何れの文明國にも男子の裏面に誰も認める如く現に保存されて居る。

男子の本能の自躍する儘に女子を選んだ元始的時代に在つては、後世の男子が我儘に玩弄物の如く女子を選ぶよりも、更に數層甚しい强壓卽ち暴力を以て女子を掠奪したのであるから、當時の女子に純潔を持することの出來なかつた、事は想像が附く。

其當時の男女は食物を集める事と、舞踏し歌ふ事とに日を送つたが、男子は特に女子を奪ふことに由つて

敵の男子と戰はねば成らなかつた。勿論當時の人間には國籍も住所も定つて居ない。水草を追うて浮動する小部隊が錯落として散在した事であらう。今日謂ふ所の如き「家」とか「社會」とか云ふ觀念の無かつたのは勿論である。

男子が他の男子と女の愛を競爭し、一旦我手に掠奪した女を獨占しようとするのは自然の性情である。其處に激烈な嫉妬が起つたに違ひない、嫉妬は本來男子のものであつて、其れが女子の性情と成つたのは後世の事であると思はれる。

女子に自ら純潔を持することの出來なかつた時代に貞操の感念が女子に自發しようとは想はれぬ。唯だ女子の持つて居たものは甲の男子を愛して乙の男子を厭ふと云ふ自然の好惡に過ぎなかつたであらう。好惡の感情はあつても其選擇の權利が女子に無かつた時代であるから好惡は一の感情として存在する丈で、其れを死守する意力即ち貞操と名づくる迄の感念は成立たない譯である。

之に反して男子には、嫉妬と共に女子を自己一人に服從せしめようとする思想、即ち貞操を女子に强ひると云ふ事が生じたに違ひない。自分は如此く直覺する貞操の起原は男子の威壓からである。女子にあつては本來被動的のものであると。

男子が一人で同時に幾人の女を獨占することは丁度今も其遺風を傳へて居る土耳古帝の如きものであつた一夫多妻は最も元始的なものである。一夫多妻となれば多妻の間に嫉妬の生ずるのは當然である。女子も遲れて嫉妬を感ずるに到つた。

☆

併し浮動して居た人間が土着する人間となり、「種族的階級」及び「家」と云ふ物を生ずるに到つて、男女の關係は政治的經濟的の關係と共に顚倒したらしい。此時代に於て男子は女の家に行つて婚を求め、結婚した後も男子は女の家に通ふのみで別に一家を創めて共棲することは無かつた。女の家に入聟となることも無かつた、生れた子女は女の家で育てる、女は子女に對

して母權と併せて家長權を持つて居た、男は夫としての權利も父としての權利も、妻及び子女に對して取ることが出來なかつた。「ちゝ」（乳）と云ふ語が古代に於いては父を意味せずに母の稱であつた。

女が家長であるのみならず、引いて族長の權利を握るものも少くなかつた。多くの女酋は現に古事記の神代史に俤を遺して居る。

土着した古代人は戰鬪と農耕と漁獵と商估とを同一人で兼ねて居た。まだ分業は起らなかつた。後世の如く體質の軟化しなかつた女子は男子



と共に其等の事に從つた。女兵はまた神代史に俤を遺して居る。

母を唯一の親として尊敬する所から總ての女の尊敬せられる風が生じ、又一面に純潔を好む神道の如き宗教上の儀式に處女を神巫として奉祀する習慣が出來てから、女子を尊敬することは一通りで無くなつた。之は前代の男尊女卑の反動とも見られる。

前代に於ては甲の男に掠奪せられ、又乙丙丁の男に掠奪せられて多くの異父の子女を育てた。女が此時代には「家」と云ふ城壁に據つて男子に對抗することが出來る樣に成り、男子の我儘な掠奪を免れることを得たのみならず、反對に男子をして愛情のために歡心を女子に求めしむるに到つた。女は男子を選擇する位地に就いた。上古の歌は概ね男子が其切ない心を女に傳ある機關であつた。

女が心を許した一人の男子を守らうとしても、男の心は一時その女に傾くのみで、時が經てば變化して新しい女を好んで遠かつて行く、入り代つて他の男が女の心を得ようと努める、男が多妻であると同時に女もまた勢ひ多夫とならざるを得ないのである。從つて女は依然として異父の子女を一家の中で育てて居た。

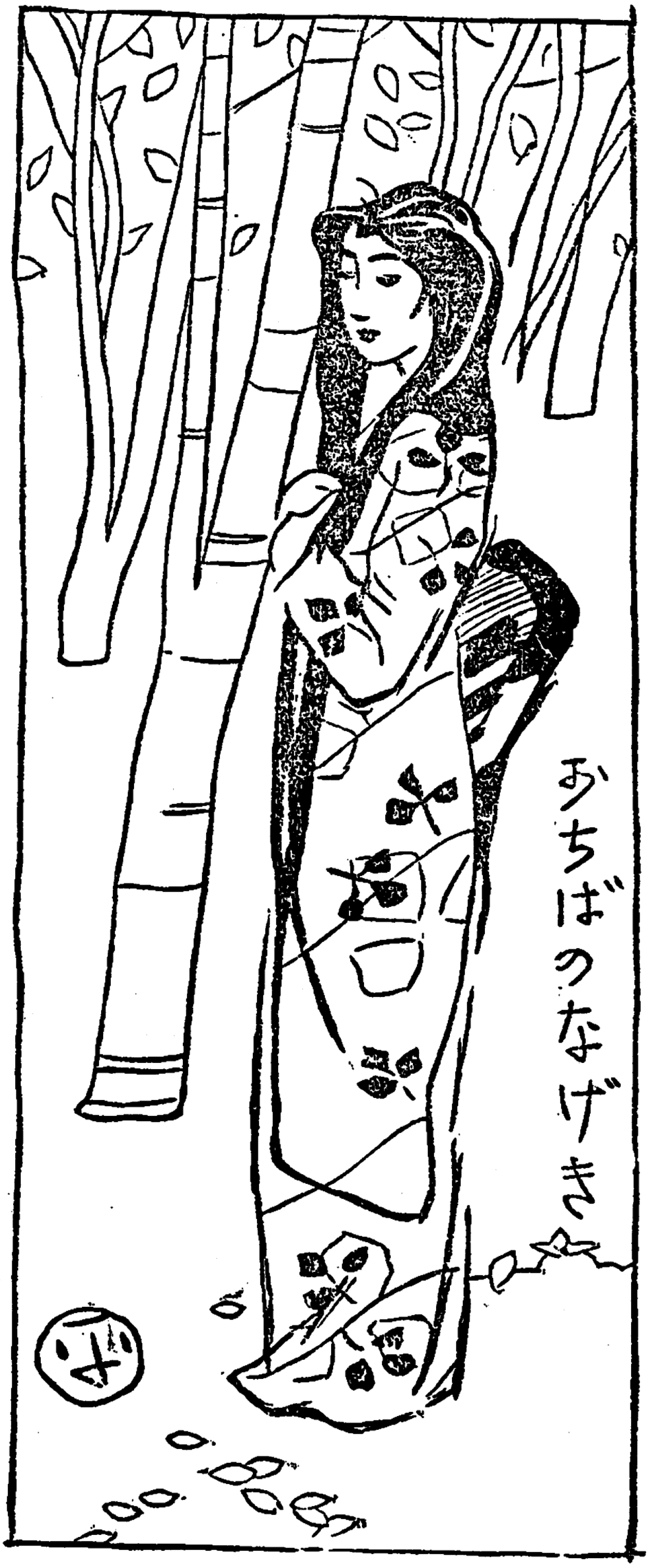
併し家があれば家長として子女を養ふ家產を尊重せねばならぬ事を感じるに到り、女は經濟上の事情から多くの子女を擧げる事を避けたに違ひない。又父を異にした子女の間に感情の齟齬が多くて一家の平和を破る事にも氣が附いたに違ひない。

又一方に種族の階級が隔たるほど、女が劣等な男子を聟にすることは恥辱である。自然男子を選擇する風が行はれて、前代の如く男子の我儘に從つて雜婚することが少くなつて行つたに違ひない。

以上、宗教上に處女の純潔を尊ぶ習慣と、家庭の經濟その他の事情と、階級的の自重と此の三つの理由から初めて女子が自動的に多くの男子と接することを嫌ふ思想、即ち貞操の萠芽とも云ふものを生じたのであらうと思はれる。

☆

更に次の時代に入つては前代の反動と社會的事情とからして男女の位地を再び復古の狀態に到らしめた。即ち種族との競爭の激甚と成るに從つて、戰士たる男子は時代の優者である、女子は殖産と子女の養育とのために忙殺せられて、最早古の如く男子と協力して戰鬪に從事することは不可能であつた。



又經濟上の事情から多くの家族を同一の家に養ふことが出來なくなり、新婚の男女は雙方の親から讓られた資産を持寄つて別に一家を建て、初めて夫婦共棲の制度を生ずるに到つた。之と同時に戰士として時代の優者である男子が女に代つて家長となり父權が母權に代つて子女を支配するに到つたのは自然の勢である。父權が重んぜられ且つ階級が益々尊ばれる樣に成つて、初めて父系の血統を神聖視する思想を生じた。女を獨占しようとする男子は更に血統を亂すまいとする思想と相待つて女子の貞操を一層きびし

く要求する事と成つた。

併し貞操とは女子丈の道德であつて、男子は毫も自己の貞操を反省しないのみならず、依然として一夫多妻が行はれ、屋外に數人の妻を持つのみならず、同一の家に二人以上十數人の妻を貯ふる者も少く無かつた女子の權力は再び地に落ち、體のよい男子の奴隷となつた、父の血統を重んずる所から「女の腹は借り物」と蔑視せられ「子なき女は去る」と云つて遺棄する事を何とも思はなかつた。

女子は折角芽を出し初めた自動的貞操を蹂躙せられて、再び元始的の外壓的貞操に盲從した、何の理由とも知らず、唯さう云ふ運命の者だと云ふ迷信に諦めを附けて日を送る女が世の中から貞女だと稱讃される事となつた。

男は自分の都合の好い樣に女を奴隷の位地に置いて對等に理智を研くことを許さなかつた。愚に育てられた女は貞女の名を得て滿足し斯くして今日に到つた。

☆

敎育に由て兎にも角にも理智の目の開きかけた今日の婦人が從來の外壓的貞操に懷疑を挾み。貞操の基礎を有らゆる科學の方面と各自の實證とに求めねば滿足が出來なく成つて來たのは其れ丈文明人の心掛に接近したのである。女子の進步である。

此問題は個人個人の問題であつて、一般婦人を共通に支配し得る科學的基礎と云ふものが容易に發見せられようとは想はれない。當分は各自の持つて居る智識と感情とに由つて硏究した結果、獨得の見解を下して其れを實行するより外はない樣である。

體質の優劣と、境遇の良否と、敎育の深淺とで各自の心狀態が違ふ以上、又その心狀態の違ふと云ふことを今日の婦人が意識して居る以上、客觀的な概論に屈從して各自の貞操觀を完成する事は出來ない。客觀的に科學的基礎を與へる事も勿論自分等の內心が要求して居るけれど、更に其中心に根強い個人自身の實證を据ゑるので無ければ滿足し難い。

更に稿を改めて自分が貞操を尊重して居る現下の心持を述べて見たい。自分は之を他に強ひようとするのでも、他に誇らうとするのでも毛頭ない。所信を述べて此問題を討究する資料に供したい計りである。

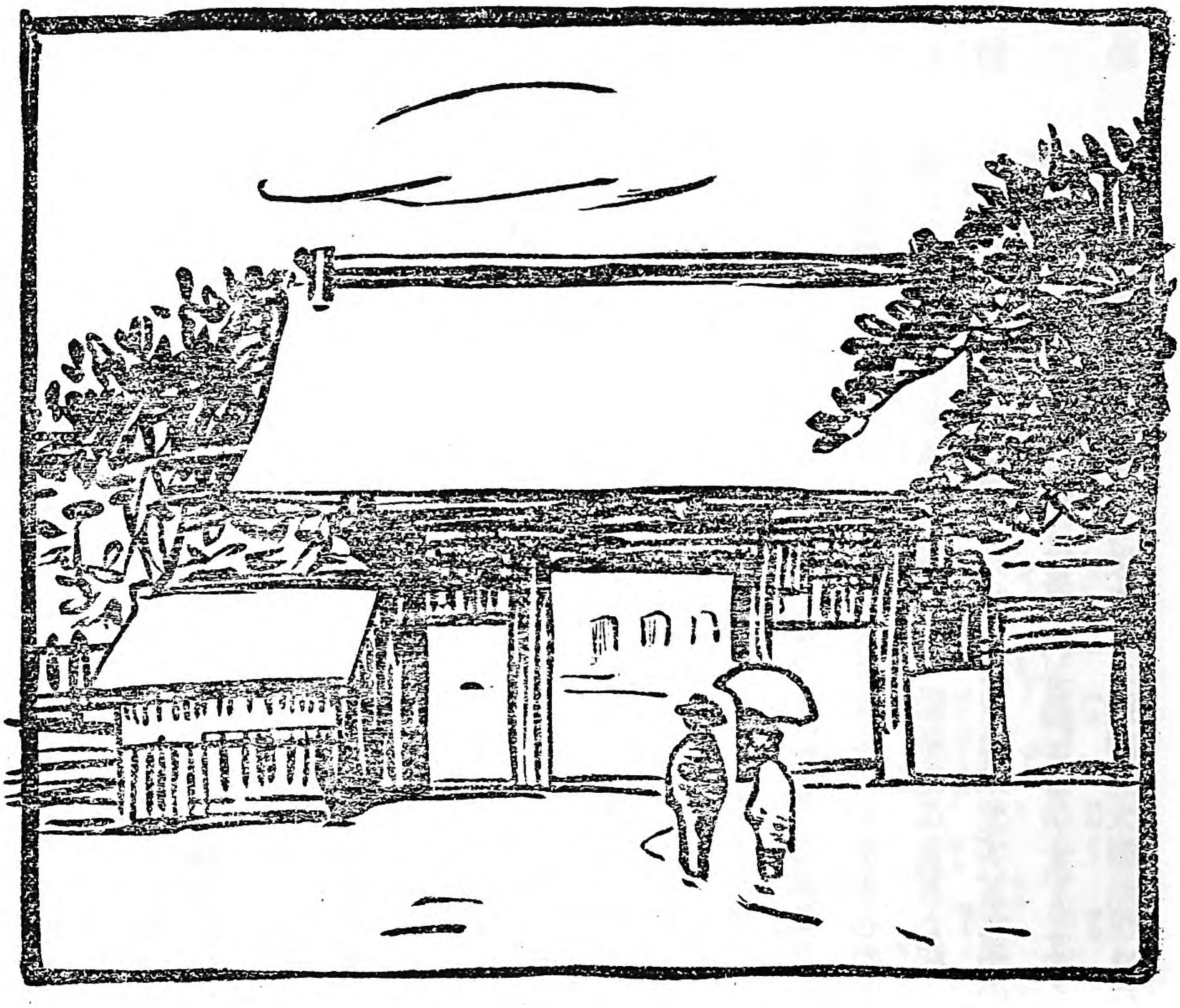
秋のたそがれ

長き九月の夕ぐれは、
野を徑をこめてさ霧に絶えいりぬ。
かすかなる星二たつ三つ、
かつ薄れたゞよへる薄暮をそゝるごと。

暮れまさる面䘥を横切つて夜は忍び來つ、
地平のかなた、森また森は、
暗き海路の月光のごと青白う、
お暗き空に消え凋む。

あゝかくて霧こめし徑のかなた、
暮れゆくまゝになやましく
薄れゆく薄暮のたゞようごとく
あはれ彼のさまよへる戀人と戀人と。

――(シモンズ)――
――(葵村譯)――



女子の腦髓

澤田順次郎

△腦髓とは何なものか

女子の精神力は、男子に比して劣ると云ふ人と、左樣でないといふ人とありまして、男女の優劣論は、容易に決定することは出來ません。と申しますのは、女子にも古來非常にえらい人があるからです。又男女の精神力は分業的に出來たもので、女子に不適當な業務が男子に適し、男子に出來ない仕事が女子に出來るといふ樣に、之れを比較して男女何れが優る劣るといふことは、秤つて見る譯に行きません。然し心力の基は腦髓にあるのですから之れを調べて見ると、大體に於いて想像がつきます、先づ之れを比較する前に腦髓は何なものであるか。一寸話しませう。

腦髓は柔軟な楕圓形の大塊で、腦膜と稱する數層の膜に包まれて居ります、其の所在地は頭蓋骨の腔内で大腦、小腦及び延髓の三部に分れます、大腦は全腦中最大の部分で、表面は灰色を呈し、内部は白色です、上から見ると大腦の中央に前後に連續せる深い溝がありまして、左右の半球に分れます、其の表面には腦廻轉と稱する大小數多の褶襞があります。思考、判斷、記憶、想像等を司どる力は、此の褶襞の中に存するので、愚昧な者の腦には、此の褶襞が少なくあります。大腦は又其の部位に從つて、前頭葉、顱頂葉、顳顬葉及び後頭葉の四部に分れ、其の形は男女によりて少しの差異があります。前頭葉は額ノ邊で顳顬葉なる耳と眼との間、其の上方と顱頂葉で、後方は後頭葉です、女子の前頭葉は大きく、顱頂葉は男子の方が大きくあります。

小腦の大腦、下方卽ち枕の當る邊で、大腦に覆はれ

て居るから、上からは見えません、小腦の下にある部分は延髓でこれは、脊髓と連續して居ります。此の二者は運動を調節し、或は反射運動と云つて、無意識の運動を司どる者で女子の小腦は比較的大きいと云ふ説がありますが、能く分りません。



▲腦の大小よりも重量

人の精神能力を論ずるに、腦の大小を主とすることがありますけれども、腦の大小と其の質量とは異なり唯々形丈大きくしても、其の質量が小なるときは、其の腦は決して優良なものといふことは出來ません。それですから腦の價値は大小でなく、其の重量にあることと申すまでもなく、之れを測るには腦膜、腦液、血液等を全く去りたる上にて、天秤に懸けるのです。

種々の人の腦を取つて調べて見ると、其の重さは人に依つて一樣でありませんが、元來腦の重さは、大體頭蓋腔の容積に比例して、頭蓋腔の大なるものは、其の小なるものよりも、腦が重きを規則としてあります、而して頭蓋腔の容積に比例して、頭蓋腔の大なるものは其の小なるものよりも、腦が重きを規則としてあります、而して頭蓋腔の容積に於ける男女の差は、野蠻人よりも、文明人の方大なれば、男女腦量の差も之れに準じて、野蠻人は文明人よりも小さくあります或る學者の黒人に就いて調べた所に據りますと、成年男子の腦量は、同年齢なる女子の腦量よりも多きこと僅に三〇瓦乃至八二瓦です、之れに反して歐羅巴人にありては、其の差は一二四瓦乃至一八三瓦で、支那人は五九瓦の差です、參考の爲に、諸人種の腦量を示せば次の如くです。

	男	女	差
英人	一、四二七瓦	一、二六〇瓦	一六七瓦
獨逸人	一、三九二	一、二〇九	一八三
佛人	一、三三四	一、二一〇	一二四
墺人	一、三四二	一、一六〇	一八二
支那人	一、三五七	一、二九八	五九
墨人	一、二八九	一、二三二	五七
濠洲人	一、一九七	一、一六九	二八
エスキモー人	一、三九六	一、二四八	一四八

本邦人に於ける男子の腦量は一三六七瓦で、女子のそれは一二一四瓦です、即ち其の差は一五三瓦で、歐洲人に比して同程度です。

▲男子の腦と女子の腦との詳しい比較

右の如く男子の腦は、一般に大きく、其の重量を百とすれば、女子の腦は八九乃至九〇の割合です、然れども之れを以て、根本的に男女の區別を爲すことが出來ません、何となれば身體の大なる男子は其の割合に大なる腦を有するのですから、本統の比較とならぬからです、故に男女の腦を測りて、其の完全なる差を知るには、身長と、體重とに比例しなくてはなりません。

斯の如くして、腦量を身長に比較して見ましても、尚男子の腦は、女子の腦よりも少しく大きくあります即ち身長一三八糎乃至一四八糎なる男子の腦量は、その身長との比一粍につき一、三二瓦にして一四九糎乃至一五八糎の身長の者は一粍につき一、五瓦なるに、女子の方は身長一二八糎乃至一三八糎の者は、一粍につき〇、六一瓦、一三八糎乃至一四八糎の者は、一粍につき一、二四九瓦の割合です。

腦量と身長と相關すること、前文の如くですけれども、腦量と體重とは併行しません。換言すれば體重の增加する割合に、腦は發達せざるが故に、體重の大なるものの腦は比較的小です、之れによつて女子の腦は、體重との比較に於いて、男子よりも大なることが知られました。其の割合は歐洲人にて體重一基瓩毎に、男

子は二、二三瓩で、女子は二三、〇瓩です。本邦人にても女子の腦は、男子よりも、割合に重く、之れを體重に比例すれば、男子の腦は百分の三、八一にして女子の腦は百分の四、三七二卽ち重きこと〇、五六二です。之れに關する研究は數多くありますが、體重との比例に於いては、女子の腦は男子よりも重いことに一致して居ります。

▲女子の腦は男子よりも大なり

女子の腦が男子よりも大ならば、女子の精神能力も男子の上に居らなくてはならぬ筈です。然し古代のサツフオ女史や、近代のマダム、ド、スタール、カロリン、ハーシエル女史、スタール夫人　メリー、ソマビール女史等の樣な偉女夫は例外として一般に女子の能力は、男子に一等を輸することは、爭ふべからざる所です、是れ腦の大小と智能とは、必ずしも相伴ふものにあらざる爲で、腦と體重との比例も、未だ正確のものといふことはできません。

此の事實は小兒の腦が比較的大なるに拘はらず、無能なると同一です、一體腦の發達は、身體の發達と離るべからざる關係ありて、身體の大なるものゝ腦は割合に小さく、之れに反して身體の小なるものゝ腦は比較的大きくあります。蓋し身體の未だ發達せざるに獨り腦のみ發達するときは、忽ち身體を害するにより腦は身體と共に徐々に成熟します、彼の神童と稱するものは、此の種のもので、五六歳にして二三十歳の腦を有するにより、驚くべき、技能をあらはしますが、成長するに從つて却つて平凡となります、故に神童は病的で健全でないことが分ります。どちらかといへば女子の腦は小兒の腦に似て、水分と脂肪多く、身體の割合に早く熟したものです。

女子の脂肪は腦のみならず。全身に豐富です、然るに脂肪は燃燒質にして、身體の構成上最も不定なるものであるから、脂肪の蓄積は發達の結果ではありません。女子は男子よりも肉附き良く、肥滿せるものも女子に多く見えますが、これは皆脂肪です。

▲女子の腦髓とボンく時計

斯樣に女子は脂肪に富んで、腦も脂肪を多く蓄へて居るのみならず、水分の量も男子よりは多くありますそれで女子の腦は比較的大なれども、組織が緻密でありません。之れを換言すれば、粗大にして不完全であることは、猶ボンく時計は大きいけれども、小さな懷中時計より器械が精巧でない樣な譯です。

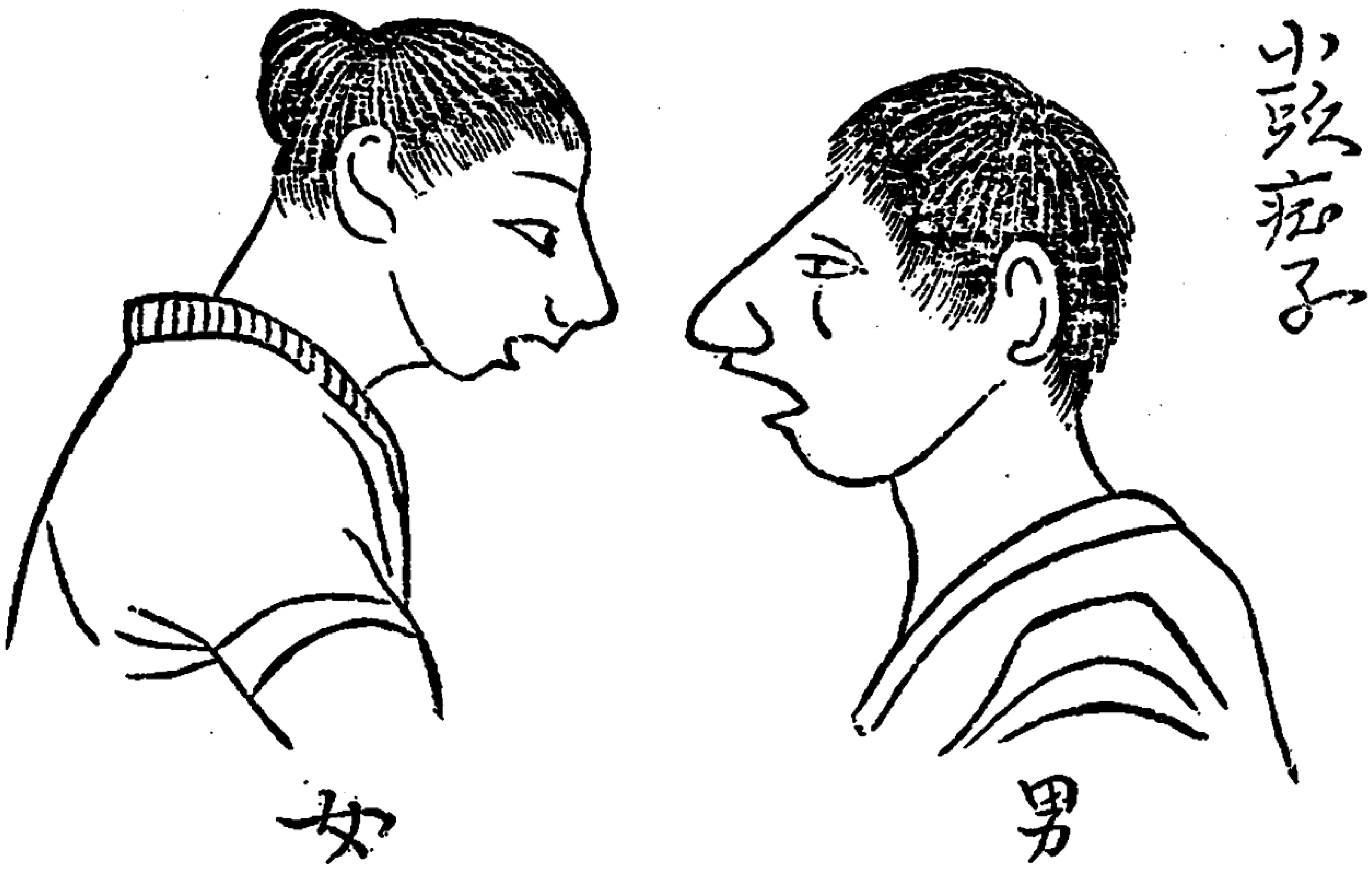
何故女子の腦が水分に富んで居るかと云ふに、これは血液の稀薄なる爲です。元來女子の血液は、男子のそれに比すれば稀薄で、血液一立方粍中に含まる赤血球の數は、男子は大約五百萬個なるに、女子の赤血球は四百萬乃至四百五十萬個に過ぎません。隨つて赤血球中に含まるゝ血色素の量も、男子は百分の血液中に一三、七七を含み、女子は一二、五九を含んで居ります。今男子の赤血球及び血色素の量を百とすれば女子の之れは八〇乃至九〇で、他の二〇乃至一〇は、水分或は其の他のものです。

▲女子が早熟の原因

腦の異常なる形狀に二種あります、一は身體の割合に甚だ小なるもので、一は甚だ大なるものです。前者は所謂小頭痴子にして、全く智能を缺き、其の狀小兒の如くです。後者は腦水腫の類で共に畸形です。極端の例を取れ小頭痴子は男子に多く、大頭侏儒は女子の傾ありと云ふ說があります。

男女の腦の差は餘程以前から始まるもので、男子の腦は胚胎八箇月の頃から女胎兒の腦と異なつて參ります。其の形は男の方は大なるのみならず。兩半球の中央にある裂溝の前部は一層大きくあります。そして表面の襞も深くあります。初生兒に於いて男の腦量は三三一瓦で、女の方は二八三瓦です。又男兒の腦は生後六ヶ月にして、出生當時の二倍近く、十三歲の後に於いて四倍の重さとなりますけれども、女兒の腦は六箇月にして二倍餘、七歲には既に四倍の重さとなります、斯くの如く女子の腦は頗る急速に發達するもので

十歳の時にはもう極大に達します。以後は僅かに成長するのみで、二十歳で全く停止します。然るに男子の脳の極大期は、十五歳乃至二十歳で其全く成長を止むるのは、三十歳以後です。それから脳の減量ですが、これも男子の方は（五十歳）女子（四十歳）よりも遅れて減じ、老年には却つて餘計に減じます。



▲決論

右に述べたる如く、女子は早成早熟で、特に脳は著しく早熟です。これは婦人方の爲に喜ぶべきことであるか、將た悲しむべきことであるかゞ申上ぐることは出來ませんが、前の事實を概括すれば次ぎの如くなります。



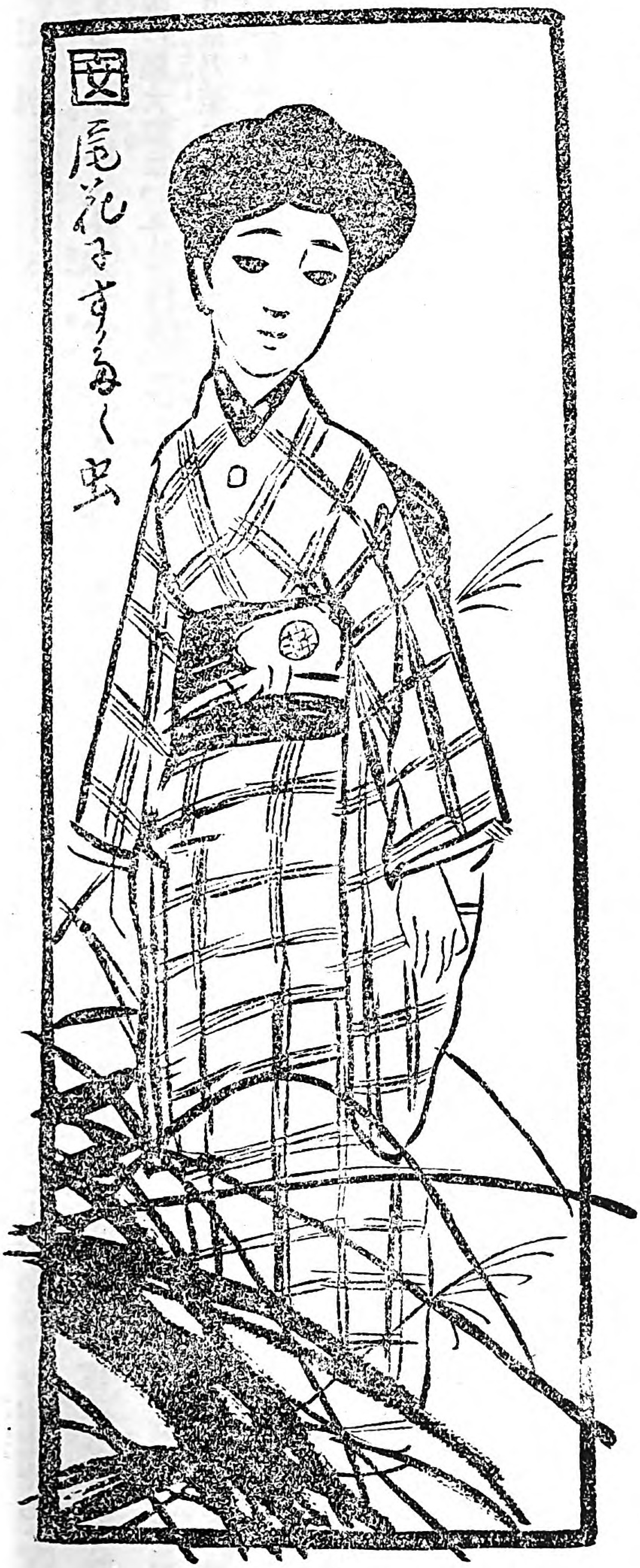
一、女子の脳は絶對的には男子の脳より小さいけれども、比較的には大きくあります。

二、部分の發達に就いては、女子の脳は前頭葉大なれども、一般に稍騣が發達して居りません。

三、身體の割合に大なる脳を有するものは、營養不十分にして、精神の活動が機敏に行きません。

四、女子の脳は脂肪多く、且つ血液が稀薄なる爲に脳及び神經系諸病に罹り易くあります。

五　女子の脳は身體の早熟に伴ひて早熟すれど



も、男子の腦は之れに反します。終りに尙一言したきことがあります、それは腦と教育との關係です。腦は完全でも、能く之れを教育せざれば用を爲さゞると等しく、小なる腦も、良く教育するときは、智能すぐれたる人となります。北米合衆國に住める黑人中に近時、學者も出來れば、資產家も出來ると云ふ様に、著しく進歩したのは全く教育のお陰です。教育の力は恐ろしいもので、風癇白痴にあらざる限りは、何人も上達して一廉の人物となることが出來る様に出來て居るのです。尤も遺傳の力もありますけれども、遺傳に依賴して大切の教育を怠るのは、甚だ愚と謂はねばなりません。古來女子の智能が男子より劣れる所以は、教育の結果で、本來の男女の腦力に優劣はありません。



竹久夢二論

變化の多い人

岡田三郎助

竹久さんは、ずつと以前、畫をかき始めた頃――丁度その時に、早稲田の商業學校に、入つて居られた時分であつた――、繪を專門に研究したく思ふが、上野の學校へ入つては、如何だらうと、相談に來られた事があるので、其頃から、知つて居たのである。でその時私は、若い者と一處に學校へ入つて、折角の自分の畫を破つて了つては、何もならんから、わざ〳〵入る必要はなからう、それよりは、ある程度までの畫を會得さへすればいゝのだから、何處かの畫の研究所へでも入つては如何かと話した、其の後、何んでも原町の研究所へ、暫く行かれたやうだ。

然し、それから後は一向會はない、尤も、芝居で一寸會つた事もあつたが、彼麼賑やかな處では、兎角話も出來ず、其れから、博物館で錦繪の展覽會の時會つたが、それつ切り會はない。處が、此春、畫集を四冊送つてよこされた、中で『野に山に』といふのが、最も自分のある考へにかなひ、面白く見もし讀みもした。

私は、こんな風で、舊くから知つては居るが、餘り親しくはしなかつたので、竹久さんの事に付いては、



人並に談ずる資格が、ないといつても可い。
　唯、私が竹久さんに就いて、著しい變化があつたと思つたのは、畫そのものよりも、竹久さん自身の、形態の上に就いてゞある。
　未だ竹久さんと自分と、名乘り合ひをしなかつた前――其頃雜誌や何かで其畫を見て居たので――或人にあれが竹久さんだと敎へられ、はアさうですかと言つた時の感じは寧ろ、意外で、如何見ても、其の時の君は早稻田出の人とは思はれない、一寸三田あたりの出かとも、思はれる位、身繕ひでも何でも、きちんと、こさつぱりとしてゐた。
　然るに、其後會つて見ると、前には、重に和服であつたのが、洋服になつて居た、許りでなく、すべてが前とは反對に、少し極端ぢやないかと思れる程、變つて見えた。といふのは、髪の毛は長くなる、洋服は身體に適つては居るが、何だか、はびろいやうな、不粹な形のものをきてゐた。然しそれは少しも鄙臭くは見えないので、反てかまはない樣な處に、氣取つた處があるといつた風なので、私がパリーに居た頃、パリーの音樂生は、丁度其麼樣な風をしてゐるものだつた。
　それが又、此頃になつてからは、餘程おとなしやかになつて來た、勿論かうした風な事になるは何か據り處が、あるのだらうが、餘り近くせぬから、私はそれを具體的に御話する譯にはゆかない。
　竹久さんの畫に就いては、面白いと思ふものもあるが、中には、何だか少しも譯の分らないものもあるやうだ。竹久さんはよくこま畫を、かゝれるやうだが、自分では、こま繪を、かいてるのではないと、いつて居られるさうだ、或はさうかも知れない。
　兎に角、畫をかく私等から見れば、竹久さんの技術上の進步は、大したものだ、此の意味に於て、君の畫は、必要に應じて、どん〳〵進步して行くといはれやう。
　竹久さんは全く、物事に非常に細かく、注意が、屆くのだ。
　私は此れ位のお話より出來ない。

夢二の繪と現代の婦人

中澤弘光

夢二さんは、餘り長く繪畫を習はないんださうですが、なか〳〵器用にかゝれます。それに彼の方は、腕がある許りでなく、いゝ頭腦を持つてますから、かゝれるもの皆、何處となく彼の人獨特の、人を引きつけるやうな氣分が現はれてますので、私等も夢二さんの畫は、非常に面白く拜見してます。

得意は、若い婦人の畫でせうし、又世間一般もさう思つて居るやうですが、其他、自然の事物――例へば森だとか、林だとかいふやうなものは勿論、草一本、木の葉一枚でも、何となく、夢二さんの生命が動いてゐて、實際詩的ですね。

落欵等でも、色々工夫して居らるゝやうですが、林の中に、一寸月をかいて、夢といふ字を見せたのなんか、面白いぢやありませんか。

何處か、夢二さんの居た、下宿屋の女の話をきいた事がありましたが、何でも夢二さんは、夜遲く迄、香をたいたり、奧さんが來て琴を彈いたりした後、じつと考に沈んで居て、それから靜かに筆を取つたといふ事ですが、さう思ふ故かして、彼の人の畫には、全く其麼な風な處が見えます。

こま繪の如きも、他に二三の人があつたにはあつたでせうが、夢二さんの力があづかつて、今日の隆盛を來したといつても、決して過賞ではありますまい。

それから夢二さんは、餘り大きな繪をかきませんがこれが又夢二さんの今日ある所以であらうと思ひます隨つて夢二さんの一寸としたこま繪でも、大きな油繪等より、ずつと趣味のある優れたものが、澤山あります。それから私共の最も苦心する色の使ひ方にしても

さうです、夢二さんは實によく使つてあります。

それであるからして、私は、別に夢二さんが大きな畫をかゝれる事を望んで居ません。

それから夢二さんは、晶子さんの『みだれ髪』時代の歌を、よく畫にしてましたが、晶子さんの『みだれ髪』頃の歌と、夢二さんの初期の畫とは、何となく、似通うて居る處があるやうに思はれます。こんな事からして、夢二さんはよく畫の中に文字をかゝれますが或る人々は、夢二さんの畫はあれが惡い、文字を取去ると譯が分らなくなると、いつてますが、彼の文字を取去つても、彼の人の畫は、相當に心持が出て居ると私は思つてます。

此頃夢二さんは、浮世繪を研究して居らるゝさうですが、近い内には、又風の變つた面白いものが出やうと思ひます。

それから夢二さん自身もいふてるさうですが、誰か金を出して、彼の人を洋行さして上げればいゝのです夢二さんなら、必然其だけの價値を得られやうと思ひます。

次に、これは一寸話が變りますが、此頃の若い婦人の中には、髪の形、リボンの附け方、簪のさし工合、衣服の着こなし等、總てを、所謂夢二式――に夢二さんの畫に現はれた女に、似せやうと苦心してゐる方があるやうです。

ですから、夢二さんに就いては、こんな話もありました。京都に、夢二さんを戀ひ慕ふの餘り、終に、重い病にかゝられた若い婦人があつたさうです。その事を誰からともなく耳にした夢二さんは、太くこれを氣の毒に思ひ、親切な手紙を送つたさうです。處がどうでせう、其の婦人は、臨終の際に到るまで、大切にその手紙を、肌身に付けてゐたと言ふ事です、これなども、滿更、嘘でない事と思はれます。

つまり、夢二さんは、平生絶えず、現代の婦人に注意を拂つて居て、それを又うまく、自分の頭腦で、詩化して描かれるやうです。

今の若い婦人の頭腦に、泌みて居るのは、與謝野夫

人に次いでは、まあ、夢二さんでせう。勿論藝術上の比較ではありません、人氣の點から言ふのです。

二階の畫室より

町そだち

☆

佛國あたりの挿畫々家は新らしき主義を奉ずる文學者とその歩調を一にし、彼等は人生の批判家であり硏究家であり又解剖家たらん事を期して居る。在來の繪畫の重要なる要素であつた裝飾的であるとか美感を與へるとか云ふ事の方面には比較的頓着せず專ら人生の眞を握らうとして居る。裏面に動く情緒の波動を彼等の簡單なる版畫の上に現はさうとして隼の如き眼をして巴里の裏町を徘徊して居る。美しき舞妓を描くとしても、今迄頭に浸み込んで居る有り來りの舞妓といふものゝ感じ――それは、必ず美しくなくてはならぬ。且パンの價や馬鈴薯の價は一向御存じない。夢みる如き眼は常に夜の灯に輝き管弦樂のひゞき、赤き酒、花のやうな服裝の外は何も思はないといふ樣な、先舞妓といふ概念、それも事實より歸納したのでなく空想より割り出した概念そのものからしぼり出した感じ――で描く事を排し、少くとも普通の一個の女が、舞妓といふものになつて居るといふ意味を描破せんと企てゝ居る。舞妓の假面の下を覗いて、世の中の當り前の一個の女を見やうとして居る。自分は嘗て舞衣をくつろげて汚ない赤ん坊に乳をふくませて居る『舞姫』と題する挿畫を見た事がある。

☆

夢二君は一種のロマンチストである夢想家である。彼はその常に描くを好む若き人々を事實の上に向つて觀察しない。氷の如き眼を以て批判し摘抉し現代の若

き人々は斯くの如くであると云ふことを畫に描き現さない。

彼は先、最初その描くべき人々と共に夢む。人々の夢に同化する。彼の夢は恰現社會の少年男女（中學三四年止り）の夢み或は夢みんと欲する所のものである。所謂ロマンチストの夢の高渾にして神秘的なるものとその種を異にする低級な夢である。

☆

彼の夢は春期發動機にある少年男女等が各異性に對して不可思議な神秘の感じを抱く時期に、しばしば夢む所のものと一致する。抵抗すべからざる本能に驅られて自然發露的に覺える哀愁や、詩情から成立つた所の夢である。故にその夢を描いた彼の畫は少年男女の情緒を根本からおさへて居るので、非常に力強くこの時期の男女に訴へる事が出來る。

☆

少年男女に訴へるには、總て物事を誇張しなければ利目が薄い。彼の描く人物の顏の道具手足などまるでプロポーションを逸する迄に誇張されてあるのは蓋ての故である。着物の模樣などにしても實際にしたら白晝、通りは歩けない樣な壁紙か宿屋の布團にでもありさうな派手な縞柄をつけてある。年頃や身分や職業やなどの區別には一向頓着なく、唯少年少女の眼に快きを第一の條件として工夫を凝らしてある。その模樣も僅か七八種の上を出でない。そしてその七八種を以て女房にも、娘にも、小間使にも、老孃にも間に合せて一向平氣で居る。

☆

夢二君はその異常なる精力を發揮して、春の卷、秋の卷、野に山に、花の卷等十數冊の畫集を公にされたのは感服の外は無い。そしてその畫集には木版の墨一色のもの丶外水彩畫らしきもの、油畫らしきものも挿まれてあるのも面白い。然し乍ら墨一遍の木版のものは流石多年毛筆の熟練が見えて相當にうまみがあるけれども、水彩畫と油畫とは未だ素人の域を脱しないそして一體素人畫家の畫には、技巧の不熟や、デッサ

ンの不行届などから來て居るプロフエッショナルな、畫家には到底見る事の出來ない感觸の清新な所があり、原始的な雅致を具へて居るものだが、彼の油畫水彩には妙に筆計り達者過ぎて、それすらも缺いて居る僅に取る所は色の綺麗な點でもあらうか。

それからどの巻だつたか忘れたが、畫集の巻頭に彼自身長髪を冠むつて花ちる窓にマンドリン？を



抱へて居る寫眞を挿んだのを見た樣だ。これなぞは最彼の短所を忌憚なく曝露したもので、人々より厭味とせらるゝ所以である。必ずしも氣取るといふ事が惡いのではない。一方から云へば藝術は氣取るにあるとも云へ樣、人世に氣取るといふ事を禁じたなら興味は半ばは確に遺漏して味ひない世の中になつて仕舞ふだらうが、例へ氣取るにしても少くとも

趣味を標榜する畫家の事である、今少し氣取り方に藝術的なアクの抜けた獨創的の所があつて欲しい。花散る窓に長髪を冠むつてマンドリンを彈ずるといふ趣向は、エハガキ店に出入する位の少年少女は誰でも直ぐ思ひ付く所のものである。トラディションの骨頂だ。この位な趣向は少しハイカラな、寫眞屋ならいつでもその陳列棚に並べられて居る。うちの裏の娘さん――女學校三年生――は彼の畫に對して相當に敬意を拂つて居つたものだが、あの卷頭の寫眞以來ひどく反感を催して、彼の畫は一さい見ない樣になつた。

これは別に畫に關係した事でなく一面から見れば稍立入り過ぎた話しの樣にも思ふが、實は大に彼の一面を現して居ると思ふから、餘計なことだけれど一言述べて置く。

☆

然し何といつても彼は挿畫々家中の花形役者として評判せられる丈けの魅力を有して居る。その畫の中の一つの點、一つの筆觸の上に既に若々しい華やかな薫りが滿ちて居り、觀者はその描かれて居る所のものが何物であり、如何なる樣をなして居るのかを識別するの暇なく、一見直にその豐麗なる筆致に醉はされて仕舞ふ。

少年少女の情緒を描いたものゝ中にはいかにも無邪氣で正直で、怨恨や、憎惡や皮肉などゝいふ濁つた複雜な感情は少しも混つて無い。唯若々しいふくよかな美くしいものゝ中に引入れられて仕舞ふ樣なのがある。われ／＼實際に美しい處女に對した時と大して違はない感じを彼の畫によつて與へらるゝ如きものがある。かくの如きは最夢二君の長所であつてわれ／＼が君を愛する所以である。

少年少女の姿勢、擧動、などの癖のある所も相應に細く寫してある。

☆

挿畫界は今迄隨分多くの挿畫々家を送迎した。そしてその挿畫々家一人の全盛期は、普通三四年より長い事は無い。彼等は世に出る迄は隨分努力の跡の見ゆる

作も出すが、全盛期に入つて人々が彼の名の爲めに彼の畫を見る樣になつて來ると、大概なものは亂作をやり出す。筆を荒ませる。墮力によつて少しのうちはそれでも濟ませて行けるが、いつまでも社會は白痴にされて居るものではない。畫家もそれを覺つて筆を引きしめやうとあせるけれども、その時には習性となつて仕舞つて元の研究的態度に戻る事は出來ない。描けば描く程作品は亂れて來て一作は一作より彼の名聲を墮とす原因となるに至る。新詩壯の明星時代に奮つて居た一條成美といふ畫家は最も之に當嵌つた例である。彼の全盛時代位世に華々しかつた畫家はないと同時に彼程激しい凋落をした畫家もない。

夢二君の全盛はこのレコードを破つて、隨分永い方である。尙幾干かの將來もあるらしい。然し乍らこゝ二三年來の作物には內容にも技巧にも段々「慣れて來る」といふ外取立てゝ發展の跡が見えぬ。そして發表せらるゝ作の數は愈增加せられて來る樣である。この傾向で行つたなら夢二さんなるものも二三年の後を期し難いかもしれない。君の對手たる與平氏の如きは着々方向轉換の途を開拓しつゝある樣だ。いろ〳〵聞けばうなづかれる原因もあるだらうが、少し亂作をよして更に今一步新らしき境界に出づる爲めに研究せられん事を望む。知己の雜誌編輯者が夢二君は以後コマ繪は描かないといつてるといふ意味の話をされた事がある——これがもし眞ならば夢二君の爲に最も、祝福すべきことだと思ふ。（一九一一、九、一四）

素人の繪

素人

夢二さんは、眞實は素人なんですよ。現在では、まあゝやつて畫をかいてゐられますが

ね。

夢二さんの畫は、一頃大變なものでしたね、何しろ燃ゆるやうなは陳腐ですが、そんな感情から出來てる畫ですからね。

何となく、かうセンチメンタルな處は、同じく燃えて居る。若い人々の胸には、泌み透るやうにうつるのでせうよ、——あの濕ひを帶びた瞳、痛々しげな胸のあたり、私はあんな風な女を、夢二さんの畫の外に、かいたものにも、眞物にも、見た事はありませんよ。

けれども、夢二さんの畫の生命は、餘り長くはありますまい、何故かといへば、夢二さんの畫は、夢二さんの感情その物が出て居て、あの通りのものが出來るのですから、感情が荒んでゆくにつれて、畫も荒んで行かざるを得ないでせう。

眼と壁と門

鈴　蘭

人は誰しも、柔らかな美しい感情を若い時の儘に、持して行きたいものですが、如何にあせつても、年をとるにつれて、感情も年寄臭くならざるを得ないのです。見給へ、晶子夫人のやうな女でも、年をとつたではありませんか、此頃でも絶えず、彼の若い頃の感情を歌はうとしてゐるらしいが、みだれ髪時代のやうな歌はもう出來ないではありませんか。

夢二さんだとて人間です、追々年をとつて行く、隨つて感情も硬ばつて行くに相違ありません。

そして、其の畫は、漸々荒んで行きはしないかと思ひます。

然し、彼の人は、なかく世の中を緻密に見てますから、今の畫を、通り越して、他に何物かを捉へ來つて描けば又面白い方面に發展が出來るかも知れません

夢二氏の畫に對つて私が何時も感動させらるゝのは先生の赤裸々の態度であると思ふ。

ある場合にはそれが大變に誇張され潤色されては居るけれ共、それが大抵は皆先生のその折折の狀態を示して居て、私共の樣に先生に近い者にはそのある時と時とが見えて行く樣な氣がする。



勿論先生は始め「春」「夏」「秋」「冬」の畫集を出される積で有つたらしい。それが「春」と「夏」の間に「花」が出來、「夏」の後に「旅」が出來た樣に思ふ。「花」の艶麗、「旅」のローマンチックの高い香は暫時おいて、先生の代表作としては、矢張り「春」「夏」「秋」「冬」をとる方がいゝ樣に思はれる。

以上のものを一貫したものとして、その間に上二巻と下二巻との間に明に區分があるのは誰もが疑はぬ處、然し私は私の貧しい藝術の批評眼よりでなく、その書に現はれた先生の狀態を考へて見度い。

春の巻と夏の巻の大部分は、先生を世に紹介したもの、集に外ならぬ。從つて其間に含まれた時も長いし、題材も各種にわたつて、その場合々々に對しての努力も快い矛盾も有つて、矢張り私共低級な頭の者には一番面白い樣で有る。且此時代は先生にも最も幸福な時代で有つて、例の「眼の人」との幸福がそれで有つた。而も山に野に、電車の中にカフフヱーに、戀思ふ女にも、春草若い武藏野にも、又は輕いある種の滑稽味を帶びた「四十男」や「冷酷なる第三者」に至るまで、例の巻頭の波の淘去し淘來せり、人は何處より何處に行く」美い然し痛切な、淡い然し現實の悲哀は一貫して居て、それが先生自にも私共にもうれしいもので有つた。

秋冬の巻に至つては、痛みやすい天才的感情は全く荒んで終つた。「性慾の發作よりでなく、ある種の官能の刺戟より出立して、人生の旅路に心の花の一ひら二ひらを落して行く」と云つて多くの供人を集めた人は猛然と背いた態度を現はした。

飽きはてた人妻、白晝の野の沈默、滿足を知らぬ人の勞働、無智の戀、そんなものが疲れ果てた人の官能にうつつて、投げやりな筆の運に罪もない若い人々の胸に肉迫した。そして先生自もつく〴〵と振り返つて

「心弱い俳優は觀衆が餘に拍手喝采するので、つひ好い氣になつて芝居を仕過ぎた。

押すな押すなと口には云ひながら、自分もわつしよわつしよと凡俗と共に流されてゆく。

讀者よ、藝術家の爲には、ゆめ〳〵拍手喝采などしたもふな」

と終の獨白で幕は下りた。

それからももう一年になるに間もない。ある種の雜誌に惰力に生れた樣な女に、去年の追想に耽りながら荒んだ感情と、變り易い氣分とを持てゐまして、刹那

刹那の刺戟を生命に、當もなく巷をさまよふ先生を想像しては私はよく涙ぐむことがある。

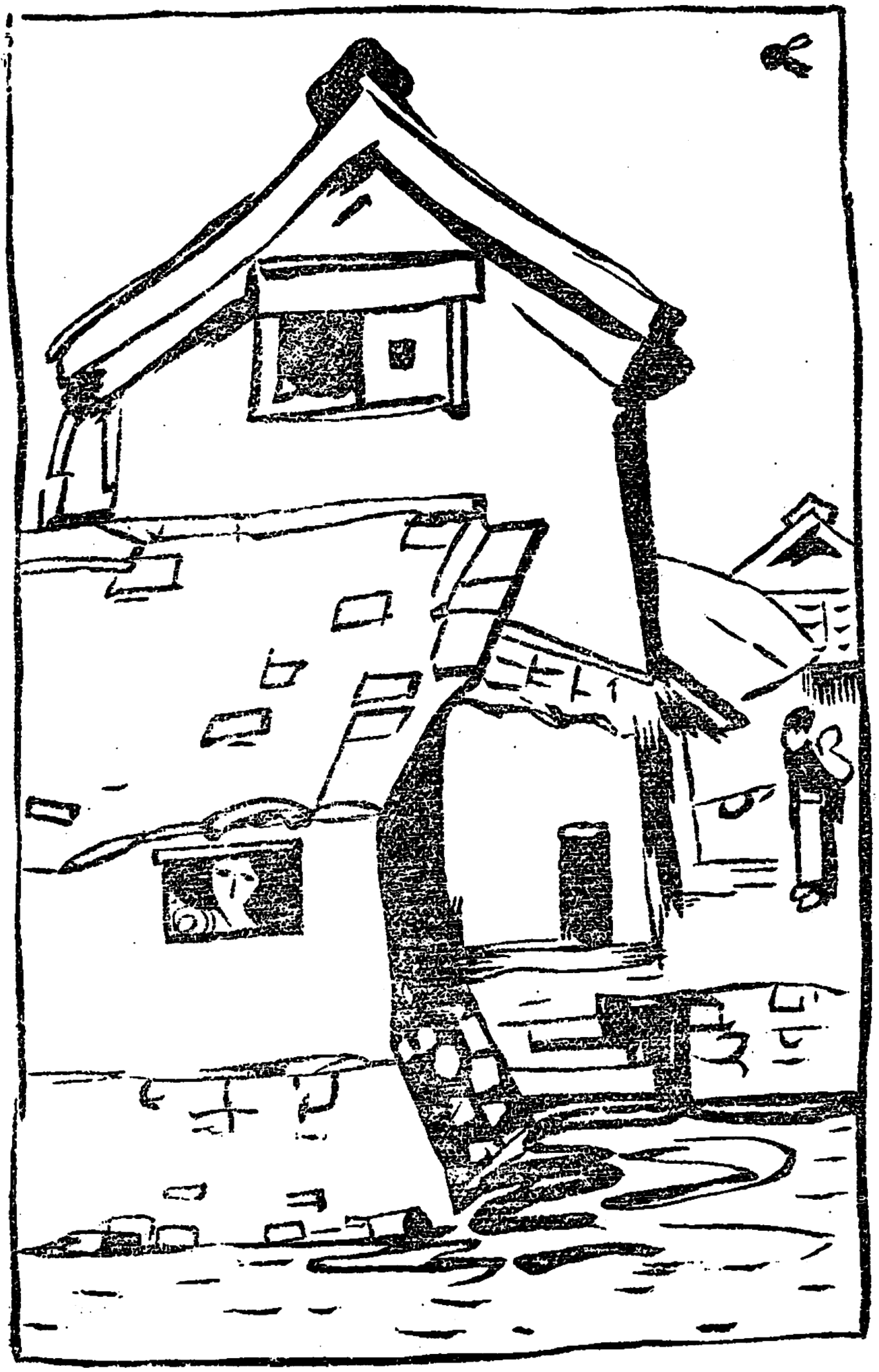
「△△さん、もうローマンスは止めるよ」と云はれた朝をよく思ひ出す。明治の又平になつて見せると勇んだ顔もなつかしい。

「夏」や「冬」の序文と、古今獨歩の眼と壁と門とを書いた人には、未だ長い〳〵未來が有る。

輝ける女の眼と、壞れたる築地の壁と男と女との間に置かれたる門とは、先生の獨創の力に發見された。

感情の荒んだ時は、感情の昂奮した時である、先生よ静にお描下さい。

私は此又平と同じ呼吸をする天來の人に、第二次の共鳴を用意すると共に、その人を「先生」と呼びなれた自身の光榮を改めて喜ぶ。



戀の掟

原田琴子

歌ならでものいふことをゆるされぬ戀の掟のうつくしきかな

ひだ多く衣は縫はまし人思ひなほゆたかなる心のごとく

着通さば汗づかましを戀衣一と夜は衣桁にかけてながめむ

白百合は氣遠になりぬ三四人白粉やけの手のなれし時

人の來てうつくしきもの貢ぐゆゑ秋も心のをとる少女子

わが衣は紫なれと香だけと歌を染めんと人の乞はねば

面ぎぬは月にかけゐしわが君をとばりの外にへだてんは憂し

わが袂二尋ばかり丈のびよ紫長き藤のかたはら

わが許に君を誘はず戀泣きて恨み給へるみ心のもと

襟いくつ千種の花の春の色ひとりにほへるわが戀ごろも

み心とならびて行けば雲の上におとらぬ旅とはゞからぬかな

わが二十心の舞のかろきこと遠く及ばすうすもの丶袖

別れてぞ君がみ心解くべしとさかしまごとをくはだてしかな

牡丹なほさびしき花とわれは見ぬ長き袖ふる藤にくらべて

よく知るといはまほしさに戀人の上をそしりぬあさましきわれ

生存

白木いと子

○

私は女らしい女になりたいと思つてゐます。けれど私のいふ女らしい女とは、よく云古した女らしい女といふ言葉とは大分違つた意味を持つてゐます。

私のいふ女しらい女、夫れを誰れか解釋して呉れる人がありませう。

女たゞ自ら修めなくてはなりませぬ。

○

私にはどんな境地にあつても、安んじ得る心と、安んじ得ぬ心と、いつもこの二つが闘ふて居る。

安んじうる心は、幼い時に親の手をはなれてから揉まれ／＼いぢけて育つた涙の果が、こんなものと何も運命の名に押つけて諦めて了ふ、かの暴風雨の後の凪ぎのやうなもの。

安んじ得ぬ心は本來の自己である。現在の境地の外に、何ものか、何ものかゞあるやうな、常に見えぬ影を逐ふて動搖するからだ。

前なるは戰ふに疲れたる若いし心、後なるは絶えず奮闘する若き心、矛盾したるこの二つを抱いて私のはかない生存はつゞいて行く。

○

お母さんのお乳でしたら此樣な事はなかつたでせうに、と逢ふ人毎に云はれる。わが子の病んで居る消化不良はいはゞ牛乳の中毒ださうです。

云はれる度に私は責められるやうな辛さを感じます親と子と、いづれは孤獨なるべき人間の身乍ら、己が血をもて造りし乳を與ふればこそ、母と子とが宇宙の間の何物にもかへて一髮をも入れぬほど密接なる眞情を覺ゆるのでありませう。良しと云はれたわが乳を失つてから私はわが子との間に見えぬ弛みを感じ初めました。

玩具見れば小い手を出すほどに愛らしくなつて來た頃には、乳房ふくませての添寢に、母らしい氣分のいかにも安らかに靜かな快さはもう私には享けられませんでした。人の乳房に縋る事を忘れて牛乳壜見ては欲しいと云ふ意志を示す我兒を見る時いつも私の心は曇ります。乳房はあれど乳うしなひし自分をわれながら

憐れとおもひます。

○

、にしは子供を成べく美しくしておきたい。男の子でも人の手に抱きかゝへらるゝうちは出來るだけ綺麗にしてやり度い。人形のやうに裝はせた兒、私は好きだ。

から云つても盲目的な愛の爲に贅澤をさせるのでは無い。わたしが子供を美しくさせるのを好むのは、本來愛さるべく小い形を與へられた子供のために、一層愛すべき素質を多く有たするため。

たゞ兒供だから、兒供だから。さう此言葉だけで澤山だ。

○

處女にして抱きえたりし憧憬は、結婚てふ一事象の實現によつてこと〴〵く碎かる。

結婚したりし後にして男を倘賢しと讃ふる女ありや女の眼はその結婚後に於てはじめて開かる。

○

わたしはこの頃誰の心持の中へでも立入つて考へられるやうな氣がする。

幼い時分に考へた善人とか惡人とかいふやうなものは此頃のわたしの頭の中に無い。

習慣的な舊道德に縛られて住んだ狹い世界は通りすぎて、今のわたしは萬人平等に見得る自由な思想の上に立つてゐる。

醜い現在の社會に、罪惡はある。不善はある。けれども人間個々の心持にはいつて見れば惡人と云ふものはない、又善人といふものも無い。

わたしは個性を尊重する。

たゞ意志の强固なるとさならざるとの差違のみ。

たゞ自制の力の優劣ばかりではないか。

自個を守るに手段の賢なるものと賢ならざるものとこの二つの分れて、善、不善となる。

必畢は自己をまもるに力あるものゝ勝利である。

○

『ある意味に於て君に敬意を表す』

結婚後ゆゑありて絕ちたる友、異性のきわめて親しかりし友よりの此言葉はわれを泣かしめき。

われは遂にひとりなりき。ゆるせし友よ、御身よりかゝる侮辱の冷語をきかんとは思はざりしを。

あゝ、妻てふ呪はれたる名なり。



倦怠した人

河井醉茗

「僕はつく〴〵世の中に倦怠した」

とK君は言つた、其語の調子にも態度にも倦怠したやうなところは見えなかつた、例の通り元氣らしい。

「魚河岸でも、大根河岸でも宜いからめまぐるしいやうな生活がしてみたいな、もう毎日机に凭れて書くのは嫌になつた」

K君は原稿生活をしてゐる作家であつた。

「然う、外の人なら酒でも飲んで紛らすと宜いんだらうが、君は既に酒にも倦怠したんだからね、淺草は何うだね」

「暫く行かないよ、淺草は好きだ、それも金がありや思ふやうに遊べるがね、無いと餘り氣が利かないよ」

「作家が口を揃へて生活の爲に書くと公然に云ふ時代だから、苦しいのはお互だけれど、君の生活は張合がないんだね」

「然うかも知れん」

K君は未だ獨身である、下宿屋や、貸間の二階に轉がつて原稿を書いてゐる、飽くと市街へ出て、バーやカフエーや日本式の居酒屋へ飛込むのがK君の道樂であつた。

K君と同年の自分は、もう小學校へ通ふ子供が二人もある、世の中に倦怠したK君に、それぢや早く家庭でも持ちたまへと云ふのが、最も通例の條件であらうが、自分は比藝術家肌に生れて來た男に向つて、容易く其事が言へなかつた。

Kさんはお酒の氣がないと何だか悄然して淋しさう

ですね、と能く途中で會ふ妹が云つてゐる。K君の前半生は酒で生きてゐたのだ。
「何うだい此頃は熟睡られるかね」
「睡られるよ、此一箇月ばかり酒を禁してから能く睡られるやうになつた」
「絶對的禁酒もなるまいが、安眠の出來ないのも苦しいわけさね、そりやまア可いが倦怠したのは困つたね一つ自動車を借り出して來て、東京中を馳走らせたら面白からう、倦怠凌ぎにね、半日なら十五圓で貸すさうだ」
「それよりか卿、早く奥樣をお貰ひになつた方が宜じやございませんか」
突如として自分の細君は忠告を與へた、K君は何と感じたらう。
「實はそれも言はれてるんですがね、或る友人は寫眞まで持つて來て、あれやこれやと勸めてくれますが、それほど乘氣になつてゐないんです」
「細君候補者なら僕の方に隨分心あたりがあるから一つ好いのをお世話するかね」
自分は考へてみた、K君の細君になるべき人は、餘程K君を了解してゐなければならぬ、其名に憧憬て來る人や、現代かぶれのしたものは到底つゞくまい、一面世話女房であり、一面戀女房でなければならぬ、むづかしい、然ういふ女はなか／＼少い、若しあつたら少くとも現在の倦怠から救ふことは必ず出來る。
誰でも關はぬと冒險的に貰ふのなら別問題だが、少し考へて貰はうとするには、K君も困るだらう。
K君にしても今まで斯う云ふ問題には幾度も、ぶつかつたことだらうと思ふ、其度に君は自ら然うしやうと決心する處までは進めなかつたのだらう、自ら信ずる處いあるものは、つまらぬ反抗心の爲に世間並から逸することがあつて、それが爲に孤獨を感じたり、寂寞を感じたりする、愚なることかも知れぬが、誇らしいことでもあるやうに思ふ。
「それとも自動車の方にするか」
「自動車に乘るのも可いが、半日だけ乘廻してみたつ

てつまらない」
「勿論細君なら自分の所有になるからね」
「いや女に對しても慾望が薄くなつた、それでも以前は隨分女の後を逐驅たもんだ、女義太夫の後を逐つて東京中の寄席を駈廻つたことがあるんだからね、終には横濱までも出かけて行たものさ、元氣があつたんだね」
「又元氣をお出しなさいよ」
「いやもう此頃は全く倦怠しちまいましたよ奥さん、何か斯う勢ひのある職業はありませんかね」
「奥さんをお貰ひになると勢ひが出ますよ」
「何うだか何しろ毎日書いてばかり居ると嫌になつちまひますよ、あ、くだらぬことを饒舌つてゐて遅くなつた、また今夜も歸つて徹夜です、や、何うも御邪魔しました」
K君は例の調子で尻輕に歸つて行つた。
自分は後で考へてみた、K君が今細君を貰はうとしても、一定の職業もなければ、一定の收入もない、隨つて家庭の生活には不安が伴ふ。假に女の身になつて考へてみると、斯う云ふことも一つの條件には相違ない生活の威嚇と云ふことは、何の位結婚の成立を妨げてゐるか知れない、好んで其難關に身を投入しやうとするやうな自信のある女があるだらうか。
多くの男子から細君難の聲を聞いてゐる折柄、一層君の細君選評の難きを想つた。

* * * *

其翌日、ゆふべの人として淺草からはがきが來た、昨夜は久しぶりで氣焔を吐いた、今は淺草に來てゐる淺草は相かはらずおもしろい、尤も電車で來たので、自動車で來たのではないと書いてある。
徹夜をしても疲れずに、淺草のやうな渦捲の中へまきこまれに行く巷の詩人の健在を祝福した。
玉乗を見てゐるか、活動寫眞を見てゐるか知らないが、兎に角若い男や女の歡樂の巷を歩いて、暫くでも倦怠を忘れてゐるであらう、然うして細君問題の如きも更に忘れてゐるであらう。

九月七日

横瀬夜雨

大學の宣誓式にはどうしても列席せねばならぬから今夜は四時迄に立つと言ふ孝に、椅子ごと椽側へ出して貰つた。柘榴の葉のきり〳〵舞して落る朝である。四疊半の方は本棚はすつかり整理して木版畫を貼つた襖をぴつたり閉てた、床には秋海棠が生けてある。足の踏どもなきまで引散した雜誌は何處かへ藏はれて合本にすべき小説類はテーブルの上に積重ねられた。

　これからは本を捜すにも一人で出來るので、はればれしき心になつて室内を見かへつた。――曩昔はそこに木目美しき簞笥があつた、いくつか輝ける鏡臺もあつた、紫の帶、紅の手繦、脂粉の香が籠つてゐたけども、嫂の影が絶えてから、久しく戸を繰らなかつたし十八年間釘づけの北椽の戸もはじめて明たのである

　自分はAnubisを手にした、皇太子殿下より兄に賜はりし巻煙草である。呑みかたすら知らぬのに、始めて金口を吸つたので、咽一杯煙に押込まれてあぶなく咽せようとした、灼けるやうな熱をおぼえる。

　鴆を嘗めさせられたやうな酒にあてられたやうな、茫とした心もちになつてしばらく坐つてゐたが、いつまでも口が苦い、戸袋のつい先には柘榴が生つてるけれど、あれつぱかしの酸ではやにが消えさうもないし指さきについた金粉をテーブル掛でなすりつけて、上から『畫集』を取下さうと手を延ばした瞬間！　また候、血を見た。

　醫師へはおよねが馳けて行つたけれど、遅いといふのでまた誰か行つた。自分は椅子に凭つたなりにゐた

孝が八男介を使つて「沒書をはやく持つて來い、なるべく白いのを」など八ヶ間敷さわぐ、母も來た。南の椽をとどろと踏んで男一も來た。

『月の明るい四日の晩はじめて『神も佛も』をよみました、あゝ猶生けるわが師の君。たゞ寂しくしかも短かかつたこの夏、師の君の愛を失ひしが故に尊いこの夏休みがめちやくでございました。が血の洗禮より蘇り給ひしよろこびに比ぶれば、何でありませう。九月五日くもれるひる。河野まき。ひるまでも蛩が鳴いてをります』晝も蛩が鳴くといふ監獄の裏の寂しさをおもふ。

『何だか少しも靜思の隙がありませぬ、事件が餘りに多いのですもの。絶望してからかうではやり切れません。近ごろは秘密といふ事も重んじられて來て、人に語るのも書くのもいや。けれど、書き、語るほど立派な行爲をしてるのは事實です。今また古河へ來ました四日夜若杉はま』性格と境遇から來るこの人の悲劇は何時になれば幕が下りるのか。

『水引草の生茂つた庭も月明の世界と化て、ほろくとなげき出る蟲の聲々に孤つ心は悲しまれます。その昔父はこの形骸をのこして去りました、地下三尺、どんな心で蟲の音をきいてをりますやら。――今燈火滅して月光の洪水は暗き家に漲つて來ました、うつくしき筑波の雲も見えさうな夜でございます。あはれねがふはみ園生のはしに、むさし野の朮が花を培ひて下さいまし。五日夜、月の下にて望月れい子』七色の虹は美し、されど瞬時にさむる色ならずんば幸である。

落日のかげを追うておぼつかなくも讀み來つた來信の中に、なほ一つ封筒がある。

『その後の御消息伺ふひまくなう時はいたづらに過ぎて行く、あゝ平和なるお心のつゞけかしとたゞ祈るのみ、明七日午前十時日比谷大神宮に於て結婚仕候……』たえて久しきこの書であつた。一葉落ちて天下の秋を知る、徂く者は一人ではなかつたのである。

結婚は祝すべきものであると壓制的に思はせられてゐたのは昔である、今のやうにコヂれた頭では處女が

何を好んで其童貞を棄てるのか、少しもわからない。喜劇か悲劇か、滑稽か、愚劣か、第三者のあづかる所ならんやと云へばそれまでだが、結婚はたしかに心ある女子を殺すものである。――未婚の女子はおほむね其友の幸を加ふるを羨望し、既婚の女子はかならず嫉妬す、その一生を通じて性欲圏を出でざるはむべなるかな。

人の父がすべて其子の結婚をよろこぶと思つたら大ちがひである。知らずや、母はわが子を人に與ふる夜千行の涙その心を洗ふものあるを。

結婚は一として政略ならざるはない。或は富により或は名によりて妻を求むる男が有る。

或はその美を賣り、その媚を賣りて人妻となる女が有る。

名を孝に假りて愛無き結婚を甘んじて爲る人が有る顧みて其心に問へ、われはたゞ或滿足を得んが爲ならざりしや否やと。

けれど………

およびなき寂しさなりや凡人の一人なりけりこの目ざめ時。とうたへる若き女詩人のうたを思へば、ふたたび處女の美をたゝへて

われは日向葵、光にのみ
面ぞむかふ、羞しさは、
日なる君かも、遠くより
花の上には天霧ふ。

われは日廻、めぐるとすれ、
君が目にのみ魅かされて、
ふとだに外へ目をやらば、
見ずやならん

と危ぶむ」は愚である。

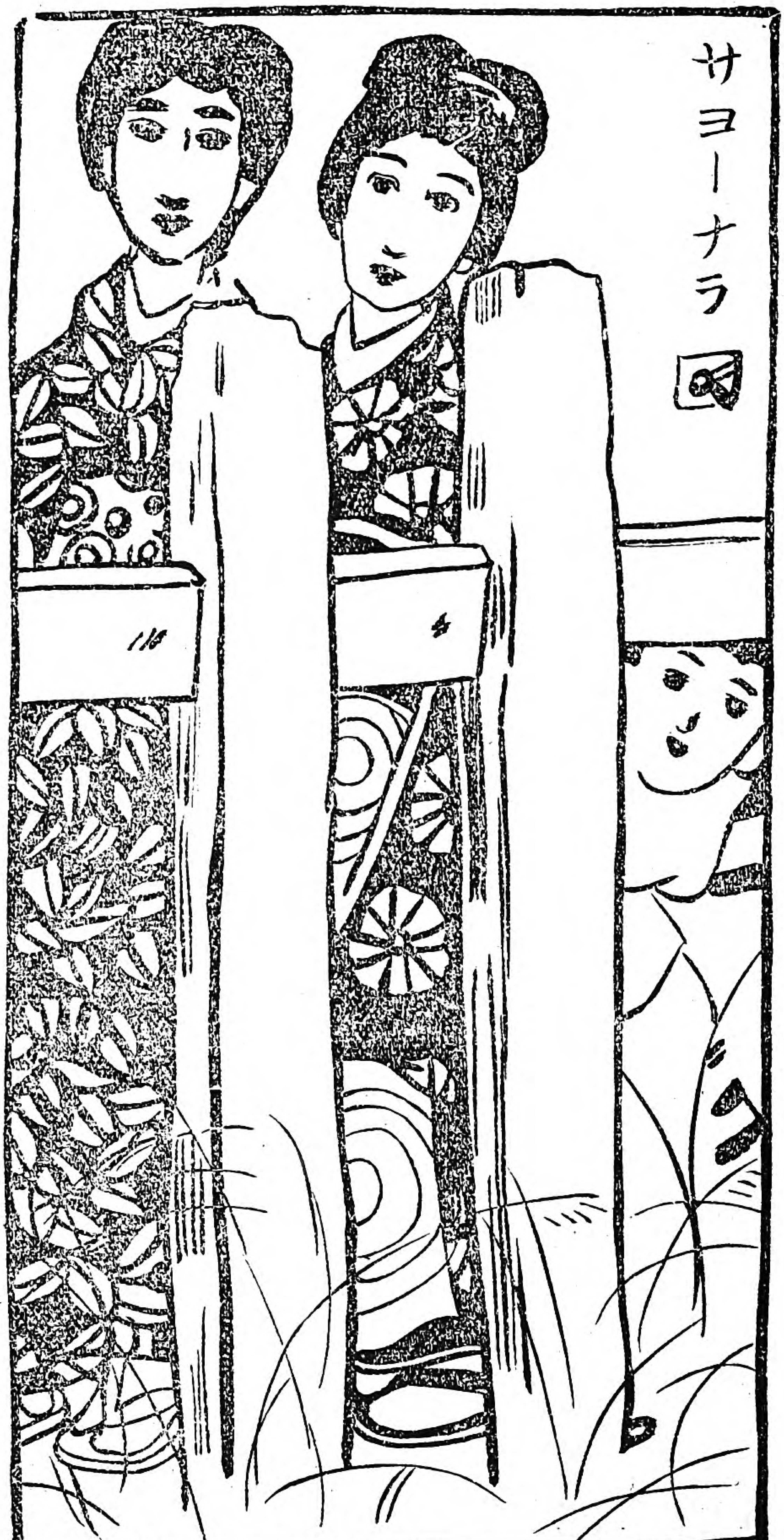
丹後河守の町に鹽見千代子といふ女があつた、かたの如くクリスチヤンで、豪家の嬢さんで、軍人の奥さんである。聟君の家に入る前の日、福知山の停車場で「お別れ」をした。名殘となりし夜はさすがに泣いて

夢に入れ今宵逢はんとよめ入の前の夜われを泣け
る人妻

わが怒りを解かんが爲に夫に秘して或る犠牲を拂ふ約束をした女がある、

纒かしめし
玉のうなじ
よひと妻の
わが手をゆ
めむゐどろ
きもあれ

筑波の麓をよぎる時、義兄なる××は不埒にも彼の肩に凭つては寢かゝるのであつた、遺書といふものを二度書いた女だが、夫には内容を知らせてはあるまい。



屍は白き面してメスもてる男の子の目をば媚び
て見るらむ

月の沈むころであつた、森の奥に二人は居た。

八つ口の緋のこぼれよりしのばせしいつゝのゆび
は乳ぶさこそ知れ

八月のなか頃だつたので、よくかわいた。

くちづけは水の味なり水こへばまたくちびるを君のもてくる

きれいにむいた梨をピンに刺してくれた。

ギヤマンのカップに水漬く梨さして喰ませなどせし星形のピン

あゝ其髪よ、髪は寂しかつた。

酒に代へし明智がつまか、もり遠に切らせし袈裟か、君がきる髪

甲斐の國を過りし時はまだ長かつた、ハイカラに結ふのはわたし上手なのよと語るのがいぢらく、

赭ければ愛しとにはあらず、切ればかつ涙に濕める髪のあぶらよ

一年ほどすれば長くなるからと慰めたけれど、

心ばかり伽羅炷きしめて母の手にながき黒髪かへしやるかな

傷ましさは「みその」をかくて後もたづさへてゐたことである。

髪結へば見るものにせしかどみずらにくきものとし捨てたまふらむ

なに故につくる色ぞと問へば、君ゆゑにと笑うていふ。

肩をわづかおほへる髪にそへ毛して結へるおもわのすこし寂しき

朝、目さめてはよく泣くことがあつた。

夢あさあさ母を忘れぬかなしさに先づゆくへなき櫛たづぬるか

はこまくらをそやなれねばピンおちて大わらはめく曉のかみ

更闌夜靜　長門閉而不開、月冷秋風　團扇杳而共絕。九月七日。

ある時はきみとありけりみづのうへのくぐひのとりの白きはねなる

かきいだけば「は」と聲たてゝあぶなげにたもとかかへてわが胸に伏す

夜、月無し。

嚴粧金屋ノ中ニ青蛾正ニ畫カレ、罷宴瓊筵ノ上ニ紅燭空シク餘ルラム、人の子は幸なるかな。
母は靜に眠つてゐる、わざと雨戸を閉ずにおくので秋の夜の空氣は蛩の聲の流れる如く流れてゐる。月二人を照せり。
月はわれ等の顔を照して、黄ばめる疊には黄ばめる影を、青き蚊帳には青き光を投げる、夢のやうな霧が輕く庭をあるいてゐる。
世界には今誰が起きてゐよう。
霧は小さな分子の一つ一つに月光を帶びて野を山を川を沼を歩いてゐるだらう。足音を忍ばせて。
門はしまつてゐる。

わが涙血となりて落つあまりにもそこなはれてし
こゝろなるゆゑ

寂寞たる天地かな。月とわれと、われと母と。

七月十日、月下に臥して。

母しあればかゝる身ながら今日ながら死なぬ命と
なほやおもはむ。

新刊

○二人やんちやん　佐々木邦著

我國には家庭の子女が集つて面白く讀んだり、聞いたりする無邪氣な小說が少い、お伽噺は有りふれてゐるし、昔の小說はふるくさいし、西洋ものは耳遠いし、文學もの〻小說は若い人を刺戟するし、實にいざとなつてみると家庭の讀物の好いのが少いのに驚くのである。此時二人やんちやんが出版されて、盛んに婦人方の間に評判されるのも偶然ではない。姉さんは妹の爲に讀んでやり、お母さんは子達の爲に讀んでやり、少年少女は自ら振假名をたどつて讀んでゆくのに、少しも苦まない、らくに讀めて、しかも罪がないから笑ひ出す外に何等の影響を殘さない、くだらぬ世間話に笑ひこけるより、上品で、趣味があつて。敎訓の意も含まれて居るのだから此れほど好い讀物はない。吾人は何の憚るところもなく此の二人やんちやんを世間一般の家庭の讀物としてお勸めする（定價金三十五錢、本社發行）

○劇五篇　黑田玄一著

「呪はれたる生存」「報酬」「朝」「哀願」「死の報知」の五個の脚本を收めてある、作者は新進無名の作家だが此だけ眞面目な勞作の結果を見ればよほど自信のある作家だらうと思ふ。まだ各篇とも通讀しないが、作者は無論社會劇の方に心を注いでゐるので、對話なども流暢に出來てゐるすら〳〵と讀めるだけ劇として上場した時には何うかと思ふ作もある、兎に角吾人は未來ある脚本作家の一人が此はな〴〵しい首途を欣ぶものである（定價金壹圓、神田裏神保町上田屋發賣）

○惡人研究　西川光二郎著

惡人研究とは書物の題が奇拔すぎて何んなことが書いてあるのかと疑ふ人もあるかも知れぬが、本書はいろ〳〵の惡事を犯した人間が、或は悔悟し、或は遷善した事實を書いて、著者の意見を加へたもので、所謂惡人必ずしも惡人ならず、罪を犯すには犯すだけの原因も動機もあるといふことを論じ彼等が一朝苦心に歸した時の心持をも書いてある、人間全體に同情するには此種の書物も讀んで、世の中の明暗兩面を知るやうにならねばならぬ（定價金五十五錢、麴町區洛陽堂出版）

口語新譯

枕の草子

外島浪之助

草の花

撫子。唐撫子は更にも言はず、大和撫子も愛らしい女郎花。桔梗。菊の花のところ〴〵盛りすぎたる。苅萱。龍膽はむづかしい枝振だが、外の花が皆霜枯れた時に、艶麗な色に抜けいでゝ咲くのが好い。

わざと取り立てゝ擬人するほどのものでもないが、葉鷄頭は可愛らしい。かま(鎌)のつか(柄)とは嫌な名だけれど、雁の來る時紅なりと文字に書けば然うでもない。

かにひ(雁緋?)の花、色は濃くないが、藤の花に似て、春と秋とに咲くから好い。つぼすみれ、すみれと同じやうな花だ、殊に同じやうに萎んでしまうのは悲しい。

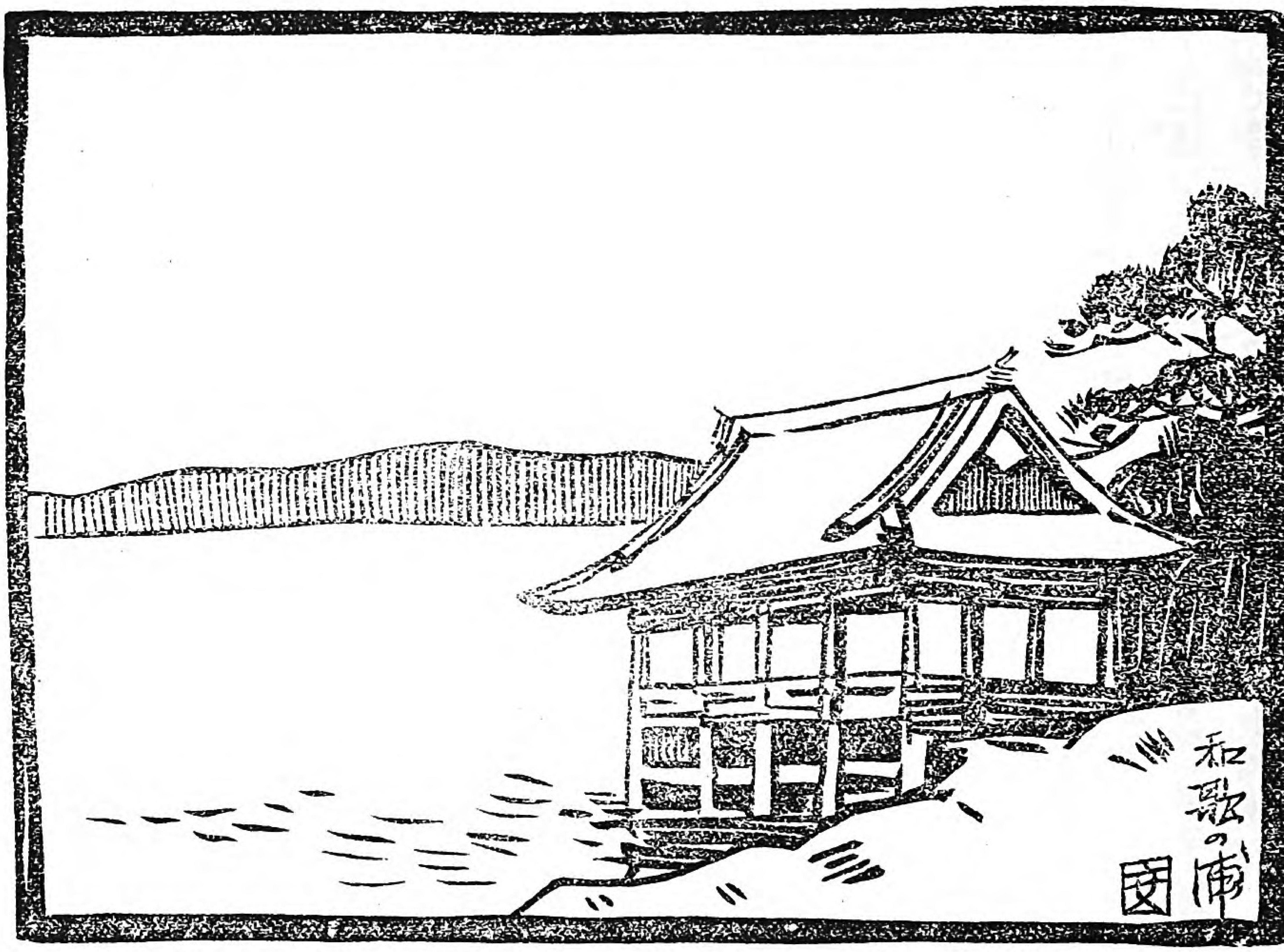
繡線菊。夕顔、夕顔は朝顔に似て、朝顔夕顔と云ひつゞけてみると、花の姿もおもしろさうだが、實の形の憎らしいのが口惜しい。何うしてこんな形を持つてゐるのだらう、せめて千生酸漿のやうならよかつたらうに、とはいへ夕顔と云ふ名は好い。

芦の花、何處と云つて見どころはないが、白木綿の幣帛に似てると云はれると、成程其心持もあらうかと思はれて、只の花とは違ふ。それに若い芽の萌え出た時の樣子も薄に劣らず、猶ほ水面に茂つてゐる時もおもしろからうと思ふ。

此處に薄のことを言はなかつたら、人は怪むだらう凡て秋の野のおもしろさは薄があるからだ、色も濃く

穂に出た薄が、朝霧に濡れて伏しなびいてゐる姿は外に比べるものもない。併し秋も終になると何の見どころもなくなる、いろ〳〵に亂れ咲いた花も跡なくなつた後、冬の末までも頭白く自ら老耄たのも知らず、昔の色香を思ひ出がほに、ひよろ〳〵と靡いてゐるのは能くある人に似てゐる、然う思ひくらべてみるとあはれでもある。

　萩の花は色深く、朝露にぬれて、枝もたわやかに咲きひろがつた上に、さをしかの踏みならすといふのも異つた心持がする。



からあふひ（向日葵）、取分けて好い花とも見えぬけれど太陽にしたがつて傾くのが、凡ての草木の性質を表してゐるやうでおもしろい、花の色も濃くはないが山吹には劣るまい。

　いはつゝじも別段變つた處はないが、いはつゝじ折りもてぞ見るせこが着しくれなゐ染の色に似たれば（和泉式部）と云ふ歌もあるだけに、さすがにおもしろい。

　薔薇は近よつてみると、枝に刺があつて、とげとげしいが、雨後の水邊、或は夕日さす黒木の階段の上に咲きみだれてゐるなど。



數字の上に表はれたる婦人の自活

しぐれ月

婦人の職業には種類も多うございますが、此頃だいぶ現れて來た新聞雜誌の婦人記者と稱する者の一箇月の月給は大抵十五圓が通り相場のやうです。仕事に依つてもつと多く出すところもございませうが、大抵初めは十五圓と云ふことらしいです。

所謂婦人の自活を目的とする方は、兎に角初めは此十五圓でやつてゆくだけの覺悟がなくてはならぬのです、婦人記者など云へば、何んなに立派な生活をしてゐるかと、地方などで想像してゐる方の爲に、生活の內容を具體的に曝露してお目にかけます。

此處では單に數字に示して置くに止めますが、實際何んなに困難であるかと云ふことは遂つて說明いたしませう。苦心慘憺してやりくりしてゆくのも、所謂生存競爭とやらに負けない爲とは云へ、只さへ甲斐ない女の身の途方に暮れることも度々でございます、兎に角お話は別として、一箇月の豫算表だけを先づ御覽に入れませう。

一ヶ月の生活費

室代　四圓(六疊)

これも一概に言はれません、場所と、室の古い新しいで大相違があります、六疊で四圓は普通神田本郷の相場ですが、疊でも新しくて床の間でもあれば四圓五十錢乃至五圓。四疊半だと云ふと三圓から三圓五十錢、三疊だと二圓以上三圓が普通。此は素人の家の貸間の相場で、下宿屋になると室代は此より二割ぐらゐは安いでせう。

米代　二圓

時の相場で一圓五十錢で濟む時もありますが、此頃は二圓。

酒屋　四十九錢

醤油は一升三十五錢。鹽二合二錢。味噌十錢。酢一合二錢。

八百屋　一圓

　此中には豆腐代も含みます。

電車代　二圓〇五錢

　回數乘車券五十回分です、往々超過します。

履物　一圓

　八十錢ぐらゐのを買ふと二週間もすると緒が切れます。

足袋　四十八錢

　二足の代金、足袋の汚いのは一番みすぼらしいから二足用ゐます。

石油　三十四錢

　二升の代、冬と夏とで多少の相違あるは勿論です。

炭　五十五錢

　冬になると二俵は使ひます。

郵便　四十五錢

　切手三十錢、はがき十五錢

新聞　二十五錢

魚代　七十五錢

　小さい切身一片が三錢の時も五錢の時もあります。

水道費　十錢

　其家主に水道が引用してあると、大概十錢乃至十五錢は室代の外に請求されます。

文房具　四十九錢

　筆二本八錢。巻紙十錢。封筒六錢。鉛筆四錢。手帖十五錢。半紙二帖六錢。

湯錢　二十五錢

　湯札を十錢宛買ひますと十錢に四枚あります。

交際費　七十五錢

　お客樣には大抵十錢でお菓子を買つて出すことにして居ます。偶ま二三人も落ち合ふと十錢が二十錢になります、其他諸雜費。

計金拾五圓也

ざつと豫算を立てゝみると右のやうになります、服粧費とか、器具費とかは殆ど入つて居りませんし、豫算以外に臨時費と云ふものも多少はみで置かねばなりませんから、隨分切りつめた生活費です。一方で増せば、一方は減ずるとか、豫算と實際とは違つて來ますし、一つ豫算以外の支出が出來ると、全く狂つてしまふのでございます。

東京ほど物價に高低のある處はございませんから、自分さへ節約すれば十五圓でも自活は出來ないことはありません、本人の心懸次第でせう。



日光隨行記（續）

神近市子

◉華嚴

白雲の瀧を右に、冷やかな餘沫をあびて小橋を渡る。

「去年の八月に此瀧で東京から來た女學生さんが、二人死にました」

と案内の車夫は云ふ。「何故死んだらう」「どこの人だつたらう」「どんな人だつたらう」私はこんな言葉が列をなして咽喉をはせ出るをグッとのんだ。

あゝ誰が、どんな閑人が日々に束なして新聞に現はれる人生の慘劇に、注意して始終を知らう。只若い人が足跡も殘さずに、默して暗に行く心は、若い涙多い私共、ある少數の者の心にのみ見えない感覺を通して見らるゝ。

「前にも後にも行く人達は有つたんだ相ですけれ共、ほんの一分間に鳥の樣に此橋から飛び込んださうで……若い綺麗な人達で、美しい着物の色が、暫時は波の間に見えたつて云つて居りました」

話しながら車夫は新しい草鞋の緒を通しながら先に行く。彫り拔いた樣な山と山との間の小徑を傘をたよりに、私共はついて行つた。

瀧茶屋の藁葺の屋根の見える頃には、私共はドーッドーッと山と山との間に反響するある不明な騷然とした音を聞いた。「華嚴！華嚴！」と私の胸はをどる。

それがどんな歴史があつて、どんな動機で有つたにしろ向陵の才人に「既に巖頭に立つに及んで何等の不安あるなし。始めて知る、大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを」と叫ばせた山ではないか、水ではないか色ではないか、遠く響く太皷の音に聞き耳立てゝ、賣藥賣の赤旗に切望を感じた昔の日の樣に、一種の憧憬と、悲しい美しい詩ひく心の緒琴の震ふを覺えて、前

に走り行く田舍の里の子の後を追つて、私は走つた。

山峽を出づれば一帶の白仭天より逆樣に立つと見え
天風吹き落つ大華嚴、千仭の浪逆捲きて、
恨は霧と迷へるか、やがて咲くべきとてあかの、
花待ちおへで我をすて、世をすて君よ何地ゆく、
紅顏今も目にあれど、幽明界の境は遠くして、
友寂莫の思有り、

私はある人の弔つた詩を覺えて居た。

天を境する霧深い山頂の一角を破つて、數なき水矢の石層を深く穿つて居るとも見える。青い磁器の一大圓柱に銀ちりばめた白のベールを長く垂れて、裾擴げたとも見える。きほいはやる水勢にたぶらかされて、青苔涼しい兩岸の浮つ沈みつすると人の眼には見える數知らぬ岩雀は、世には危險はなきものゝ樣に、瀧の餘沫に打たれながら、雌雄呼びかはして餘念もない。

多感な青年の死を聞いて、我行く道を示された樣に泣いた小女は私ではないか。その時は只行き處なき淋しさに、死其ものゝ暗黑と思つた影に吸はれた人を悲しんだ。眼艶ある乙女となつて戀する詩を知つてからは、人失つた心と、瀧の音との調和も見た。春秋こゝに廻つて、かへす袂の短かくなつて、「生命」を思ひ、「人の世」を思つて私は藤村氏の死を知る。

繪葉書には「此處でなら私にも死ね相です」と書いて都の女友によせた。戀はれたのを捨てゝ送つた男にとは思はなかつた。

◉湖畔

湖畔ホテルは右に一橋をひかへ、湖の東南に聳ゆ。高原の時定まらぬ糠雨に木々の梢重く、暗雲低く垂れて、喪に居る人の住む里とも思はる。

硝子を越して見る中禪寺は夢の國のもの、樣。ヒタ〳〵と水は音もなく寄せ、漕ぎ放れ行く船歌もない上野島のあたりは霧に閉され、波の色には住む里はなれた二人の心の不安の色が見える。その近くを白鳥に似た水鳥の白い頭を立て、兩肩をそびやかして湖の精の如くに水を支配する只一のものゝ樣に行く。

◉輝く廣間

ミセスエフは袖の短い青い着物の裾を引いて、椅子に埋れて、ジヤパンタイムスをよんで居らるゝ。入口の右に贅澤な客間を控へて廣間の四方の壁には、二間位な鏡がはり詰められて、其間々には日光彫刻の睡猫

や三猿の樣々の形のが飾られ、近在の風景の油畫も美しい。三四脚づゝの椅子に圍まれた卓には、後の丘に開いた白百合や、野生の菖蒲や鐘つき草や、罪多い私の心の樣に、こは〲と人をも世をる憚る紫陽花やが挿されて有つた。一方の壁に近く雜誌や圖書の棚も有つて、金文字美しい私共には解らぬ國々のものも電光輝く食堂に近く玉突場も有つて、幅廣い男の笑聲に細くて高い女の聲も交つて時には聞える。客間にそゞろ彈きするピアノの唖く樣な佳調に慰められ、鍛練されて音もなくスッ〱と通る給仕に驚かされながら、私は雜誌の口繪を見入つた。(十日の夜)

◉バルコニーより

終の夕暮を私は獨ミセスエフのバルコニーに立つた日光では山に靈あると云つても、恐らく否定する者は有るまい。高く黑く、靜に温に世に物もない樣に聳ゆる山を危ふげに負ふて、人住む家は點々と隱見し絲の樣なレールを辿つて電車はゆる〱と行く。それが如何にも果敢ない自然に對する人間の無益な爭の樣を見せられた樣に思はれた。

頂近く雲行怪しければ、吹く風も心細く、打ちひびく寺々の晩鐘もうら淋しい。庭園には英國人らしい兄弟がベンチによつて、弟の吹きすます紫笛を知らぬもの丶樣に、兄の靜な碧眼は今現はれた夕星にそゝがれて有つた。

忘れては、私は日光に居るのだとは思はなかつた。その頃讀んだ白樺の有馬(?)さんに書かれた瑞西の片田舍のホテルが、イブセンの「彫刻師」の怪しいホテルが、さうした處に故國遠く、友もなく戀もなくて行衞定めず漂浪してる樣に感じた。

あゝ南に、南に、私の故鄕はそこに有る。私の戀もそこに有つて。一人になつた私の心には、其感がある例の不確な感覺によつて告げられた、私の行く運命の樣に思はれて、泌々と涙を流した。

一體に臆病な私は、今迄ある目的に外遊をすゝめられても、行くことは出來なかつた。あゝ然しそれも、人有つてこそ行かれなかつた。一人の今、何止める柵の有らう。

恨みと涙を含む身體を運んで、見知らぬ國に見知らぬ人に、怪しい音に怪しい色に胸さはがすも一興ではないか。一年餘の學校生活の後には、無限につゞく漂浪者の生活に入らう。海を渡つて！海を渡つて！(終の日)

◀諸孃及び奥樣の良參考書▶

本書の内容

婦人ノート

【裁縫】◎普通の着物も縫へないやうでは嫁にも行かれぬ（松韮紫花）◎裁縫と機轉（吹雪野）◎何より好きな裁縫（田舍女）【音樂】◎生田流と山田流の區別（櫻井銈子）【育兒】◎仲子の育て方（笹の露）◎子供本位の教育家の家庭（美智子）◎子供を白痴にした若き母の罪（島の女）【學校】◎新に寄宿舍に入らんとする友人に注意する書（毒だみ）◎往復三里の學校通ひ（文香子）【衛生】◎處女の衛生と旅行の衛生（むらさき）◎看病の心得（N女）◎化粧法問はず語（鈴音）【園藝】◎櫻草の栽培（牧野理學士）◎無邪氣で珍しい家庭公園（新田文子）◎養鷄（むらさき）【運動】◎何時でも出來る室外運動（中川女子高等師範學校長）【圖畫】◎郊外寫生の話（岡野學習院女學部教授）【詩歌】◎萬葉集の佳作（澤村文學士）◎詩を作る呼吸（金田代志子）【作文】◎文章の今昔（河井醉茗）◎何うすれば文章が上手になるか（撫子）【出産】◎二つの生命（磨志緒）◎始めてお産をする方へ（若き母）◎三度のお産にて得し私の經驗（みどり）【職業】◎女子就職の領分（海軍少將中村靜嘉）◎仕事の苦痛（白山伏）【化粧】◎顔の美しくなる食物（北原十三男）【料理】◎お芋の料理と御飯炊き（さつき）◎臺所の一週間（笹舟）【家政】◎家庭心得其をり〱（萬野葉女）◎日に一錢づゝの貯金（北利子）◎商家の店と奥（はる子）◎吾家の室内に揭げて置く各種の表（紅梅女）◎家庭の秀才と云ひたい（春野胡蝶）◎時間の屑を利用せよ（みきよ子）◎母のをしへ（佐分菲影）◎母の留守（はさくら）◎肉體の痛み心の傷み（山桃）◎家庭の心おぼへ（野の花）◎感心な奥樣（内海千鳥子）

▲對話文髪結所の朝（うす雪）外數篇▲和歌數百首▲ノート（東京、英語、文學、滑稽）

全二百餘頁美裝

定價金貳拾錢

送料壹錢五厘

●發行所 東京市京橋大鋸町 **女子文壇社**（振替東京壹七九貳）全國雜誌書店賣捌●

見よ◎月經なき女子◎病める婦人

▲勿驚……藥力最精實……効能確保……有効無害……

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物

有効確證



其主藥は最新唯一の通經藥にて**帝國大學**病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の**月經**閉止月經**滯**り經〻順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

諸孃姉の福音



◎肥滿病新藥

（米國新輸入）

子供の折**美愛**と賞せられし人も年頃になりてよりぶとく肉太りたる爲め上圖の如く**醜婦**となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンッオルト氏の發見藥にて脂肪多き人◎ぶとく〳〵ふとり◎血太り◎肉太り◎酒太り◎水太り◎顏赤◎にきび◎ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は紛痆たる艶白となり誓て**美顏**美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

藥一劑一圓五十錢三劑四圓卅錢送料
價二劑二圓九十錢四劑五圓半　十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 **小宮愛生堂**

◎腦神經衰弱及生殖器病藥

壯快愉絶



藥價四十五錠入壹圓 百錠入貳圓二百八十錠入五圓特器入拾圓
適効ハ神經衰弱遺精夢精早漏房事過度射精無能貧血勃起力減少精神的及身體的過勞等に用て特効有り

本劑は獨逸醫界大博士メリングー氏が發明に係る新劑にして男女生殖器不能即ち**陰萎病**活力無能發育不十分等に起因する病症に使用して**可驚**大効ある新發見藥なり故に該病患者は一日も早く本劑を服用し**人性最大の快樂**を全ふせんと欲する人は必ず服用せよ服用僅かにして精力を尙一層强健にし偉大の効力顯る……奇効現代唯一の良藥なり

◎淋病でこまる人は

先づ完全なる良藥を撰べ

りん病消渇必治藥

內用外用

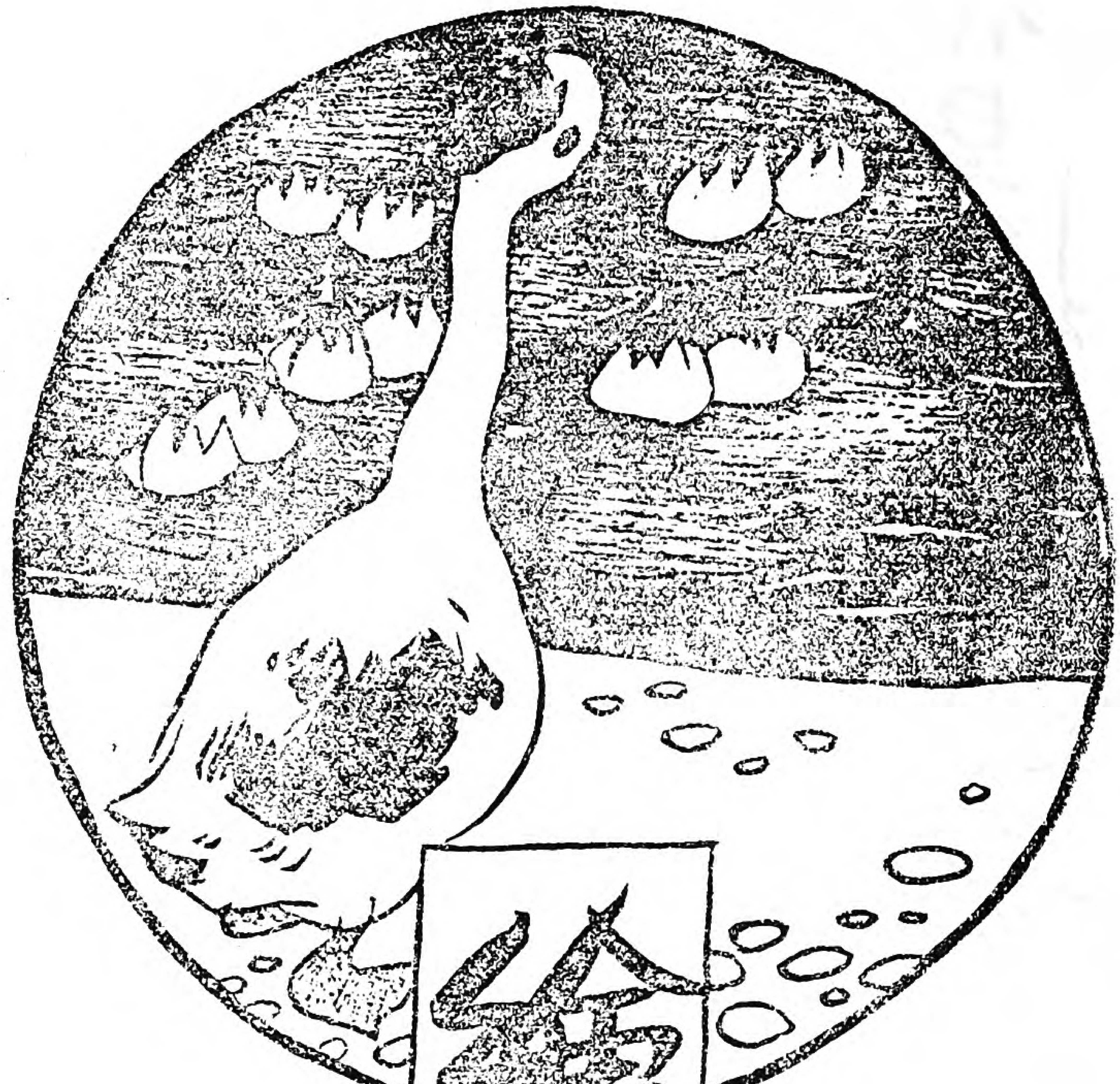


奇効說明書無代進呈

內用三日分五拾錢七日分壹圓十五日分貳圓特製分參圓八拾錢
外用三日分參拾錢七日分六拾錢十五日分壹圓廿錢特製貳圓廿錢
送料內地は各八錢要す海外は小包卅錢

本劑は各國醫科大學處方及び藥劑を參酌し研究に苦辛を重ね一大完全なる良藥を調製するを得たり依て之れを多くの患者に與へたるに其結果實に驚く可く急性淋病は勿論慢性痼疾の淋菌も悉く殺滅して更に餘す處なく治癒せしめたり故に同病患者は速に試みられよ必ず全治保證す—

本舖 東京京橋區中橋和泉町 振替一〇六七七番 **小宮愛生堂**



絵と歌

竹久夢二

ひとかげなる
青き無花
果しのびて
ものをおもへ
る青き無
花果





繪と歌



なんとなく身ぶりそぶりが氣にそはず
壁にもたれてさしぐまれぬる　―芸子―






病院のたそがれころのわりもなや
しろき帳をものいでず引く



眼をふせて
人をおもへば
しらしらと
睫毛のひまた
隠れし

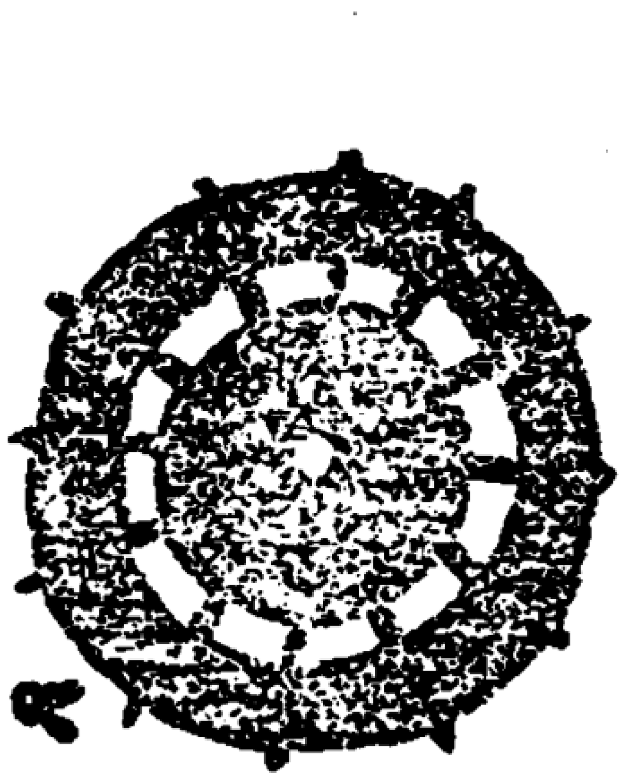
慈悲もなき海かな遠く都よりのがれて泣
きに来しわがまへた
——砕花——




つばくろの子は
巣をたちぬ
さびしや

この家の少女祈しく炭をとらび三味線昔すと
摘めるあはれさ
よみ人しらず





夕顏鉢

澤村胡夷

何時であつたか忘れて了つたが、何でも急に雨の降出した夜だつたと覺えてゐる。

　私は電車から降りて傘を持たなかつたから停留場の直ぐ側の植木屋へかけてんだ事がある。その店頭には金蓮花の鉢植やら月見草の土株やら葉鷄頭の根株などがところ狹に並べられてあつた。その中に夕顏の二鉢が殊に眼立つてゐた。

　私が駈込む以前から一人の若い女がその店頭に雨宿をしてゐた。その女は空を眺めては心配さうに隣の雜貨屋の時計を覗いてゐたけれど、雨は急に上りさうにも思はれなかつた。女は自烈たいといふ風に、神經質な白い額際に二つの眉を寄せてゐたが、電車はその間に幾臺か吾々の前を過ぎて行つた。

　もう仕樣が無いと云ふ樣子で、女は靜に店頭の草花に眼をそゝぎ初めた。植木屋の老爺はてうど草花に水をそゝいでゐたが、其手をとゞめて吾々の方を顧つて、

『一鉢如何です』

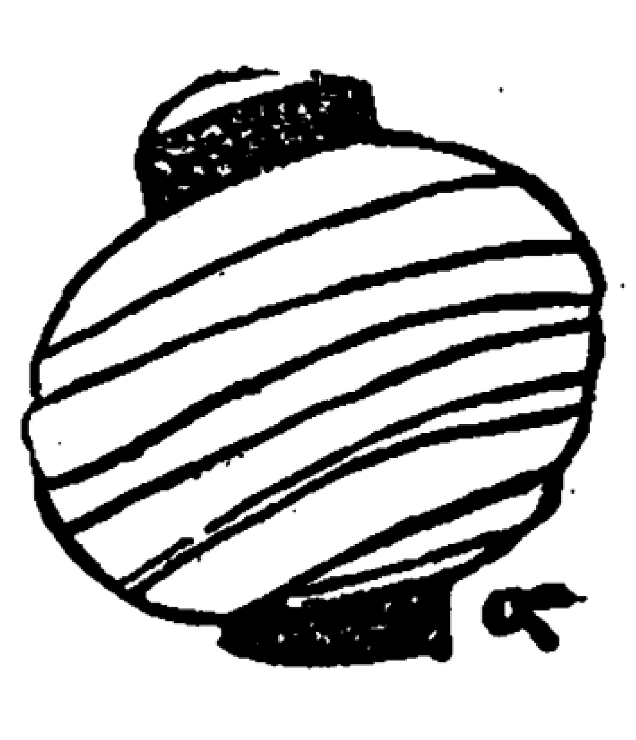
とにたにた笑ひながら話しかけた。女は老爺の話頭を私の方へ向ける爲に、故意と私の顏を覗込むやうにして、すいと棚に飾られてあつた夏菊の方へ視線をそらした。けれども私は默つて月見草の黄色に咲いてゐるのをみてゐた。すると、植木屋は再び水を注ぎ初めた。

　女はやがて二鉢の夕顏に眼を注けて、熟それを見て居つたが、植木屋が一順水を注ぎ終つた時に、

『……私ね、あの夕顏を、一鉢もらひませう……』

と幽かに植木屋に言つたので、老爺は、

『へい、へい、何方に致しませう？』



と尋ねた。

てふと、その時、空俥が一臺通つた。

「俥屋さん！」

と女は威勢よく呼んで、

『……右の方を』

としとやかに植木屋に言ひながら、車夫の方を振向いて、

『あの……植物園の前の所まで送つて下さい』

『はい、はい』

と車夫が答へて、俥の梶棒はがたんと店頭の敷石の上におろされた。植木屋が夕顔の一鉢を車夫に渡すと、車夫はそれを大切さうに受取つて、女が俥に腰を降すまで、ぢつと捧げてゐた。

女は幌深く身を隱した。車の梶棒は靜にあげられて車輪の影は雨を衝いて横町の闇に隱れて了つた。

その翌晩、私は再び植木屋の前を通つた。夕顔の一鉢は昨夜の儘に殘されてあつたが不圖この殘りの一鉢を買つて歸らうかといふ氣になつた。而して遂に私はそれを買つて、宅へ持つて歸つて、椽側にならべて置いた。

程なく白い花が毎晩いくつも咲くやうになつて來た雪のやうなこの純白な花が幾つ咲いたか、私は覺えてゐなかつたが、凋れた花瓣は大きな鉢の縁やら、細竹のさゝやかな垣に幾つとなく横はつて、もう今では咲く數も一日毎に減じて了ひ、一晩か二晩をおいて一輪づゝ夕風にしなふやうになつて來た。

私はそれで椽側からその鉢をおろして了つた。

その後四五日を經て少しく急ぐ事があつて私は夜深まで鉛筆を走してゐた。而して全く書きものに疲れて鉛筆を休めてゐた。すると、私の床下から、鋭い……幽かな音が聞えた。夫は消えて行くでもなく、高まつて行くでもなく、唯絶入るやうな響であつた………

蟲！

卒然として私は秋が身に逼つてゐるのを覺えた。而して思はず識らず椽側から降された夕顔の鉢を瞰下したが、それは翌日の蕾を唯一つ殘してゐるばかりであつた。

私は再び鉛筆を走らせながら、時々とりとめもない事を考へ出してゐた。暫くすると、鉛筆の進みが澁つて來たので、……私はぢつと眼を閉ぢてみた。

すると何日かの若い女の顔が私の眼のさきに瞭然と書き出されたのであつた。

雨

森川葵村

ふる雨のたゞよふ國へ
吾を追ひくる聲より逃れ來ぬ、
かた岡のさびしき小舍へ。
風無き雨のかなたより吾呼ばふ聲、
夜となれば吾はまたその聲を聞く。

日ねもす雨は湖のうへにあり、
夜もすがら雨は藁屋根を漏り來る。
小舍の戸口に立ち見れば
たゞよふ雨は湖をうち、
泡だつ白き漣の集ひつゝ破れつゝ。

森は日もすがら雨もてつゝまれつ
森は夜もすがら雨の下にうづくまり、
落ちくる雨は空より叫べり。
日も夜も、雨のさなかに吾は聞く、
あゝ遙、かなたにて呼ばへる聲を。

沼のほとり

蘆の長葉のつぶやきを吾は聞く
青國原の灰いろの沼のさなかに。
綠の岡と砂地のかひを
蘆の長葉につぶやく海の風。

蘆の長葉のつぶやきを吾は聞く
幾日と知らず幾夜と知らず。
吾は聞く浦洲に飛べる野鴨の騷ぎ、
吾は見る空翔くる海鷗の圓を描くを。

蘆の長葉のつぶやきを吾は聞く
幾夜と知らず幾日と知らず。
かくて忘れぬ老の身を、死にてゆく日を、
さては戀しき若き日も、はた愛の衰へも。

蘆の長葉のつぶやきを吾は聞く
晝となく宵となく。
かくて吾が忘れてし昔の夢の
それとなく思ひぞいづれ。

蘆の長葉のつぶやきを吾は聞く。
吾が忘れてしそのかみの平和の
ふたゝび吾に歸らんとて叫べるを、
あゝそはあだなりや、あだなりや。



東西、夜の歡樂

（劇場の印象）

西は帝國座

梨花

四時半に家を出るといふに、二時から仕度を始めた今朝結つたばかりの髪を又結ひなほして、精々おしやれをする、女の足は弱いから宮川の奥様を誘つて先に行けといふ。寄つて見ると、まだお湯には入つて入らつしやる、暫らく待つて居たけれど、今入つたばかりですから、お先きに入らつしつて下さい後から主人と伴れだつてまゐりますからと仰つしやる。そう〱御主人の方は今日は六時までだつたと思つて、ではお先きに、いゝ場所をとつときますからといつて失禮した一人で櫻宮へ着いたのは、四時五十分、十分過ぎた頃どや〱と待合室へはひつて來た人達を見たら驚いたM奥様とY様とTと、三人一所なのだもの、御湯から上つて、御化粧して着物を着る間が、十分とは驚くの外はない、私はまあー、といつたきりぼんやりして居た。すると耳元で、周章者が！そんなに急がなくもいいのに、と叱られて始めて氣がついて御詫びをした。けれども私は口惜しかつた、だつて私ならどうしても一時間餘りはかゝるもの、そうしたら遲くなつていゝ場所がなくなると思つたから失禮したのですわつて口の中で辯解して居た。

あなたどうすればそんなに早く御仕度が出來ますのと聞いたら、私が出た後へすぐ御主人が一寸歸つて早く〱つて急がして帶を締るにも手傳つて下すつたのだと仰つしやる、それにしても隨分早いと思つた。

櫻宮から汽車で梅田まで、梅田から電車で帝國座へ着いたのは五時五十分、始まるまでには四十分ある、切符を買つて置いて心齋橋通りへ出る、Y様とTとは

蕎麥を食べに行くといふ。御前達を伴れて行くと遲くなるから二人は勝手におしだつて隨分ひどい、二人は顏見合せて笑ひながら歩いた、Y樣とTとは有名な何とか屋へ飛ぶやうにして行く。

とある本屋に、京人形を見つけた、私はかけ込むで急しく、京人形、夏の卷、それから秋のもとつゞけさまにいつた、小僧はすぐに出してくれた、私はうれしかつた、前からほしい〳〵と思つて居たのが手に入つたのですもの、之でKさんに頂いた春の卷とで四冊になる、外でも一寸買物をして歸つて見ると丁度五分前椅子にかけて少しの間でもと夢二畫集を見る、Y樣とTはまだ歸らない。

靜な鳴物につれて幕は明いた、正面の一段高い所に清盛入道、右手に近侍の者四人、左手が祇王祇女と侍女が控へて居る、いづれも下髮に緋の袴の扮裝。

先づ右側の近侍が代る〴〵御機嫌をとる。

下手の御簾を卷いて一人の侍女が出て來て、佛御前の參上を傳へる、清盛すぐに返せといふ、近侍も其に言葉を添へる、祇王手をついて御目通り許さるゝやうにと願ふ、清盛氣を變へて、さらば之へ通せといふ、侍女が下ると間もなく佛御前は盛裝して出て來た。

此時Y樣T、M樣K樣四人で入らつしつた、入口で丁度一所になつたといふ。

佛といふはそちか、一度ならず二度三度、推參するとは我身を輕んずるに似たり、なれども祇王が強つての願ひ、許す、顏上げい。なか〳〵威張つたもの、佛謹んで禮をいふ、さらば何か謠ひて見よ、佛ハーと答へる、祇王にこやかに笑みて、さらば妾樂の調べをなさんといふ。佛今樣を謠ふ、面白し〳〵此上は舞を致せ。いふのを忘れた佛御前は貞奴である。

何の舞か私には解らない、けれども其さす手引く手のしなやかさ、目の表情の美しいのには女の私でもうつとりして仕舞つた、清盛はと見ると、脇息にもたれてゐる臂をはづしては氣がついて脇息にもたれる、と又はづす、後の方で誰かプッて笑つた人があつた。

舞がすむと清盛言葉をつくして賞める、そして佛は此まゝ止め置くべしといふ、佛驚いて色を變へて、君の目通り許されしは祇王御前の厚き御情、さるを人も無きやの擧動は佛仰せに背きまする、といふ。祇王に遠慮があるならば祇王こそ暇を遣す、すぐに出て行けといふ、祇王驚いて手をつき、佛御前は佛御前として妾等も御情の端に置かれまするやうと哀願する、なら

ぬ早く出て行けといふ、さらば日の暮れまするまでといふ、清盛怒つてえゝぐず〳〵云はずとさつさと出て行け！と、どなる、祇王返す言葉もなくハ――。

佛、他の座敷にて杯せんいざ來よと手をとる、佛辭む處へ、暫らく〳〵と出て來たのは主馬判官盛國、清盛の亂行を責めて涙を流して諫める、清盛怒つて手討ちにするといふを近侍に止められて、さらば小松の邸を預る盛國、此まゝに捨て置くともよも余の寝頸も掻くまい、さらば佛來よといへど佛命にかけても從ひませぬ、此上は早々御暇賜はるべしといふ、そなたまでがいらぬ事をと笑ひながら無理に手をとつて奥へはひる、近侍や、侍女も其れにつゞく。

後に殘つたのは祇王祇女と盛國の三人、後見送つて恨めしさうに顏見合せる、ワッと祇女は耐へ兼ねて泣き伏し、姉御前口惜しゆうは在はさぬかと縋りつく、さ、口惜しゆうは侍れども、とそつと涙をふき、此上は只自害して、祇王がいふを待たず



いや〱佛に恨の刃報いてからと祇女いふ。盛國二人を諭して、何事も思ひ止まれ、家には母人も居らるゝなれば早く歸りて孝行せられよ、といふ。祇王思ひ返して頰に、

　萠えいづるも枯るゝもおなじ野邊の草
　　いづれか秋にあはで果つべき

と美事に書き記して、祇女の手をとりて名殘りを惜しみながらしほ〱と出て行く。盛國もやがて內へ入る其後へ祇王御前〱と、呼びながら佛御前が出て來る、裝束をとつて白無垢に緋の袴の姿。

最早こゝに在はさぬは、夕を待たず御歸りかといつて靜に坐り、心にもなき此罪を御許し下さるやうと詫び入る樣は哀れであつた。祇王が書き殘した歌に目をつけ、をゝこれこそ、妾への戒と打案じ、深き覺悟の色を示し黑髮を惜しげもなく斷つ、此時侍女いで來て佛御前こゝにましませしか、君の御召しいざといふ、妾の心は此通りといひながら髮の毛を渡す侍女謹んで扇に受ける、佛、白絹をとり出して冠り、數珠を持ちて靜に立ち上る、盛國出て來て其樣を見、感じて淚を流しながら、邪念を斷つたる其御姿、といつて賞める佛、數珠を左右に打ちふりて目をつむる、其姿は實に尊く哀れに見えた。

　幕は淸い佛を隱してしまつた、私はぼんやりして、閉まつた幕の內に、佛の姿を見出さうと、見つめて居たけれど、其目には、幕の繪がはつきりと、見えるやうになつて仕舞つた。つまつて居た鼻をかみ、淚をふいて、あたりを見廻した、泣いたらしい人は一人も居なかつた、私は耻かしくなつた、けれども祇王祇女を見て泣かない人は血も心も冷えきつた人か、でなければ心に泣いても淚を流さぬ女丈夫か、でなければ此意味の解らない人だ、淸盛にどなられて、返す言葉もなくハ――といつた祇王の聲の聞こえない人だ。佛が尼になつた心も知らない人だといつてやりたい、でもそれは自分の泣いたのを笑はれたくない、弱蟲だといはれたくない、赤い目を笑はれたくないと思つたからであるかも知れない。

　二階の左側に、前髮を分けた、目の大きいハイカラな美人が居ると、M奧樹は仰つた、見る〱全く夢二式の美人、私はふと改野たけ子樣ぢやないかしらと思つた。次の生番討伐が終へて歸路についたのは十一時半梅田からはもう汽車がない、六臺の車は並んで暗い町を通りぬけて、淀川橋へ出ると却つて明るくなつた

いくつもの會社の電燈は、赤く青く淀川に映つてゐる車は、堤防の上を勢よく北へ走る、目の前に、夜業の響の騒々しい會社が顯はれた、其處に車は止まつた、毛馬の閘門の浪が暗に白く浮いて見える

東は帝國劇場

草の門

私は芝居と云ふものを初めて見た。自分が想像したより帝國劇場は小さかつた。そして私が期待したより芝居そのものはつまらないものだと思つた。私が夢のやうに現のやうに印象されてゐる芝居はあんなものぢやなかつた。



傘さした五人男が何か言ひながら花道から出てきたのや、忠臣藏のおかるの美しい姿、そんなものは幻のやうに覺えてゐる、それは私のむかしの芝居である。

舞臺にむかつて半圓形に觀覽席が出來てゐる。花道はないが……といつたら笑はれるかもしれぬけれど。

『ね、花道のない芝居は、ものたりないわ……』と可愛いゝ口をゆがめて、きいちやんはいつた。

席に導かるゝまでに、三人の白いエプロンの女ボーイは形式的敬意を表した。ジロリと目早く頭の飾りから足の先まで見る。私はジッと見送る女の瞳が憎かつた。

水滸傳は一幕であつた。雪をけつて戰ふ子役の立廻りは、わざとらしいと思つた。

『芝居つてこんなものなの――』と作さんに囁いたらたゞ笑つてゐた。この人は芝居といへば見のがさぬ人である。

『三階の方へいつて見ませんか……』と光さんに誘はれた。立ちあがつた時に――約束の人が來た。

『遲くなつてすみません……』とわざとらしくまだ冗談らしく輕くいつて笑つた。白い羽織の紐が氣になつた。

『いゝえ……』と私は光さんと連れだつて三階へいつた。

渦卷の中心を抜いたやうな觀客席に――人間は都合よく並べられてゐる――煙草呑むさへ許されない、觀客は文明の劇場は難有いものだと思つてゐるのであらう、思ひ〱に天井の批評などしてゐる。

天井は美事なものである。

『入はざつと八分ですね』と光さんはいつた。『エヽ』と無意識に應じたまゝ私は無言で見廻した。

輕く肩をたゝかれたので、ふりむいて見た。

『○○さんが食堂で待つてゐらつしやいますよ……』とやつと探しあてたと云ふ顔付で作さんが云ふ。

華かなる觀樂に醉つてゐる人と人との間を通つて、美しき輝きの花瓦斯の廊下を作さんと光さんの後から引かるゝやうに歩いた。

わが胸にはまた新らしき響を覺えた。花瓦斯もまぶしい、食堂の片隅に腰をおろした。

『さあひとつ如何です……芝居としては中々よくできてゐますよ……』とお壽しをつまんだ人は云ふ。

わが卓上に匂ひこぼるゝ花の香と、人の香に醉ひさうだ。いりみだれたりする人肌の香はわが胸をおそう私はごく輕い頭痛を感じた。

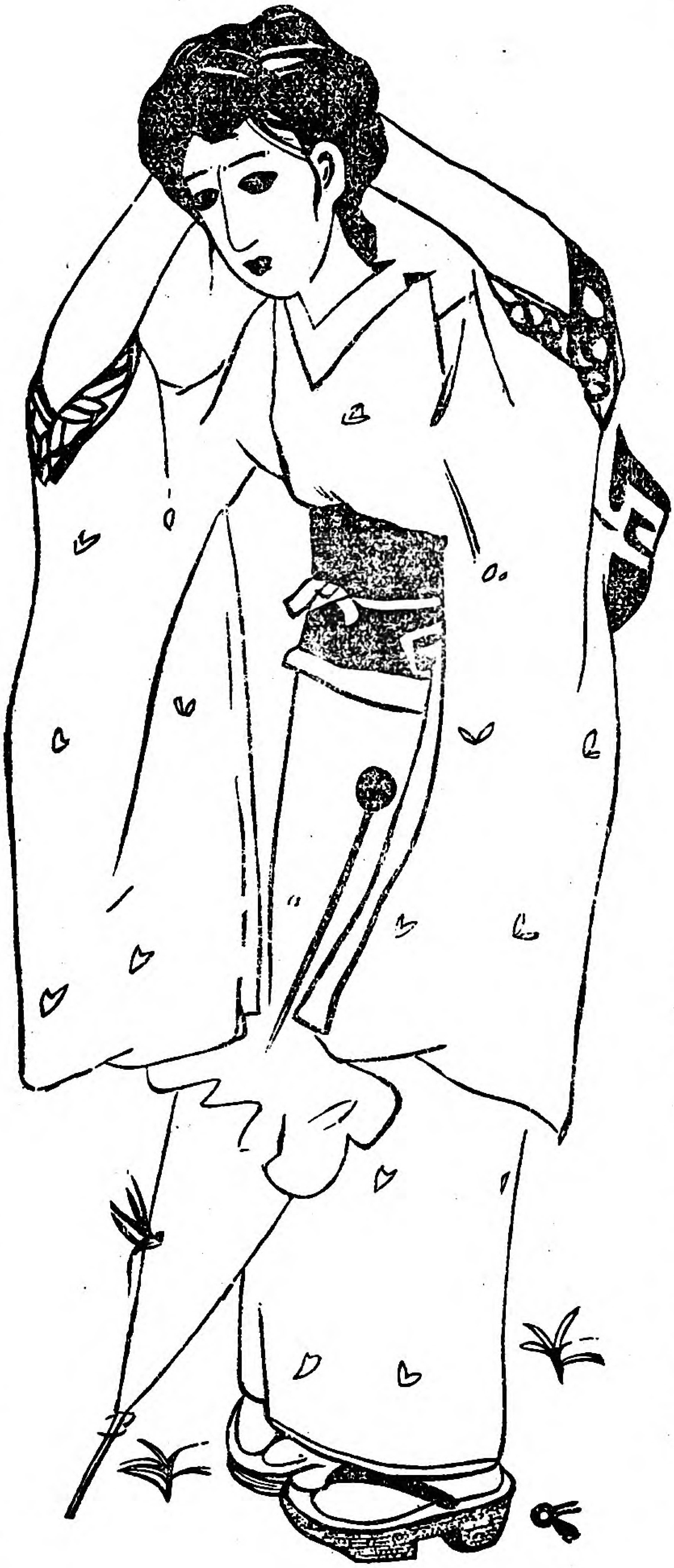
電燈は晝をも欺むく華かさなれど……心はそれを味ふ程の餘裕はなかつた。たゞ多くの人と行動を伴にするにすぎないのである。

立派などん帳は上つた。日比谷公園の場であつた。鶴の噴水が背景である。

『心の聲』と云ふ悲劇は現代の女學生が浮薄なる心情を演じたものであつた。私は見るに堪へなかつた。

『女つてあんなものだらうよ……可哀想に男爵と結婚するつて、樂しんでゐる女を、あんなに大勢でいじめる…じようがないなあ……いよ〱破談か……』と、

わが前の男はいふ。かへり見ては若き女に冷笑の笑を浴せる、嘲笑もよせる、嘲りながらも音高き拍手した。



京都祇園の舞妓姿はうれしかつた。二十幾人かの女優が總出の手踊である。身のこなしは鮮かなものであつた。

『女優は小さ過ぎるね——そこで理想の藝術もこゝろで止めを刺しておくとしようかなあ……』といつた人をふりむいて見たら、二十五六の有髯男子であつた。千差萬別、男はおもひ〳〵に批評をする。

柴田環——私はこの名に深き憧れをもつてゐた。美しき人の聲も味はひたいと思つたこともあつた。けれど悲しいかな私には西洋音樂に對する素養が薄い。たゞ成程、聲は大きい——大きく且ふるひ聲だと思つたきりであつた。

媚態を作つて金屏風の前に立つた環子の風情をじつと見て、なにものか見出したかつた。

『なんだ、おどかしたもんだ、金屏風が光つてゐらア僕、芝居見にきたんだがまあ……いやに死にさうな聲出すぢやないか……』と二三人おいた右の男はあくびしながらいつた。

私同樣、音樂を解さぬ手合だ――と思つたらをかしかつた。ニッと笑ひをハンケチに隱した。バタ〳〵と「せんす」の音は四方から起る。煽風器は、頭の上でまはつてゐる。足の下からも風が出る。

あゝ藝術に一生涯を捧げる尊い女、あまたの犧牲をもかへり見ぬ賢い女――難有なみだを流して聞かねばならぬ筈だけれど――水色の裾模樣に紅オレンヂの派手な帶をした環子が姿を見たときは、涙のこぼれる程氣の毒な思ひがした。

あゝ三千の觀客の中に果して心から環女史が尊い藝術を解し、味ひえた人がいくたりあつたらう？と私は見廻した時しみ〴〵思つた。

＊　＊　＊　＊

八方の出口から潮のごとく人間は流れでゝ最終の出口に集る。おのうちやんは作さんにおぶされた。光さんは下足の札をかへに行つた。お互に見失つても外にまち合せる約束である。

私は人にたずけられて、おされ〳〵外に立つた。夜の風は冷たくなつた。丸の内の電氣は消えた。電車は遠くから響をつたへてくる。おのうちやんは俥にのつた、作さんが送るのである。車上の人は挨拶して去つた。夜は心細い闇である。

『もう十二時でせうね……』といつたら、『こはいのですか……』と笑つた。『こはくはないけれど、勝、淋しいね……』といつたら。勝もなんだか夜ふけて歩いたは初めてのせいか淋しいといつた。

夜の電車は案外、こみあつてゐる。お勝はねむさうに目をしばたゝきながら電車の動くがまゝに身をゆずぶつてゐる。

女優は――文明の產兒である。美しいものである。美しき器の中に美しき女は惜氣もなく躍つた。と無言のうちにいろ〳〵の思ひが浮ぶ。

闇をにげる電車は、おそろしい音をたてゝ進む。

櫻田本鄉町の乘換にたつた時は、女は私と勝だけであつた。後暗い思ひのあるやうに、人の影に俯向たなりハンケチを握つた。髮の毛はハラ〳〵と風に散つた

山(やま)より山(やま)

平塚白百合

▲新橋前

久しく田端近くの田舎に蟄居して、夜の銀座にも遠ざかつてゐたのでショーウインドーのけばけばしい光りや、ペブメントをはいてゆくやうな人の足音にそゝのかされて、鈍つた頭が急轉し初めた。

光さんでなくとも信州の山中から都會に投げ出されると、實際目許りキヨロキヨロしたと云ふのも無理はない。——一寸した小鳥だつて、今日はおはやう位言へるのだもの。

目の先きに、例の新橋畔の廣告燈が色彩の輪轉放射をしてゐる。青と赤とが渦をまいてまはると黄と紫が瀧のやうに流れる。それが反覆される度に落下する彩光は、瞬間も休まずに動いてゐる。

都會は何と云ふめまぐるしいものであらう。

紫の火を空に撒いて、電車はベルを鳴らしながら南行北行する。傍若無人にオートモビルがうなりながらとぶ。

カツフエープランタンにやつとこの間お目見えしたと思つてゐるうちに、五十リツトル賣れると壁間のライオンが、ヴオンと聲をなげるといふカツフエーライオンが出來た。聞くのもせわしい位に都會は歡樂の都の巴里をうつして、華美に〱と傾いてくる。金の腕輪はめたレデーのそゞろ歩きや、燕のごとくゴム輪とばすヴエールの裏町の女。

一寸して買ひ物をするため天下堂に入つた。

▲鏡に映る旅姿

二階を上るとき鏡に映じた自分の姿を見て苦笑をもらさずにゐられなかつた。

五年すてゝかへり見ぬ海老茶しぼ瀬の袴をすそみじかに、麻裏草履を足袋にくひ込む程に穿いてゐる。

これで埃にまみれて襟垢でもにじんで來たなら、水草のやうに放浪生活を送つてゐるホーカイ節の女ときちがへられるかも知れぬ。

前なる人も學生時代の小倉袴をつけて双眼鏡を左肩に、白の草履ばきである。

着がへ一枚持たず、巣立ちの小鳥みたいに私達二人は、肉シヤツと半股引一着づゝを入れた編袋と、小道具のスクールバツク許りで、外には何物も持たなかつた。

階下で七人許りの一組が、各自水筒を買てゐる。

あの人もきつと登山するんですね。

あゝそうだらう、大勢になるよ彼方へゆけば澤山のぼり手があるからな。

夜風は重くるしい並木柳をかきわけて、つな手に引いたシオン製の夏リボンをかろくなびかせる。

一寸おどかしのいゝ音をたてゝエレベーターがカツチリ止まつた。私の買物の四品もちやんとのつてゐる。

十一時〇分下の關行きの列車にのる。

▲赤切符

二枚の赤切符を丁寧に名刺入れにはさんでソツと室内を見まはした。

どれもこれも注意を引くやうな人は一人もない。

心安んぜよと私は電氣の光りをよけて窓の下にかくれながら見た。

まひるなら滿艦飾の貴婦人達が四五の人をしたがへて、良人と共に一等車にのるのが見られるのだが、今は夜もふけてゐる。

フトかけてくるソフト帽の人の横顏を見て思はず叫んだ。

三好さん、蓮見さん、

一人は二本ラインのさつまがすりや、奧樣でしたか、こりや恐縮ですね——、なんで三等へおのりになつたんです。

エツ、わけはね、いづれわかりますよ、これつと袴のすそを一寸つまんだ。何のと考へたつてとてもわかりはしない、青でせうと云へば、一寸赤くなつて、蓮見君此處丁度すいてるからごいつしよに願はふではないか。よからう。が實際驚かざるを得ませんね、一たいどうしたんです



クリ〳〵した眼を大きく見ひらいて膝をすゝめる。

それよりは君達こそこんな遲く何處へ

塔の澤へ。電車の都合ぢや小田原で宿るかもしれませんが、あなた方は？

僕等はもの好だからね例のバンカラ旅行さ、富士から處女峠を越えて、箱根に入るんだ、それからはまだ定つては居らないがね、大島にも渡りたいと云ふ計畫を持つてゐるのさ、それが君無錢旅行といふのだから驚くだらう。

又やり出したんですか、奧樣はそのお招伴なんですねしかしゑらい!!

駄目ですよ、いくらをだて上げたつて、歸途に一寸およりするかしれませんよ、福住？環翠樓？

實は〇〇君があすこにゐるんで押しかけるんです。福住！

そう？

夢中になつて話してゐると天下堂であつた一連が車窓外を過ぎる。後に雲右衛門の一行とわかれた。

ホームをかける足音がたえると發車のランプが高く低くゆれる。

ホームの柱は後がへりを初めた。

遠ざかりゆく光の巷よ、水色の星が月出でぬ空にキウ〱とまたゝく品川をはなれると、もう車窓にせまる蟲の聲が細く響く。

昨年荒らされた箱根の宿の話をしながら、いゝ工合にゆられるので、夫は顔をふせて寢入つてしまつた。

二年ごぶさたしたので〇〇樓の娘もむこをとつた－、××館の女中が五位さまの愛妾となつた。こんな話をきいてゐるうちにおふたりともたれ合つてねむつてしまつた。私もしいてねむらうとヴエールをかついで見たけれど目が合はない。ヴエールを透してヂツと見てゐた。

乘客は次第〱に睡眠に落ちてゆく。

低聲に琵琶うたうたつてゐた學生も、髮をきづかつてゐた白リボンの女學生も。

國府津で二人は降りた。

ねられぬまゝ窓によると、手にもとれさうな蟲の音、田圃にともる赤き火、箱嶺山脈は藍紫に夜空にけぶつて、我踏破せんとする富岳は、濃き夜の幕に凡て覆はれつくしてその片影たも見せぬ。

つめたき明けの星はまだるくまたゝきて、あけ近き空は陰欝に、黑百合をなげたやうな雲切れ！

御殿場の灯は夢を追ふて淡い。

◭東表口登山

停車場に下りはしたが馬車は五時でないと出ないと云ふ。七人づれはむかへが來て何處かへ入つた。

私達は一時間半を停車場の腰掛けに待たうかと思つてゐると、宿引きが來て須走りより御殿場の方が登山途の近きことを語つた。そうして若き學生が二人今立つ所だと云つた。

それではと宿に行つて見ると、某醫學校の學生と、京都の學生とであつた。

最初の豫定を變更して、御殿場口より登山することゝした。

しのゝめ近き空は白霧にまがふ小雨を捲いて、馬の背にのつた私は面まで水に浸されたやうになる。

淺間の森に馬を止めて靜かに祈つた。

森をいでゝふりかへると、赤き灯は雨にぬれた森に反映して崇高の氣がした。

夫と學生二人と强力二人とは徒歩である。

私の馬はすぐれて遲しい故か、徒歩の人は遲れがちになる。

雨の力はつよくなつたが、右手は雲切れがして、山の青いのが見えて來た、見えたかと思ふ間にくづれて山はむなしくなつた。夜は全くあけはなれたのである。

なよやかに露に伏した撫子や、すぐれて色よい「われかもう」粟つぶのやうな女郎花、白き野菸、紫の花、赤き蕾、群青色の葉、裾野の草花は雨につやよく濡れてゐる。その間に蟲の音はほがらかに銀鈴を打ふる、みにくい姿の鶉がヨチ〱と露をこぼして花の中にわけ入つた。

一本松に小休みして兵士のバラックをぬけると、戸ざした家の軒に霧藻が干されてゐる雲切れはめざましい程に明る味を見せて、太郎坊近くなると雨は全くあがつた。

太郎坊にて金剛伏の燒印を入れる。そうして富士記行のノートに記念の印を押した。

遲れた人達も茶をすゝつてゐる間についた。皆肌に通つて手いたい雨であつたと云ふ。

▲富士あざみと燒沙道

裾野の洗禮に吾々の身はきよいものである。

しほたれ衣を、秋の日に干してゆく。

風やゝ立ちそめて、二合二勺に馬をすてた時はあやうく笠をとられさうに强くなつた。

太郎坊からは熔岩土のザクくした道である。もう地には普通の薊より優れて大輪の色濃い富士薊と。赤まんまに似た一種の草しか生えて居らぬ。

ヴエールでスツクリ顔を包んだ。そうして笠を頂いた姿は他から見たならきつとをかしいものであらう。山の變化に富んだのは吉田口ときいた。此處は三合以上草の一葉も見えないのである。

宿のあるじは頂上が荒れて今日澤山歸つたと云つた。併し今、頂上は寶永にかくれて見えぬ。

われらは石室毎に休む事はなかつた。健脚はよく一室をぬき或は二室をぬいた。

足下には三合二合五勺の室が白く一つのラインに結びつけられたやうに小さく見え、末は太郎坊より森林帶が見わたされた。

左手にはいつか半月形の山中湖がいぶし銀の面のごとく、青い山を湖岸にしたがへて、白壁の不規律な小さな街を展開してゐる。湖岸の青山にうねる一すじの道は須走宿への通路だと强力が云ふ。

▲雲の海

ムクくと足元から雲がわき出した。その雲は甲駿國境の山頂で花のやうにひらいて横さまになびくと、もう裾野は糢糊とした雨にけぶつて僅かに山中湖の木を見せる許。

高山の雲の變化は目にとまらぬ程にすばやい。スラくと大潮の引いてゆくやうな雲の隙間に、双眼鏡を向けた。

雲の斷片は寶永めがけて絕間なくとぶ。

のぼるにつれて山中湖の形も大きく、そうして遠巻きにした山の紫に遠く、なほ一すぢの連山がよこたわる。

ふりあふぐと赤裸々な富嶽は寶永の山にぬけ出でゝ、日光を彩別した頂きは、血の色の紫紅色に、藍の色に、寶永をかすめてわく白雲が中斷してゐる。

かうした高所にくるともう風の方向も判別しない。脚下の雲は右にとび、眼上の雲は左にとぶ。とびながらもまた右に左にもつれ合ふ。

そうして脚下もしばく密雲のそらに封じられて、晴れては裾野の青深綠、黑青、山の色は遠近により樹木の配色により藍色に、藍青に、濃藍に、浮雲はたえずその上にたなびきて、函根につらなる裾野の一望をゆるさぬ。

寶永頂上に黃雲がまき起つた。

見てゐるうちに忽ち笠の上にハタくと音かしたと思ふと、私は片膝ついて笠を傾けた。それは風に吹き起されてくる小石礫の雲であつた。膝まづく間もなく黃雲は四合の岩室近くたどる雲右衞一連の上にひろがつた。

こんな雲はたびくまひ起つた。また頂上から雨雲も引切なしに下して來た。甲斐の山麓からも動いてくる。

遠望の富士の美は女性的だが赫岩磊々とした熔岩の流れを見、沙崖を見、ましてや風力大浪のごとく山をくづすそれを聞いては、女性的崇美の極致とたゝへた私も、口をつぐんでたゞ金剛杖にすがつた。

六合についた時は溫度五十五度、ヴエールに吐く息がつめたく凍つて十月末の冷やかさを覺える。――(つゞく)――

秋の夜語　坂東太郎

▲旅順口の包圍戰に豫備役から出て戰死した木下勝全氏(中佐)の後妻を迎ふる時、作れる結婚公正書「夫の責任將校にあるを以て國家事あるの日は屍を山野に曝すとも怨みざるべく、かねて將來に不凡の國器を擧げんことを誓ふ●密輸入の目的で犬の食物中にダイアモンドを入れて喰はせ、五回まで税關の目を眩ました女がある、價額は八十萬弗といふ、犬が偶然税關で死んで解剖されたため露顯した▲丹波篠山小山田某の狎技に與へた『離別許可書』「出願人梅鶴、當年十八歲、右民法第八百八條により特に左の條件を附してこれを許可す。一向ふ一年間他に情夫を拵へざる事違犯する時は許可を取消すことあるべし。年月日」妙齡を過ぎて未結婚せず、將來にも結婚の望なき女、英國に百六十八萬二千六百十九人有り。わが日東帝國の統計は如何。▲佐賀に五十四歲にて姙娠したのを恥ぢて自殺した女があつた。大分縣北馬城村松本直藏(七十五)の妻アサは、六十九で子を生んだ。郡山の安達うた子といふ七十二になるお婆さんは、郡山中學校の擊劍稽古に出てゐる。「今の若い男手合は女の顏を見て涎ばかり流してるからどうもならん」て。このお婆さんは結婚しなかつたのだらうか。●グラスゴーの電話交換局にゐた女。牧師に實際健康を破りますかと問はれて、「えゝお祈をする時でさへモシ〱といふやうになつちまうんですもの」▲人口に割當て結婚數の最多いのは福岡縣とあつた、最少ないのは沖繩縣。序だから拔く全國寺院の住職は五萬人、坊さん達は引くるめて二十三萬人おはします。善男善女の巾着錢を絞り上るにはちと多すぎると●孟買に一種の藥をのみて數十日間公に斷食する旨發表したる女あり、神の如く尊崇されて日々多くの贈物を爲すものさへあつたが、斷食の四日目に食物をスカートにかくしてゐることが見つかつた▲朝晩天輪王の難有さを說いて加入を勸めても動かぬのが忌々しくてか今度生すお前の子は確に人間ぢや無いぞと天理教の先生に言はれた女、出産祝の時、其男を呼んで、膳に黃粉まぶしにした馬糞を添へて、

出した、人の兒の獸であり蛇であることを透視し得る天理王の尊も、甘さうな匂ひにつひ神通を失つたと見えて、一口あんぐりと喰ひついたさうだ。岐阜稻葉の事。まだ新しくて煙のぽか〳〵立つのなどは、一寸カルメ燒に似てるから、黄粉へくるんだらいかさま牡丹餅位には見えたらう。　南ドイツのある小學校で一人の男を一室に置き、男生と女生とに交々出入せしめて其感想を筆記さした。女生の八割は着物の事を主として書き、二割は容貌の點に注意した、男生の七分は容貌に就て記し、三分のみ着物のことを言つてあつた。せんだんは二葉より芳し、女は生れるとすぐ着かざつて美人になりたいのだと見える▲淡輪（和泉）の村田まつといふ六十四の女、汽車に轢かれて死んだ子の供養の爲に淡輪驛の人に限つて無賃乗車を許されたいと願出た、警察署長が氣狂だらうと言つたら「敷島の大和心を人とはゞ旭に匂ふ村田まつかな」の一首を留めて去つた、お婆さん大いに別嬪がつたわけさね。京都川端通りに行倒れの女乞食があつた、何處生れだと聞いてみるとそれには答へず「荒磯の濱の小石の圓いのは涙が磨くか砂が磨くか」「てゝも旅また行先も旅なればいづれの國の土となるらん」とよみ出づ、これはまた哲學をやつた人だと見える●毎夜戀人の家の軒下に眠る十六歳の少年が紐育にあつた戀人は十五だつたが其母から警察に訴へて少年の寢ることを禁じて貰つた、鏡花の『梟物語』にお寺の孃さん？に戀して寒夜その寢室の下に眠る男を書いてあつた、これは警察には訴へられないかはり門の閂で首を吊つた▲ある年の七月より十二月までに成田山に籠りて斷食したる二百九十九人の中に女が三十四人ある。男は多く自分の病氣平癒を祈れるに反して、女は大概その子の爲にしたのである、女に信ずべきもの一に曰く母子の愛●伊太利の富豪タノシ料理に巧なる細君を得んとして、試驗の成績最すぐれたる者と結婚すべしと廣告した。應ずる者百二十三人、三日間にわたりてマカロニ料理を爲さしめたが、百二十二人目まで落第し、最後に殘れる女が首尾よく及第した。これが若し女が夫を探すのだつたら、料理屋といふ料理屋のコックは皆應じたらうけれど結婚の後、細君の爲に汗水垂らして年中御馳走をこさへるのでは何ぼ富豪でも恐れ入る▲宮崎町に年二十四五、茶銘仙の小袖に東コートを着、髪を英吉利卷に結へる美人の乞食があつた。世界に於て男子の最優美なるは朝鮮人で、女子の最優美なるは日本だとある

から西洋人に「これが日本の乞食だよ」と宮崎のゑ見せることだ「凡三歳頃より男兒と女兒との間に互にあらはす愛情見え始む、親しき友人として相抱き相悲む傾向もあり、多少の嫉妬も發見するを得。七八歳頃迄の愛は無意識的なれど八歳―十二歳頃迄の女兒八歳―十四歳頃迄の男兒は意識的に示す。殊に注意すべきは男女兒相互に身體に相觸るゝことか愛情の發動に大いなる關係あること也」フオドベル氏の報告にあるさうだ。日本の兒童は？とあつたが、三つ四つの頃は知らず八つ九つとなると女の兒と遊ぶやうな奴は中間の男の兒に撲られるからてんで一しよに遊ばない、研究はむづかしいもんだらう。十三四の頃は自分に姉さんが有つてさへ外聞が惡いのだから……これは內しよう。▲田崎のぶ子は



秋田の人、その家に寄宿して秋田中學に教鞭を執れる米人クローサーの室に入り、壁よりピストルをとり下して自殺した女である。年十六、「悲しめる者は幸なるかな、その人は慰めらるべければなり」の一句其墓碑に刻まる、クローサーの書である。クローサーに戀して其妻あるを聞いて自世をすてたるなりと傳へらる。ウエルテリズムの徇教者！若き女の死をおもふと涙がこぼるゝ●その羽毛が高價な爲に捕りつくされて、アフリカの駝鳥はまさに亡びようとしてゐる。アルペンチナに住むミラソルの羽毛も一斤二千二百圓に價する鳥も亦わざはひなるかな▲赤痢といふもの〻流行初めた時であつた、豫防だ消毒だと戰の樣に人が騷いでゐる中で、月一回の最初の赤痢に仰天して死ぬるやうに泣た十三の娘盛岡に在り

化粧問答

化粧研究會　婦人修容會　顧問　藤波芙蓉

問　眉毛を濃くする藥は何處に賣つて居るのが一番有効で、又如何に化粧したら濃く見えるでせうか、それから白粉は何が一等よろしうございませうか、(廣島愛讀女)

答　賣藥で有効の生眉劑は私の知れる限りでは、今の所一つも見當りません、眉毛を濃く見ずるには、印黄を生紙に塗り、それを焼いて油煙を取り、その油煙を黛になさるか一番簡便で、且つ尤も自然に見えます白粉は煉製では矢張り御園、大學、菊の露の類、粉製ならキセロールプードルドリーです。

問　除毛劑のデピラといふのは實際好果を得られるでせうか、又先生にトルコルスマの御配劑を御願ひされませんでせうか。(尾張のS子)

答　一時的の拔毛劑としては確かに有効と認めます、御望みによりては調製して差上げぬでもありませんが、それが原料の一たる硫化砒素は素人には求めること出來ませんから御存知の醫師に御依頼になつた方が便宜だらうと思ひます。

問　(一)生來眉毛薄きを短日のうちに濃く生やす良劑、(二)全く瘵毛を直す化粧藥、(三)顔を白くする藥、(四)皺の直る方劑、以上御教示を願ひます。(小樽夕月)

答　(一)生毛には長日月の辛抱を要します、短日にして好果を見得べきものは未だ私の知らぬところです、(二)蜀癸根の煎汁で洗つて御覧なさい、(三)外用藥としては塗身香がよいと思ひます、(四)美容マッサージ法を御實行なさい、この方法は近日實業の日本社から發行する拙著化粧法の中に精しく述べて置きましたから、それを御覧下さるか、でもなければ曾て博文館から出版した新式化粧法を御參考下さい。

問　私は多汗性の爲め御化粧して直ぐムラ〳〵になつて困りますが長時間動かずについて居る化粧法とそれに使用する化粧品類を(東京初江)

答　九月號の「新婦人」にお化粧の秘傳と題し精しく述べて置きましたから御覧願ひます玆には申上げきれませんから

問　(一)ニキビの療法、(二)脂肪性の爲め顔や首筋につけた白粉が五分と經たないうちに剝げて了ひます、これが剝げない仕方、(三)首筋へつけた白粉が着物の衿につくを防ぐ方法、(四)ニキビが出來て居た上に白粉をつけるの可否。(浪越なでしこ)

答　(一)蜜陀僧を人乳で溶いて御つけなさい、(二)(東京初江)さんに答へた所を御覧下さい、(三)絶對的に防止する方法は存じません、比較的剝落しない方法なら矢張り右の「新婦人」に述べたお化粧の秘傳を御覧になれば御解りになります、(四)不可ません、止むなくば無刺戟性の粉白粉を御うちなさい。

問　私の額に小さい凹みがあります、少さい頃のオデキの痕と思ひますが、これを見えなく隱す方法は(下野愛讀者)

答　見えなく隱すには扮飾の仕方で譯もなく出來ますが、それは手術に屬すことで御顔全體の上から割出して塗粉せねばならぬのですから、

凹んで居るとだけ承つたのでは充分な御返事は致しかねます、それよりも長く御辛抱さへなされば根本的に其凹みを直すことが出來ます、それはパツチリといふ鉛製白粉の上等なのを十匁、蘿蔔二匁、葛粉一分を細末にして合せ大根ノ絞汁に溶き、夏毛の筆で凹き處につけるのです、猶この方法は、アバタにもよいと「百舌の草莖」に書いてあります。

問　(一)オードトワレツト、化粧醋は何れで賣つて居りますか、(二)胡瓜クリームの製法を御敎へ下さい、(三)顏のキメ荒く、鼻の邊殊に甚しうございます、如何なる化粧を常用としてよいのでせうか、それとも根本的に直す方法がございますでせうか、(四)水おしろい、粉おしろいは何が一番よろしいでせうか、貴店も共に、(五)時々顏にブツ〳〵吹出物致します、斯る時の手當は如何に致せばよろしいでせうか(高知村雨)

答　(一)三越、丸善等に賣つて居ります、(二)私の知つて居るのに精製法二通りあります、その一方を申上げませう、それは扁桃油百匁、白蠟及び鯨蠟各六匁五分づゝ胡瓜エツサンス十五匁、胡瓜汁百匁から成るもので、胡瓜汁は無論新鮮なものでないと不可ません、(三)前に御尋ねのオードトワレツトがよいと思ひます、若し根本的に直すとなると、一たび剝離劑の應用を試みねばなりません、これを應用しますと一週間位は洗面も外出もすることが出來ません、それ等の御覺悟あるなら改めて御質問あれば其方法を御知らせ致しませう、(四)水おしろいは內地製ものではローヤル水が安直でよいでせう、粉おしろいは、どうしてもキセロール粉白粉を優秀と認めねばなりません、ローヤル水は銀座の佐々木商店、キヤロールは三越、丸善等にあります、(五)杜松子精を一週二回程顏にすり込み、翌朝糠袋でよく洗ひ落すのです。

問　(一)鼻に眞黑なニキビの發生するを防ぐには、(二)ニキビの出來た跡の黑いのを直すには、(三)ビネーグルやコールドクリームは何方で賣つて居りますか、代價は何程、而してニキビの出來る人でも使用して差支ありませんか(無名子)

答　(一)綠石鹼二十匁を酒精十匁に入れて十四時間溶かし後それを濾してラーヘンダー精一匁を加へたもので御洗ひなさい、(二)前の(高知村雨)さんその答の(五)を轉用遊ばせ、(三)ビネーリルは三越、丸善、白木屋等にあります、御求の節はキセロールビネーグルと仰しやらんと不可ません、他に同名異質のものが澤山ありますから、コールドクリームは御自製なさる外、今の處精良の品はありません、何れも御使用になくて差支ありません。猶(山口八重)さんからも同樣の御尋ねを受けて居りましたが、この段の(一)と(二)を其御答に代へます。

問　鼻の兩側の赤くなるのを如何致したら直りませう(おしやれ)

答　チゲノール一匁五分、レブルチン五分、黃色ワゼリン五匁を煉合せて御附なさい

問　二三年前までは房々して居た毛が十六七才頃から前髮に縮れが出來、殊に春から夏にかけて甚だしいのですが、どうぞ直る方法を(名古屋一少女)

答　柘榴皮の煎汁で氣永に御洗ひなさい。併しその由つて來る原因を除かないことには駄目でせう。その原因除去に就いては玆に御答致しかねます、御都合で直接私の手許に御尋ねあれば申上げます。

(芝の獨り女)さんへ、一應御目にかゝらんと責任ある答は致しかねます御序の節拙宅まで御はこびな下さいませんか、その上でシカとした攝養法を申上げませう。

(岡山の受讀者)さんへ、直接私の方へ御尋ねあれば精しく御答致します誌上では少し困りますから、猶(丹後女)さんも右同樣に御願ひ申します

(麻布愛讀者)さんへ、ブエストヅールは牛込改代町市川藥局に、オード

トワレットは日本橋の丸善、三越にあります。

(十九女)さんへ、貴女は大方(東京初江)さんと御同人でせうが、藥用美顏水でニキビは直りさうにも思はれませんから、當號(浪越なでしこ)さんに御答申した(一)を御轉用なさいまし

(小樽一愛讀女)さんへ、貴女も本號に御答した(小樽夕月)さんと異名同人で在らつしやいませう、生際の惡い云々に就いては(名古屋一少女)さんと同一の原因によると察せられますから、是非それを直したいとの思召すなら矢張り直接私の許に御尋ね下さい。

(處も名も書かずに御質問下さつた御方々へ)、曾て社告にもあつた通り御葉書であらうと他の御投書と一所であらうと、その形式は皆樣方の御隨意でよろしいのですけれど、大勢の御方の中には紙のキレッ端に、何がドウするかとの御質問のみを記されて、處も御名前も書いてないのがあります、それでは御答する張合もなければ亦御答した處で、誰の問に答へたのやら、御本人にすら御解りにならぬこ　があると見え、重ねて何時私の質問に答へて呉れるかと御催促なさる方もある程で、何れにしても之れでは自他の損失と存じますから、せめては今度(愛知の愛讀女)とか(牛込の白すみれ)かといふやうな處と御名とを必ず御書添願ひたいと思ひます、右の理由のため今日まで處も名も書いてない質問に多く御答せずに了つた次第でした、で若し此種の方々にして猶私の答を御求になつて居なさるゝなら改めて御質問を願ひます。

(直接私よりの答を需めらるゝ御方々へ)或は本誌發行の日まで待つて居れぬとか又は本誌に掲載さるゝを忌むとか其他樣々なる理由で、直接の返事を御需めになる御方が澤山あります、中には爾云ふ性質の御手紙を文壇社の方に宛てゝ御出しになる方もありますので、その都度文壇社からワザ〳〵三錢切手を貼つて私の方へ回送して呉れますが、それでは誠に手數のかゝるばかりでなく、返事を得べく豫計な日數を費すことゝなる譯ですから斯樣な性質の御質問は總べて私に宛てゝ御送り願ひたいと思ひます、現在の住所は牛込赤城下町三二です。

新刊

○いろは文庫　有朋堂文庫

演劇に、小説に、隨筆に、赤穗義士の傳が我國の作物に影響したことは實に盛んなものだが、其中でも代表的作物はといへば先ず爲永春水のいろは文庫を推さねばなるまい。正洪實傳とあるが其實一個の小説である此書も亦世間に飜刻が無數にある。しかも校訂の疎漏、活字の不鮮明等のため愛讀者ながらも書架に飾るのを潔しとしなかつたが、有朋堂文庫出でゝ復その憂ひがない、原書の繪を其まゝ寫眞影刻に附したのも溫古の氣があつて珍重するに足る。

○金葉和歌集　有朋堂文庫

和歌金葉集、詞華集、千載集の三歌集を一冊にまとめてある、此三個の歌集は八代集の中の第五、第六、第七の順に當るので、平安朝文學の精華とも云ふべく、古今集から流れて來た和歌の潮流が、新古今に移らうとする時代の代表的勅選歌集である、例の通り輪廓は朱刷にして、卷尾に索引を附けてあるから永久の藏書として遺憾はない。

○弓張月　有朋堂文庫

弓張月の文章は、八犬傳の文章より好いと云ふ人があるくらゐで、馬琴の文章——殊に八犬傳の文章は七五調に拘泥しすぎて癖が多い、弓張月に到つては雄渾莊重の文章を以て、壯烈なる英雄烈女の事蹟を傳へたものので、馬琴の作中でも第一位に囑する、本書八百頁に渉つて弓張月全部を收め、插繪も原作そのまゝを縮刷して古書の面影を止めてある。序に云ふが有朋堂文庫の飜刻事業が着々と進捗　て既に十數冊を出版し、讀書家の渴望を滿足せしめつゝあるは欣ぶべきことである。本文庫は其體裁に於て完美してゐるから、婦人の本函に備へるにも尤も好い叢書であらう(各冊定價金八拾五錢、神田錦町一丁目有朋堂發行)

○詩集、獸苑　廣井浩風作

廣井浩風君の名は餘り聞えなかつたけれど、こんなに大きな詩集が出來上つたことを思ふと、美術的生活の豐かな人であつたことが知れる。吾人は近來の眞面目な製作として此書を世に推奬する、製本は地方の出版とも思はれぬほど堂々としてゐる(定價金壹圓、富山市西三番町清明堂出版)

▶文字に現れたる娘時代の表情◀

『娘時代』が從來の増刊と異つて居る處は、新しい顔ぶれの多くなつたこと、内容が花やかに明るくなつたことです。一つの波が去つて、一つの波が來るやうに、時代の婦人も後から〳〵新しい文章を書く人が現れて來ます。しかも増刊『娘時代』には、其新しい人の數が目に立つて多くなりました、それが從來の増刊と大いに異つた點であらうと思ひます。

娘時代の感想

▲白き手の謀叛者▲月の出るまで▲十六になつた娘心▲現實から離れたい▲火事と地震と男の手紙▲破れたる友情▲義太夫を聽く夜▲薄明▲火影▲若きやすらひ▲あらしの夜▲ふだん着▲運命の峠▲夢二式の眼▲美人本位▲金持をかさに被る親族の厭制▲面白く暮すは今の内▲されぐの文字▲誘惑に勝つ▲生きた人形▲其他數篇

十月十日 女子文壇 増刊

娘時代

二百頁美装

價貳拾錢

送料壹錢五厘

日記

▲出水▲南の郊外▲スーイチヨ日記▲田舍の町▲蟲干日記▲街の秋草▲健康診斷▲伊香保より▲見合の前▲大阪より▲沼津千本松原▲初て圖書館に入る▲葉月の末▲雜草の花▲其他數篇

小說

◉本鄕の兄◉お奈津◉伯母◉最後の日◉海水浴場の女◉初舞臺◉里子

課題

▲わが故鄕▲わが親友▲わが手文庫

▲和歌▲俳句▲詩

◉表紙、口畫 募集當選畫

◉寫眞版 本誌作家諸孃面影

發行所 東京市京橋大鋸町 女子文壇社 振替東京壹七貳九 賣捌各地書店

らい病根治新劑

藥名……レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共
壹劑分 五圓拾錢
特別製分 拾圓拾錢

美き聲の出る新藥

發聲藥は古來甚だ多し、然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し、初めて確實に美聲を發する方法を自得せり本劑は實に無上の**發聲藥**として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を増進する靈劑

醫學記臆増進丸

（藥價）七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓參拾錢壹週分八拾錢（送料）各拾錢宛

本劑は獨逸大醫スクリーボワト氏の新處方に基き醫學的の原理に徴し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば**腦病、神經病**を根本的に**根治**し精神爽快智力活潑となり**記臆力大**に**増進**し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に増進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絶顯著なる奇効を知れ

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉けも迅速に安全に**快通**

流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を連用せば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず安全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及び**惡血毒血**を掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は**廿日ほくろそばかす、なまず、いぼ**は**拾日**目に必ず美麗に除去すること**保險附**

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らること確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ゐて天然の**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝状**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ入墨ほくろを除去し又一はそばかす、なまず、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢（ゴ、にて郵券代用二割増し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす）着金即刻小包郵送す

以上五藥**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

新輸入 美容肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體**純白色**に**變化**し肌を滑にし皺を伸しおれ及吹出物を治し艷美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服藥 サーサパリラ

價壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑强なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒檢毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的肉色を**純白艷美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みて奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王なることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薰るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉瓦混同視することと勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

以上三種 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

有効保険 前代未發 秘傳奇術

全壹冊正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(目錄大要)神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰○の爛れを治する法●淋瀝を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顏クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治藥製法●髪の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髪必生法●臭汗治法●白髪を染る法●毛髪光澤を美にする新變●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●はくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●[illegible]紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず體へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女か心中を知る法●白なまず即治法●五十の皺婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯す神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盗人を見顯はす神術●女に○れらそ、藥法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女を○○かゝ藥法●堅、女ゝ氣を○○す藥法●陰○を長大にする藥法●そばかす必治法●女を○○にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を増す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ特効藥●避食ノ仙術●神速に精力を强む法●即座ゞ身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を○せしむるゝ●記憶力ら増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の秘術●黒字夜光の奇術●老人終身皺取りの秘術●腋臭を治す法●色を白くする內服劑新法●ゞ丹の製法●腹痛即治法●疥癬病藥法●生たる縋を遠國へ送ゞ法●服膓ら治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●痳病の治法●月經の不順ら治ゝる法●疝ゝの妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭ゝを治する法●陰部ゞ虱を去る法●にきびを去る新法●頭髪を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治ゝ新法●下府を治する奇法●胃病ノ新劑●百日咳の妙法●肺病必治の最新藥●中風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服酒のしみたるを洗はずして治す法●火傷即治ゞ秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髪豫防新法●土藏ゞ鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治すゝ秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔新法●乳の出る妙藥●陰部の諸瘡を治すゝ法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目ゝ覺す法●年齢により房ゞの度數●病氣ゞ知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艷美ならしむる法●毒酒ゞ製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●員帽子洗濯新法●髪の汚染を落す法●新らしき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服の油の付たるを落す良法▲以下拾法略す合計壹百四拾法あり着金即刻送本す

專賣元 東京市神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効の新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひろかさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**すること確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

陰萎病特効新劑（瑞西新輸入藥）

内服 トニチン TONITIN

拾錠入壹劑藥價送料共壹圓九拾錢郵券貳割增

本劑は瑞西國ウォルフエンスベルゲル社の發明新輸入に係り其主効は…男女**生殖機不能**即ち**陰萎病。腎虛。神經衰弱**遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虛弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不姙娠。冷症發育不全等に用ひ天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力を増進**し生殖器を強健ならしめんと望む者は早く試みよ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる無効賣藥と同一視すること勿れ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

奏効確證美容新劑 やせる藥

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓廿錢着金即刻送藥す

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

世界唯一 麻病消渇の根治確證新藥

麻滅（りんめつ）

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**麻病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭 根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽ち**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ、價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

特別製分金五圓三拾錢
中瓶貳圓廿錢
小瓶壹圓廿錢

本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぱうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

以上六藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

以下九種の書は百年後でも三重縣桑名矢田積弘報舘で販發す

萬物製法秘術寶典

代價郵税共廿二錢 郵便切手又は振替貯金なれば廿四錢

目録、輕便電氣燈●輕便晴雨計●輕便電話機●煙火●癇癪玉●歯磨●石鹸●洗粉●白粉●香水●紙石盤●のみ取粉●萬年草紙●メッキ法●朱肉●空氣銃●萬年手帳●墨●朱墨●鼠取藥●無刀影刻術●酢●豆腐●甘露水●果寶酒●屠蘇酒●燒酎●葡萄酒●魚煎餅●鑵詰●ラムネ●リモナーデー●ジンジヤエル●蜜柑水●甘酒●味噌●醤油●水彩繪具等の製法其外大發明器械いらず**早取寫眞術**器械不用**早印刷法**等が**百**餘種記載してあるが皆あり合せの道具で出來る様にしてある、殊に早取寫眞術は名の如く器械を用ひず僅かの藥品を以て器械にて寫せし者と少しも異ならぬやうに人物風景其他如何なる者にても大小の差別なく何枚にても鮮明に寫し得る愉快なる寫眞法である、藥品の無き地方は弊店より送る、又器械にて寫せし通りに寫らねば何時にても**返金**す、又早印刷法は道具を使はず繪でも文字でも大小の論なく速座に數百枚印刷する事が出來るから名刺ハガキ書畫廣告其他如何なる者にても安價で奇麗に印刷する事が出來る、一つ覺えても僅に五十錢以上の價値がある。

奇々妙々 手品種あかし

郵税共廿二錢郵券代用又は振替は廿四錢

本書を讀んで酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなし、目録鬼火の妖術●口中より火焔を吐く術●不思議な水の魔術●月世界の術●針を呑む法●皿廻しの術●かるた逆立術●銀貨をふやす術●水上に文字を書く術●三尺の棒を丸呑みにする法●豆腐の上にて獨樂を廻す術●箱に水を入れる術●火を喰ふ大奇術●熱湯中に手を入れる術●空の帽子より色々物品を出す法●水上に木製船を自由に動かす術●黒いんきを金魚にする法●紙製の蝶を自然に飛ばす術●黒水を清水にする法●水を燃す法●清水を牛乳にする法●銅貨を水に溶す術●ステッキを帽子の中に隠す術●水中又は机上に鷄卵を踊らせる法 附録 **驚神的大魔術** 其他尚面白き手品が澤山記載してあるが皆子供にも出來るやうにしてある。

學理應用 世界奇術大全

一週間に思ふ儘に白色となる法●人間百歳迄生きる法●人の生死を前知する法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎内の兒の男女を知る法●他人の年齢を當る法●顔を櫻色にする法●日に燒けぬ法●髮の毛を多くする法●毛を生す法●書き損ひの字を拔く法●物覺悪き人を忘れさせぬ法●習字速成法●**催眠術**●歌がるた八々に必ずまけぬ法●百日百夜眠らずとも氣の衰へぬ法●老人でも白髮とならぬ法●其外斯の如き奇法を百餘種集めたる書物は廿三錢(郵券代用は廿五錢)

破天荒の快書 破格の大安賣 最新大奇術

郵税共二十三錢郵便切手は二十五錢

目録天に文字を顯す術●白煙を闇黒にする術●夢に天國に遊ぶ術●百鬼夜行術●風を吹す術●吹き居る風を止る術●妖光幻術●水の流を止める術●天空に怪人の姿を顯す術●人を空中に眠す術●十字架殺人術●忍術●仙術●**切支丹バテレン**の妖術●ヒルモット術●金錢自由吸集の妖術●縄拔の妖術●火渡の奇術●武道**隱身術**●竹折術●人の力を取り我身を重くし上げられぬ術●七八歳の小兒を重くして上げられぬ術●棒を掌につけ押しても取れぬ術●片手にて數人の力を防ぐ法●讀心術●三人にて持ち居る椅子を指二本にて取る術●不動金縛の妖術●二本の指にて大人を自白に揚げる奇術●數人にて一人を倒せぬ術其他奇術妖術山の如しそして何人も實行し得る獨習書なれば早く求めて朋人を**驚**かすも亦愉快ならん、奇術師天一も跣足で逃げ出す術ばかり。

禮法及婚姻法

日本の禮法は最大洩らさず婚禮部には媒酌●見合●結納の受渡●婚姻の前支度●嫁の荷物を送る事●三三九度盃の仕方●嫁と舅姑と親子盃の仕方●寢室に入る時の心得●フトンの敷方●其他婚姻に關する事柄は最大洩らさず附録には婚姻出產死亡届其他澤山。郵税共廿三錢

男女 無上の快樂

本書の内容は秘密に付掲載する事は出來ないから本書を讀んで初めて愉快なる事が出來る者と思へばよい。(他人に見えぬやう密封にて送ります)定價郵税共二十四錢

一讀千笑 滑稽頓智笑話

面白くてアゴのはづれぬ用心して讀み給へ本書を讀んで居れば退屈する時がない郵税共廿二錢

道具不要輕便 食パン和洋菓子製造書

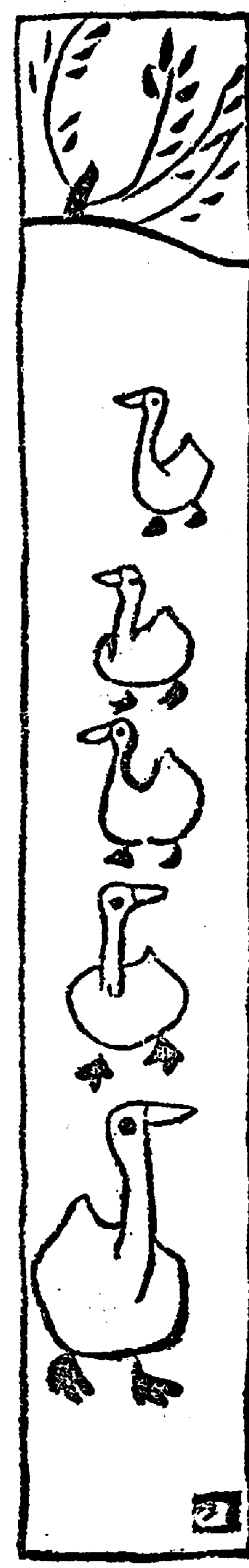
有り合せの道具で米より費用少くて美味で一度に廿日分も拵へて置ける食パンや洋菓子が手輕に製造出來る樣にしてある書物は郵税共廿四錢

簡易素人治療法

感冒●疲小便●肺病●胃病●男女陰部諸病●ニキビ●痔●頭痛●ワキガ●淋病●凍腫●サメハダ●子宮病●眼病●耳ダレ●歯痛等の療法●毛を生す法●白髮を黒くする法●其他萬病を高價な醫藥でなく手輕に治療し得る書は廿二錢郵券代用は廿四錢

振替貯金口座番號 東京壹六九貳八番 三重縣桑名矢田積 弘報舘

◎割引上段下段ヨリドリ五冊一圓、十冊一圓七十錢、郵券代用一割增



創作

小説

水野葉舟選



○暖簾縫（天）

信濃　優梨子

中庭の北を椽傳ひに行く新座敷の十疊には、綠町の伯母も新宅の叔母も、其からぐるり下しの桃割れに結つた從妹のお時ちやんも、まだ二三人が不揃へに圓くなつて、一度入れ變へたお茶を話の合ひ間〳〵に思ひ出した樣に飲んで居た。

水引きの花があつさりと投入れに挿してある床柱の前には紺の色の新らしい暖簾の布が厚く重ねてあつたお艶は皆より少し離れて敷居際に、何となく手持無沙汰さうに坐つて居た。そして時々皆の茶碗をのぞく樣に見て、一つでも明いたのがあるとすぐ、急須を取つてそは〳〵した樣なそれで居てわざと落着いた風をしてお茶を注いだ。

九月半ばの朝の空氣はしつとりと落着て氣持が好かつた。裏庭の眞中にある大きな松の木を通した日が、座敷の中を綠色に明るくして居た。

お時ちやんは一寸した事にも面白さうに笑て、始終晴やかな顏をして居た。それがお艶は何となく嬉しく思はれて、自分も一緒になつて優しく莞爾して居た。

綠町の伯母は時々まじ〳〵とお艶の横顏を見た。そしては終ひに恍惚した樣に細い眼をして、お艶が一寸でも此方を見るとすぐ莞爾と柔かく笑つた。お艶は其度に困つた樣な風をして笑ひながら俯向いた。

お銀――お艶の母――が大きな糸卷きに卷いた黑い糸と、好く切れさうな斷ちもの剪を持つて、そは〳〵して這入つて來た。皆はせき立てられた樣に急がしく茶碗を端へかたづけた。

「まアまだ宜しう御ざいますのに御ゆつくり什麽ぞ」とお銀は何だか惡い事をした樣な氣がして氣の毒さうに云つた。

「もう澤山戴きました。餘りゆつくりして居て夕方急がしいと困りますから」と綠町の伯母が云ふと、皆も眞實にといふ樣な顏をした。

お時ちやんは自分の後にあつた暖簾の反物を重さうに眞中へ出した。お銀は輕く會釋してそれをずつと長く廣げた。紺の強い香がぱつと座敷中へ廣がつて、すつきりした明るい空氣に溶けあつた。

紺地の中に「高島屋」といふ字と「ヨ」と大きく染め脫いたのが半分に切れたのとが、眞白に浮き出て見えた。それを皆は昵と見て居た。

お銀は馴れた手つきで小暖簾から裁ち始めた。皆はもう小ちやぼの針に紺の三子糸を通して待つて居た。

お艶は何だか氣が樂になつた樣な氣がして、重ねてあつた茶碗を皆茶盆の上へのせて、輕くなつた湯わかしと一緒に茶の間の方へ持て行つた。そして二つ三つ小さな糸卷を持つて來て、大きな糸卷から分けたり、まだ殘つて居る長暖簾を斷つ許りに見積りをしたりした。

「此暖簾を掛ける時分にはもう高島屋のお艶ちやんじやなくて高島屋の若いお內儀さんですネ」と綠町の伯母は誰に云ふでもなく云つてお艶の顏をちよつと見て笑つた。お艶は俯向いたまゝ顏を赤くした。

「もう一月しかないんですもの、まご〳〵して居ればすぐですよ」と新宅の叔母は別にそれに受け答へをする積りでもなく思つた事を云つた。

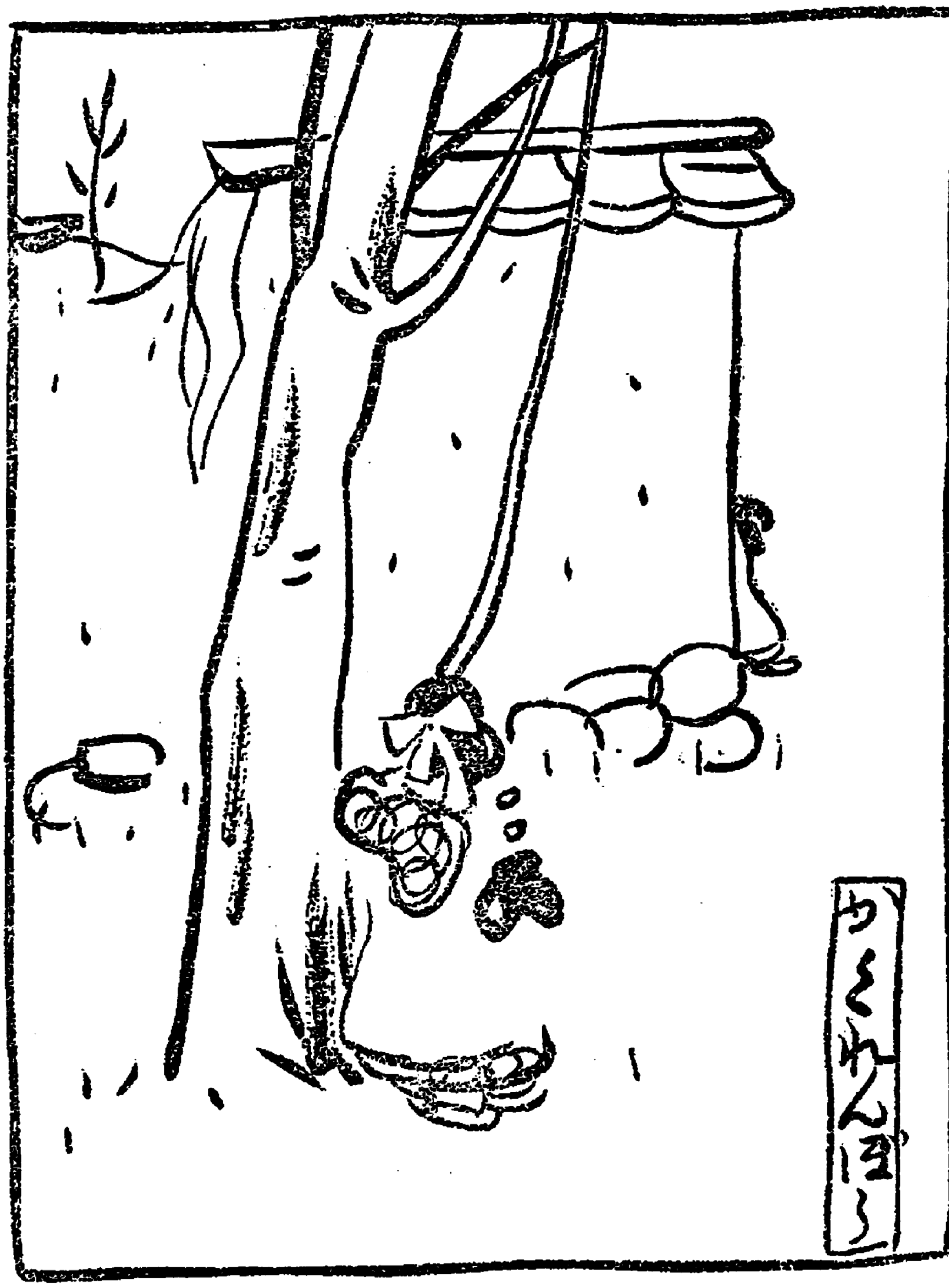
「まあどんなに好いお嫁樣におなりなさるでせう」と丸髷を粹に結つた、割合に見たところの好いおずいさんといふ高島屋の一番番頭の內儀さんが、眞實にさう思つて居るらしく落着いた云ひ方をした。

「まだからつきり子供見た樣ですけれどネ、他家へ出すんじやありませんから」とお銀は云ひわけらしい事

を判然した何となく嬉しさうな聲で云つた。

「えゝ〳〵掛けがへの無い娘ですもの早く定りをつけなくちやあ………一寸も早いことは有ませんに」と新宅の叔母がすぐに云つた。

お艶は什麼すれば好か困つた樣な風をして、布の端を揃へて引張つて見たり、上から撫でゝ見たりして居た。お茶の時から其麼事を云はれやしないかと思つてはら〳〵して居たのを云ひさうだつた綠町の伯母が何も云はなかつたのでほつとして居たのに、お艶はまだ何か云はれやしないかと思つて、胸をおど〳〵させて居た。と皆はそれきり少しの間默つて居た。お艶はほつとしたけれど、何處かに斯う物たらない樣な氣持ちが少しくして居た。



（天）かくれんぼう　京都　岸田富美子

「艶ちやん一寸其糸卷を頂戴」と綠町の伯母が云つたそれをお艶は何か云はれるのかと思つてはつとした。

「さあでは皆樣お願ひ申します」とお銀は裁ち切つたのを皆前へ押しやる樣にして云つた

「私達は皆つなぎ合せるから艶ちやんと時ちやんは縁を絎けて頂戴ネ」と新宅の叔母が云つた。

「お時ちやんさアお手並を見せて下さいよ、其かはり晩にはどつさり御馳走をして上げますから」とお銀は冗談らしい口振りで笑ひながら云つ

たお時ちやんは默つて笑つて居た。
皆針が澁さうに時々顏を顰めては糸をぬいて、せつせと縫ひ始めた。
「伯母さんなせ暖簾は一日に縫つて終はなければ不可ませんの？」とお時ちやんは隣に居た綠町の伯母に小さい聲で聞いた。
「まア店の名が切れるつて云ふ理由なんでせうよ、それに今日のは格別御婚禮の日から使ふんだからネ、一つまあ時ちやんにみつゝりやつて貰はなくちあア、其かはり又時ちやんがお嫁に行く時は艶さんがいくらも御仕度のお手傳ひして下さるから、ネー？」と眼の優しい伯母はお艶の顏を見て聞く樣に云つた。
お艶は手先から眼をあげて小さく頷いて莞爾した。お時ちやんは一寸赤くなつて矢張り默つて笑つた。
皆はまた默つて一生懸命針を運ばせて居た。何も別に考へる事のない皆の胸は平だつた。只お艶の小さい胸許りが時々波立つて、獨りでぼーつと頰が赤くなつたりした。

○三田の姉（地）

横濱　月やさ女

光子は姉の病を問ふべく牛込の家を出て四國町へと尋ねて來た。其處此處と探し廻つたけれども「一番地七號」と書いた端書許りでは仲々知れさうにもなかつた。
照り付る七月の強い日光を空色の洋傘で除け乍らダラダラと流れて落ちさうな汗を拭ひ拭ひ新らしく移轉した家てふ尋ねたがさうした家も三四軒はあつた。
小一時間も探しあぐんだ末、光子はもうそこに倒れて了ひたい程落膽して、「一層の事歸らうか」とも思ひ乍ら、とある横町を折れると目に着いた丸い瓦斯燈。それには「たちばな」と平假名で優しく記されてある
暗の中に光を見出した樣な嬉しさにホッとしながら小さな冠木門を屈ると、玄關に續いた敷石、左手に大きく咲き誇つて居る紫陽花、右手の小さな建仁寺垣の間から面を出して居る黄色な美女柳等、粹掛りな建方は何となく「見越の松」と云つた樣な造りである。
光子には是が姉の家であらうとは思はれなかつた。
何時もなら「姉さん」と駈けて入る所だけれども新らしい家には姉妹にしても流石遠慮があつた。
「御免下さい」出て來たのは例の德衞である。義兄の從弟とか云ふ丈のいやに高い、艶々した髮を中央から

分けた、色の黒い男の癖に派手な柄の好きな人だ。
「や、よく」と口許に笑を湛へて會釋した。晝寝でもして居たらしく浴衣の裾がくしや〳〵によれて居た。又來て居るな、と思ふと嫌な氣がして「男妾……」と口の中で云つた。あの媚のある眼で、口許で姉を魔魅するかと思へばにくかつた。
聲を聞付けて姉は奥の方から、
「みつちやん」と懷しさうに呼んだ。
「よく來て呉れたねえ、家の方の思惑も如何かと思つたのに、よく來てお呉れだつた」とだるさうに身を捻返して茶棚から夏蜜柑を取出しながら云つた。中庭に面した六疊の室で傍に敷いた蒲團の上には新刊の雜誌が二三冊取り散らしてある。光子は胸をくつろげて、しきりと動かしてゐた團扇を止めて、
「どんな按配ですの」と聞くと、うるさゝうに遅れ毛を掻き上げ、かきあげ、
「さうね、何だか胸が苦しくて堪らないの」と一寸其の顔を見て「でも吐いたりなんかする事はないよ」と云譯がましく、
「全くどうしたんだか、三月あたりから止んでは居るんだけど、正可ねえ」便り無さゝうな救ひを乞ふ様な眼付をしてぐつと光子を見た。
光子は未だ曾て姉の這麼弱々しい素振を見た事はなかつた、一體が勝氣な女で、今渡米中の義兄にすら優しい返事もした事は無かつたのを知つて居る。子供を貰ふ話が出た時「誰が、うるさい、子供なんぞ」と一言にはねつけたのも知つて居た。
「さう仰れば顔色の悪い事ね、殊によるとさうなのかも知れませんよ、家の嫂さんが彼時はいつもさうよ」と強く「屹度さうよ」と獨言の様に繰返した時は我知らず勝誇つた様な微笑が浮いて出た。
「困つちまうね、眞實に」と投げ出す様に云つて美しい眉をひそめたが後を振向いて、
「徳さん徳さん」と呼んだけれども居るのか居ないのか返事は無かつた。「あゝつ」と深い嘆息をしながら、
「私も實はさう思つてゐるんだがね、父様には默つててお呉れよ」憐愍を乞ふ様に見上げた姉の面は凄い程青かつた。
黒瞳勝な睫毛の長い水々しかつた眼も曇然とにごつて居た、長かつた髪も抜けたまゝぐる〳〵巻にして眞中を蝶番の飾ピンで止めたのが殊更淋しく見えた。
昨年の春、光子が某大學の哲學科に學んで居た人と

戀に落ちた時、頭からはねつけて「其麽破廉恥な行爲は先祖の系圖を汚すと」罵つたのは此姉である。父が新橋邊りの新道に、女を圍つた時、滔々と論じたのも此姉である。

其姉が今、義兄の留守に……然も自分より十も年下の德衞と……不圖「復讐」と云ふ念が光子の胸に込み上げた、そして自然と顯はれる嘲笑を務めて押かくして、

「月下しでも呑んで御覽なさいよ姉さん」、と何氣なしに云つたすると、今迄ボンヤリ考へ込んで居た姉の活氣のない眼が急に輝き出して、吃驚した樣に光子の面を見守つたが、

「いゝか知ら、利くかねえ、」其眼を見た時は姉の心も見すかされる樣な氣がして怖しさに身を慄はせた。

飛んでもない事を云つた、と今の自分の言葉を繰返した光子は胸が戰いて、どうかして一言を取返したいと思つたが駄目だつた、姉の面は一層活々として來た

○雨降る日（八）

京橋　伊藤千代子

午後三時、△△小學校内に放課の鐘が鳴渡るとやがていづれも言ひ合せたやうにオソ〳〵と、鞄や風呂敷包を抱へた幾百の小學生は小砂利を敷きつめた運動場を靴や足駄の入り亂れて、雜然たる響と共に通用門からしと〳〵と降る雨の中になだれをうつたやうに吐き出された。

今年尋常科四年生のお美佐は一級違ひの姉のお鶴と一緒に小さい蛇の目の傘を並べて何かしら嬉さうに急ぎ足で家路に就いた。雨は折々サーッと思ひ出したやうに激しく繁吹いて小さい傘を奪ひさうにした、二少女は既う三ッ横町を通り越したあと四ッ越せばよいのだそう思ひ乍ら餘念なく歸途を急いだ。新しい白壁造りの○○病院の横手迄來ると急に何思つたかお美佐はおびえたやうに立ち竦むだ、二重瞼のあまり濃からぬ眉毛の邊に不安の影がひしと押寄せた。

「鶴ちやん、また北村さん來てやしないでせうか？」

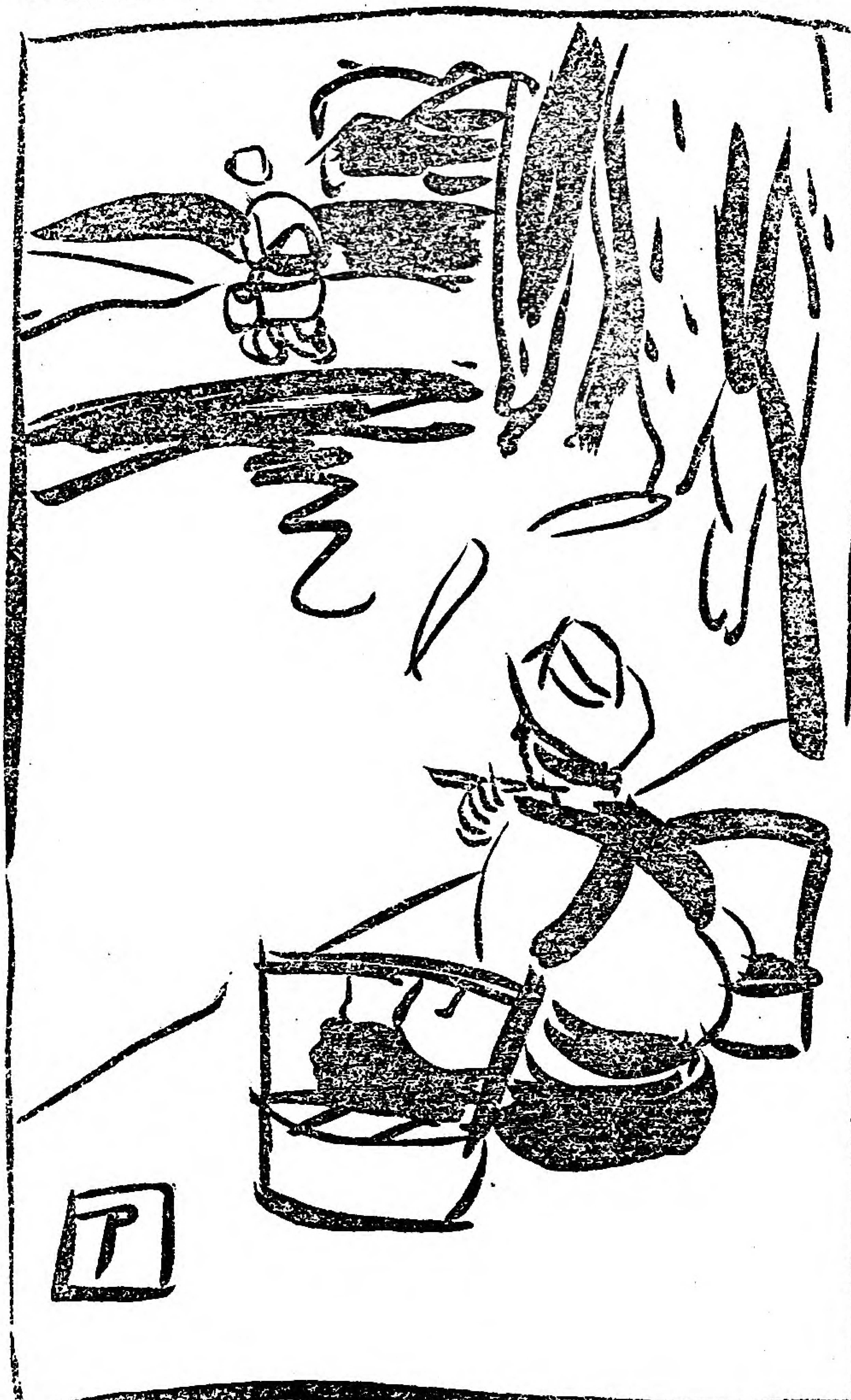
突然だつたのでお鶴は驚いたやうにお美佐の顏を眺めた。

「アヽ、まだきつとこれよお花!!」お鶴は落膽したやうに斯う言ひ乍ら傘をかたげて自分の鼻を指した、お美佐にはお鶴が鼻を指したのが一寸解らなかつたけれどそれはすぐとお美佐にも解つた、二少女は悲しさう

に顔を見合せた。

「美佐ちやん北村さん來てないといゝね」勝氣な妹が何時になく眼には涙さへ溜めて急に消氣返つて仕舞つたのでお鶴はもうおろ〳〵しながらそれでも慰め顔に斯ういつてお美佐の顔をのぞき込んだ、二少女は幼さい胸に不安、恐怖そうした思ひを抱き乍ら何卒北村さんが來て居りませぬやうにと覺つかないとを願んではいくらか胸を安めやうとした。

お美佐は今日學校でお友達から少女小説を借て讀むだ。或る少女が學校で修身の時間に先生から賭博といふ事は非常に惡いことであるといふことや皆さんのお家ではそんな惡いことをなさる方はないでせうねといはれた時に其少女一人は手を上げることが出來なかつた、それでどうかしてお母様に賭博を止めて



（地）河畔　芝區　後藤明あさ子

呉れるやうにと一生懸命に誠心こめていさめて遂にお母樣を後悔させたといふのであつた。今迄まぎらされて居た不安は渦を巻いて押寄せた、誠心込めて、誠心込めてとお美佐は幾度か我と我心に囁いた、姉にも言はうかしらと思つた、けれどまたアヽよそう氣の小さい姉には默つて居やう、そして自分獨りでするのだ心にキッとそう定めた行手に微かな光をみとめ得られたやうにお美佐の胸は波打つた。二少女は別々の思ひを抱いて家の前迄來た、やつぱり北村さんの下駄は隅の方にちやんとそろへてあつた、二少女はゾッと冷水をあびせられたやうな氣持がした、小僧が二人退屈さうにだらしなく散し放した店先に座つて居た、家の中は薄暗らくて何となく陰氣である。二少女はおづ〱しながら障子を開けた、座敷の樣子を一目見ると今更のやうに恐しい、暗らい牢屋の中を連想させられるやうな氣持がした。二少女が輕くおじぎをして「只今」と挨拶をするとお母樣は次に捨てる花札を一生懸命に考へ乍ら「あいよ」と上の空で答へて居る。

「やあ、お歸りですか、早かつたですね、もう三時、そんなになりますか」と落付きはらつて居る北村さんを二少女は憎らしくて堪らなかつた。どうしやういつ言ひ出そうかと迷ひ乍らお美佐は母樣の傍に座つて居た「はゝア、青丹とお出なすつたね御用心々々」北村さんはかけ構ひのない聲で獨りでいろんなことをしやべつて居る。

「君!、聲が高いよ」お父樣はひそ〱聲で斯う北村さんに注意した、そしてぢろりとお美佐の方を見た、充血した眼が怪しく光つて居る、お美佐の胸は一しほ恐しさに震へたそして唇がピクピクッと動いた。お鶴は既う何時の間にか此處には居なかつた。

「やあどうも旨くやられちまひましたなあ」不意に北村さんが無理にひそめたやうな聲でいま〱しさうに言つて持札を放り出した。

「オホ……………」お母樣は低いが晴やかな若々しい聲で嬉しさうに笑つて財布の中にサラ〱と銀貨を入れてまた大事さうに帶の間に仕舞つた、そして忙しさうにきせるに煙草をつめて一息吸つてポンとはたいた。傍に何か言ひ度さうにして居るお美佐を見ると思ひ出したやうにニッコリ笑つて「學校は既うおしまひ?そうはやかつたねえ」と云ひ乍ら今仕舞つた財布を出して「さアよ鶴ちやんと二人にだよ」といつてお美佐の手に白銅を二つ握らせた、お美佐はお母樣の晴々しい顔

を見ると思はず誘はれてにつこりした、北村さんは傍から「ハ……みいちやん今日はお母樣にとつさりおでつてもらはなくつちや」面白さうにいつて卷煙草の煙を輪に吹いた、お美佐はぢッと北村さんの顏を見詰めてやつた。お母樣の前には新しく次の花札が配られたお美佐は遂々口が開けなかつた。

○母

六　花

雨上りの空はくつきりと心地よく晴て、青空がゆつたりと澄み渡つてゐる。奈津枝はコソ〳〵支度して、月村の下宿へ馳け出した、いつもの通り狹いでこぼこの道路を通つてお寺の前まで來た時、處々破れた柴垣の外から覗いて見たが、未だ雨戸が締つてゐた。歸ろうか這ろうかと暫く考へたが、思ひ切つて這入る事に決め、足音のしないやうに門の中へと進んだ、いつもなら燒木の枝折戶を開けて、踏石傳ひに椽側の下へ立つて（早うでございます）と、お化粧したばかりの愛らしい顏を見せるのだが、今日は勝手口の前を傘で半身隱して通り過ぎ、玄關から這入つた暗い椽側を足音强くふんで部屋の前まで來た時、內からガラリと障子が開いて、月村の寢ぼけ顏が現はれた、ヤア……アラッとお互に微笑んだ、月村はツイ便所へ行た其中に奈津枝はかろ〴〵しく雨戸を開けにかゝると、頭を青々とそつた可愛い坊さんが來て、床を上げたり、掃除をしたりして座布團まで揃へて行つた、奈津枝は椽側に立つて大きい杉に圍まれたうつとうしい庭を眺めて居ると、月村が出て來て何か云はうとする時「旦那さんのお休みなんして居る中に奧さんがおなんした」と疳高い下宿のお婆さんのどなる聲が母家の方からきこえた二人は心持顏を赤くして部屋へ這入つた、月村が洗面に行つたあとも、奈津枝はひとり呆然坐つた切り、傍に揃へてある今朝の新聞にさへ目もふれなかつた。「何うしたんです、斯樣に早く、まだ七時前ぢやありませんか」と机の置時計を見ながら月村も坐つた。「アノ昨日の御手紙ネ、彼れ父に見られてやかましく言はれましたの……私本統に恐かつた……」と昨夜の父の恐ろしい權幕を思ひ出してぞつとした。「昨日の手紙……と（少時考へて）それぢや繪葉書でせう」とやゝ安心した樣に卷煙草に火を點けた。「へえこれよ」と袖から油繪のハガキを出した、名宛の下に紫のインキで「青葉の中から秋の哀れをしるや

うな悲しい心になつたあなたに滿腔の同情を捧る何れ御目にかゝつて詳しい事は伺はう」と簡單な走り書きであつた。

「何う詰問されたんです」

「別に詰問と云ふ程でもないんですが……只今日來た手紙は何處から來た、名前は女だが手蹟も文句も男ではないか、其位の事が解らん父ではないつて……少しは醉ふて居りましたけれど、平常餘り口を利かない人ですから隨分てはかつたワ」

「それで貴女は何と云ひました」

「それぢや今日のも男だか女だかお解りになりそうなもの」と云つて自分の部屋にきて寢ましたが、矢張心配でネ、今朝少し眠つた切りですの……如何したらいいでせう、恁麼ことになるんでしたら先月の中に東京へ行けばよかつたと思ひましたワ」

「僕はまたあなたがどんなに氣を揉んで彼んな悲しい手紙を書く樣になつたろうと、お慰めのつもりで上げたんですがネー、そんな事情なら暫く僕の方からは上げない方がいゝでせう今の場合で……」

「そうネー淋しいけれどすてしの間そうしませうか」

「そして結婚問題はどんな模樣です」

「私にはまだ何とも云ひませんの、云ふてとなら早く云ふて貰ふて解決をつけた方がお互に安心ですけれど……考へれば考へる程詰らないやうな氣がして……」と投げ出す樣に云つて、縞モスリンの單布の膝に眼を落した。

「兎に角まだ繼續中なんでせう、斯樣話は今度に限らず此後何遍出遇ふか解らんですから、お互に確な決心を持て居なけりやなりません僕は續く限り努力する精神ですが、男と違つて女は氣が弱いから、それだけが心配です」

「私だつて覺悟はして居りますワ」

二人は言ひ合はしたやうに部室の外へ目をうつすと、毛なれの美しい猫が、親子二疋、日當りの善い椽側に寢轉んでぢやれて居た。

「羨ましいワネー」と奈津枝は淋しく笑つた。

本堂の方で鐘と共にお經を讀む聲がして、線香の香ひがかすかに匂ふ。

「餘り遲くなるといけませんからまた伺ひませう」と思切り惡く立つた。

「そう、それではあなたの方からは時々御手紙を下さい、そして問題が解決したら、直ぐ知らして下さい」

と月村が言ひ足して玄關まで見送つた。

＊　＊　＊　＊

其夜奈津枝は母から結婚の話をされたが目のくぼんだ年とつた母を見ては思ひ切つて斷はるだけの勇氣が出來なかつた　そして皆の寢靜まつた頃、そつと起きて月村へ長い手紙を書いた。

○母親

近江わかば

「少し用事が御座いますのでお先へ失禮致します」房子は、おづくしながらいつた



（八）初秋の濱　下謚谷　井上もと

各級から集つて來た教案や、雜錄の書類を積んだ間から、校長は薄髭のある淺黑い顏を上げて、默つて頷くやうにしたが、不滿らしい色が見えて居たが房子は、其麽てとを思ふ暇もない程急いで校門を出た。太陽はカンカンと照つて、軒を竝べた商家のどす黑い瓦屋根が、煎りつくやうに燒けてゐる。軒に掛けた帆木綿の日覆がバタ〳〵と風に鳴つ

た。白く乾いた道路からは歩く度毎に薄い埃が立つて足袋を汚した。洋傘を握ぎりしめた手がにちや〳〵して、汗ばんだ襟元の後れ毛が氣味惡るく首筋へへばりついた。

日盛りをも頓着なしに、鍔廣の麥稈帽子を被つた子供の一群は、道端に俯蹲がんで土いぢりをしてゐたが、「やあ先生や」と、眞先に見つけた一人が手柄顏に叫ぶと、四五人が一度に立つて、どや〳〵と道を塞ぐやうにして禮をした。房子は輕く其れを受けたが、しほたれた白絣の單衣に色の褪めたセルの袴をはいた見すぼらしい姿が、自分ながら眺められた。いつまで此麼ことをしてと、思ふと泣きたいやうな氣持になつた。

眞直に延びた檜や杉の木が鬱蒼として、晝も暗いやうなお宮の森を控へた、町はづれのとある格子を房子はほつとした氣持で引開けた。途端燥やいだ笑聲がピタりと止んで、茶の室では外の樣子に聞耳を立てゝゐるらしかつた。「又か」と、房子はむら〳〵と嫌な感じがした。

「只今」手にした紫メリンスの包を其處に置いて、處處切張のした油團の上に手をついていつたが、すぐと客の方へ眼を寫して、「お出なさいませ」と、ぎごちない云ひ方をして輕く會釋した。

「あゝお歸りやすまた御邪魔に上つとります」客は、麻座布團の上を半分ばかり膝座り出て、ぐつたりと身體を傾してゐたのを、周章てゝ居ずまゐを直した。意氣な縞の新らしい壁透綾の單衣が、汚ない室に不似合に見えた。

「まあ早いやないか!!どうしたのや」母親は、衣桁から着替へをはづしてゐる、房子の後姿を見ながらいつた。

「えゝ少し頭痛がするので早く歸つて來ました。」房子は、幾度も水を潜つた中形の單衣に着替へて其處へ坐つた。成可くならば此場をはづしたいのだが、氣の弱い房子には其麼ことも出來なかつた。用事があるなどと、いゝ加減なことをいつて、氣まづい思ひをしてまで歸つて來るのではなかつたと、今更後悔した。客も何だか手持不沙汰に見えた。ふんはりと柔かい香の泌み込んだ白い手巾を膝の上に置いて、透き通るやうな細い指先で弄つて居た。先生といふ名に對しても、そう滅多なことは口へ出せないやうな氣がして、房子は氣が置けた。

「いつも今時分に歸れるとえゝのになあ……この暑い

のにあゝ遅うては堪まらんな」母親は、豆のやうになつた火を、長煙管の雁首で堀り起しながらいつた。

「お大抵やおへんなあ」客は、染みりといつた。然し房子には、客の口吻が不快に聞えた。此麼人にまで同情せられるのかと思ふと、少なからず自尊心を傷けた

「そうやともな」と、母親は、煙草を旨さうに喫かしながら、頷くやうにして、「仕樣がないよつてさせとくのやけれど、娘の子には此麼ことはさせたくないもんや、娘ざかりに此通りのそつ氣なしの容子で、この暑いのに日向へ出て體操でも何でもするのやさかい――地はそなはに黑いのやないけれど、この日に燒けたてとな」母親は、可憐らしさうな眼容で、バサ〳〵と後れ毛のかゝつた日に燒けした娘の顏を見つめた、母親は、自分の妙齡の時分が思ひ出された。大きな料理店の女中をしてゐて、容姿のいゝ處から、町での大きな吳服店の主人の妾になつて、間もなく女の子を一人生んだ。其頃は絹物に包まれて、隨分大ビラに金も使つた。が、間もなく其人にも死なれて、手切金に貰つた金も、馴れない商業なぞをして暫くのうちになくして了つた。其後色々と世話を燒いてくれる人もあつたけれど、連子をして嫁に行くのも可厭なので、其れからは吝嗇の商人の隱居や、破戒の僧侶や、色んな者の妾になつて、一人の娘を兎に角此處まで育てゝ來た。どうぞして、娘丈は堅氣にして――と、辛い中から女學校へも通はせた。母親の胸の中には、二十年の辛い生活が染々と繰り返された。其料理店も其後間もなく破產して、其中主人は死んで了ふし、大勢の兄弟は皆散り散りになつて了つた。其頃赤ん坊だつた末娘の客は、藝者になつて今では自前で稼いで、一人の老母を小奇麗な自宅に樂隱居させてゐる。娘も此客のやうに藝者にすればよかつたと、母親は、此頃になつてから時々其麼ことを思ふこともある。いつそ、そうして置けば母子とも苦勞もなかつたのに、柄にもない先生などにしたものだからと、今になつてから後悔もした。

「何云ふても貴女のお母はんは結構どすな、今では氣樂なもんや」母親は思ひ出したやうに口を開いて、羨ましさうにいつた。

「それでも大勢の兄弟やよつてな、色々と心配事が絕えやしまへんがな」客は、欠伸を嚙み殺した涙を急いで手巾で拭いた。

「それでもお金に不自由はなし氣樂なもんや」

急に前の森では喧ましく夕蟬が鳴き出した。客は、其

れに腰を浮かされるやうに立上つたが、二人の胸に蘇蝕させるやうな心持を殘して歸つていつた。

房子は、机の前に坐つて、借りて來た雜誌を開いたが手は只いたづらに頁を繰るのみで少しも氣が乘らなかつた。母親は、元の所に坐つたまゝ、深く考へるやうな眼容してスパ〳〵煙草ばかり吸つて居たが、やがて臆劫さうに腰を上げて釜の下を焚きつけにかゝつた。

「お春さん――客――は孝行者やな、彼麼稼業に似合はん氣質の優しい子や」母親は、竈の前に俯蹲んだ儘大きな聲していつた。

「妾も藝者になすつたら、母さんもよろしかつたのに」房子は、ピタリと雜誌を閉ぢて、いら〳〵した調子で突掛るやうにいつた。

「まあ此子は怒つたのかいな、何もお前さんにそんな……」母親はおど〳〵して、云譯らしくいつたが、胸が一杯になつてひとりでに涙が滲み出て來た。其儘默つて了つて、とか〳〵と燃えてゐる竈の火をぢつと見つめてゐた。房子も、氣拔けしたやうに默つてゐた。

○午後六時

福島　木下春子

「おい酒だよ、なにをぐず〳〵してるんだい、御亭主樣の御歸りだ……嬉しい顏を見せるのが、女房のつとめぢやないかいな――」

先の強みに似ず、終りを歌にまぎらして三次は、ごろりと横になつたまゝ、かすかにねいびきを立てゝ居る。

七軒長屋のはづれの家で、前に杉垣を越して、寺の墓地が見える。東から許り光線の入る、六疊の室には、午後六時に近い光は淡かつた、連日の雨にじめ〳〵した、心地のわるい空氣が、室一ぱいにたゞよふて、黑光りする戸棚のかたへに、半、戸のあいた押入から、白地の單衣らしいのが、眼だつて見える。

五日許り前から三次は、横町の美濃屋といふ呉服屋の井戸を堀りにいつた。臺所のわきの、せまくるしい處に、風もない、なまぬるい氣に體をさらしながら、流れる程の汗をぬぐつて、終日働いた、骨迄しみ通る樣な泥の中に、午前十時頃と、午後三時過ぎ、からだも氣も、つかれ切つた時分、お茶が出る。ガチンと下ろすつるばしの先に、全身の力を打ちこんで、深く堀る其樣な時には、此家の娘らしい、中高の島田にいふた若いのが、ちよろ〳〵のぞいては「深いのね……」と

いふて眉をひそめる、それがたまらなく美くしい、角帶きりゝとしめた番頭達が、來て見てはなにかにとささやき合ふ。

はでやかな商賣だと、三次はつくぐ思つた、思ふほど如何にも、自分達の仕事が卑しく思はれる、資本があつたら、商賣をしたいとは、三次の胸に、いつもくりかへされる言葉だつた。

今日で、すつかり吳服屋の仕事はきまつた、酒代といふて渡された、三十錢の金を手に握つて、他に日給と、例の道をいそいでかへると、角に居酒屋がある、酒ずきの三次はもうたまらなかつた。



葡萄棚　淺草橋　ひなげし

二合の冷酒を、すき腹にあふつた故か、めまいする程にふら〳〵する、あやうい足をふみしめて、戸口をまたぐ頃は、茫とした眼に、女房も、子供も寫さなかつた熱い血が、ぐるぐるとすばやく體をめぐつて、……それがいつとはなしに冷えてゆく頃は、湯の口へ立つ音もなにも、馬鹿に、神經を刺戟して、大きなくしやみの後から、「畜生――」となつて居る、隣の人の聲にすつかり眼がさめてしまつた。

雨水のたまりが、隣家の方から、小川の樣にながれて居る、其處に、小ざりを集めたり、棒切で橋をてしら

へたりして、六つになつた許りの要吉は、一人で遊んで居た。小さな時に腦病をわずらつたのが元で、割合に頭の大きい、あるいて中心のとれない樣な……けれども、身體の發育の惡るいに似ず、頭はよく、えいびんに働く。

父が歸つてきた時、要吉は驚いた樣に立ちあがつた、かうして、酒に醉ふて歸る時には、よく、母と父との間に悲劇が演ぜられた。物覺えてから幾年かの中に幾度かくりかへされた事を、要吉はよく覺えて居る。

おどろいたやうな大きな眼を見はつて、眞直に小みちを大道にぬけて、母がいつも買物にゆく八百屋の店先に立つた。「母ちやん——」母のおせんが、大根葉をかかへたまゝ、おどろいた樣に要吉を見た。

「なんだい此子は、はだしのまゝで」所々白くかすりのはげた、單衣の袖をたくしあげながら、買物に來て居た人達が、驚いた眼を、一樣に要吉にそゝぐのを見て、大きな眼を白く、一寸にらまへるまねをして、

「今かへるから、先にいつておいで」……といふたけれとも、要吉は其處を動かなかつた。不安げなひとみが、ちらりと母の顔にむかふ。

八百屋の店には、今日市場から持つてきた、活々しい桃や、林檎が、美しくならべられてある、要吉は、父の醉ふた樣などもう心になかつた、果物と母の顔とを當分にながめながらそれでも默つて、立つて居た。母が外に出る先になつて、いそいであるき出した。

くしまきにゆふた髮が、とけさうになつて、まがひその安つぽいかんざしがさしてんである。生活難の小ぢわは、まだ若い顔にきざまれて、どことなく、やせた淋しい、一寸、眼立つ顔だけに一層そう思はれる。おせんは行きながら、ふと側の床屋の鏡に寫つた自分の姿を見て、自分で、自分が可愛さうでならなかつたおせんの胸には、八年前の、自分の姿が、はつきりと書きだされる。あゝ下宿屋に女中をして居た頃は、あかのついた襟もかけたことがなかつた、わずかに三圓五十錢の月給だつたけれども、ふとした縁で、三次と一處になつてから、子供の病氣と酒の爲で、只一人といふ子供であるのに、身もふところもやせてしまつた有望さうに思つた、始めの夫を思ふと、いま〳〵しい

「家に誰れも居ないんぢやないか」……父ちやんが居たよ」「いつから……」「先程から、あかい顔して、醉つたんだよ」おせんは又かと太い眉を動かした。

▲小說選評は一〇七頁にあり▼

◎諸嬢よ東洋の美を全世界に誇れ!!!

東洋人と西洋人と異なるは毛髪眼の状態也然くに純日本人にて恰も雑誌の如ゝ醜なる者あり實に悲觀すべき現象ならずや之が救助策として不合理の薬劑を郵送し或は奇法あり〻稱しチヾレ毛クセ毛ハク毛者の弱點に付込み不正なる利益を食む者あり其曖昧なる實に驚くの外なし本院茲に如ゝ奸商を排斥せんと多年研鑽漸く特効劑を得之を臨床大家刈谷先生に實驗を依賴し洽く諸病者に試用せられ其有効なるを確證せられ今回洽く頒與する事となれり世の同病者よ不迷不憾一刻も早く申込み美髮となり宜しく東洋の美を世界に誇れ●定價三十錢五十錢一圓市内送料四錢市外八錢

東京本郷駒込神明町三八一 東京美容院藥房

◎にきび◎あかはな◎わきが

以上三症に職業に障りなき爲皆放任す隨而醫界に於ても重く之を研究せず現今一番効力あり〻稱するはクンメリフエルド氏法なれども時に無効の事あり然るに神谷家に來の塗り藥は數世の經驗にて之を使用せんか輕きは一回如何に重症と云へども十數回を超へずと云ふ如何に其効驗の卓絶せるを現今藥界に於てオーソリチーたるを恥ぢず今回全快者の勸めにより永年休難せられたる方に一千名限り分與せんとす全世界の紳士淑女先天の美を保全せんとせば一刻も猶豫せず其恩澤に浴せよ●分與料(包裝共送料合計)金三十錢●一言すドクトルメヂシン鈴木先生は常に其効驗偉大なるに驚歎しつゝあり



ちゞれ・くせ・毛の方へ告ぐ

ちゞれ・くせ・毛を速かに治し赤毛を黒化し白毛を防ぎフケを去る妾り實驗したる妙液あり望の方は郵券二錢送付あれ詳細説明書を進呈す

東京神田區仲猿樂町十

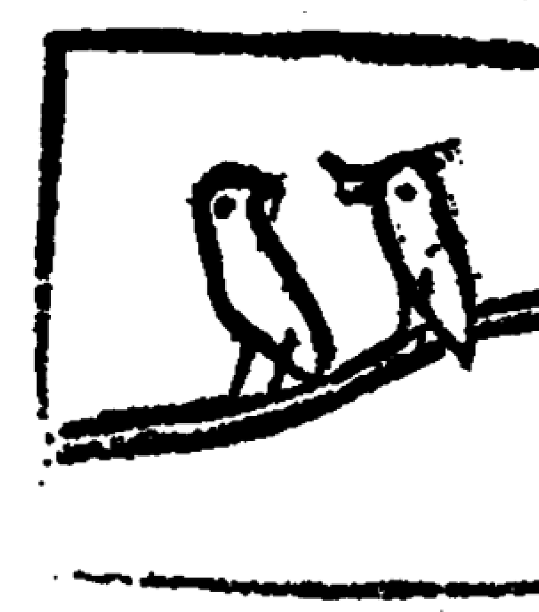
北澤定子

全國男女募集

自宅最新職業あり高尚簡易有利年中無休業全國の教員官吏及普通教育ある農工商業家に適す照會往復葉書但返信に住所姓名御記入

東京市麴町區飯田町 東京理學會第五十一部

●識者曰く東京理學會の自宅最新職業は遠近に關せず就職容易純益多額なり



散文

編輯局選

○寂しきゆめ（天）

東京　うつせみ

ヂフテリヤがいえて××病院から母と共に退院して歸つた時であつた。美しき女は母の部屋に主人顏してはひつてゐた。それはすきやの裾も氣になる程暑い夏の盛りであつた。私はふりわけ髮の頃。

女の運命はたゞみじめである――私の運命はもつとみじめであらう。涙を呑んで母は去つた。

母にはぐれた幼ない子はやるせない悲しみと淋しさとを知つた。

この頃習へ覺えた「汐くみ」を口ずさみながらお祖母樣に貰つたお菓子を袂に入れて大事に抱たまゝいちぢくの木の根に腰かけて、こゝにゐれば母ちやんに逢へる――と思つた。つき山を越した裏庭である。

浴衣の袖をあふる風にも小さい肩をすぼめた。月より外に光はないとも思つた。母家の灯も離れのともしびもわれにはとゞかぬ、淋しい淋しい、けれど、私の味方には兼やがあると思つた。ふり仰ぐとこんもりした青葉の梢から床しい風ごとに母かとまつた。

お月樣が昇つたらこゝへくるのですよ――と云ふ。

母ちやんはなぜうちの人ぢやないのだらう――と兼やに聞くけれど、兼もわからない……と云ふ。そして泣くんだもの。

お前はこゝの子なんですよ――お父さんの子なんですよ――母は固く抱きしめていつた、私はだまつた膝から母の顏を覗いて見た。

貰つたお菓子は、母に見せて今まで通り賞められようと思つた。子は母に對するそれが眞心であつた。

微かな夜風は淡い青葉の香を誘ふ、母と――子は無言のうちにつゝまれた。

……この弱い病身な子をあの女の手にはかけられませぬ、どうぞこの子が十五になるまで、私に育てさせて下さいましと、子を――いたいけなる七つ子の私を抱いたまゝ身動きもしなかつた母の面はどんなに濡れてゐたらう。

「おれの子はおれが育てる」とお父さんはそりやひどかつた今こそあゝして眞面目な顏をしてゐらつしやるけれどねと母は泣いてそのかみの悲劇を語るのである

幼なき悲しき日は永遠のものではなかつたけれど、思ひ出は、痛ましき涙のやどるもの。闇に悲しき聲の今も殘る――。

あゝいま子は二十何年の齡をかぞへた。あらゆる、涙をもしつた、涙を包んで人生の階段に足をかけようとする——、母のきづなにつながれて、長くゆたかにのびそろつた黒髮に鋏を加へる時も迫つたのである。まことの闘ひはこれから始まる——かとも思つたら私はふるへた。ほつれ毛を唇に嚙んだまゝ、私はふるへた。

過去を覗いて——現在を見つめて——未來を描いた時は——子は母と相對してすらむかしのやうな涙は出ない、母の笑顏はまだあたゝかいけれど。

かういふ閲歷をもつてゐる人は一面に於て幸福である。家庭といへばスヰートなもの、夫といへば甘つたれるものと信じ切つて、うはついてゐる君たちは餘りお目出たいからね(S.S.S.)

お此君に踊の素養があるとは知らなかつた。はやぶさが三味線を習はせられて度々お炎を喰べたのと似てゐる。この次の誌友會にはたのんで踊らせることだ、丸髷の汲くみもめづかしからう(茶目)

沈默した寂しみのにほひが、仄めいて居る。最大級の强い形容詞をゴタゴタと使つて、態とらしく現代がられるより、斯う云たしめやかな空氣に觸れる方が、どんなにうれしいか知れない(ジヤンチオンム)

○火山の破裂　(地)

百瀬秀代

七月某日。朝起きてみると、意外！意外！。木の葉のみどりもわからぬほどに、火山灰がかゝつてゐる。燒岳の大破裂！。私は、うら庭へまはつて西の方をみた。燒岳から、西北安曇郡の方へかけて、赤黒い雲が棚引いてゐる。あの下、今、降灰の最中であらう。昨夜の破裂の光景。どんなであつたらう。あゝみればよかつた。

母と二人で、桑つみに行く。「こんなくわ蠶が食ふだらうか」と、母は、しきりに心配する。人々の驚きも一通りではない。草ばうきで、はらつてやく人もある。ハタキではらう人もある。大變な騷であるが、中々、はらひきれたものでない。幸に、私ところでは未だ、蠶が小さいので、一葉、一葉はらつたが、それでも、しつかりは落ちない。南の叔母さんは、「これでは蠶もたまるまいけれど」つて云ひながら、眞白い葉を負つて行つた。

モウモウと、灰煙が立つ。最早全身眞白になつてしまつた。汗は出る。まるで地獄のやうだ。

燒岳は、蝶ヶ岳のよほど南だ、と云ふがどの邊だらう、と、みてゐると、一種異つた雲が、ぽつと浮き上つてゐる。あれか知らとじつとみつめてゐると、だんだんひろがつて、上つてゆく。たしかに燒岳の噴火だと母にしらせて、二人でみてゐた。

モクンモクンと、はき出る、はき出る。上へずんずん上つてゆく。横へもひろがる。畑の人々は、みな驚いてみてゐる。と、だんだん此方へひろがつてくる。「これやあ面白い」、と思はず叫んで、母に笑はれた。

母は北の方へまはつてゆけと、念じてゐる。少しの風が加はつて、みる〳〵頭の上まできた。そのうちに細かい粉が落ち始めた。最早仰向いては居られないほどである。「此上てられて如何しよう」と母は限りなく心配する。しばらくの間盛に落ちてゐたがやがてをりからの北風と一所に諏訪の方へまはつて了つた

夕方亦少しきた、あくる日の朝、亦も、大噴火をした。少しの風もなかつたので、みものであつた。其日は、一日中、降つたり、止んだりしてゐた。松本市中一面の灰となつてしまつた。かうなるともう珍らしい所ぢやあない。厭になつてしまつた。

此度の破裂で、新らしい噴火口が五つ出來た、と云ふてとである。

噴火の記事としては、見たまゝの描寫であるだけ、却つて實境が歴然と現れて來ておもしろい、下手



寫眞　金澤市　中田なへ

に誇張したものより遙に好い(醉茗)

平淡に書いてあるだけに外部的刺戟が少くはあるが、それだけ醱酵性に富んでゐる。森田君が曾て口を極めて讃稱した綾足の洪水記に見るやうな強い力のある作だ(白羊)

○森の悲しみ（入）

佐分華影

二人は神社の中を透し見て「まあ酷い事」と、思はず顔を見合せて相合傘をかたく握つた。

木の葉木の枝を蹈んで眞中の大きい門から中へはひつた、今朝の風の樣が胸に閃く、四時前からの嵐で、大きいの、素敵に大きいのがくると何物をも吹き飛ばす樣な力で町中はガタ〳〵と顫ふ、ビユービユーガラガラミシミシ、と木の折れる音、風の呻る音、物の倒る音、落ちる音、樹木の狂ふ音、電線のみだれ、家のミシミシと云ふ度に蚊帳の中で幾度座りなほしたか、破壞、破壞、然うだ破壞されるぢやないか、そして私等も天へ地へ山へ海へ吹きとばすんぢやないか、ガラガラと瓦の落ちる音アラ隣の家？どうなるんだらう、靜止しては居られない、母樣と共に表二階の障子がはづれるといけぬと云ふので銅張りの戸を立てる又裏二階の雨戸にも手當して裏へ出て湯殿の次の二疊間に腰かけて居た、板塀より六七尺も高い隣りの木が隱れては其度に木の葉や小枝を少なくする、あの狂つてくるつてくるひ亂れて居る萩の枝がサッと吹きくる風に雨に白い裏葉を見せて苦しくそして左右上下に狂ひ吹かれて居るのが可哀想でぢつともつて居てやりたい樣だ、煙筒が倒れて二方から引張られて居る針金の範圍の中をコロコロ屋根の上を活動して居る、物置の亞鉛屋根のおさへがとれかけた高く松の小枝が飛んできた、そして一吹は一吹きと靜かになつた。

西の方から行くと小さい社殿が二ツ壞れて片寄せてある中の神樣どんなに驚かれたかしら、眞中から折れて上半は下に落ちて居る木、吹き折られし森の木、倒れたのや又折れて落ちずして木の先のみ地につけて居るの等西の方だから大方の木は昨日の樣に空をしげくおほひて居る、高く木柵のしてある社殿の後の方へまはる、こゝは風がよく當らなかつたのか、倒れて居るのは少ない、杉や樫の木やイチの木やいろ〳〵の小枝が一面に厚く重なつて落ちて居る上へ、一抱へもある杉の木が根の方から折れて靜かに倒れて道をふさいで居る、私等は傘を窄めて一足一足と氣をつけて此の先どんなになつて居るかしらと、森の側を木の葉道をゆく、數多の女や男は木の枝を拾つては束にして持つてゆく、なんと云ふ樣だらう、倒れて居るのも、人が押しても直ぐ倒れる樣なのも眞中から吹き折られて木の香する白い生々しいみきを多く現はして、あゝ昨日まで青く誇つて居たのに今は此の樣、靜止として居れば

まだみしみしと音がする樣な、あゝ敗殘だ負けたのだ、大きな、イチの木が池の半分に小波も立てずして並んで寢て居る、根はむごく高くあがつて……
　私等は木立をくゞつて、倒れた木、折れた木を踏みこえて稻荷樣の側、池の北の方へ來た、おゝ池の中に安らかに寢て居るイチの木よ。
　冬の初めにはイチの實が落ちる、團栗の樣な、より綺麗な小さい實が落ちると、朝早く起きて御飯前に此のお宮へ拾ひにくる、そして學校から歸つて來て五十七十と拾つた、寒い風が吹くとバラ〱と落ちるのを見つけて四十拾つた、アラ私まだ二十だわなんて走つたりして遊ぶ、森の中の運動場である、私等も幼ない時木の葉をかきまはしては手を眞赤にして小さいのを見御友達とかけ走つて小さい前掛に包んで足袋など汚して喜んだ、百本程ある其中の一番大きく多く實つたイチ、情けなくも大きな根を高くして池の中へたふれてあゝ其落ちた時には池の中の龜は死にはしなかつたかしら、あの美くしい緋鯉は身をくぢかれはしなかつたか、そして大きな眞鯉はどんなに驚いたらう。
　龜よ緋鯉よ鯉よ！小さい魚よ！お前等どんなに驚いたらう、小さい首を引てまして、尾ひれを振つて慌ただしく逃げたらう？、風が吹いても小波立てるなりの安全の棲かを、高い高い水煙たてゝドシンと木が倒れて橋の樣にした時にはどんなに〱そしてキットおまへ等の仲間を殺したらう。今は靜かである、多く居る龜や鯉は姿を見せぬ、池の眞中まで行つて居る木の上をわたる人もあつた。
　あゝ大木は倒れた、長く永遠に榮えて居たのに、風の爲に、强木は、風の爲に悲慘な最後をして永久に枯れるのだ、此の森に倒れし、巨木よ古木よ杉よ樫よ、二人は木の香しみてる樣な事にぬれて大門を出た、そしてもう一度見かへれば、あゝ淋しく明るくなつたとしみ〲不安や、恐怖や、哀愁を感じた。

『花守日記』に「暴風」の一篇有り、極力あらしの凄ましかりしことを書いてあるが、この人の作にはトテモおつかぬと思ふ。針金で引張ておく煙突がころ〱したり亞鉛板が飛んだ位で、どうして森の大木があゝまで無殘に倒れたかそれがわからぬしどろもどろおみ足は例によつてふらふらと醉つぱらつておる。これは褒めたのた(S.S.)
くだらないことを言つて居るかと思ふと、氣の利いたことを云ふ、新しい措寫をする、すると又だら〱と單調な田舍道のやうな文章になるつまり此君の文章を書くのに、省いて好いことゝ、書いて好いこととを選り分ける眼識がない、只頭腦から出て來る通りを、頭腦から糸を取るやうにながく〱引くのである、書くだけの時間を、今度は省く爲に費してみるとうまくなるかも知れぬ(醉茗)

○夾竹桃のふくさ

徳島　松並紫花

　私は今でも、白メリンスに靑と紅梅との絹糸で、夾竹桃の枝を一面の鎖縫にした(ふくさ)をもつてゐる、今度といつて私はもうこれ程精密にはして見る氣がせぬ、あの時ならこそこれを拵らへた動機の事が今更に思ひ出される、それはもう八九年も前の事であつた

夕方、父を訪ねて來た人があつたので、丁度行水を濟して裏の四つ辻の涼臺で兄樣や弟と一しよに涼んでゐられる、父を呼びにいつた。

何里とも知れぬ青田の果から吹き送つて來る稻葉の風が弄ぶ樣に輕く吹き上る浴衣の袖の輕るさに、ついて手をのばして、垣から枝のさし出た夾竹桃の花を私は無意識につみとつて、口にくはへたまゝ何心なく涼臺のそばへいつて父に人の來意を告げた。

其時、涼臺の眞中で仰向に寢て、天の川の流れる中天を眺めてゐた弟がふと私の口を見ると、吃驚した樣に「姉さんその花何？……」と云ふと同時にバネ仕掛の樣にはね起きて「夾竹桃でないの……」ハッと思つて私はすぐ吐き出したが、花瓣は既にかみ碎かれて、薄暗の土の上に血塊の樣に赤い。

「夾竹桃毒だのに姉さんたら、早う唾吐きなさい、」私は夢中になつて唾を吐いた「お父樣どうしように、」私はなほ喉を絞つて懸命に唾を吐き續けた、心配する事はない、と父は笑つてゐられる「何でもすぐ口に入れてかむ奴があるか、」と兄樣は憐れむ樣に私を見る、唾呑み込みやしなかつたの、と弟は此間學校で聞いて來た夾竹桃の毒を姉は今かんだのかと非常に心配して呉れる。

呑み込みはせんと思ふけれど……どうしように……死ぬのであつたら今夜中に死ぬのだらうか、心の中は不安な涙が逆卷いてゐた。

「死ぬもんか、」兄樣と弟は一しよに斯ういつて笑つた父も笑つてゐた、そして、何でもない、心配する事はない、氣に懸りや歸つて嗽でもして置け、といつてお父樣は歸られたので、私は父に從いて這入つた。

嗽をすると、幾分か安心はしたが、まだ何となく不安な味が口中をはひ廻る樣で、氣懸りな樣な、心細いのを、只父や兄の言葉を賴りにして、其晩は常よりは殊更に父に近寄つて寢た。

眼を閉ぢると、青い〱寧黑々と繁つた夾竹桃の尖つた葉が、戰場で切り結ぶ無數の刃の樣に、殺氣を含んで目の前につき出て來て、毒氣に燃える赤い花房が狂女の笑顏のやうに氣味が惡い、毒花――毒花、私はアノ花をかんだのだ、あすの朝生きてゐるであらうか、と只それ計り思つて、雀の笹啼がふと耳に入つた時、我生命の先づ恙なく、昨日と續いてゐるのを覺えた刹那の嬉しさ思はず聲を擧げようとしたが、聲を出したらこの嬉しさが破れる、この幸福が消えて仕舞うと思つて再冥目して靜かに此の最の幸福を思つてみた。

直ぐ夾竹桃のもとへいつて見た、昨夜は命を刺される刃とも見えた堅い青い葉は、まだ日の當らぬ涼しい

朝の庭を守る様に凛々しう枝を張つて、其枝の先毎に盛り上げた様に咲き盛つてゐる美しい花房は、アゝどこに毒がある、夾竹桃よ、生きてゐるではないか、こんなことをいつて見た、花房は露を含んだまゝほゝ笑むやうに赤く美しかつた。

其當時興に乘つて拵らへたのが夾竹桃の枝振妙に、花房の色も美しい此の鎖縫の帛紗である、人にも度々望まれたけれど、これ計りは首を振つた、忘れられぬ其時の私の眞情そのまゝの色糸の花であるもの。

この人はすべてに不滿といふことを知らぬ方であらう、熱も無し情のひらめきもうつらぬ、だから人氣が無い。三ケ島葭子さんの文は乾び切つてるやうだけれど多病孤獨の人だけに暗默の中に涙がある、この君のえらいのは平凡の事實を平凡の筆に傳へて一方ならぬ趣を描てゝゐるとだ（S.S.S.）

僕の知つて居る人に、強度の神經衰弱病者があつた、いつも病的な事ばかりを云つてゐたが、でも其人の云ふ事はすべて宛らの詩であつた。こゝに書いてある事も、恐怖の感情が與へた一時性の病的刺戟であるが、何となしに美しい感じがする。優しい味のある作だと思ふ（B.B.B.）



花園の後ろ　岡山縣　野崎芳野

○泉中の祠

若狹　里子

水邊の木々は、そのみづくしい葉先きや、莖や白い花まで少しの風にさへ、やさしい音を立てゝゆらめいてゐるのにこの水面は亦どうしたんだらう。

グリーンの濃厚な色調をおびた、この水面は、少しの波も切らさない、渚には名もしらぬ小さき蟲がういてゐるけれども、たゞ沈默をまもつてか靜としてゐる。

あら、つばめが、しかも二羽、音もなうとんできてつとこの水をくゞつた、と死んでゐるやうなとおもつたこの水面に、ッッッーとみる／＼大きな波紋をつくつて、音もなうつと亦空へ、キリキリッと二度三度、空に渦をゑがいて、亦水中をスッと亦波紋をあらして、再び宮へ、四度、五度しかもおんなじところに渦をゑがいて、おんなじ水中をくゞつて、チュ／＼ッと最後の聲を二聲のこして、はるか／＼の北の空へ――。今まで廣がつてゐた水面の波紋はいつかしら消えてゐたが今までくゞつてゐた水下には、小さなおみやが、一尺位な、ふれたならぬる／＼としさうな、水あかが青青、すつかりしとその木で造つたおみやをおほうて寂としてゐる、あれ／＼扉が私の方をむいてるわ、何かしら氣味がわるい、亦何かしらなつかしい。

「よくこの泉は身投げ女があるんですのよ、あのまん中はどれだけ深いかわからないのよ、氣味のわるい水のいろ」お幸さんはこんなにさゝやいた、きつとこのおみやが、ひきつけるんでせう若い女を、さびしくなつた若い女を。

私達だつてさうかもしれないわ、きつとひきつけられたのよ、ほんの山へ昇つたばかりだつたのに、こんところに立つてるんだもの、あのときはまるで雨泥に緑でもつながれてあるやうにおもはれて、それを誰かゞつる／＼／＼／＼ッとたぐつたやうになつてあの狹い崖みちをこんなにきたんだもの、もしか／＼あのおみやが、たぐつたんじやないかしら、あれ／＼扉はやつぱりとこちらをむいてるわ、中から誰かゞ招いでゐるやうに。まあこの草はなんてこんなにすべるんだらう、このドス黒い水の中へ、まあすべりおとさうとするの？いゝわ、おとして御覽な、けれども／＼わたしはまだしつかりと此方の木につかまつてゐるのよまつてゝ頂戴な。いつかはくるわ、なつかしい水よ、その水のいろよ。

さつきのつばめは、私達に何かの暗示をあたへたんじやないかしら、私たちも二人つばめも二羽と亦こんなにお幸さんはさゝやく。

あら／＼ッ亦風が吹くわ、あたりの木々はやつぱりとあんなに、みんな／＼ゆらめいてゐるのに、水も、おみやも、やつぱり寂として、いたづらに沈默をまもつてゐる。

池と宮と古い傳說、そこに何か知ら見えないトレーヂユニオンがあるこれだけの材料を捉へ乍ら、案外平凡に看過して居るのが殘念だ、但所々機才のはのめいて居るのは認める(S.)

詩歌的情緒のある場所を捉へながら、場所を捉へたといふに止まつて心持を捉へてゐない(S M)

○雜記

神戸市　津　城

休暇になつてから向ひの子が二人、毎日人の寢てゐる時分からまるで坊主のお經みたいに本を讀み立てるので八釜しくて仕方がないそれでも父様、あすこの子はよく勉强するなあつて……いやだわ、二人共此三月には近江八景の一つ堅田の何だかだつたと云ふ話……

昨日なんかも晝頃に、ジイ／＼急に蟬が鳴き出した様なのでちよいと窓から覗いたらまあ二人が胸のどこ迄網シャツのすそをまくり上げて其處へ蟬をどつさり入れてゐた。おまけにそんな身體して內の塀へ登つて朝顔の萎れたのをむしくつて居るのだもの……

あきれ返つて仕舞ふ、珍らしく隣りとの堺の戸が開いてると思つたら、雀の奥様と母様と何か話してゐらしつた。日の立つのは一寸早いものですねえと云つた人、妹がよく當選すると自慢する女、△△の主人は鼓が上手だと賞めるお世辭者、△△の鼓と來たら內ぢや輪換屋つて呼ぶ、何の事はない丁度桶の底をたゝいてゐるのと同じ、此暑いのにあの音を聞かされちやぬか味噌どころか、隣人よ、大切の着物がむれない様に注意なさい、馬鹿な人、馬鹿らしい日、戯らに星を七赤として見たら、馬鹿げた事の多い日だつて……道理で自分の星も知らずに見る前に勝手に八白とか何とかきめて占する私も馬鹿臭い。

（曇つた日）



ひるね　山口縣　輝烟かの

斯ういふ文章もあつてよい　（評者）

無邪氣でいゝ、暗く時代がつた文章を讀んだあとでこんなのを見ると、肩の凝が下るやうに思ふ。（モデルス）

○月の園にて

本鄕　かくれし人

蟬の音がなきね入りしたやうにヂッヂッと思ひ出してなく、もうたそがれの色は園に一ぱいみなぎつた。花の白と黃との差別がつかなくなつたころ浮き出たやうに小さい微かな音を立てゝ月見草が、しげつた草の中にめざめた。その音は限りなくやさしい極の音である。お白粉花も白いのは星のやうにさき出した。今夜の花は、わが世ぞと一息に爽かな胸一ぱいの氣を徐々に澄みわたつて來た空氣にはき出して、輕るくゆらいでゐる。

衣をかへたすが〳〵しさに灯のとゞかぬ庭の面をすがやかに見まもつてゐると、いつともなしに一寸すじの青白い「あかるみ」が園に流れた。

蒼白色な、はるかに見る月の夜のサーチライトと云ふか、末廣がりに、流るゝ光線は、花をもつた許りの萩を、露をそのまゝ戴いてゐる圓葉の金蓮花と月見草と、桔梗とお白粉の幾株かにシットリ口づけて青い夜の空間に綠金色の光矢は、水蜜桃の重い葉の重なり合つた間から投げられてゐるのであつた。

ムーンライト！おゝ夏の夜にかく事の出來ないムーンライト！、歡樂の都の巴里を想はせる月の光よ!!!七色の色衣をぬぎすてた玉のはだえはくもりなき鏡面のやうな宇宙に黃玉のやうにのぼりゆく——月よ月よ。冷熱をもつたその面よ。

斜光に浴した花はあかるいうるほひにほゝゑんで、同じ花も月にそむいたそれは、ドロンとしたよどみをふくみて、輕快な夏の花らしい氣分が少ない。丁度影と現のやうに——。

フト美女がめざめて欠伸しながら起き上つたやうなルキジユリアスなコンサルトが後ろの家から起つた。

生垣がちの此處あたりは、垣ごしに瓦斯の華やぐあけひらいた窓近く、ピアノのキーに女にも見まほしい白き指走らする音樂學校の學生の住居がある。

曲は何？るり盤に玉を投ぐるがやうなる快調は知らず〳〵無我の境にはせさせて、醉ゑるがごとく、興にまかせて私は二歩ゆき一歩かへり、いつか軒の影から出ると、十日餘りの月はまともに樹の上から直に落ちた。

その頃はもう園の半面はみなぎる月光に草の花はぬれて、くらき東の樹立から灰色のいかめしい蛾が夜の花をしたつて、弓づるのやうな羽音をたてながらとびまはり出した。

うつとり目をあげると田圃を隔てた田端のわが家と對立すべき高地には、樹立の中の家から青白い瓦斯の水々とした燈が、涼しげにまたゝいてゐる。

小說選評

水野葉舟

△隣の細君（信濃、世良田優子）この人はこれで二度讀むわけだが、作としては極く幼稚なものである、しかし此作の背景になつてゐる作者の人となりの、如何にも無邪氣であるのが直接に、感じられて來るやうで、何處となく捨てられぬ心持がする。

△十六日の夜（陸奥、黑百合）筆に何處か達者な處があると思つたが、作者が見て來た、考へて居ると思はれるものが何にも無いのが、いやだ。

△午後六時（福島、木下春子）細かく、ごちや〳〵と書いてあるが、この作は混雜してゐない。だが、相變らず才が勝ちすぎて居る。才走りすぎてゐて、底に深く沈んで居るものが無い。そこは大いに考へものだ。

△暖簾縫（信濃、優梨子）この文章の調子と、中に含まれて居る感情のリズムとが實によく相融合してゐる、靜かな、淸らかな、香をきくやうな感じのする作である、この作を讀んだ時には、少しも不平を言ひたくないと思つた。この作だけで、小さいながら心持のいゝ藝術の味が舌にあまるほどあると思つた。自分は此心持を公にして置く。しかしこれが完全であるといふのではない、誤解されては作者自身にも其他の諸子にも困る。

△おそろひ（東京、さかえ）緩い調子で描寫してある、何處かに懸みが流れてゐるやうだ。そこに美しい感じがある、だが、それがあまりにのかであるので、この作はたゞ事に近く思はれる。

△母（六花）終のスターから後の心持を、もつと明かに書くと面白い小說になる、筆は素直でいゝ。

△病人の死（東京、いなげし）一寸アツトラクチーブな事が、書いてあるが、また藝術として價が少い。

△母親と惡魔と（横濱、都美路）氣のきいた手法が目についた

△母親（近江、わかば）上手だと思つた、一通りはよく書けて居るが。見方が——自然の——やはり平常である。

△憧憬（東京、露菜子）も少し考へて書いて貰ひたい。

△濱の一日（みさひ）輕靜な作、一種の流行の模倣である。

△鷄（常陸、木村那賀子）まづくはない、しかしよいとも思はれぬ。

△蓮葉女（東京、古那夢）斯う藝術を易々と取り扱はれては恐縮する、

△三田の姉（横濱、月ゃさ）淡い感じがするやうに書いてある、この人は新しく進んで來た人だが、未來がある人だと思つた。

△雨降る日（東京、智代子）生眞面目に書いてある、そこが面白く思はれた。

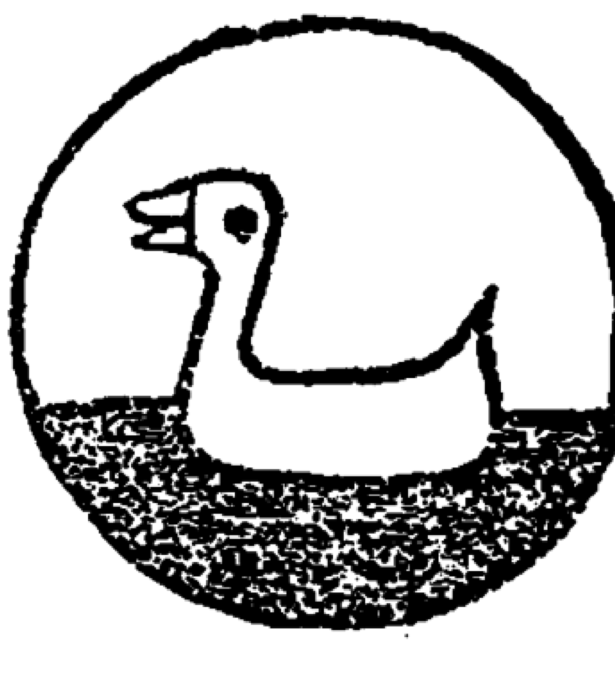
△文がら（山形、花陽女）不愉快な作。

△醉語（横濱、千鶴子）氣のきいた書き方だが、この作の根本に新しい處が少しも無いので、形ばかりが目に付く作に成つた。

△浮草（東京、露木あき子）惜しい事には底に沈澱した深いものがない、たゞ斷片が並べてあるにすぎぬ處がある、しかし、巧みだと思ふ。

△歸途（横濱、若蘭）才筆だと思つた、そして歩く道が誤られなかつたら幸だらうと思つた。

△藪人の日に（下谷。さすらひ）これも醉語に對した批評と同じ言葉を繰り返す必要がある。



身がはり音頭

坂東太郎

今度といふ今度、流石の惡口屋も運惡く病に喰ひつかれたらしい、天罰といへば天罰だが、六號が無いと寂しいやうだから、君書いたらと醉茗さんがいふ。田舍には閏の月が有つても一度盆踊をするさうだ、自分の音頭役は無論閏位である。

蘇生法師の傳言兼遺言に曰く、女は見えつぱりである、うそを突くものである、亭主の二本棒を書いて來たら宜しくカラシを嘗めさせよと。先生餘ッ程あてられたと見えてムヤミと新郎新婦にあたるからおかしい。「おのろけ其まゝは詩では無い、中講の言に耳を塞ぎ衆中の會に目を蔽ふとあるのは何の爲だ、お互女同士なら何とでも言へ、殿方たるわれ〳〵の前で宿六とイチャツイて接吻抱擁までやつて見せるとはあつかましくはないか」はちと嚴し過ぎる。畢竟、近江の定子君大和の靜子君越後のひろ子君などが惡いといへば惡い、近くは楊子江畔の新婚生活を書いた人や覺め際の寂しさを語つた賢き夫人の君など、まさにその三十棒を喫せねばなるまい。

幸にして私には細君が有る、おこられたら切腹する積りで臍の緒切つて初めて口語詩を作つた。讀者の頭痛は全くしんしやくする必要は無いからお目見えの印に發表すれば、『針は持つたけれど、箏は使つたことがないといふ。着物は一人で着るが、床なんか敷いたことはございませんとおつしやる。「レ、ミゼラブル」を原書で讀むのだからおれよりは學者だ。ピアノは上手なり學もうまい、況んや一門切つての美女にておはす。飛んだ奥さんを貰つたなどゝゆめ〳〵思ふまいよ』醉茗先生はこいつにや驚いたと言ふたらう、惡く分にや構はない。

昔々藤原鎌足公は「我れはとよ安見子姫を獲たり皆人の得がてにすと安見子獲たり」くやしくてもおれの眞似ができまいと大のろけにのろけたことがある、僕の細君は、背はいゝ加げんすらりとしてるし、髮はうんと濃し、丹花の脣、遠山眉、少くとも僕の目には安く賣つても美人である。學藝界にはいつもあつちの人を向うにまはして、ジュリエットにもなればオフエエリヤにもなる、評判は新聞で御らうじろ。言ひ落したが年は五つ下のとつて十九歲。お望みならは寫眞を女子文壇の卷頭に揭げる。但引立役には醉茗白羊兩先生の奥様に出て頂かねばならぬ。

けれど考へると結婚位阿呆臭いことはない、『生きんため死なんが爲のわれならじ死も美しくうつる戀哉』三ケ島よし子。人生いくばくぞ、戀は絕對ならずや、『十年ならは病ませ玉へど衰へぬ少女は我よ天地の神』原田琴子。戀すれど嫁がず、悲めど傷らざる病めるこの人を思ふ。見ず知らずの人に遍く多くの女は賣らるのである、初から賣られたがつてをるたぐいは愍あはれむべし、及ぶべからず。歌を知り詩を知り、シツクスの尊むべきをも覺りて、しかも終に性欲に負くる男女の醜くさを見よ。

と力んだつて初まるまい。女は矢張褒めるに限る。況して僕の細君も女である、はぐらかせば目が三角になるし、茶かせば頰ぺたをふくらますし、惡く怒らせると里へ行つて了う……仕末にならない。

はめるに限ると定めてさて山の如く積まれた原稿を調べると、紅い絹絲や白いぬひ絲で綴ぢたのは、女らしくて可愛いけれど、中には小指ぐらゐ太い、手垢だらけのかんぜんよりでくゝつたのもある、一寸ほど紙の端を裂きかけてそれなり綴つたハイカラのもある。住所姓名の無い奴は片ぱしから見ずに落第させる。楷書どころか行も草も通り越して靑大將風とでもいはうか尻ッポを思ふさまのたくらしたのがある。無論これも助けがたし。

『いつしか夏もすぎのとにさすや凉しき月の影夕の夢のさめぬ間に』と大薩摩と出たのがある。『親何物ぞ！教師何物ぞ？憐なる女は强者に候、そは女々しきくり言にすぎず候へばにて候』と候ヅクメの文も候。

譽田順子の「夜の町」蒲田千夜子の「停車場まで」金竹かをるの「發電所」は見たまゝを正直に書いてある。が書いた人は、男か女か犬か猫か、それとも八十になるお爺か水々したかみさんか一向見當がつかず、まゝたきの樋助にも風呂番のお三にも融通が利くやうに、類性は有れど個性が無い、—自分といふものを忘れてゐる。のみならず譽田さんはつけ景氣

にチリンチリンまで入れた「ハテ土佐に電車がゴザイマシタカネ」と例の君なゝ毒づくだらう。

かたづいた友にあひて、女は結婚するとあゝまで美しさを增すのにと羨んだ人のあるには吃驚した。道理で有夫無い君達の御腕の力の冴えたること、御おもての皮の彈力に富めること、ひとり者は助からない譯だ。「童貞に何の誇がある」ともあつた。むかしは、大英國の帝冠をかざれる著名の玉をかつて一匹の牝牛に換へた亞弗利加人があつた。狼籍者にキスされてあたら唇の傷きたるを悲み、その男の胸を刺したルーシのいかりは何時の日か君等の上に見られよう。一千萬磅に値する玉は一千萬磅あらば購ひ得べし、天帝も處女の操は奪ふあたはず。われからゆるさぬかはり誰人の處女の唇に觸れよう。われ等はかく信ず。然るに！

この身、この心、神のゆるせる童貞をすてゝ、―人妻の白き白き腕を羨むは何ぞや、あゝ羨むは何ぞや。

が、事實は曲げることが出來ない。多くの女性が人妻を高きところに仰ぎ見て羨望の焦點とするが事實ならば、われ等すべての男性が、人妻をしりめにかけて、處女をのみうつくしとするは冷笑すべき空想であらねばならぬ。

「金玉の響なしと雖古學尙我を慰むるに足り、蘭授讃軸の飾なしと雖十ケの一輪ざしは山花野草を並べえて鼻目賤鼻を樂しまするに足る、東籬花木の壇あり、西庭わが鐵脚を拔道せしむ。出て尾蓋の詩を誦し高標を以て自ら任ぜんよりは、坐して古今の聖賢に見えん、方一町これ妾が理想の天地なり」埼玉高橋エツ子。惡い病にとッつかれたものだ「うさアねへ、あの人が内にゐる時を見せてい、古るい見臺を控えてむづかしい本の講釋をするが。ム、何か關羽張飛字は孔明、牛ン房切の槍を捻て縱橫無盡と働きまする所、遙左の方に備を立てましたるつはものには誰れ御座りませうや、緒三枚の大立者鍬形打つた五枚しころの兜をさつくと着殺し、給一かん半天もゝ引……

癪に障るのは匿名の多いことだ。「新文章」でも山田長曾我部若杉のやうな眞面目に文學に生きようとする人を除けば、思ひ／＼に卑怯を示してゐるぞ。何ぼ安價の告白をするとて一定の號なり符丁なりせめて使ふがいゝ、暗中模索をこゝろみる讀者こそいゝつらの皮だ。

座談のくさび

▲關の小萬といへば「最後は伊勢路育ちは近江、生れは丹波、栗毛馬夫を抱きかきのせて……相の土山死出の山」と巣林子に歌はれたが、關（伊勢鈴鹿郡）に殘れる唄は「關の小萬が龜山通ひ月に雪駄が二十五足」といふのである。薩州紀州兩藩の士が同所地藏尊鐘樓の下で鬪へるを見て、小まんが驅けつけ「お二人の此出入、關の小まんが預つた」と、持つて行つた火吹竹で兩士の切り結べる刀の切先を押へたんだといふ、會津屋といふ旅籠屋の娘だとあるが、その事が評判になつて龜山侯（石川氏）の大奥に御造師範として抱へられたさうで武具は火吹竹に限つたかどうだか。大奥にかゝへられたのでは月に二十五足の雪駄も無意味だ、馬鹿な手合がいゝかげんに故事つけようとしてあべこべに小まんの艶名俠名を傷つけて了つたのだ、火吹竹が愚劣ぢやないか▲「我輩は當市隨一の美人にキスした。來る某月某日其名を發表すると」書いた新聞屋があつた。物見高い米國だからべら棒に讀者が殖えた相手の美人は誰あらう揭載しゝ寫眞を見ると其男の細君であつたアメリカズムを尊崇すと稱せらるゝ「報知」の先生達、一つ擬られる積りで眞似て見たらどうだ。▲喧嘩といへば、つい十日ばかり前（七月中）に亭主の頭から、おはちを被せて飯粒攻めにした女があつた。鈴木といふ靜岡の男は一夕細君と喧嘩をおつ初めて、お定りのすり鉢の代用にお膳を蹴つけられたが、立上つてなぐるには可愛いしとそばに寢てる猫をつかんで細君に投げつけたら、相にくと爪が眼にはひつて、立派な眇にして退けた。何處かには癪をしたのは藝術だつたわと仰しやる奧さんがある。夫婦喧嘩も藝術でせう、細君の目の二つの中の一つへ、猫の爪をあてさせるといふことは奇天齋正一にもむづかしいからね。▲世界最小の女として萬朝は二呎六吋のチクイタ（キユーバの產）を擧げたけれど、印度だつたかにビールの瓶より少し背の低い女が年齡は二十一、各部の發達あたり前の人に違はぬと『時事』にあつた。ビール瓶と並んでテーブルに立つてる寫眞も見た▲甲府に飄來せるホーカイ屋の女、首筋に血が垂れてるのを發見して、拭取つて隣へ行くと、また垂れてゐる。怪んで丸髷を解いたら、大きな百足が充分に血を吸つて動けずに居たのであつた、女は一時夢中になつた。

詩

河井酔茗選

○夏（天）

やどり木

夏よ。若い緑の夏よ！。
柔かい南風に伴はれてお前が來る時
過ぎし日に甘さに滿ちた花の匂ひに
醉ふて眠つて居る私の心は驚き醒め
て、
靜かにも樂しかりし青春の夢を繰り
かへしては淋しむ。
乾き切つた強い日光と
むせかへる若葉の吐息と……
晝は空虚な自分の心と……
くれがたの緑の風が海原をめぐり
昨宵少女らが戀がたりした彼の柳の
枝を縫ふて自分の和かい肌にまつは
れば、醒めた心は夢のなかに過ぎ去
り行く人の影を追ひ、沈默の森の深
い緑を洩れて
紅い鳥の美しい歌聲がきこゆるとき
心はしづかに今日の若さによみがへ
る。
夏よ。
汝の腕はビロードの夢よりも軟かく
汝の瞳は戀に破れた少女の心よりも
激しく懷かしくさうして憂はしい、
そして汝のなべての力は
私の心を、深い眠りより醒まし
醒めた心を蕩かしては消えて行く夢
のあとを追はしめ
かくて又新らしい今日の心によみが
へらしむ――。

くれがたの風

くれがたの風のなつかしさよ……。
丁度疲れた天鵞絨の手ざはりのやう
に
暗の中に匂ふ金盞花の白い香りのや
うに
空虚な胸を抱いて
黄色い月光の中をさ迷ふ時の心持ち
のやうに靜かに吹く薄暮の風の軟か
に懷かしさよ。
青い芝生に身をなげかけて
捨てどころない悲しさと
震へて止まぬ嘆かしさと
痛ましい憂ひとに胸迫つて
若い此の日を、泣いて泣いて泣きあ
ぐんで
重く疲れた自分のまぶたに
無邪氣な小守唄のまだ殘つてゐる青
田の上を
靜かにもめぐり來てまつはる
くれがたの風のやはらかい懷かしさ

よ。

二篇とも佳作、これだけ詩が分れば大丈夫だが此れ以上進まうとするには眞の自覺を要す（評）

○小鳥（地）

津市　藤田　豐子

何かしら小鳥が鳴いてゐる。
深い〳〵木立の中で―
涼しい風が木立の葉を動かしてゆく。動かして行く。
と、葉と葉と鳴る。さら〳〵！
小鳥は鳴く、小鳥は鳴く、
嬉しさうな、歡樂に滿ちたやうな聲で
深い〳〵木立の中に……
青い〳〵木立と、
美しい〳〵小鳥の聲と……
あゝ既う私は悲しくなつた！
愁ひに滿ちた私の胸は、
にじみ、



夕涼み　栃木町　中島千代

あゝ丁度この石の樣に冷たくなつた
けれども――けれども――
未だ鳥が鳴く……

拔巧がなかく群を離れて巧い唐突に現れて來た人だが（評）

○かくれ行く月（人）

野　薔薇

青白き月光は、
濃霧重たき夜の天に、
たゞよふ如くうかび出で、
―水にうかべし銀盤の如く、―
流れ行く雲の上に、
白き沈默をつゞく。
流れ行く雲の輩――、
仄白き浮雲は青色に、

黄燈色の斷雲は、
重き香油のたゞよひをなして、
次第々々に被ひ重なる、……………
…………………………
今ぞ層雲の厚き面衣は、徐々に、
青ざめたる月の面を被はむとす、
――尊嚴なる聖の終焉の樣に――。

かくれ行くその瞬間よ、
光おさめし月影は、
雨の接吻にしぼみ行く花の如く、
夕暗に立ちつくしたる少女の白き
面にも似たり。
かくて刻々に……刻々に……
憂愁の我瞳よりはなれ去る。

作詩の經驗は淺いと思ふが、多少の豫備智識があり、作物に忠實な態度が表はれてゐるから、經驗さへ積めば此君に望みがある（評）

○月光と蜘蛛

金澤　ひらさき

風もなき夏の夜や
木棺は沈默せり。
心持かしげられたる下絃の月光は、
所せきまで散りしけり。

黯める柏の葉より
彼方梅のしげみに
觸れなば鳴りもいでなむ
銀線一條渡れり。
月光にきら〱、きら〱と。

呼吸深くひめて
營める蜘蛛のわざ
あゝ、月光に洗はれたる
崇嚴のすがたや――
――見る〱ぬれゆく我瞳！

白き布

はた〱はた、
竿の白布ひるがへる
其度毎に胸痛む。
あゝ八月の晝の思ひ出。
風が光るか八月の
太陽をさしかへすか白き布、
はた〱はた……
なごまぬ心のいぢらしさ。

そこ紅させる傍の
木槿の垣の青き花、
徒らなる物思ひや
白き布と木槿の花と――。

『白き布』の方が好い感與を與へる、『月光と蜘蛛』は說明に過ぎた（評）

○心ほろびし女故に

草の門

あゝ女とは――
犧牲の小羊よ――
男とは――
紅と白粉をほどこした
華かなる、けば〱しい
偽りの女の唇にも――
あつい情を送るもの。

わが頰に、唇に——ふるゝ
をとこの熱烈な唇はもゆる印ぞ
柔かく、優しき瞳に
眞らしき愛は閃けど
われ——冷たき涙ながるゝ
心ほろびし女故に——。

されどその瞬間よ——
世も、人も、何ものと念はぬ
まことの心！
キスは男が眞情の閃と云へど——
肉のにほひぞおもはるゝ
そは——女にのぞむ、最初よ——

あゝ女とは
犠牲の小羊よ——
をとこがなすがまゝに
腕まかせど——ほろびし心は
涙のにじむ。
世を欺ける、僞れる——
死にどころなき女のおもひ——

あゝその昔よ——。
君ならで、うつさゞりし
口紅を、——
淺ましき僞り多き人生の
變化のまゝに、たゞよふ小草の
われは根もなき浮草よ——
『許せ！』とわびれど——涙おつ。

藝術としては香氣の乏しいものだが、女の叫び聲としては痛烈だ、詩を作らうといふ心は旣に藝術に入らうとする心だから、一歩進んで藝術に近ついたら何うであらう（評）

○ひろ野

淺草　露木あき子

打つゞく平原のなかに
月光の青きわなゝきと、酢の如き風の哀哭と
幽かなる夜の横顔に下り行く時の皷動と
そを聞きて長く〳〵列車のはてび
今宵、充ち溢れたる愁ひを乘せてはしる
あゝ單調なる夜の平原よ
地平の果てに沈み行く空の穹窿は低首れて
幽かに殘す瓦斯の灯の暗き仄に限りなき哀色の嘆きを染めむとすらむ。
或は見よ、疲れたる觀客の吐息の中に
痛ましき悲劇の幕をたれて
我が思ひの行手を遮るにも似たり
かゝる夜の青き靜謐を破りて、わが暗き憂をのせつゝ長き〳〵列車の運びは止まれり——

新しい、平原を走る汽車も意味が深い、併し作詩の態度は才に任せて輕卒にするのは宜しくない、なほ且私は此作者に性の疑を抱いてゐる（評）

○小鳥の死

姫路　美代子

鈍色の嘴、鈍色の足
あゝ小鳥よ！

眞赤な美しかつたお前の足が
鉛みたやうだわ
苦しさうな小さい吐息
瞳を蔽ふ白い膜
あゝ青い小鳥よ——
汝は今何と考へてるの
何も思ひ殘す事は無いの
青色の羽の一つ一つに、
反射する灰色の光
ふつくらした柔かい胸毛の下に
緩かに流れる青白い血
人に云へない寂しさを包んで
天に歸つた青い小鳥よ
暖い羽根の下に
鉛の様なお前の身體
土中に埋められた鐵管の様な
深い響が聞えるやう
あゝ小鳥の死、灰色の夕ぐれ
窓に凭る薄黑い病女に
何事をか暗示した小鳥の死よ！

新しい題材でないだけ、それほど強い印象を與へない誇張や刺戟もわざとらしくてまだ充實してゐない（評）

○朝の海

大阪市　杉山かし

廣々と明け渡りたる朝の海——。
船も無く鳥も飛ばず、瞳のとゞく限り、靜かな
靜かな音なき青い朝の海、何物もなく——、
たとへば……、空虛の心の様な……。
—否々、最つと〳〵——。
靜かな、大きいたとへ様があらう、
昨夜殘した足跡を探がしに來た少女、渚に立つ
た小さい姿は、此廣大な自然の一つのまたゝき、
の中にも入つて仕舞ひさう、あゝひろきあした
の海。

○宵月の讃美

横濱　都美路子

投げた火の玉が、
長い尾お曳いて飛んで行くやうに、
宵月の第一光線のあかるさ。

赤い星
青い星——それ等は、
腐された林檎のおのゝく感じに、
ぶる〳〵と、ぶる〳〵と、
酸性のため息をするといふ。
あのいやな。——けれど美くしい色に
包まれた宵の明星。

月が吸ふ月見草の息。
星が落とす白ろい露っ
靜かな、
だけど笑をこらへてゐるやうな蟲の歌。

月ののぼる一瞬
暗らいところから、明るみへ出された
やるせない—むづ痒ゆさ。

○川邊

ふさ子

すゞ風の、すゞ風の
さと吹けば
長い袂のひるがへり、ひるがへりさわやかな黒
かみの
鬢をはなれてふわとゝとぶ
甘い桑の實、それのよな
唇赤いやさ少女
川越えてくる誰を待つ
素足にはいた桐の下駄
かるいは何の爲にとか
すゞ風の、すゞ風の
水の面を搖がせて
何の心地か波よる毎に
はゝ笑まるゝが面白や。

○幼きうたがひ

越後　菊子

でも昨今日も一昨日も、お前は同じ事を思ってますねえ、小川の水にちら〳〵と日が入って、あれ、小石が、きら〳〵とひかつてゐます。夏の夕暮、涼しい朝も、黙はしげに、うつむける白百合の花よおゝ白ゆりよ、

秋おとづるゝ朝風、お前にはなぜ悲しく涙ぐませるのだらう。もやふかき夕暮、笑こぼるゝ星のまたゝきにもお前は始終うつむいてゐるではないか。なぜ〳〵かなしいの、私にはわからない。

私の心がお前にはわかるかえ？え、

そうおかしいわねえ、だのに私にはお前の心がわからないへ？あれ又、いつもの星が百合さんと呼んでるではないか、なぜ返事しないの、

あゝ御お前の心はどうしてもうごかすことが出きないんだ、あゝお前はやはり沈默だ。

○冷たき夕暮

美作　青北まさ女

たゞ一人さまよい出でぬ
やはらかき初秋の夕陽は
はぐれし魂を靜息なく
冷たき夕に照らせと
我
あゝ淡き涙ぞ浮ぶ
咲くや悲しき瞳して
うなだれてゆく乙女の姿、
野も煙り灰色の雲のたゞよひ
渺々とかの夕彩の雲
何をか求めむとして、さまよふ



草取り　京都　磯なみ子

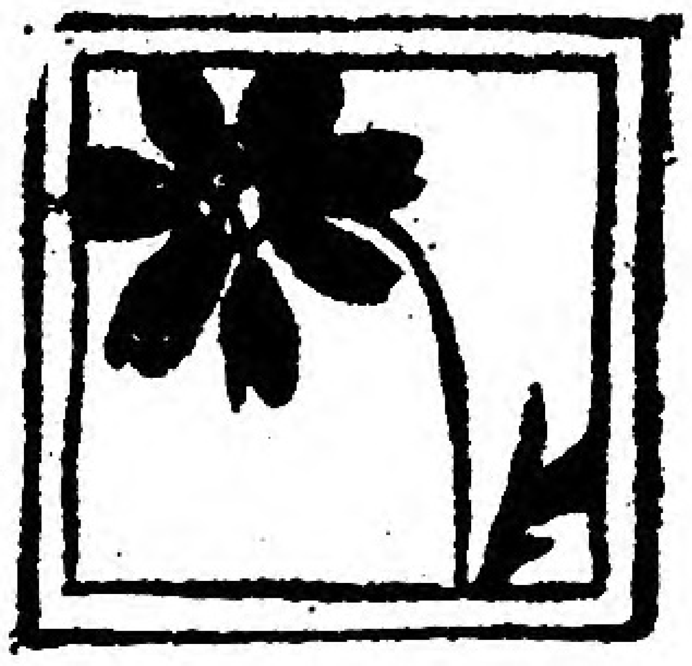
○薄ら笑ひ

横濱　若蘭

あはれ現に悶の子
よしなく醒めし慰哀の子
薄ら笑ひのわびしさは
空虚の樣な我が胸に
谷を流れて來るやうな
冷たい血潮がひろがりぬ

あはれ現に悶の子
よしなく醒めし慰哀の子
浮世の嶺を越ゆる時
浮世の橋を渡る時
薄ら笑ひの悲しさは
そつときびすを巡らしぬ

あはれ現に悶の子
よしなく醒めし悲哀の子
空虚の樣な此胸に
兩手をあてゝ步む時
生あるものの悲しさは
沈默を守りうつぶしぬ



詩の言葉（八）

秋

秋風わたる青木立
葉なみふるひて地にしきぬ
君が心の若き夢
秋の葉となり落ちにけむ（クロアサン）

秋の落葉を斯んな美しい感情を以て見た人は我國に少かった、説明も註解も要らぬ、只此句を口ずさむと青春の夢のさめてゆく悲哀が動いて來るやうに思はれる。

私の心はまた夢を慕ひそめる……
秋の日の午後、白い柔かな光は漲り
花は靜かな眠りに輝く（柳虹）

靜寂な秋の畫の冷たい悲哀の漂ってゐるやうな心持を表はしてゐる、これ頓て詩集『路傍の花』の色調であらう。

柳河のたつた一つの公園に
秋が來た、
古い懐月樓の三階へ
きり〳〵と繰り上ぐる氷水の硝子杯
薄茶に、雪に、しらたま
紅い雪洞を消えさうに（白秋）

柳河風俗詩の一つ、此調子は白秋氏が最近の傾向を示してゐる。

しめやげる精舍のさかひ——
石だたみ音もかすかに
飜る落葉は夢に
すゝり泣く愁のしづく
かぎりなき秋のにほひや
白蠟のほそき焔と
わがこゝろ、今し、靡かひ
ふと花の色にゆらめく（有明）

大きな伽藍の中の、しめつた空氣に秋を感ずるのはふさはしい心持だ、石たゝみの上の落葉も、蠟燭の火も、秋らしい感じを作ふ。

秋の日の
ヰオロンの
ためいきの
身にしみて
したぶるに
うら悲し
鐘のおとに
胸ふたぎ
色かへて
涙ぐむ
過ぎし日の
おもひでや
げにわれは
うらぶれて
こゝかしこ
さだめなく
飛び散らふ
落葉かな（ヱルレエス）

これは『落葉』といふ詩の全篇で『海潮音』に譯載されてある『ヱルレヱヌに至りて音樂の聲を傳へ、而して又更に陰影の匂なつかしきを捉へむとす』と譯者上田敏氏も云つてゐる如く、フランス有名の詩人の作だけに、其情調の渾厚なる、全人類の誰に與へても感動する詩歌である。殊に又此詩は、譯の巧みなこ

とも感謝せねばならぬ、日本語を以て綴られた創作にも、これだけ平明に、自由に、潤澤ある詩を成し得たものは少い。

霧にしめれる雨引山の
林の奥に、猿飛びて
秋は空しき、山中の
石の蔭より、見下せば
常陸國原、揺かせし
雨と風とに、逆らひて
枯れける草か、野の西に
日は力なく、落つれども
眞青なる空に、雲絶えて
峰も麓も、しづかなる
山の上行く、我なれば
みそらに在るに、似たるかな
路は雲母の、あらはなる
峠に沿うて、たど／＼と
行けども家の、まだ見えで
我は疲れし、旅人なり(夜雨)

實に夜雨は疲れし旅人なり、行けども／＼彼が心を充たすべき家は見えず、徒に途遠く、空しき空をゆきかへりて悶ゆるのみ、夜雨の詩は何れを見ても傷心の色がある、自ら廢人と云ひながら、なほ悶えの情に堪へない處は、彼が近代的自覺の人たるを證するもので、舊式の悟道者流とは大いに性格を異にしてゐる夜雨の藝術に毎もかゞやかしき光輝を持つてゐるのは蓋し此爲である。

閉された扉に手を觸るればうら悲し
なが雨のあとの夜
黄なる葉の落つる
暗き夜の底へぽたりぽたりと落つる
葉の重さ(東明)

細かく顫へる瓦斯の光のやうな新詩人の官能が想はれる、斯うした心持は、新しい人の言ひ得ることで、習俗的の人には分らない味ひだ。

すゞしいかなや西風の
まづ秋の葉を吹けるとき
さびしいかなや秋風の
かのもみぢ葉に來るとき
道を傳ふる婆羅門の
西に東に散るごとく
吹き漂蕩す秋風に
飜り行く木の葉かな(藤村)

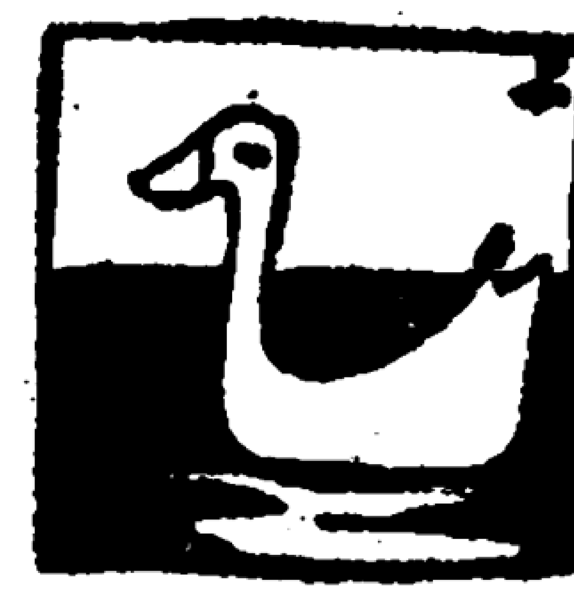
朗讀する詩歌として、此等の作は東洋に生れた吾等の爲に一種のなつかしい情緒をよびおこして來る、一概に古いと云つて忘れることは出來ぬ、古いだけ猶更に尊い價値があるとも思ふ。

晝ごろの
榛の並木の路ゆけば
秋の空に枯葉とび
銀笛の震ひの如く微風の寂し
小鳥の群のなつかしく
こゝろ吸ふ空の青さの
晝ごろの……(浩風)

此頃新しく「歐苑」と云ふ詩集を出した衆井浩風君の秋の詩の一斷篇である、特に獨創力の目に立つ作風ではないが、また水平線下の作風でもない、新進の人に見る晦澁や、獨斷やいやみがなくて、すなほに心持を表はしてゐるのはたのもしい。

何處よりか頻りに落葉飛び來り
色褪し都會は埃と塵に苦しむ(同上)

都會の街に飛び散る落葉は、何となく惱ましさと、不安とを覺えしめる。



和歌

与謝野晶子選

○（天）　松本市　矢口貞子

蓮の葉の水にひたして浸まぬこと戀てふものによりがたきわれ

○（地）　岩手　清子

朝の月北上川に白むときしとゞに濡るゝ月見草かな

○（人）　淺草　若菜

わが櫛の疊に落ちしひゞきにも啼く音をやむる壁のこほろぎ

佳作

○　北海道　平田美也子

名を清き少女と呼ばるこの胸に灰色の雲わだかまれども

○　信濃　べに百合

青色のうす羽の虫よ汝となりて君がほとりの萩に泣かまし

○　山城　木の花

つめたくも啼きて日を經る古壁の小暗きもとの虫なるかわれ

○　大阪市　小泉貞子

つれづれにくろき花など口づけてさびしき我を忘れんとする

○　京都府　竹村愼子

石垣に寂しく咲ける晝顔の花にも積る街の塵かな

○　近江　植村廣子

心みなほのほともなり人こひて病める我が身は生きがたきかな

○　足利　名無草

爐の灰のわが字をかきてある時はもの思ふやととひ給ふ兄

○　千葉縣　山和野その

庭にゐる孔雀のたり尾皆ぬかむ金もてかゝむわが文のため

○　神奈川縣　鈴木梅子

石によりて咲く紫陽花は梅幸の素顔の如く物足らぬかな

○　仙臺市　安井優子

夏の野のうす紅のひるがほよ汝もわれに似てものはかなむや

○　甲府　はま子
秋よしと銀の小すゞを振りて來る虫をめでつゝ人をまつかな

○　神戸市　雪の女
目覺めたる此の淋しさよよその子は永久にまどひて夢を見給へ

○　近江　掬子
たれやらのこしと思へるその刹那大地くづるゝおどろきをする

○　ほづ枝
輕業の空に渡せし綱ふむと我れの二十といづれ危き

○　相模　加藤李花子
をちかたの汽車の笛にも涙おつ別れし人を思ふ初秋

○　淺草　露木あき子
わが痩せし指さへ花の香の如き戀の殘りてときに文かく

○　淡路島　波留子
わがゆかた廣き芭蕉を染めつれば秋風通ふ心地こそすれ

○　大阪　杉山とし
あめつちを美くしと見るわが友は泣くを好みぬ笑ふかはりに

○　府下　早川妙子
たそがれの家の窓より目をあげてつばくらを見る少女子なりし

○　千葉縣　高岡歌子
葉を誘ふ風のゆくへを寂しらに見るもはかなし物思ふ時

○　若葉
朝顔のつるに巻かれて破垣もいみじきものとなりにけるかな

○　東京府　竹村壽尾
松の風千鳥の聲に夢さめて思ひみだるゝ磯少女われ

○　伊豆　西島行野
紫の長き秋の衣着たる我あとを追ふ秋の風かな

○　豐後　吉田散花
路の草足にまつはるはしたなき君を追ひ行く川沿ひにして

○　神戸　岡田登美子
草中に尼君さびし白桔梗それにも似たる頬うつす鏡

○　朝鮮　美子
夜を行けばかすかにもるゝしづが家のきぬたの音の胸にしむかな

○　前橋　みどり
弱ければ運命の手にぬかを伏せて人にかくれて涙するかな

○　佐賀　泥子
四年見ぬ人とあひたる嬉しさをたゞほゝゑみて別れむものか

○　秋田　愛
あはれにも庭の白百合長雨に誇りもすてゝさめ〴〵と泣く

○　宇都宮市　緑の水
夏草のむされし匂ひあさましく家に入りきてくるゝ水無月

○　松井毘韮子

なつかしく青草匂ひ白きばら咲き亂れたる野をば歩める

○　北海道　角館すけ

たふとかる君が言葉にそゝられて今よみがへる戀の御國に

○　南千住　吉田清子

あはれにも破れし三味をひく如きうき戀をして二十になりぬ

○　松江　清き花

君はそれ山びこなりきこひしやといふにまかせておなじこと云ふ

○　西島枝折

みどり地に疋田模樣をそめ出しゝふりそでに似る山の白百合

○　土佐　はぎ子

百人の男の子の矢をばうくるとも髮一すぢもゆるさじわれは

○　本郷區　荷音子

肩揚げを下ろせし衣のふさはしき歳となりしが悲しきものを

○　堺　しら露

蕃人のもの、肉食むさまおもひ桃の赤さのうとましきかな

○　東京　草の門

さよふけて巷に唄ふ下司歌の中にもありぬ悲しきふしは

○　渡島　椋原夕月

思ふこといよく悲しこの少女たわれ男と泣くが悲しき

○　陸前　河骨女

紅の林檎と林檎ふるゝ音身に覺えつゝ妹と居る

○　熊本縣　しらはぎ

世の中を我から捨てし身なれども蟲なく宵は涙もおちぬ

○　宮城　馥子

山本の林の上に美しき色をのこして夕立のさる

○　近江　鈴蘭

自らを戀する人の有りとせば百夜も千夜も寢ねで思はむ

○　和歌山　茨木妙子

つゆほどもかなはぬ戀と知りながら泣くあはれなる少女となりぬ

○　横濱　都美路子

新酒酌む叔父達にうち交りおどけごゝろに歌うたふかな

○　北海道　海嫗

やせにたる手にこと彈くがさびしとも思ひぬるかな時雨のふる夜

○　群馬　谷間の水

うたうたひ野をかへりくる童見てつばさのなきをあやしとはせじ

○　茨城　有本靜江子

思ふ子の昨日今日をばかく日記の中にはさみぬ紅きあふひを

○　城南　小島美雪

年たけて島田をゆはぬ悲しみと花つまざるといづれまさるや

○　渡島　宗原美津子

白百合の香りたゞよふ夕闇に君が來すと思ふあこがれ

○　渡島　雛子

手をそろへたゞしく君をおもひ見ぬさて君こそはいのちとぞ知れ

○　金澤　俊子

いみじかる我春なれば眼に映ることごとのたゞ嬉しきものか

○　靜岡縣　森賀

しみぐと涙はわけど其の奧に樂しさやどる若き日はよし

○　枯尾花

清らなる里の小川の夕ぐれをしたひてきぬる笛吹きながら

○

悲しきを得いはで閉ろき瞳に浮けし三つ下の子の清き涙よ

横濱　若　淵

○

聲たてゝ群りつどふ蚊のごとく世の男の子らのわれに戀する

茨城　浮　舟

○

合歡の木の感ずるごとく男女皆聖書をもちてうつむくはよし

宮城　長谷川紫葉

○

赫と照る夏の日輪初戀の少女が胸といづれが燃ゆる

姫路　美　代　子

○

紅き花名は知らねども藥草と聞きて流れに根あらひてきぬ

大阪　村　田　璃　子

○

夏の月星より歸るいもうとゝ肩を並べて涼む夕ぐれ

岐阜縣　八　千　代　子

○

かの天の少女よきたりて汲みつくせうれひあふるゝ胸の泉を

豐後　北　山　花　月

○

兵士らの軍歌のこゑも遠ざかり入日さびしき松のむら立

川越　糸　柳　子

○

伯母います家より見ゆる萱原に玉をば投ぐる白きむら雨

岡山縣　野　崎　よ　し　の

○

をちかたに沖つ白波ほの見えてこなた靜かに晴れし朝かな

大分縣　古　屋　紫　香

○

初秋の霧ふる山の湯にひたり夢のこゝちに水音をきく

東京　蔦　の　葉

○

秋の山薄紫に黄昏れて落葉さびしき大原の里

牛込　西　村　し　の　ぶ

○

夕顏の花さくもとを露にぬれもの思ふこと癖とはなりぬ

和泉　金　田　文　子

○

若き人のうらむが如く仰ぎ見る其のやせし頰をてらす夕月

宮城縣　齋　藤　き　く　の

○

見つゝ來し昨日の我のはなやかさあはれ今日こそうら淋しけれ

金澤　む　ら　さ　き

○

沙漠ゆく疲れし人のまなざしと眞夏の空の星を思ひぬ

神戸　宮　本　こ　と

○

くれのこる日もいさゝかの顏見せて二人の幸を盜み見するらし

京都　要　司　村　福　子

○

箏の音のはたとやみにし高どのに靑すだれまく美くしき人

横濱　若　葉

○

わかき日の戀にも似たり君が手の葉まきはもえて灰となりゆく

東京　夏　子

○

遠く行く人の別れを留めかねて秋野の花に立ちて歎きぬ

神戸市　三　木　白　菊

○

天地もわれ等の戀を守るとて打默すらん安かれよ君

武藏　し　ら　は　矢

○

あぢさゐの殘りて咲けるらち庭の小暗き隅にこほろぎの鳴く

美作　美　津　田

○

此の頃は浜のひまの故里のつれなかりける人もなつかし

福岡　田　中　由　多　賀

○

蟲のこゑ小き鈴を振る野邊のつゆにやどかる秋の月影

牛込　環　の　花

○

此の六とせ旅にて聞けば古郷を思ひ出でつゝ悲しき砧

麴町　牧　野　伴　女

○　滋賀　植村春子

はし近く蚊やりをたきて里人は何語るらん夜のふくるまで

○　豊後　小屋落子

親の庭しら露おける朝顔の花をめぐれば涼風ぞ吹く

○　大分縣　あどはぎ

秋風のうら吹きかへす芭蕉葉に涼しき月の上る夕ぐれ

○　德島縣　蔦紅

まだし居るこのつかのまもむな苦し君とわかるゝ心地迫りて

○　淡路　平田宮子

人妻の今日さへ君を忘れかねくちづけぞする君が御文に

○　三河　鎚谷とも江

わが父は早く世に無したらちねの髪も漸く白み行くかな

○　東京　ゆふ影

蘆生ふる川のあなたを見さくれば月や出づらん空のあかみぬ

○　本郷　德永都子

夢ぬけて迷へるやうに蝶一つ青葉の中をゆきかへりする

○　富士雄

星のかずよめども盡きずいたづらに時のたてどもこぬ車かな

○　熊本市　河野千茂子

日盛りを馬車より行けばうつむきて荒れたる上に晝顔の咲く

○　兵　女史

伯母とわれ言葉すくなく物縫へる淋しき夜半の秋の雨かな

○　甲府　煙子

宵やみにうてんの蝶のまどへるはわがあはれなる心の如し

○　月見草

放ちなばまたとらはれんことねがふ獄のひとわれを知るかな

○　近江　堤野の花

わが好む紫の花露草と名づけし人はたれにかあらむ

○　大阪　田野靜子

連彈の箏の調べの音高しわだつみ色の君が水莊

○　横濱　ロなし女

今もなほ少女心の失せやらず肩揚なきがものたらぬかな

○　尾張　佐分華影

美くしき戀も破れぬまざまざと穢く生きん明日の見えつゝ

○　島根縣　篠田豊子

何故かそれとわかねど只胸の強くとゞろき涙ながるゝ

○　名古屋　加藤花子

秋の宵多〻の人にかしづかれ物語など讀ませてきけど

○　京都　芳子

雨上り葉末の露の美くしく日に輝きて秋風ぞ吹く

○　山形縣　智惠子

君捨てし人の心の見まほしと泣く友の居ていとぞかなしき

○　群馬縣　高橋夕星

友といふ名の戀人と變りゆくこの頃匂ふ木犀の花

○　相模　中村貞子

おん皿に繪の具ときつゝ笑み給ふ罪なき君を思ひ初めてし

○　伯耆　新田文子

女とは玻瓈の鏡にかげうつし微笑みてあるものと思ひぬ

○　大阪　田野しか子

藤原咲ける御寺の庭のもみぢ葉は丹ぬりの門にまさりていみじ

○　横濱　かげろふ

さとりつれ君さらばわれ念力の一矢射てまし傷手追ふとも

○　東京　藤堂楓花

悲しさをひたに包みし今日もまた華やかに笑む身ぞおろかなれ

○　長岡市　秋月すゞ子

なむあみだはたなむあみだあなたふとあくびする間も汗ぬぐふ間も

○　信濃　世良田優子

寂しさは若き愁にそふものとこの頃憎くしもなく思ふ

○　神奈川縣　しうん子

姉妹初秋くれば野にいでて同じ花をば朝毎につむ

○　會津　仙子

相ひ逢はでいのちはてむとちぎりける心はたえずかよはざらめや

○　新潟縣　田巻てい子

いさゝかの疲れ覺えて行水のたたちに見たるうたたねのゆめ

○　赤坂　高力かざし

此の入江めでてさまよふはての日と思へる時にのぼる夕月

○　群馬　秋草子

朝風に袂ふかせて戀人と淡き月見る初秋の里

○　大阪　うれひの人

世に在さぬ今を忘れて君が歌口ずさみつるあとのさびしさ

○　大阪　すみ子

文きたる君と相あふ心地してそゞろ心に封じ目をとく

○　神戸市　港の女

我が姿我と淋しみ群衆に交じりて行きぬ秋のまつり日

○　岐阜縣　日下部咲子

かへり行く君の姿のなほ見えてすゝきの上に夕月いでぬ

○　美作　青北まさ女

白粉の匂ひちるなる鏡臺になでしこの花おきてかへりし

○　北海道　蒲原てる子

われ少女十九の夏の夕より忘れぬことの多くなりぬる

○　松の葉

初秋の石間の水をむすぶ時かれさく世さへ清くおもひぬ

○　大阪　みどり葉

夏の月豔なる人が涙して怨じてあるに似ると誰云ふ

○　茨城　田村波津子

おろかなるわれは机に寄りかゝり君がみ名など手のひらに書く

○　下野　高村維子

蟋蟀のかなしき聲も身に泌みていとゞ淋しき初秋に入る

○　和歌山縣　都田操

水色の衣ふさへる春の野の花つみ人となる七日ほど

○　長崎市　村尾靜子

かたみにと君が給へる夏花を我そめし衣に寒き風吹く

○　宇都宮市　松井綠子

このごろの音も三味線引くはたれアカシアの白き丘にある家

○　備中　小見山春子

このころは只何となく狂ほしく孔雀なんどもささまほしけれ

○　小樽　紅子

我えにしこの美しき紅の絹絲などにむすべるものか

○　野尻ちどり

戀をただ夢みてありし日を思ひ涙するなり二十二の秋

○　岡山市　柿園花子
ましろなる行水使ふ女あり白粉草のしげみのおくに

○　本郷　井上さだ子
夕風に庭の秋草さとゆれてこぼるゝ露に匂ふ三日月

○　白花
朝つゆをおける桔梗をかざしけり少女ばかりのそゞろあるきに

○　姫路　磯菜
何となく唯嬉しかり夕ぐれに君とながめしかの一つ星

○　下谷　島貞子
山かげの露に濡れる草の道しろがねの笛ふきてわれ行く

○　常陸　木村那賀子
ともすれば心君より遠のきてよしなき方に走る日のある

○　長崎市　永井圭子
秋の雨無言の中にすゝりなく君のみ涙はた我が涙

○　四谷　金田代志子
斯く清くくしけづりたる我が髪にまつはるは憂し人の世の風

○　知多　みどりば
少女子の髪を亂して走り行くさまにも似たり丘の秋風

○　尾張　加藤矢枝姑
箱根山古木に蟬の鳴くひるは月の夜にもましてさびしき

○　三重縣　駒越くに子
衰へしわが魂にふれて鳴るこの新秋の風の音かな

○　福島市　木下春
大雨の後の如くに心地よく別れんとしも思へる如し

○　京都　名無し草
父まさば母在さばとあぢきなく世は思へども二十になりぬ

○　神田　石田よし子
新らしき木の香漂ふゆぶねよりわがくろ髪のいづるさま見よ

○　渡島　田山きよ子
眼覺むればあとかたもなき美くしき夢の花にも戀は似るべし

○　出雲　人の妻
白刃をば與ふるごとき言葉をば我にのこしてのがれにし君

○　信濃　三村りゑ子
夏の夜の山の端走る稲妻か若き女の華めく時は

○　茨城縣　岡田つゆ子
こほろぎのなく音まじりて秋の夜はわが三味の音あぢきなきかな

○　埼玉　鈴木美津子
歌をよむ娘ふたりがめしひたる母と住む家に紫陽花の咲く

○　岡山市　桃のむら女
君を見る眼はよろこびぬ君を知る心は泣きぬいかがすべけむ

○　和歌山縣　都田操
野はみどり空は紫はてしなき戀の夢見る春の三月

○　函館　田本静子
針の手もにぶり勝ちなるこの日頃身にしむ歌をうたふ童ら

○　函館　田本愛子
此日ごろ何とは知らねよき夢に引き入れらるゝ心ちこそすれ

○　山口縣　椰良美那子
心よきめまひを稍に身に覺ゆいとみやびたる君前に居て

○　小萩子
はなやかに笑む人ながらさびしさのながるゝむねを誰かしらまし

散文（其二）

編輯局選

○十年一昔

南千住　吉田清子

昔と言ふ言葉は、私に取つては何となく床しくも懐しくも思はれる、然うして七ツ位から十二三の時代を追想させる、自分は大昔の人でないが又現代の變化せる思想にもふれない、昔の人、殊にかたい昔の人の姿は、最も私の好む處、芝居も舊劇を好むと言つて、年に三度位な物、お祖母樣此んな長い物どこへさすのですかつて私は伺つた、御祖母樣の母樣が御殿に御奉仕の時分、片はづしとやらに結つて頭にさしたとやら、私は其の祖母樣の御姿を想像する、御顔は夢にも知らないが、何となく政岡の樣な姿ではなかつたかと思ふ。私も七ツ時分には、赤い切れ掛けてよくおたばこ盆に結つた、あぶ蜂とんぼきりぎりすの親方だの、おたぼこ盆お茶持つて來いだのと兄さんやお友達に言はれて泣いた事もあつた、其れがびん付けでかためた唐人髷と變り、あごの下までふさのたれるつまみ細工のくす玉のかんざしさして非常に嬉しかつた、友の三人と寄ると頭に手を上げた物だ、十八の春には重き初島田、蝶々髷やおたばこ盆時代はふり返つて見る樣になつた。十年の自分はあまりに變化した、庭の石燈籠や杉の若葉にしと〳〵と降りそゝぐ小雨を何思ふともなくうつとり眺めて居ると、沈み切つた灰色の中から朝顔日記の深雪の目くら姿や妹脊山のお三輪が變るがはる目の先きに浮んで來る、優しい感情の強い昔の女性の心が、よくあらはれて居る、朝顔は義太夫でも聞いた、こがるゝ夫のあるぞとも知らぬ目くらのさぐり手に、戀故心筑紫箏と消えも入りさうに語る聲、お話し申すも恥しながら、元私は中國生れと膝の上に優しう白き手を置いては、つぎつぎだらけの着物にやゝ亂れし島田、私は其の島田美しかつた、哀れだつた歌舞伎の場内はしんみりと涙をすゝる音のみやかましう、私は思はずほろりとした、明くる日下品ならぬやう思切り根を高く結つて赤い切れしぼりを根元から上にふつさりと掛けた、すゝき咲く野原のやうに淋しかつた束髮よりも何ぼ嬉しかつたらう、赤い切れかけるも娘時代と言はれた人の結つて居る束髮見ると妙に淋しく物足りない、そして自分の頭にそつと手をのせて、なめらかな髷に手がふれると、言ひ樣もなく嬉しい、自らを若い娘、華やかな時代だと思はせる自分より三ツ上の千代さんは、意氣な銀杏返しに結つて居る、私など貴女の年にはもう人妻であつてよ、などゝ悲しさうな事おつしやる、清ちやんは若いのね、苦勞がないからつて言ふ、私は幸多き女、他人に我身のぐちや苦勞は言ひ度くない、つゝめるだけは包んで一生を送り度いと願ふ。

斯う云ふタイプの婦人が、近頃多くなつたやうに思ふ、あまりハイカラがつた反動であらうが、此君のやうに眞面目な娘氣質を持つてゐる人は、どつちへこけても大丈夫だらう（評者）

○夏ぐさ

ふさ子

Come back came back

あゝもう一度歸つて欲しい、あの幼な時代が、

丈より高い紫蘇のかげにかくれて鬼ごとをして遊んだ夏の日、じいじいと蟬が啼いて、小川の流は涼しかつた、白粉の花を椽先に並べて黒い實をつぶして白い粉を、頰に塗つては笑はれもしたが、あゝあのふるさと今はどんなに……

なぜ歸らぬと友は云ふ、講習の始まる前一度歸つたらよからうと情厚い師ものたまふたに、何故私は歸らぬのか、問ふてくれるな自らも情ない、悲しい傷ましいとは知るけれど……

歸れとや何地へかへるふるさとはおろちすむ穴運命の坑

何の毒蛇が故鄕にすまうぞ、これはうそ僞はりの言葉、がかうでも云つておかなければ世間體もあるものを。どうかして母の笑がほをみやうと日盛りのあつさもいとはず胡瓜もいだり紫蘇の葉つんだりちひさな心をはたらかした、あの時分がなつかしいこひしい、も一度なつてみたいとも思ふ、時の流よ逆行してあの時分のページをこゝに繰り廢げてはくれまいか！

さびしう御座います。

矢張り——あゝ矢張ね、朋も女でございますもの、はじめて味はう一人住みの淋しさ、漸う夕餉の後じまひをへて白い着物を長く着て、椽ばた近う庭をみれば鳳仙花がほろ〳〵と靜かに、しづかに散てうらさびしい、夢からさめた月見草も昔なつかしい色見せて——御地の空が偲ばれます。

さびしい、明はさびしい、好きな旅にも出られないで毎日かうして六十日を、お留守番して過すのかと空を仰げば涙が湧く、君つれなしとは申しませぬ、たゞ胸の小琴のこの絃の破れるまでかきならして見たく……はら〳〵とそよぐ後れ毛をかきあげるも物憂く、ちつと柱に身をもたせて

君と別れて花きよき……

と時ならぬ歌口ずさむあはれさ、新らしい詩も存じませぬ、かうしてこゝに一生を葬られて……と八疊の間のまん中のシーツの上に倒れた時はつく〴〵思ひもいたします。夜半のかなしさ、二時すぐるころうたゝねの夢ふとさめて心の臓まで食ひ入るやうな、白百合の匂もいや氣がさし、電燈のあかるさも氣味惡くなつて手元の雜誌の表紙の繪まで、物凄いやうにみえますもの、疑心暗鬼を生ずとか日に夜にうらみ、ねたみの湧き返る胸を、しひてしづめて表面丈は聖人らしくみせやうとする、それをせねばならぬのだと○○○は敎へるけれども……

潔な、相模の海の反響を聞かしてやつては下さいませんか、塵の街の片隅に新らしい空氣にふれることも出來ず、たえず不安のむねをいだき物におびへて過して居る、この朋をあはれんでは下さいませんか。

あゝこひし相模の海の藻のにほひ波のしぶきと若きあまなど

去年の春の湘南の波の色をば思ひ浮べて……

內容の充實はあるやうだけれど、所謂精彩を缺く文章だ、何か一つのものを捉へてごらんなさい(ＳＭ)

溢るゝ力を持ち乍ら、君の言の何ぞ寂しきや。神は明らかなる瞳と盡きざるエネルギーと、美しき心とを、すべての少女に賜へり。何爲れぞ、卑濕の凹地に佇立して逡巡して進まざるや(覇王樹)

○燒骨

備中　小見山春子

どんな物か此麼ものかと樣々に空想した予想は外れて、片手にも安々と提げられ得る小さい甕に少からず驚いたが奉書の上にカラカラと微かに音を立てゝ移された未だ赧みのある骨、瞻々これが。未幼ない頃汐の干た海邊で貝を拾うて遊んだ、藻を除け石を穿つて珍らしい貝殼を拾出しては友に誇つた、干からびた藻が高くなつてる中へ手を入れて眞白い眞白い骨の樣な貝殼を握つた事があつたが夫計は拾はなかつた、人の骨に覺えもない敎はりもしない自分が眞白い下顎骨の樣な貝殼がどうしてか人の骨見たいに思へて、妙に深う印象されて居た、今目の前で貝殼に違はない伯父樣の燒骨を見て、弱い自分は何とも云へず氣が遠くなつた、肉附の豐だつたお姿や眞砂の中の白い貝殼がありあり見えて。こらへて居た涙は止度もなく溢れた。せめて結構な御臨終を看護の仕甲斐と諦めて。どうせ一度は斯樣なお別れのある事は覺悟して居ましたあゝ皆なこれでと竹と木のお箸を下さつた伯母樣のいとほしいお顏。思ひ切つて挾まうとしても涙の目で目指すのがいつも外れた、兄樣は頭蓋骨だ腰椎だ大腿骨だとかお齒が何枚足らない智齒の充塡一番大きい金が二つ無くなつた、小さいのは此處にも此處にもと集めて、隨分齒にはお金を掛けておらしつたなど平氣想に仰つたけれど、夫んな事耳にも掛けず妾は只謹んで高く積上つてる骨をそうつとながめてカラ〳〵と音のせない樣に心を使つた、其內小兄樣は青い變な今まで一寸も見なかつた齒位の物を何だらうと見て被居る氣の早い伯母樣は夫か痘石じやないかしらきつとさう

だよと仰る、一座は皆其方へ目を取られて仕舞つたけれど誰とて口を開く者もなく只見る計、香港の兄様が居らしつたら直ぐにも分るだらうけれど大兄様も是計りはと云ふ風に同じく口を閉て居らす宜石だつた處で仕方ないけど兎に角東京へ歸つた上で調べて見ようと綿に包んでお仕舞なさるゝ若し宜石だつたら其儘にはしない伯父樣のお命取りなんだものどんなにしたつて慊らないと妾に仰る日頃の伯母樣にしては可笑敷けれど、そんなお心持もするだらうと（本當）にと微かに答へた判然しないのを大變物足りなく、手を洗つて元の座に引返した時伯母樣は奇麗な箱から綿に包んだ俗に咽喉佛樣と云ふ頸椎を見せて下さつた、同じ樣な佛樣が三體居らすこれが罪人ではないと聞いたが奇妙な物だと思つて見た、あゝ火葬の方が心持が良いとは仰るけれど柩を閉ずる釘の音を聞いてさへ起つても座つても居られないものを火を付けて灰になつた部分はおん坊の穢ない草履に踏まれるのだものを醜も火葬になんか決してすべきものでないと思つた——又雨になるらしい。

おれは今寢てゐるせいか至極この文が癪にさはる。尤人と違つて死んだつて泣いてくれるやうな女もなし、不二見ゆる大野のはてに、ね棺たらうと瓶だらうと勝手のいゝものに入れて埋めて貰ふからいゝ（雨）



田舎の若き母　岩手　黃川田加代

○祖母

大和　河崎八重

こわれた塀にそうた川佛にかまびすしい蟬の聲がパッタリ止んで川むかひの家々から木魚や鐘の音が淋しう聞こえてくる美しい記憶を喚び起す盂蘭盆の十三日どこかに悲しみを持つた月が冷えきつた色をして上りました私の心を幼い昔に返らす樣に。三寸角形地にひく水色絽の振袖背おふたやうな、緋緞子の立て矢の字ともすれば前へのめりさうな稚子輪、羽織袴

の嚴めしい父樣や新伯父さんの後から祖母に手をひかれて生蓮寺の高い石段を「一つ二つ三つ」と祖母の低い太い聲が妙におぼつかない私の足をはげましました。

「美い着物汚れるよつて私が持つて上げよう」と云ふのを無理にせがんで持つて上つた手向けの水。小さい水面に月の光のゆれるのをチャプチャプとわざとゆすぶつてよく祖母にしかられた、鈴のついた木履を投出してしかられた腹いせに、石段に座りこんで動かなかつた時、御影石のいやに生溫かつたことや、祖母の困つた顏、はては恐わかつた父の顏など小さい時村の夏祭で買つた廻燈籠の人形の浮かんでくるやうに、明らかに浮かんでまゐります。其れでも水桶を持つのが何より嬉しうございました。何々信士たとか信女たとか一門並んだ石碑の戒名を祖母は皆知つてゐた。天誅黨で死んだ伯父や自害した從姉の話、十六歲の年祖母と二人で紀州樣へ奉公した時の夢形から春秋のお遊びごとまで幾度も繰返して話して呉れた時、いつでも夢みるやうな晴れやかな顏をしてゐらしつた。歸りには必ず半七やお園の墓へまゐるのが例であつた。物心地ついてからかうした祖母の話を聞く度に元祿時代や平安朝時代に返へつて欲しうございました其頃の私の紅のかつたメリンスの長い袂にはいつも浮世繪の本がはひつて居りました。稚子輪がふくやかなルイザに結ばれて八寸五分の帶巾さへ廣く見えない十年後の今宵赤いリボンでお下髮にした、手向の水を持つ小さい姪はあれど水面にゆれる月は照つてゐるけれど—嚴格な父や伯父、小さい胸に永久忘れられない美しい印象を與へて下すつた祖母もやつぱり昔の人になつてしまひました。想ひの綱を其れから其れへと走らする時下の道で墓詣する人々の聲がする、私は、はね返された樣に離座敷へ走つた八疊　室はシーンとして大きな九谿にあらひ浴衣一枚で嬰坊とすや〱眠つて居るのが月あかりでよく見える。折角墓詣りから歸つて來て大切の十三日に什度どころか暢氣さうに眠つて居るのだもの、元來があわてもの丶私悠々と構へて居るのが腹立つて腹立つて泣きたくなる。一人暗いやみに消えて行く影を眺めました時、孤獨の寂しさがひし〱と胸に迫つて、立つても座つても居られない程いら〱した氣持が致します。

誰が供養か知らないけれど餓鬼を祀れる燈明が意味ありげに、またゝいてゐる、泣かうと思つても泣かれない程胸が痛い私は十有餘年の今日までこんな想をしたのは初めてだ。年の故なのか知ら?

墓參にむせまゐりといふルビがついてゐる、醉茗さん、君のお母さんの國ではさういふのですか（S.S.S.）

むせまゐりとは初めて聞いた語だが、或る一地方では然ういふかもしれぬが、鬼に角天下には通用しない語だ（醉茗）

又曰く、此文、稚氣はあるが、取るべきところもある、大和にはあんまり人がゐないやうだから、しつかりおやりなさい。

○七月日記

清國屋根の草

三日晴

げに思ふよりは生むがやすしとやら板ばり物といふものもそんなにむづかしいものでもなく、好きな海老茶地のはでな銘仙は、新らしきにも增して立派に張られたので、一人じまんをして笑はれた。今日は必と旦那樣も私の大元氣をお心地良くおぼしたに違ひない、思ふと一しほ嬉しい午後も折角つゞけやうと樂しんでた矢先へ、〇〇夫人來られ、例により長話、けれど私は快活に快活にお相手した、が後ではさんざこぼして氣をはらした。

五日暑さ堪へ難し

早朝洗濯物して御出勤後引續きのりつけ、初日が一反二日目が二反今日が三反、然し今日ばかりは張り物に對する興味もうすらいで、實にえらかつた、一つには急に增した暑さのためもあらうが、イエ此業に馴れたかげんも手傳つてるわ、正午過どうやらと案じてた矢先へ米姉樣から手紙來る、例の衣服一件、姉さんをせがんで〱それには祖母樣もたしあくまでも作つてもらひとりこめよとの眞情あふるゝ意、けれど〱私は大恩深いおばあさんばかりは、七十四だもの、いくら大膽にかまへてもせがむ事は得しない、姉さんへは少々せがんでもかまはないけれど、いくら子供が多いたつて、絽の帶や上布位なんだらう、よし私はうでによりをかけてせがんでみやう、松井の正一さんから寫眞が來た、郵便局員ら

しいわ判任官の正服つけて……寫眞も何もないので誰だらうといぶかつたも道理、でも小學終へたばかりで十九の今日此成功はうれしかつた、父一人子一人の中が美しう忍ばれた。四時迄男をふるひ張物したが、いよ／＼つかれ切つて食事も出來かねる有樣、旦那樣の御情けで、雪を一コップ山ともられた、白雪見たばかりでもすい／＼したが、其顔は何かと云はれたも尤、後にそと腹部へ手をあてゝ見たらつめたかつた、あらつ……と何やら氣にもかゝるやうで又しても汗が出だした、もう／＼氷なんかしば／＼は頂かないわ、夕刻より暑氣大につのり九十三度にも上り、遂にバンドへと出かけた、どのベンチにもはでな浴衣の人ばかり、瑠水夥しき江上を出船の火の流れうら／＼しうさすがに悪暑も忘られた。

七日晴夕立來る

ボーイのご飯たく間にのりつけ二枚ず、御出勤後は例の板張り、裏二枚とさらし二枚分にて置く、午後天井に電氣うちは設く、おゝ暑さ知らずよ、眞夏でもきつとお仕事が出來るだらうと一しほ嬉しく／＼しばら／＼ジッと夢見心地で居た、と文壇と婦人の友來る、兩手に花どちらを先に云はずもがな文壇だ、處がまあー此十日發行の新文章目次中へ楊子江畔の新婚生活と題して名こそなけれ出てるぢやないか、あらまあと一人驚發して見つめた、あんなもの沒と思ひあきらめてたに……でも此記事はあれでも私以外の人かも知れないと思ふと不安の念がむら／＼と、わいて心細かつた、で旦那樣には見せなかつた、冷しそうめんで夕食してたら大夕立來り、羽織ほしやまでにさむく成つて大笑ひ、それでも私には珍らしいので電氣うちわは其まゝにしておいて、小供の如く打仰ぎ、眺めて馬鹿だなあと笑はれた、夜旦那樣は三好館へ？一人文壇にふける、と十二時酔つておかへり、なにもやきもちしたわけではないけれども、持前の大目玉でごあいきょうのつもりで、グッとねめつけたら、こそ／＼と具合あしさうに次の間に……私はおかしくも氣の毒でもあつた。

腕によりをかけて絽の羽織と上布とをねだられる人が氣の毒だ

（ＡＢＣ）

○涙と心

大分　べにのはな

強烈な日光が青葉にとけて、痛切な私のハアトにしみてんだ時、夏やせした白蝶は、紅いほうづきの上をまひました。

兄樣、やるせない心の私は、去年の今頃、詩の兄樣として崇拜した彼の日「詩人の多くは悲しみ歎く」といふことをしみ／＼意識しました。その時ゝ貴兄はよく泣いてらつしやいました。けれど私は其の御涙を拭ふてさし上げる道を知りませんでした。唯「まねをして泣く」にすぎませんでした。其の時の悲しみは人の情の如何なるものかを知らずに泣いたのでした。若い男女の一度味ふてふ戀！夏の夕やけ雲の如くもえてるのもありませう。刈つてもなんでものびる夏草に似たものもありませう。兄樣、私はその戀を語られた事があります。けれどそれは申しますまい……。

兄樣、どうぞ男らしい男でゐて下さいまし。而して涙をすてゝたのしい嬉しい歡樂の大通りを元氣よく歩いて下さいましね。

昨日部屋の窓から茫然と夏のものみなをみてゐたら、隣りの長樣を足音高う歩き乍ら「……墨すり流し、主にあげたいこの手紙　ご存じよりとはかいたれど、まゝになるなら妻よりと一さしてね」高々う調子揃へて五六歳の男の子が歌つてゐました。私彼の年位な時も矢張りこんな俗歌を唄ひましたでせうか。じつと目をとぢて考へてゐますと、「出來ません」といふ叫び聲が、薄い浴衣の縫目をとほして響きました。

人がさあをどりませう、さあうたひませうと、手を取つて、口をあけてみせましても、風に青葉の靡く樣に「それでは……」といひ得る女にはなれませぬ。其癖、私はいつもあらゆる藝術にことごとく趣味をもちたいと願つて居ります。矛盾！「汝の心はいつも矛盾してゐる」と實兄は申しました。さうでせうか。意味も何も解らずに話しをするのでせうか。書くのでせうか。頭が重く、廣い海原に漂泊してゐる小舟の樣に、目をあけて寢ては居られませぬ。常に何かを求めようと、あふむけにねたまゝ天井のふし穴まで、みてしまひました。障子の棧も數へつくしました

淋にもまれて死なんとする私は、病む時が多くございますもの……。

兄樣、貴兄は「十六ははなやかな時だ、嬉しい年だ、お前の幼い時數いて遊んだ花ござの模樣のまゝに、若やいで暮すが好いよ……」と仰有いましたね。でも――しかしそれは兄樣、毒蟲にさゝれた所を暇なしにかくやうなもので、蒼ざめた唇の女を見ても涙する少女には、どうしても――淡紅のやはぎぬで押へる瞼の心地よさを忘れて、若い人のみと生きて行く事はできませぬ。私には母があります。「みぢめな母と共に泣いて樂む」これより他に道はありませぬ。お許し下さいまし。み言葉に反きます。丈長かりし母の黑髮は、今はもう短く切られてあります。これを私がすいてさし上げるので御座います。兄樣、紅の花子は僅か一年の間に斯う變りました。佗びしうございますのよ……。（八月十日）

あなたも斯んな理屈を言つてはいけません、理解力の確かなのは結構ですけれど、あなたなどは其理解力を根柢として、自然の萬象を觀察する人です、小さな狹い理性を表現しようとするのはいけません（SM）

○若葉みち

京都　河骨

夢の樣に私は丈高き友と笑聲深き小がらな友との間に挾まつて歩いた菜の花の落ちつくした青い野面には心地よい風が絕えず吹く。路は加茂の堤にかゝつた。何といふ自然の美しさ。洛東洛外を限るべく昔築かれたといふ向岸の堤の藪は青く風にざわめき、河原には美しい水、透つた春の水がところ〴〵にある繁みを縫つて流れてゐる、水は少いけれどゆつたりと、心ゆくさまに。あの白銀のやうな水の中には小さい小さい、若鮎も居るであらう、彼の強い香氣を水中に放ちながら。汀に美しい花は咲き、散つて居るのであらうけれど叢にはたゞ野茨の花が風に白う見えるだけ。比叡の嶺は昔ながらの姿して東に立つ。朝に夕に仰ぎみて懷かしいこの山の色に命までも打ち込みたく思つてゐる私は永久に汝の讚美者よ。

憧がれの目をあげてふと丈高き友を見上げた時わたしは眉を曇らせた常から蒼白き友の顏はなほ白く、此君の細く鋭き眼は何物にか魅せられたやうに鋭く閃めき、肩の邊りほつそりと、すらりとした容姿が今日はなほ淋しく見えましたもの。「どう」。縋るやうにして聞くと目が醒めた樣に川の面を漂ふ輕き霧を眺めながら莞爾と笑つた。其頰に美しい血の色が虹の樣に浮ぶ。いつもの淋しい冷かな微笑に比べてこの笑の温かさ。飽くまで冷靜な此の君。仄にきけば胸を病み給ふとか。おいたはしい。

今、私たちは此堤を柳煙ぶる加茂の里へ、畫師を訪ふのです。丈低き友は燃ゆる如き眸光を此方に向けた、愛くるしい面に笑靨をは深く、「あの―」今にもと見てゐると長い睫毛を顫はせたきりで默つてしまふ。一且伏目になつたが伴なる二人をちらと見て、やゝ不滿らしきおもゝちに例の緣の唇を一寸かむ。白い埃を立てゝ先に歩いて行く。けど今、その大きな眼の輝に、怒つてゐないことは私にも知れる。

路の兩側に充ち溢れた綠の色、心地よい葉ずれの響。其中を三人は默しつゝ行く。共に歩みながら多くを語らぬ三人の心。我が心も平和ではなかつた、しかし、唯美しき世界に辿るやうな歡喜にわが胸は充ちて居た。そして彼の送別會の席上で初めは沈痛に終は情に激してゐた師の御辭を、み瞳を、うつすりとくりかへし、心に浮べて多くの友は涙を以ーお送り申したに、胸は悲しさに塞りながら涙だに出なかつた私の心の不思議さを思つてゐた。

師の涙職の日を聞いていよ〳〵だと彼の梧桐の下で告げた夕べ、高く痩せたる友は私の手に縋つて空を仰いで泣いた。笑くぼ深き君の眼を泣腫らしたのをも見たが、感情強き君なれば、矜らひを命なる君なればと深くも氣に止めず、私自身は冷靜であつた。其夜消燈の後もなほ座した儘の私の胸に何故か暗愁は雲の如く湧き出でた。

今、晩春の若葉路を新らしい葉の香を嗅ぎながら步み行く三人は、各々の胸に美しい思ひを懷いて默しつゝ辿るのではなからうかとふと思ふ步むにつれて綠の木立は暮れ行く春の香を、心地よく、我熱したる頰のあたりに吹きかけて我等を迎へる。いつまでもかうして辿つてゐたい。默しつゝ永久に辿るのであつたなら三人の胸の破れる時は來まいに。三人の夢よ靜かなれ、久しへにさめずあれ。神よ、我等が胸を守りませ。私は輝く瞳をあげて綠の天地の中に鼓動する胸の上に靜かに手を組み

合せた。

行く手遙かなる栄橋は霞んで半は見えず、輕く白さ川霧は我空想を乗せて夢のやうにさまよふ。

「雲が」。先なる友が持ちながら指す木瓜の紅の彼方、山は半腹から微かに春の雲を吐いてゐる。

京都からは相當に多くの投書が來るのであるが、何うも男くさくて困つてゐる、これだけは確に女らしい、女らしいがまた餘り女らしくて、もつとてきぱきと書いて欲しいやうに思ふ、それから文中に月見草が咲いてゐることを書いてあつたが、如何に京都でも、春霞の立つ頃に月見草の花は咲くまいそれとも咲くのかしらん（ＳＭ）

○梅雨日記

山形　豐子

朝から降つてる雨を聞きながら昨夕の事を繰り返して思つた、妾はちつとも悔いては居ない、たゞ夢を慕ふやうに思ふのだ、

午前にあの手紙を讀んで一時も早く弟の方向を定めてやつてと大姉様の處に行つたのだ、

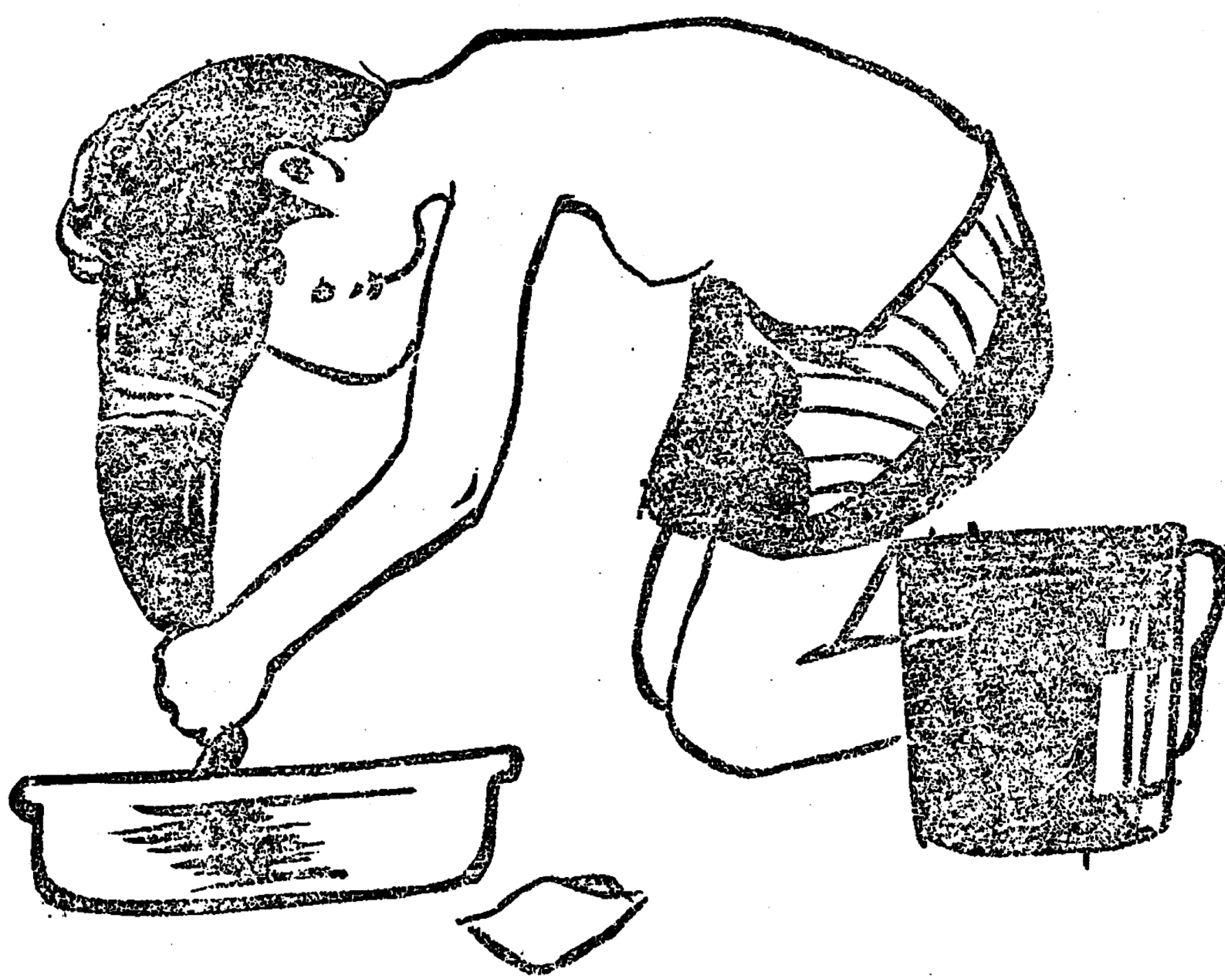
淋しいところの梅の木によつてしやがんで言ひ出した、大姉様は立つてゐらしつた「皆のよいといふことなら決して悪いなんて言はないからどうでも皆のよいやうに」冷淡だ、當にもならぬ親族の人達を姉様は御承知の筈だ、皆のよいやうに、何といふ無責任な語だらうい〻、い〻から、相談にのつて頂かないから、涙があふれて後から後から頬を流れる、うずくらがりを幸に拭きもしない、泣いてるとさとられたくなかつた、何か反抗したやうな皮肉を言ひたかつたけれど聲が出なかつた、たゞいつまでも下を見つめて其ま〻に、姉さんも。

何といつて歸らう、默つて行かうか、驚かして行きたい何とか何とかふいと立つてお邪魔しました、一禮するや背を見せた「……」もれたやうだけれど分らなかつた、門の橋を下りると後で笑ふ聲がしたやうでもあつた

田甫道も誰とも行き逢はないでよかつた、たそがれて人の顔も見わかぬ程ではあつたけれど

人に頼らうとするのが愚なのだ、嫁いだ人に母に代つてと強ゆるは無理なのだらう、姉様にも、姑も夫も子供もあるんだもの、愚だつた、愚だつた。それにしても昨夕の姉様はあんまりだ

何でもい〻妾は妾だけの手段をつくす、依頼心を起したんだ、妾は誇を忘れたのだつた、自分自身より外



洗湯にて　青森縣　山田黒百合

信ずべきものはなかつたのだ。(二十五日)

夜、弟の將來についての意見を父上へ認めた、書いてゐる間も姉樣の冷靜なお顏が目について、妾は妾だけの手段をつくすから、いゝから、と叫ぶ心があつた(二十六日)

○

しんみりと雨が降る、

沸えたつやうにいら〳〵する胸を押へて、講堂の柱によつた、花壇がすぐ見える、ひなげしが一ひら〳〵靜かに散る、

頭の中は糸がこんがらかつたやうにぐる〳〵する、其間々に面影がある、やせた父の顏、嘲笑の影のある冷靜な姉の顏、俯向になつて一方を見つめてゐる弟の顏(二十七日)

○

昨日よりも雨がつよい、壁も柱もじめ〳〵する、大梅雨が來たと皆がいふ、この雨がいつまでも〳〵續いたら。二年も三年も――髮を亂して猛雨の中を走り去る氣狂ひの女の姿が見える、幻よ。

警察の前でみのかさを着た女勞働者の一群が立ちよどんで居たのを見た、みなずりへつた下駄をはいてゐた稼ぎ先を何處にしようと相談してゐるのだらう、五十餘のが一人あとは黑い顏のさかりの女ばかりだ、一人はかゞんで下駄の緒に小石を打ちこんでゐた。

自分は是等の女よりどの位離れてゐる、そうしてどつちが幸福だらうと思つてふりかへつて見た、彼等より弱くはなりたくない、(二十八日)

○

眞向ふの地方裁判所が取りこぼれたのがよく見える枝垂柳と梅の大木や丸くかりこんだ庭木など見られる、正面にあつた牡丹はない、すゝけた材木が一隅にうづ高く積まれてある。

歸る頃になつたら五人の男が柳の幹に繩をつけて根こそぎにしやうとしてゐた、力こめてゆる毎に長くたれた枝が女の髮のやうにゆら〳〵となびいて、いや〳〵と身もだえするやうだ、あかじらけた跡の土に雨ばかり降つてゐる。

たゞさへ寂しいのに、古い大きい建物がなくなつて、雨ばかり降つて(三十一日)

○

文壇が來た悲しみも、苦しみも、はた、樂しみも、湧いて來て、寄せてきて、あゝ都會の空氣に育つたなら、どんなにか――。

はやぶさの君が背教者をお好きだとあつた、お作を通しての君の御性格は、妾をしてうなづかせる、あれを好むと被仰る方はお慕はしいおなつかしい

妾はほんとに都會に生れたかつた、都會の雨はこんなに陰氣ではなからう(七月三日)

○

泣いて歸つてからまた今日逢つた、二人とも知らぬ顏してゐたけれど心は離ればなれになりつゝある、姉さんを正視するにはまぶしかつた、見つめてゐなさると感じても、別の方を向ひてゐる心は全く寂しかつた賴るべき人はないものと思ひつゝもなほ妾は姉樣を賴つて居たのだ、以後は、以後は、もつと〳〵强くなる小姉樣がお歸國とばかし思ひこんで居たのが仇になつた、何の爲に汝は小姉樣を待つのか、大姉樣をそむいた代りに縋らうとするのか、否、否、小姉樣は縋らるゝ方ではない、縋つた處でたゞ泣いて下さるのみだ他に進むべき道を指示して下さる方ではない、それは知つてる、妾は、泣いても上げやう――、泣いでも頂かう、弱いと笑ふ人は姉妹の情を解さないのだ、數年前、母の愛とはかゝるものかと始めて、十七の妾に感じさせて下ずつたのはあの姉樣だものたゞ〳〵なつかしい方と思つてゐる。それ以上小姉樣には何物をも望まない(七月九日)

水野君などに書かせれば立派な小說になるだらう、但十七とは受取れぬ、すくなくとも三つ位かぞへ足さなくては情がうつらない、尤つゞゝも若く〳〵と書くのがぺた一面だけれど(S)

○やみに吸はれて

福岡　つくし

外れて〳〵何處迄外れて行くのだらう、際涯なき闇路をすべつて落ちて行く樣な……此の思ひその喜びはしつかり胸に抱いたまゝ、

あゝ違い、お母様は矢張り立つて被在る——默つて覗つめて被在る。

母様、そんな處からこゝの私が能くお見えになりますか申しませうか此の喜びを

ね母様昨日はこれを洗ひました今日はかうして巻いて居ますやつと人手を借らず始末が出來るやうになりました、只これ丈けの事でございますけれど私は此上なく嬉しいのでございます、もう嬉しい日が二日續きました明日も明後日も否々一生かうして生きて行くのでございます。

眞に母様、私は山笠見にも夜市見にも行き度くありませんから何卒其處を退いて下さい、氣にかゝります、何卒、何卒後生ですから。

先刻から幾度か、もう人は居ない、とさゝやくけれど不思議にも承知せぬ我意識、そんなに張詰めて〳〵て如何します今に斷れます疲れます

暗中に小さく敏捷く動く指先とくる〳〵とすなほにまかれて行く白い長い布とを、覗つめたまゝ〳〵沈み行く深い〳〵沈默の果て、やがてやがてきれなんとする白い弦、五寸、三寸、あ、今、今、音なき音色、見えざる震動、かすかな笑が口元に浮んで來た。

巻き了へた五つの繃帶を並べてじつと見入つた時急に双肩に重い倦怠を覺えた、二三度大きく手をふつて見たが關節は普通に働くホッと一息して投げるが如く欄干に仰向に軀をもたせた。

あゝ疲れた、あゝ心地よい此の涼しさあゝ、あゝ、あゝ、何物もない何物もない只しづかに快い

しつとりとしめつた露氣と、そゝと輕ろやかな微風とを程よく含んだ闇が天から地から忍び寄つてそして頭の疲勞を吸ふてくれるのだ、あゝ心地よい

あゝ此のまゝ何處へか去つてしまつたら…… 闇に吹はれて……眼を開いても閉ぢても同じ樣な暗さ……だから眠つても覺めても同じだろう眠らうよ。やみに疲かれてやみに眠る……只靜〳〵しづかに安らかな世界、眠らうよ、

意識は漸々と遠のいて見ずきかず思ひ果てなき夢なる國へひかれて行く——

筆は夢幻的なれど、內容は何でも無さゝうに見える、上手には上手だ。（？の人）

○日記の內

徳島　みやてどり

三月二十五日。向への窓を開けると彼岸櫻の白い花が丁度盛り。スリッパのまゝ庭に下りると、草はまだ朝露に濡てゐる。ストーブに上氣した頰を。うすら寒い朝の風に吹かせつゝ花の下に立つた。手を延せばとゞくやうな東山に向つて…… 花に名高き都の春も、まだ見ぬ內は、嵯峨よ、祇園よ、淸水と、空想はそれからそれへと廻燈籠の如く取り止めなき、思ひに憧れてゐたが、いざ今となるとなんだか行きたくない。そして、いつまでも〳〵かうして此木の下で此まゝゐたい氣がする。フト後に振りむくと。睡さうなお眼遊ばしたN樣が髮の後れ毛を搔き上げつゝ立つておられる。「お早うムいます」と云つたまゝ二人共無言でゐた。暫して「保養園でも歩きましよう？……靜な朝の庭を二人は唱歌を謠ひつゝ心ゆくまでさまよつた。

N樣は弟さんの看病に來ておられる方で、お眼の大きなお顏の丸い二ツ年下の弟さんより却つて若く見える、で、いつかもV樣がN樣は姉樣の樣ぢやありませんねつて仰有つたら。「それでは僕の奧樣に見えますか」つて、大笑ひした事もあつた。お二人共それは〳〵大變に陽氣な方で——蕗の薹がふくらんで來たのをN樣が、まるで芋蟲の樣ですねつて仰有るから、一つ取つて袂の中に隱してKの室へかけて行つたら、K樣今の先やつとお眼ざめの處。B樣がいらつしやつてたのでお庭歩きのお思ひ遊はしてお顏の色まで變つてゐる。後でK樣今日は朝からお二人にお土産を。つて蕗の薹を出したら、アツイヤ——つて、もう皆樣本物とおかつがれましたネつて笑つていらしやる。

四月一日。夜中からゾク〳〵寒いと思つたら今朝はとう〳〵雪が降つて、遠い山々は眞白だ。もう四月と云ふに——。日曜の朝抱布變で彼處でも此處でも、ドン〳〵バタ〳〵ポツ〳〵と。埃が立つてゐる。其後を淺黃の洋服着た。掃除のおばあさんが。シボ〳〵の雜巾を棒の先で。ズルズルと只機械的にふひて行く、おとゝひからの熱がまだすつかりさめないで。頭がずん〳〵痛む。上に向ひて本を讀んでゐると、手が、しびれるので橫に向くと、額の氷囊がズル〳〵辷る。なほしても又ぢき辷る。

五月雛のでとう〳〵本をとぢてしまつた。此二三日は大分忘れかけられてゐたストーブも今日の寒さに又世に出て。皆様が其廻りを取り巻いて平井さんと云ふ五十餘りになる方が。コースをくべつゝ。弘坊様が日蓮様が等と一生懸命お話してゐられる。其横台からH様やM様が交ぜつかへしなさるので眞面目に聞いてゐられる方までが吹出しておしやひ遊ばす

今日は舊暦のお節句。前の日曜に買つて來た小さな人形を樂事棚に飾つておく。そして小さな桃の枝を挿した。夕方スミ様が雪白の小さな花の優しい。小米花の枝を持つて來て下さる。

夜になつて、藻の高い鉢のフリージャと、可憐の小米花と二つの白い花がクッキリと夢の様に浮び出で、神秘のさゝやきでもしてゐる様子…

○小川せん子様を見る

會津かよ

朝風が蚊帳をゆるがして、おきぬけの肌にヒヤ〳〵する位、もう初秋い ゝえ、まさか。ところどころ碧空が見える、板塀越しに金れん花に日の映つたのをうつとりゝ見入つてゐると、美くしい影がチラと眸にせん子様？あの瞳！きつと然うだ、我れ知らず立つた時は、お納戸の單に紅い帶の後姿が次第々々と私の眼前から遠ざかつて。露邊の、ウネ〳〵した細い道を、露草を踏んで美くしい人が行く。繪の樣！恍然としてみつめてとる内に見えなくなつて。せん子様よどうしても——あの日、石橋の上でお二人の姿を拜した時、瞬間であつたけれど、若々しい桃割れの優艶なお姿がハッキリと浮んで來ますもの。こんなに朝早くどこにいらつしつたでせう、ゆる〳〵歩いてゐらつしやるの、散歩でせう、それから詩やうたを考へてゐらつしやるでせう？。

庭を掃きながら影の消えたあの邊りを、幾度も〳〵みやつたけれど、どうしてもどつていらつしやらないの。違つたか知ら？、誰も〳〵せん子様のお顔に見えるまでに私の眼が酔つてるのぢやないか知ら、否いゝえあの横がほ、あの瞳！「唖とさうでないの二つ、姉さん！」ぼんやりしてゐると耳のそばでミーンミン、アッと耳を塞いでハッと氣がつくと白い嵌巻きの鬚が紫陽花の影から半身を見せてククククツて笑つてる　うつかりしてをられない！復みやつたけれどどうしても……

「呼んでるよ母さんが」

ア、慌てゝかけ上つた時はもう臺中に食卓がおかれて、私はタオル持つて急いで井戸端に行つた。

邊りを、細い道をみる事が出來なかつた。仙子様！、と思つたお姿を今一度はつきりと拜したいと希つたけれど遂に〳〵……でも垣根の外に見えた半身、遠くに消えた後姿、私の胸からは消えない！、優しい下駄の音も耳にのこつてゐる。（八月三日の朝）

せん子さんが背の君と會津に歸省してお城に上つた日の事である、をしどりはうつかり出られませんね（茶目）

○得わかぬ心

古河咲かぬ花

昨夜いつになく外出したのが運のつき、K様にお目にかゝつてからお別れしても心がいら〳〵して小間物店には寄つたけれど、金鎖一個買つた許りで出てしまつた。

K様は已に人妻である。かつては同じ學び舍に教へ草擴んだ身も、花鬚姿品よきマダム振りに妙に怖氣がついて、暗闇にかくれやうとしたら異さんぢやありませんかつて、すまないけれどお言葉かけて下すつたのが却つて私はうらめしかつた。

處女時代が一番ですわ。——私だつて自活の道があれば、何を好んでこんな束縛の境遇に甘んじて居るでせう。としみ〴〵仰しやつたけれど學はれぬ滿足の輝きは美くしい頬に溢れて居たもの。結婚が女性を美化する力の偉大なるに驚くと共に、うらぶれの身が恥かしくなつて、世間はひとりですから是非お遊びに、といはれた時には、もう三間もはなれて居た。

童貞—處女—何の誇りであらう、人なき室に潛々と泣いた（ある夜）

沈鬱な水無月の空、やるせなき思ひの身にはそれすら愁ひの種であるものを……。ハイカラな深紋へて頂戴な、妹が編物持つて入つて來た。美しう化粧つた妙齢の少女、近頃めきて美くしうなつたのを見ると、自分の妹ながら妬ましくつてたまらない。夢に現に日毎夜々床しのおもか

げ。自分にはそれすらないものを……

（或日）

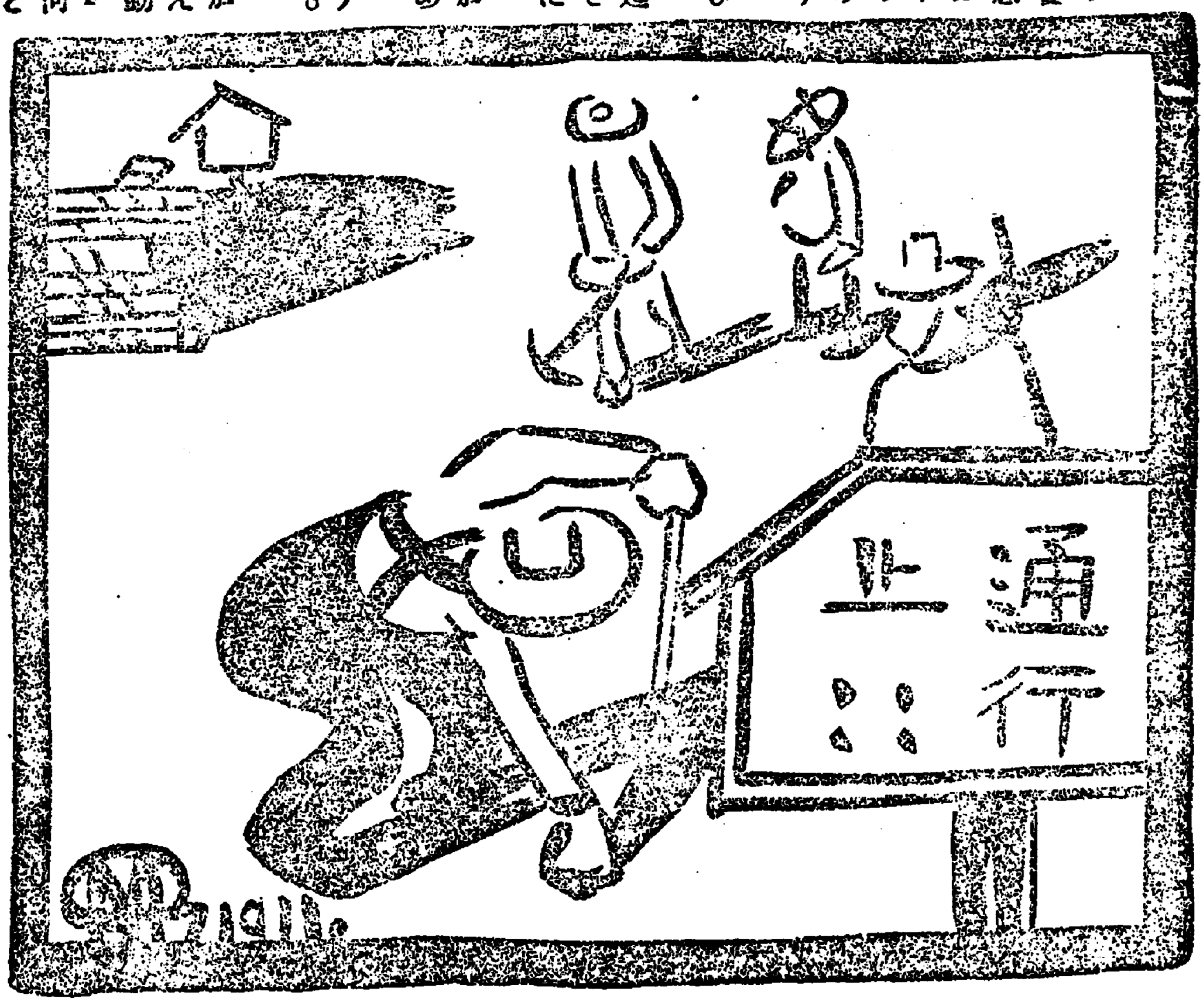
昨日縫ひ終へた父様のお羽織に、火のしかけて押しをおいた。机上の一輪挿しの小撫草がいつの間にか萎れて居るので、何か鐙りの花をと思つて鋏もつて庭へ下りた。名知らぬしいへ花に朝露が宿つて、いやます美かりの色。いろ氣がいゝから切つて活ければ、すぐに萎れてしまふのが、何か未來の暗示でゞもありさうで、此花がつくぐ嫌ひになつた。切つちまつて下さいなと度々お願ひするけれど……。

まあ爬の子百合の延びた事此間迄乳の處だつたのがいつしか肩をこしてしまつた。六月××日、葉の表に記した。又逢ふ夏の來らば!!

咲きおくれか返り花か、白山吹がたつた一輪、許してよ心なきをとめのわざを私は鋏を持ち直した。

家に入つたら人が居た。寒いですねといふ。袷羽織重ねてゐるくせに。まあ此の營いのに!

此頃のくせ、何かにつけて反抗がしてみたくてたまらない。物心覺えてから順境の人となつて、拗ねる動機がなかつたものを……。だからFさんは拗戻者といふ何でもいゝ、何でもかまはない、只私に平凡の女といはれたくない。（ある日）



道路　京都市　松井緑子

結婚した女に羨望の目を向くるはすべての處女のならひらしい。が「童貞、處女、何の誇があらう」はいやになる、結婚した女に何が有る?となぜ思はないのだ。羞恥を失してはいけませんよ。（SSS）

SSSは無理ばかり言ふね、あゝいふ考へを持てゐる女が不用意の間に性の秘密を暴露するのは面白いぢやないか（XYS）

○失望の一日

土佐　鍵山春水

今日こそと思つて湖まで來たのに急にあやしい雲が出て、折角思立つた張物も出來ず、糊の始末に困つて居るのに叔父樣てばあゝいゝ雲だなアつてカンバスと繪具を持つて飛び出していらしやつた。之幸と畫室に忍び込んで此度土陽美術展覽會に出品するといふ彌姬を見る。金扇を翳した十五六の少女の姿なかく〳〵の出來ばえと千頭先生は仰しやつて居らつしたけれども何所がいゝのか私にはさつぱり解らない、此樣なきたないもの……私だつて書けさうだ、まあ馬鹿に目の大きいこと。

姉ちやんダリヤが咲いてよ、との妹の注進に胸轟かし行つて見てがつかりした。名のみ聞いて久敷あこが

れて居たダリヤあゝ其花は天竺牡丹に何の變りもなかつたもの、此樣な位ならわざ〳〵態取寄せるんぢやなかつたのに——見やる庭の片隅重さうにうなだれた靑白い色の花、私はツト走り寄つて口吻づけた、淋しいけどもお前の清楚な此姿がいくら嬉しいか……亡母樣も好きだつたと言ふものねエ、お前!!紫陽花!!!

午後强雨に浴した夏木立風に白い葉を見せて涼しさう、納屋の庇と橙の枝に蜘の大きな蜘蛛がいそしく巣を作つた。叔父樣が椽がはで御園の空瓶へ食鹽をつめておらつしやるので、何ですか夫を聞くと、天下一品夏齒磨粉との事、メッボーカイ價が安いので澤山使つて舌を鹽漬にしない樣、と申上げたら何だじやうだんぢやない、鹽も一升七錢するからなあつて仰しやつた。齒磨の一升は隨分使ひでがしませうね、未來の貧乏繪師はさすがに經濟的だわホ、、、

今晩は藥師樣のお祭り白地浴衣の幾群かゞ門前を通つた。氷屋の客呼ぶ聲や、皮の弛んだ樣な太鼓の音がそゝる樣に聞えて來る。私もつひ行く氣になつて髮を結んでゐると、松崎の從妹が誘ひに來た

おなんど地のモスリンに墨縮の紹帶が又なうはえて、しなやかな肩のほとりふるひ付きたい程頭はいつものS巻だが少し高めに前髮をふくらして、潔白のばら一輪句はしてゐる。名家の令孃として一分の隙もない高尚な出立、美はやつぱし人格の一要素だ、此人と並んだら私は全く下女同樣、いやだ私はとんだ引立役になるもの、行きたくない……

私頭痛がし出しましたから今晩は止します……念入りにすいた髮を引詰のぐる〳〵巻にして手早く道具を片づけた。又そんな事を、折角澄江さんも誘ひに來て下さつたのに、祖母の目は不快相だつた。おばあ樣私だつて澄ちやんの樣な美人だつたら……默つて頭に手してうつ伏した

（失望の日）

どう致しまして、澄江さんより別嬪でゐらつしやるくせに何といふアテコスリ方でせう。ダリアと天竺牡丹が同じなので失望したといふが、ゲンノショウコでも立派な名が有り、勿忘草などはやたらに路のはたに生えてゐる借問す君が意中の人は雲岳女史かお金夫人か、

（日出島のかをる少年）

○誌友訪問記

埼玉　若葉

態と裁板の前に坐つて見たけれど、何物かに嗾かされてジツとして居られない、そんな決斷力の鈍い事でどうする!て心の奥の方で叫ぶ、それでもまだ幾度かためらつたけれど、思ひ切つて常着を脫捨てる。

丁度お晝少し過ぎたばかりの强い照りだつたので、近頃初めて外出した私は、暑くて堪えられない程だつた母校を出てから二とせの間會つた一度紀念日にお目にかゝつた切り、其の時はクラスメートとして殊に親しかつた友、今日は誌友として面會するのかと思ふと、初對面の人でも訪ねる樣な氣がする。

私はいつか運送の二臺も並ぶといつぱいになりさうな町の左端を歩いて居た、その時はもうMさんのお宅も見えて居た。

小僧さんがつく然としてお店に居るのでMさん御在宅、聞くと、默つて奥の方へ行つた、私は何となく胸騷ぎがした、暫くして「まあよくいらしつて下さいましてね、何卒此方へ」つて優しくおつしやつて二階へと通された、Mさんは今日、は前髮の思切り立つた束髮にお浴衣召した友仙メリンスの丸帶を可愛く締て丈はお高くないけれど、品のいゝお姿、學生の時よりもズツとお顏色が勝れてゐらつしやる、そして時々襟を掻き合せなさる手付のお可愛い事、御挨拶もそこ〳〵に「私貴女はきつと太輪の潰銀杏に結つてゐらつしやる事と思つてましたわ」つてひねくるつもりで云つたら「あら貴女隨分ね」つて氣まり惡る氣に微笑んでゐらしつたので却つてお氣の毒に思つた、話は級友の事から誌友先生方にうつり、文壇を前にして、種々な批評に思はず時を過したので堅く後日を約して、左樣なら、とお別れして奇麗に打水した町へ出た。

町はいつか華かな電氣に包まれて居た。

○淺間山

信濃　世良田優子

あれ淺間山が……お傻さん早く……悲鳴の樣な聲を上げて隣家の喜美さんは叫んだ、私は轉がる樣に飛び出た、まあどうしたのでせう大變ね母樣兄樣……私は夢の中で呼んだ其聲が餘り高かつたのだらう、向ふの家根の人が此方を振り向ひて見下して居る、私は恥かしかつた、兄樣は何事かと草履と下駄とチンバに一寸足の先に掛けて石につまづきながら出て見て、コリヤ大變だ、コリヤ大變だと……おつしやる、母樣も續いて出て來られた、道理で先き大きな何か破烈でもする樣な音がしたと思つたつけとおつしやる――まあ大變だ事ね、ほんとに大變だ、眞實に大變ですね、唯かふ云ふより外に此場合適切な言葉が一寸出ない、皆默つて空を眺め入るばかり、空は一面紅の煙が被ふて、末は遠く今や夕榮の雲に連れて凡てこれ紅、人も、鳥の羽根も、公孫樹の峰も、草花の葉も、石も、蟲も、凡て紅に包まれて、赤く輝く、處々眞紅の中に暗黒の姿した煙の浮流して居るのが物凄い、此まゝ世を燒くのだらうか……向ひの二階でも隣りの物干でも皆出てガヤガヤ何か話し合つて居る此上田ばかりではなく、山の見ゆる地方は、皆かういふ樣子だらうと思ふ、かうした場合人は何物も他に思へる餘地はないだらうと思ふ、唯紅の煙にのみ心吸はれて。もしこふした現象が長く續いたらば、人の心を被ふ凡ての苦痛、戀、涙、怖れ全く消え去るだらう、もしそう出來るならばそう有りたいと思つた、そしてしばしなりとも世の煩から逃れたいと思つた、否むしろ一歩進んであの紅の煙に人も世も燒き盡されてそして僞りのない清い正しいそして新らしい或何物にか變化したいと思つた、「兄樣は何と思つて」……そうさね壯麗だつておつしやつたきり私は物足りなかつた、母樣は……「山が燒けると戰が有るつて昔からいふよ」成程母樣には應はしい仰、！喜美さんは……そうねつて空を見つめて居られる……いつ迄續くのかしら、山はドン〳〵燃ゆる狂つた樣に、燃立て〳〵罪の子の心を新たにする迄



蟲の聲　北海道　蒲原てる子

燃えるのだらう、灰がサラ〳〵降り始めて來た。

西の夕榮はだん〳〵消えるともなく薄らいでゆく〳〵が纔けに益々晨紅に、紫に、暗黒の空の眺めを樣々に變化させてゐる、そして母樣も兄樣も芳美さんも私もいつ迄も飽かずに立つて眺めてゐた。

音に聞えた淺間の噴火、女性としては努めて描寫したものだらうがなほ力のある筆が欲しい（ＳＭ）

○命日

小石川　小萩子

灰色の雲は丁度家の庭にばかり覆ひかゝつてるかの樣に、紫陽花は死美人の聯想をおこさせるかの樣に、しほれかゝつて居つても露がかゞやいて居るのをみると、花は花だけ幸福である。佛壇の前で、木魚をたゝいて居らしつた、母樣がいきなりふりむいて「おまへ又そんなお葬式の時のリボンかけるのではありませんよ」と仰有る。緣側の端によつて居た、妾は電氣にでもうたれたやう、何故か涙が迸つて來て惡いとはしりながら馬鹿に、反省したかつた。眼にはあの淋しい病院のかべが浮んできて、冷たき御手を握つて父樣〳〵と叫んだ曉を思出ずには居られなかつた。熱い涙が頰につたはつたので、我しらずヂツト空を眺めると黑雲がむらむら魔の手の樣におこつてきた、妾は傘を片手に思はず門へ走り出たさつと雨が浴衣の袖をぬらしてくれたので、急に母樣にすまないといふ念がおこつてくる。茶屋の男に水をもたせて妾は奈落の底にでも落ちて行く樣な寂寥を感じながら、お花とお線香を持つてしめつた落葉松の上をさく〳〵とふむ。ぬれ松のみどりは薄日に照らされてしづ〳〵となり妾の前髪に落ちて玉とちる、墓標がみえる妾は堪らなくなつてかけよるあゝ人目がなかつたらしがみついて思ふ存分泣きたい、花筒にお花をさして父樣に申上げたい事を心の内で手を合せながらかきくどく。しきみからはハラ〳〵落る露の音に驚く〳〵と茶やの男はさも待ちかねたやうに箒と一所に垣根によつて此方をみて居る。サツト顔は赤くなつたけれど無情なよの中である、あゝ纔か五尺の土を離れて居るばかりに生と死の區別ある悲しさ、ふりかへれば御墓を飾る緋あふぎの花の紅と純白の桔梗とが深く印象を殘して更に〳〵涙がわいた、ゆらり〳〵と長い線香の煙は角を曲るまで私の影に追ひつかふと地をはつて居た。

令孃の墓參姿が眼に映る、父は此子を善く感化したのであらう（Ｓ）

○夜の街にて

東京　葛の葉

何とはなしにふらりとうちを出た。三枚裏の朱珍のはな緒に夜目にも金絲が來線の工合によつてはちかりと光る草履をはいて、私には連があつた。お弱いがために外出をおいとひなさるお母樣！どこかへ何かとお誘ひしても、につこりしては、まあ！とつよくお言ひなさる、日の中むされて家の中にとぢこめて居た魂は華やかに光る街の燈の樣々に、浮き出でゝは折々ゆら〳〵と風に袖まかせて、草履の足はかるかつた。

血をわけては居ないけれど、姉樣〳〵とすがりついて近きがまゝに日に幾度となく、往いては笑ひ、歸つては胸を抱いてはゝえんだ其姉樣にきつと泣かない筈で居てそれでとう〳〵二人はしがみあつてつきぬ涙の袖を西と東に別つて上京の途についたのも、もう一ケ月になる。姉樣と強く呼んでかくれたりしたあの頃は東京はまたなくいゝ處だと思ひ、また戀しかつた非常に戀しかつたが、今にしては西の空、岐阜、雲遠き思ひは堪へず不安を生む、なつかしきは私を生みて給ひし父母おはする郷青い火が赤くなり赤い火が黄ろい火の華と實を結ぶ、それをみてまたあお都だなあ、とも思ひおもふけれど。

華やかな瓦斯の燈、電燈の輝きに、くまなき月もあるかとれ人のめでぬ夜よ、人形町通りはあかるかつた。三宅堂で油をね、と母樣に仰有るえゝ、と私はかるくうなづいて、兩袖のひら〳〵ずるのを別におさへ樣ともしなかつた。

葛さんは生意氣に東京言葉を使ふなんていはれた私にさへ、仲々きゝとり惱い土地の言葉、かん高に可愛ゆい口から二人の女の子が、派出な麻の葉つなぎの浴衣とつたか何かを染めぬいた、お揃ひのをきて、リボン大きい子と桃割麗しい姉であらう、堪えず甘ゝえんでは話して行く

のにずりかずつて、三宅堂、田舎に居てよく物の廣告に人形町通りと吹聽してる油屋、まだ見た事はない、頭の想像と實地と思ひ當るか否か？と私は、ねお母さん立派ですか油屋はと首をかしげた。

蹈て東京を罵倒した君が東京の人となつた、稍餘奇餘、世の中は理窟でゆかぬ（S）

○岸より

しづか

定樣今頃はもうお床の中でせう。だつてあなたは、有名な早寢と、朝寢の先生ぢやござい亦せんか。アラK子など知るものかつて、けれどKはちやんと存じて居りますよ。オヽそう〳〵、またやつと七時過ぎたばかりなのにコクリ〳〵お遊ばして、顔中墨だらけにして、Kにふいてもらつた事は、お忘れにならんでせう。ほんたうにあなたは、早寢は、あきれますよ。今夜はもうとつくに、七時は過ぎましたが、私は今、村境の流の岸に立つてボンヤリ水に寫る月の影を、眺めて居ります。え、何？弟と何か爭つて飛び出したのだらうつて。まさか何が何だつて……弟はもう定樣のお弟子とみえまして、ムニヤ〳〵と夢のお國に遊んで居りますもの、まあ何といふ目的もなくたゞブラリ〳〵と出たのですスルト此の月なのでせうと申ても、お床の中のお方には、どんな月かおわかりにならないでせうが……まるで湯屋の隙間の間から、スラリと片手にぬれ手拭をさげた美人が顔を出したやうな、月がフワリと畑中のヒヨロ松にひつかゝつて居る、かのやうに、梢の間から、光をなげ出して居て、あたりはまるで畫のやうです。私はつい月に引張られるやうにこゝまで來てしまつたのですの。岸に立つてあたりを見れば、山も、森も、社の屋根も稻田も、ボーツとして、まるで夢の中にボカツと見えるやうな山や森と同じです。山から流れ落ちて來る水が、キラ〳〵と月にうつつて丁度眞珠の瀧のやうですのよ。田間では、ゴト〳〵と蛙が田舎びた、野呂間つたい聲を自慢さうに張り上げてないて居るのが何だか自分のドラ聲を知らずに、美音家氣取りで、田植歌をうたふ、田舎娘のやうでおかしうでざいます。あゝいゝ晩だ。オヽそう〳〵また都に居た頃、このやうな晩はきつとあの池の邊に行きましたのね、ねむい〳〵とおつしやるのを無理に引張つて行きましたね、ホラあなたの好な藤棚の下の椿池のまん中にかゝつてたでせう。あの橋の上に立つと、二人の影が……定樣のは、汀の霧島のよりずつと長かつてね。私のは霧島と同じでしたわ、そして時々池の底から鯉が泳ぎ出しては、二人の影を、亂したぢやありませんか、スルト定樣は「憎くらしい鯉だ」つて……今夜もあの頃のやうに、月がうつくしくてよ。岸に霧島はなくとも野ばらがやはり影を寫して居ます。時々スーツと風が來ては、私の影を亂して行きます。けれど少しも憎らしくはありません、だつて影が、一つしかないのですものあら里の子供が草笛を吹いて居ます。淋しいものですのね。もう何時でせう、大變に、頬をなぶつてゆく風が冷たくなりました、もう私歸りませう、女があまり、おそくなつての夜歩るきもいけませんわね。叱つちやいやですよ。大丈夫道に迷やしませんからぢやおぢい樣によろしく、玉ちやんにあまり、昨日贈つた、桃を、食べ過ぎて、けん〳〵わをせぬやうにと、云ふて下さいね。さようなら。

「定樣は私の未來のなのよ」と書きそへてあれは本物だけれど、これだけではオヽそう〳〵おヤスイおのろけです（茶目）

○營口より

營口　古谷小桃子

支那のお葬式を見ました、近づいてくるのを見ると、一番先には紙と土とで作つた女の人形が、馬に乘せられて來る。次にも一つ男の人形が笑顔をして人の肩にかつがれてゐる。日本の坊さんらしいのが五六人、手にブリキで造られたやうな樂器を持つて、チヤラン、チヤランと鳴らしてくる。飾られたドンスが山のやうに盛られて、棺（寢箱）が來る。

寢箱　兩わきには、泣き男が青い顔して添ふ、後から穢い支那馬車に、泣き女が、頭から肩までズツクのやうな袋を被つて、めちや〳〵に泣きながら乘つてくる。次の馬車は子供や親類が幾臺となくつゞく。

新市街の支那人君は殘り惜しさうに見てゐる、私共はをかしさをこらへて、漸く寄宿舍に歸つてきた。

珍（S）



俳句

内藤鳴雪選

○（天）
夏の夜の懐かしきもの灯かな　宇都宮　松井清子

○（地）
松蟲や名妓のはてのひとり住み　岡山市　柿園白花

○（人）
名月を仰いで吠ゆる野犬かな　京都市　ほゞ枝

佳作

柿おつや兼好殿のつれ〴〵に　山城　木の花
蝶になる草はと妹に問はれけり　淺草　露木あき子
頬紅のこのごろさめぬ秋の風　大阪　小泉貞子
炎天や馬逸したりと人走る　失名
夕暮や子を呼ぶ牛の聲暑し　宮城　馥子

油斷して居れば立ちけり秋の風　群馬縣　新弁つゞ子
夏草や古井の底の水の音　千葉　冬子
三井寺の鐘を別れの月見かな　島根縣　藤田盤子
蟬なくや柿の大木の傘に似て　京都府　竹岡末尾
秋近し水車の小屋に河鹿鳴く　南千住　吉田清子
この里や懐しき名とて咲く桔梗　横須賀　加藤楓子
綿交の吹き散らされつ秋の風　神戸市　雪の女
白露や草の中なる寺一二　兵女史
霧盆の木立の雨や不如歸　香川縣　星野ワサ子
蟋蟀一夜平語を讀む夜哉　美作　青北まさ女
世を忍ぶ男女や木槿垣　水戸市　島田霜子
山姫の片頰に白し秋の月　群馬縣　高橋夕星
夏の夜を三味ながしゆく女かな　城南　小島美雪
初つゆに野菊しら菊うるはへる　京都　要司村福子
蚊遣火に面そむくる女哉　茨城縣　麗子
初秋の吸二つも戀しかり　越後　藤原竹子
七夕や三粒の雨の物思ひ　北海道　山本夏子
白波や綸蚊帳に凉し小夜嵐　熊本縣　しらはぎ
先生を慰め申せ夏の蝶　渡島　華子
鳥邊野の雨に暮れ行く芒哉　深川　佐久間貞子
なつかしき君住む空や月一つ　渡島　宗原美津子
長き夜や猫の鈴とるはかりごと　千葉縣　若菜みどり
失戀の窓打つ秋の夜風かな　上毛　荒井よし子
柏手や森の祠に風薫る　岡山縣　藤本靜江子
百合の露花もろともに散りにけり　茨城　田村波津子
由良の戸や一舟秋の空に入る　上總　西山露子
白萩にいほりを結ぶ詩人哉　仙臺　安井優子
こほろぎや筧に涸れし水の音　山口縣　椰良美那子

月見草蕾き野を來て父の墓　美濃　夢の人
躑躅の今年も茲に萩の風　神戸市　潮の女
朝つゆをけたてゝ行くや草苅子　千葉縣　工藤碩子
春を戀ふ鳥の心ぞ狂しき　長崎市　村尾澪子
陣中に物書く夜半や時鳥　宇都宮　間準江　鹿韮子
旅衣今ぬぎすてし歸省哉　南千住　清　子
松に來て千鳥の聲や夜を悲し　東京府　竹村壽尾
八ッ頃や御嶽に例の雲の峯　知多　榊原銀子
日の當る城の甍や夏の雨　麻布　小倉うた子
梧桐落ちて詩人歌人の世なる哉　福井　北　明星
紫陽花や雨の中なる嵯峨の里　宇都宮　松井玉子
秋の水たゞいたづらに流れけり　淺草　松原雪子
ほろ〳〵と雨の降る夜や雁渡る　新潟縣　西須葉久子
御車のみ鑣吹く奈良の野分かな　横濱　都美路子
秋風に母が縫ひたる袷かな　渡島國　福山町
籬屋にしだれて散りて萩の花　土佐　はぎ子
繪日傘の後姿や蓮の池　前橋　みどり
山しげり谷しげり清水音高し　近江　植村露子
初嵐一葉飛で矢の如し　水戸市　根崎俊子
日盛りや長うしきたる雞のこゑ　佐賀　泥　子
梶の葉に歌書く妹やひそやかに　姫路　磯　菜
夏の月浪打際に二人哉　渡島　岸浦交江
小夜更けて夢のやうなりきりぎりす　上毛　落　葉
桐一葉師の坊をたつ朝かな　麴町　牧野はん子
夏痩と知らねど舞の袖重き　東京　ゆふかげ

今朝見ればベンチに蟬の殼一ツ　三河　樋谷ともえ
見るうちに畔に堆き苅穗哉　大阪府　辻井信子
夕涼み芝生に琴を奏でけり　茨城縣　岡田つゆ子
傾城の今宵歌あり星祭り　埼玉縣　鈴木美津子
砥の如き電車の道の柳哉　岡山市　桃のむら女
森に來て馬もろ共に[illegible]かな　知多　みどりは
入梅して頭腐ると思ひけり　根室　齋藤ふじ
行き暮れて道問ふ里や飛ぶ螢　茨城縣　花岡千代子
暮の秋玉を抱て罪ありと　越後　藤原歌子
靑すゝき馬子うた欲しき野原かな　岡山市　柿園花子
ガラス戸を通して窓のみどり哉　北見　白　椿子
夕月の影のうとさよ露の草　本郷　井上さだ子
夏痩せの重たき髷をかこちけり　岐阜縣　八千代子
摘草や親しく話す知らぬ人　岡山縣　野崎よしの
南國や額にうつる紅の花　下關市　木本蘭子
さら〳〵と小笹動きて秋の立つ　府下　高木姫百合
夏痩の女語らず秋に入る　神奈川縣　鈴木梅子
古板戸の倒るゝ音や今朝の秋　京都府　竹村槇子
葉櫻や琵琶になきたる夜なりしが　淺草　若　菜
雛僧のましろき脛や清水汲む　福岡　田中ゆたか
ふみ月やおぼろの夜のすゞみたい　美作　美津　多
コスモスや多病の君が窓見えて　武藏　しらは矢
流賊のかまど殘れり枯野原　神戸市　三木白菊
椅子による夏の夕や草の風　和泉　金田ふみ子
桑の實の濃きむらさきのうとましき　神戸市　足立春子



初作

編輯局選

○都の客（八）

信濃　三村かゑ子

東京の靜さんが暑中休暇になつたから、避暑がてら、久ぶりで、御出になるつて、此間御便りが有つた。其日から私はたあいもない空想や、想像に、耽つてどんなに樂しみに待つて居たらう、昨夜、松本へ御宿りになつて、今日の午前には、家へ入らつしやるのだ。

靜さんは私と同じ年、幼い時一度入らしつたから何か印象された事でもないか、と、思つてハートを探して見たが、何にも思ひ浮ばなかつた、すつかり忘れてしまつて居た。

女學校へ這入て居らつしやると云ふから、吃度、ハイカラだらう、御髮はローマか、マガレツト、に結んで五吋巾とかのリボンを飾つて、御出だらう。

マガレツト、――ローマ、――雜誌の寫眞で見るきり、片田舍に住む私は、實際結んだ人を見た事がないんだもの、早く〳〵靜さん入らつしやればいゝ……。念を入れて綺麗に掃除した御座敷の、緣側に、兩足をぶらりつと腰掛けたまゝ、又例の想像に囚れて仕舞つた。

青葉の何處かで、おり付く樣に鳴いて居た蟬が、何に驚てか、パツタリ鳴止んだ。深綠の木立をめぐつて來た微風が、心地よく前髮のほつれをゆるがせて、開け放した部屋に、音もなくスーツト流れ入つた。

……、がら〳〵つと、わだちの音烈しく、御隣の橋を渡つたか、と、思ふともう家の前に響が止んだ。私はハツト何者にか、あやつられた樣立上つて、母樣の處へ、注進に馳て行つた。母樣の御出迎へに行かれる後から、私は胸を躍せながら、行つた。私の瞳は機敏に動いた。叔母樣より大きく、すらつと立つて居る靜さん、――マガレツトでなければローマと、思つた御髮は、一寸細目な、前髮の、ふつくりと大きい桃割、――赤いひもの根掛に、大輪のホワイトローズの簪を差して居た。名も知らない綺麗な御付に、ピカ〳〵光る帶、――紋付でも着たら、背の紋が見えなくなるだらうと、思つた位ゐ、胸高にキチンと締てゐた。御納戶色のシルクパラソルを、左手の中指に、輕くさゝへて、輪廓のはつきりした、白い顏に、淸冷な瞳、パツチリと見張つて、ニツコリと、微笑でおらしつた、スタイルは純日本風な娘――。都會の女學生と、少なからぬ興味を以て、腦裡に、ゑがいて居た、靜さんとは、まるつきり變つて居たので、淡い失望を感じた。が、それも瞬間「マアよくいらしつて下さいましたねー、さぞ御暑かつたでせう」つて母樣のおつしやつて居る間は、私は叔母さんと竝んで居た靜さんの、軟かい手を握て居た。靜さんの瞳も、私の瞳も、悅びに輝いて居た。

車夫から渡された大きなかばんを抱えて、バタ〳〵行く私……靜さんの眼にどんなに、をかしく映つたらう。圖拔て大い髷に、細い飛白の單衣を短加減に着て、巾の狹いメリンスの帶をチヨツキンと結んだ姿は……這那事を思つたら、たまらなく後から、くすぐられる樣な氣がした。

夜は、何時にない明い洋燈の下に、家內中大きなチヤブダイをかこんで、叔母樣の快活な御話し振り、――(主に帝劇の御話に)耳をかたむけて、明け安い夏の夜の更〳〵るのも知らなかつた。

瑕がないと云ふだけで、未だ何ものも見あたらない(評)

○動機

仙臺　花精

今まで絹絲より細く降つてた雨は、急に强く風さへ加へて前庭の、萩のやさ枝を折らうとすさんでる。

開け放した椽側は、吹き入る雨になかばぬれた、暗くなつていやだがしかたがい、讀みさしの本をなげすてゝ、雨戶を繰り出した、今まで晝寢してゐらしつた母樣は、突然大聲に「二階はどうした」とおつしやるより早く母樣は馳け上がつていらしつた、今朝欄干の格子も室の窓も開け放し

て置いたからきつと、ぴしよぬれだらうとひやく〳〵してた。ヒステリー性の母樣は早や持病の大聲をなり立てゝ、下の兄樣のお室にはお友達の二人もおらつしやるのに、あたりはゞからずどなつていらつしやる、皆樣のお耳に入つた事と一層切ない妹を叱りながら閉めておらつしやる母樣のお聲がますく〳〵高くなるので、新參者の常やはウロ〳〵用もない所を歩いてた。逃げる樣に臺所に姿を消した、私は早く行つて手傳ふ氣も失せた。自分が自分を怪しむ程冷やかな態度で眉一つ動かさず閉め殘した樣に吹き入る雨など意ともせずしほらしい蕾を持つた萩に、どう〳〵降りそゝぐ雨を無意識に眺めつけて居た。二十分も過ぎたと思ふ頃現からさめた私は、名づけ樣のない悲しみを覺えた、そしてなにものかを解さうとあせつた嗚呼！おやさしの姉樣も矢張こんな思ひが若しや、動機になつてあさましい結果を見たのぢやあるまいか。あの内氣な方が何につけ彼につけきびしい我家を出歩いたその後兩親を捨て故郷を跡に、伴れさへこしらへて無斷に家出なされた、お心を知り得ぬ幼き我は、不孝兒よ無情の姉よ恥知らずと、怨らみもし泣いても見た、然しお姉樣のお心の切なさはどんなであつたらう、今日といふ今日は怨みを捨て同情に眞から泣いた、嗚呼―自分もいつかはこんな思ひを可愛い妹に味はせる事ではあるまいかと、おそろしさに身慄た。

動機の心持をも少し強く書いてほしかつた(評)

○日記の一片

彼奈子

學校がないと退屈して仕樣がない

今朝御琴の歸りに柳正堂に一寸よつて、女學世界と女子文壇と婦人世界を買ふ

うちへ歸るとすぐ離れへ行つて、一番うへの女子文壇から讀み出した、暫らく此の雜誌を愛讀しなかつたので今見てホントにびつくりした

誌友倶樂部のにぎやかなるに、

わたしはいろ〳〵の雜誌を讀むけれど、一度も投書した事がございません、いゝえ投書する事が出來ないのです。今も女子文壇の誌友倶樂部に投書しようと思つて紙片に

「わたしは甲府の女學校に通學いたしてをります……敬する皆々樣よ

なにとぞ御交際を……など書いてみたけれど

こんな事を出して朋友が何か云ふだらうか？

記者さんが笑ふだらうか？

變な事に氣をもんでとう〳〵袂のなかへまるめ込んでしまつた

毎月自分は新しい雜誌を手にする毎にこんな事を何度となく繰り返してゐる

どうしてこんなに文章が下手なのだらう

我が唯一の友なる雜誌にすら投稿する事が出來ないのだもの、

色々考へたら悲しくなつて思はず涙がこぼれた。

これだけ書けるなら何か外のことも書けるでせう(評)

○水

神田 水口靜子

恐ろしい雨の音に夢は破れた、きつと床の上に起き、直つた私は、水に對する恐怖は失せて、大人らしくおちついた。そして水を見る氣にまでなつた、時計を見れば午前一時である、ねまきのまゝ外へ出た、藤さんも、達ちやんも、おぼつかない顏してつつ立つて居る。

おそるべき水の力よ、にくむべき汝の姿よ、

あゝ、今ほどかつて汝をうらんだことはなかつたものを、けれど、さんざん人を困らせたあげく、どうすることも出來ない水をいぢらしく思ふ、深くうらまるゝのがいとしうてならぬ、水よとく逃れよ、夜の明けぬうちに、なつかしい樣な悲しい樣な思ひが、おとなしくおとなしく湧いてきた。

右手の坂の上からは激流の直下か、どぶの中は濁流の暴下か、水勢とみに亂れて暗の中をくんずほぐれつ猛烈に土砂をえぐつて、何も彼も丸のみといふすさまじい勢である。

がん燈持つて見まはつた私は、いひ知らぬ感動と驚きと一時に胸をついて、口を結んだまゝ深い〳〵呼吸をつゞけた、と見る左手の水中に、

ぱつと電燈が光つた。

警報？　面白いといふ心もちが、自分ながらはづかしいまで、どうきの數でわかつた、かなり深くなつた、四つ辻のうづまく中を、わけもなくすー―とよぎつて、音もさせずに通りすぎた――手腕――は忠實なる電報配達夫であつた。

この深夜、この雨の中、この水の中、あゝ何といふ愉快なことであらう、ほゝ笑まずに見送るのがつれない樣な氣もせられて、苦もなく乘りきつた自轉車の姿が。妙に嬉しく感じられた。

雨は縱にとめどなく降る、水は益々横ざまに、溢れる、家は坂の中途にある、氣づかふことはない、而して私はより以上被害のはなはだしい處に居る人の心もちは遂に知ることが出きなかつた。

配達夫に愉快を感じたのは賴母しい(評)

○若き憧憬れ

早　百　合

「男女七歳にして席を同じふせず。」支那人ぢやあるまいし、此の文明に生れた、女を捉へて、朝から晩まで、六づかしい事を言つて、いらしやるお父樣、いくら、有難い御言葉でも、時代が違ひますから、と、言ひたくなる。それでも、家長の御言葉、背く譯にもゆかず、おとなしく守つてゐる。けれ共、現代の若き女が、此の、表面の平和を、永久にどうして保たれやう。何時かは、暴露する？あはれ、處女十九の花盛り、燃ゆる思ひを深く祕めて、冷靜な態度を守つて居られやうか。かすかに見ゆる夢の園、紅いの花、咲き亂れる自由の樂園。どうして憧憬がれずに？！えゝ焦れつたい。加代樣は、この樂園に遊ぶ自由の人、羨やみの眼は、やがて、涙で充滿になる。衣服も、櫛も、何も、いらない。常から慈ふ母樣も恨めしい。縫ひかけた衣服を、放り出して、加代樣を、お訪ねせうとすると、「何ですはしたない」と、母樣の鋭い眼が光つた。口惜しいやら、腹立たしいやら、結び上げた高髷もむしりたくなる。ぢつと、涙の目で睨む？熱い涙が、ポタリ〳〵と落ちかける。もう睨む勇氣もなく、心檸しきれず、とうとう、泣き出した。「お父樣に叱れるよ」たゞ一語お母樣には、この一言が、凡てを總括した言葉でもあらうが、私にはそんな事を考へる餘裕がない、この語の中に、最愛の塊があるであらうが、私にはそんな事では滿足出來ぬ？！もう、小供ぢやない。大人なんだ？！かうして、悶え〳〵、狂ひ〳〵て、空しく散る草葉の花と終るのか。あゝなつかしい、靑春の輝き？おゝ戀しい、情熱に、樂しむ樂園の人??

可愛らしい氣焰(評)

○夏の朝

金　澤　俊　子

今朝は近頃にない、早起をしました。

唐松絞りの浴衣を、すべりと着ると、身も、心も、すが〳〵として、誠に、心地よく、思ひました。

庭下駄はいて、飛石の上に立つた。あたりは一面に、うす霧に包まれ、なつかしい新綠の香が、みち〳〵てゐる。靑葉を渡る凉しい風が、柔かく頰をなで、髮のおくれ毛を亂す。私はこの新鮮な空氣で、幾度も、深呼吸を致しました、そして、朝の自然の快よさを、しみ〴〵と、味ひました。

生ひ茂る、靑葉は銀の玉を、のせたやうに、美しい露を宿してゐる。と見ると其葉がくれに、赤く色づいた鬼灯が、ぶら〳〵下つてをりました。私の胸の奥に燃ゆる、向上心の炎の、それのやうに、赤く、赤く、はなやかに……

私は、妹のお目覺しになすべく、その赤いのをちぎりました。とたんに、露の玉は惜くも、はら〳〵と、手の上にこぼれた。

私は、鬼灯を握つたまゝ、突つ立つて妹の、喜ぶ樣を想像しました。

●初作●　▲初めての投書を此欄に掲ぐ

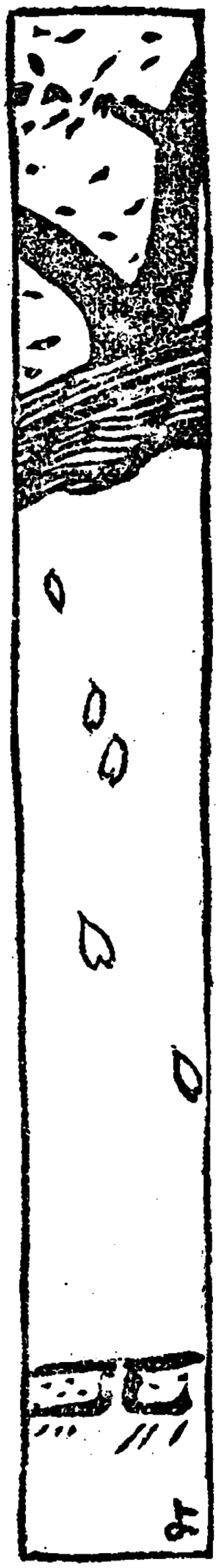
▲文章は作つて見るべし

▲文章は出して見るべし

▲文章は人に見せるべし

評

●募集●　者



誌友くらぶ

交際を望む

○大阪東區大手通二丁目　田野しか子

▲御挨拶　此頃は餘程涼しく相成りましたが御記者には些少の御變りもなく日々御精勤の事と賀し上候　毎號面白き記事此身に利益となる事澤山御載せ下さいまして有がたうかげながら私も本誌のますく盛んなる樣力を入れております末筆ながら時候の變り目に御ざいますれば御自愛なさいましさよなら又繪葉書の御交換誌友の皆樣に御願ひ致します

○京都府加佐郡舞鶴局下本間小谷徳藏方　小谷ゆり子

▲初めて　私は本月から本誌の愛讀者となりましたが初めて投書を致しました以後は御見知り下さいまして御交際の程偏に願上ます

○朝鮮京城大和町二丁目六十三番戸　筧浦きよ子

▲朝鮮より　誌上の姉上樣私は三年前からの愛讀者ですが、くらぶにだすのは始めてゞす何卒不束な者ですがよろしくお交はりを願上ます

○長野縣北安曇郡平村口四八一　工藤清子

▲草深き田舍より　誌友の皆樣に御願申します私は何も知らぬ隨分なお轉チャンですが何卒親しき御交りを願ます　そして御玉章繪はがきなどを御送り下さいましなもとより不學の身で見苦しう御ざいますが御返事は屹度さし上げてよ又雜誌等をお送り下さいました方へは繪はがきか寫眞か御望によりますれば當地山中の珍物をも送ります　それから私は一寸白馬山てふ山の麓なんですから當地お出の御方はお寄り下さい

○美作國苫田郡奥津村　水田邦子

▲およろこび　縣下の皆樣方、實にお目出度ございます、朝な夕なに、誌友會！誌友會、と思ひ續けてゐたら、望み叶うて、愈々十月には開けますつて、妾眞實に嬉しうございます、皆樣方も屹度！どうか一日も早く、ね。幹事の皆樣待つてゝ頂戴、屹度參りますから。美作の愛讀諸姉樣！　羨やましうございますわね、是非入らつしやいましよ、そして十一月には津山でも開きませうね。

○近江水口町　細野鈴蘭

▲誌友會　來る十一月十九日あたり誌友會秋の會を開かうと思つております、廣く縣内の皆樣の御來會を待ちおます　委細は次號に申し上げます

○宮城縣柴田郡金ケ瀬村山泉方　加藤ざん子

▲淋しい處より　妾は鳥も通はぬ深山に淋しく暮して居るものよ　誌友の姉上樣行末永く變らぬ御交際をして頂戴な殊に繪葉書や皆樣の美はしき御寫眞大すきなのよ

○兵庫縣姫路市本町川島方　赤堀磯菜

▲御交際を　私は父も母もない極く寂しき者で御座います、白鷺の里にわびしくも秋の日を送つて居ます　女子文壇を手にする毎に何時も誌友の皆樣が懲しく懐かしく存ぜらるゝのです、私の樣な不束者にでもお交り遊ばして下さる方が御座いますればどうぞお手紙下さいませお願ひ

致します

○

下野今市小倉の里
高村瀧子

▲日光の片山里より　私は日光の淋しい片山里にライフして居る者で御座います、御情深き誌上の君樣レターや繪葉書の交換遊ばして下さいましな 御願上候私の淋しい時と共に定めし姉上樣方も淋しう御ざいませう

○

名古屋市相生町二丁目
山口樣方　竹内さかえ

▲お寫眞　皆樣親しくお交際下さいませ、繪葉書かお寫眞かをお惠み下されば すぐお珍らしいものと言ても別にありませぬが相當の御返禮はきつとするつもりです。 溫いレターの交際も望みます皆樣きつとよお願ですよ。

○

神奈川縣久良岐郡 六浦莊村三分
小泉くに子

▲都の方に　私は田舍に自然を友として暮して居る者ですせめて御手紙なりと都の事物に接したうござ います お惠み深き誌友の諸姉樣あはれな私に御手紙御惠み下さいそして御敎導を願ひます

○

鳥取市湯所町
井上彌生

▲鳥取より　讀者諸孃樣よ私は草深き田舍に住む淸き少女でございますから以後誌上にて淸き淸き御交際を願ひます

○

上毛長野原局區内
茂木芳江

▲繪はがき　誌友の皆々樣方よ妾美人の繪葉書を好みまするがどうぞ 妾の風景其の他と御交換を願ひます。

○

豐後　散る花

▲かなしき時　皆樣秋もいよ〳〵深ふなりまして私の樣な淋しい 性の子には泣くのにいゝ時となりました 皆樣はさぞかし此の秋を詩界に筆を取つてたのしくお暮らしあそばすのでせう、 本誌九月號の月の夜語りをお書き遊ばした 坂東太郞樣は本誌の記者樣におなり遊ばしたので 御座いますの…… そしてあの内の大分縣臼杵に云々とありました臼杵は 只今私の現在地なので御座います、 かりそめにも本誌に田舍の當地の出たのをよろこんで居ります、 終りに本誌々友の方で西大久保白日社（詩歌）の社友の方が御座いますか、 御座いますなら御通知下さいまし私は一號からの社友です。

○

長野縣小縣郡長窪古町
小學校内　宮島千代子

▲再び御交際を願ふ　本誌愛讀のみなさん――東京を慕つて東京をのろつた私も今になつて自覺致しました、 却て田舍に居て日本中否外國までも配布される本誌上で御交り下される方と永遠にレターの交換等をするのを切に望みます 不遇に泣く私を――御助け下さい、 御交り下さい屹度御返事致しますから。

○

廣島縣神邊町黃葉山松岡立一
別莊に於て
松岡なつ子

▲黃葉山より　誌友の皆樣淋しい秋がきましたね妾は此の淋しい秋を只一人黃葉山中で 女子文壇を友として心をなぐさめて 居る者ですがどうか御交際下さいませ 殊に繪葉書 趣味を以て居りますから屹度交通を御願ひ致します

○

茨城縣新治郡林村字根小屋
島田きく子

▲繪ハガキ狂　皆々樣今からお交をして下さい妾女の癖に繪葉書狂です 皆樣御心ある御方は送つて頂戴な、 きつと返禮します。 末長く御交り下さる方は濟みませんが、 御寫眞を送つて下さい、 私も磐若の泥溝の樣な寫眞を送呈いたします、 どうかね皆さんお願ひです、 濟みませんが男子の御方は御免下さい。

○

東京府三宅島阿古村
彥坂蝶子

▲島より　磯うつあら波や千鳥の聲より外に友のない私は島の女であります、 諸姉樣、 磯の松風にも涙して暮らして居る境遇に 御同情なされて何卒御見捨なく 御交際下さいませ、 そして寫眞や玉章の御交換も切に御願ひ申します。

○

出雲松江病院内
石原とら子

▲みな樣　私はこれからこの淸い女子文壇の愛讀者となりましたから 妹と思召て末長く御交り下さい

○

奈良縣北葛城郡高田町東口
喜治緋沙子

▲不束ながら　おなつかしい誌友の姉上樣私は至つて不束なものですが どうか永久にお交りをおねがひいたします そして時々御たよりして下さいなお待ち申して居りますわ。

○本郷元町一ノ二吉田方　大塚敏

▲皆樣　私は至つて不恙なものですがどうぞ妹にして御交際下さいな レターや繪葉書の交換が致したう存じます 頂ければ美しき皆樣の御寫眞を頂戴致し度う存じます 私も屹度御返禮致しますよ、どうぞいつまでも御みすてなく

○德島市　横山三枝子

▲誌友の皆樣　私も皆樣におとらぬ本誌愛讀者でございますよ 高女校を出たばかりの處女でございますが 何卒御交際下さい

新潟縣三島郡塚野山村　内山まさ子

▲交際を望む　愛讀者の諸姉樣方よ其後は永く御無沙汰致し誠に失禮で御座いました 玆に謹で御詫び申上ます 妾しは四十年の一月から愛讀者になりましたが 本年不幸にして病氣の爲め一時中止致しました諸孃樣何卒御手紙及び 御寫眞の御交換を御願ひ致します

○横濱市南太田町七〇三
増田内　中田元子

▲おたづね　皆樣に御伺ひ申しますGペンの使古しがたくさん貯まつて居りますが これで何かこしらへたいと存じます どうぞ御存じの御方は御敎へ下さいまし

○長野庶子

▲富士登山　寺田よし子樣の富士登山の記を見て壯快を感じました 私も去る七月下旬に兄と從姉と三名にて吉田口より登山致しました天候不順の爲雨中の登山で御座いましたけれど當時を追懷して愉快に感じました

○千葉縣君津郡佐貫町幼稚園内　石川恒代

▲山里より　記者樣初め誌友の皆々樣私は多年女子文壇を愛讀して居りますが 未だ一度も投書いたした事はありませんが これから鵞つて及ばずながら投書致しますから 誌友の皆々樣何卒御交り下さい必ず御返事は差げ上ます

○山口縣都濃郡戸田村　河津さい子

○岡山市(第一回)誌友會開催

皆樣大變涼しくなりました△時日（十月中旬日曜日を選ぶ）と會場(市内)とは十月七日までに御申込下さいその都度お答いたします△會費は三十錢位にて△男子は無論入場お斷り△第一回なのですから出來る丈け美しく樂しく、皆樣に御滿足を與へたいと、面白い餘興などもいろ〳〵工夫中△女子文壇を御愛讀なさる御婦人方は擧つて御來會を懇望いたします。

學生のお方は級の皆樣を御誘ひ下さい。郡部でも近いお方は御出で下さい。

△當日の盛大ならんことを祈ります。

申込所　岡山市八番町一番地古田方　村井君子宛

發起者　立岡房之　入江翠波
村井君子　桃のむら女

▲歌俳句　諸姉樣方妾は田舍の不束者でありますが何卒行末永く御交際を願ひます。繪葉書や歌、句をも交換して下さいませ

○三重縣松坂町新座町十八　村田英子

▲繪ハガキ　所有分本居宣長翁の御肖像、翁の書齋鈴屋を祭れる神社翁鈴愛 伊勢神宮津名所加良洲浦阿濟圖識三重名所其他美人風俗 祭典種々求むる分日本三景富士山外國 内地美人外國名所外國人物等のぞむ

○鹿兒島市西田村三四八松田方　中尾雪子

▲始めて　誌上の姉上樣方私は永く本誌を愛讀致して居りますで投書は始めて此後永く 御交の御交換を願ひます

○岐阜縣加茂郡川邊局下
米田山茂東一一ノ一　渡邊甲子

▲名所繪はがき　皆樣おなつかしう御座います 妾昨年十月號より女子文壇の愛讀者なの 何卒これから不束者ですが 御交り下さいまし永久變らぬ御交際をして頂戴な 東美風景名所繪はがきなどどし〳〵御送りいたしますからねえ

○神戸市今宮町二丁目七十九ノ
十二、濱中孫次方　中田雪花

▲秋の音信　諸姉樣妾等の待ちに待ちたる秋は參りました皆樣には 御變りは有りませんか妾も數年前からの愛讀者です 今後御交際を御願ひ申上ます

○

福井縣坂井郡坪江村

坪田久子

▲山里より　私は昨年高女を卒へて山里に淋しく暮して居るもので御座いますが今後何卒〳〵諸姉樣、誌友として御玉章の御交際をねがひます

○

芝區愛宕下町四丁目西一番地

吉田東馬方

海老澤きみ

▲秋來る　みな樣淋しい秋は來ましたのね……私はね此廣い都に友もなく淋しくくらして居る哀れな者でございますみな樣　レターおめぐみ下さいな

○

名古屋市西區本町五丁目星野方

山田楓花子

▲繪葉書　皆樣殘暑烈しくってお變りなくって此春から愛讀して居ます不束者ですが、おなつかしき誌上のお姉樣方お玉章の　お交り下さいな又繪葉書も大好物ですから御交換下さいませ

○

茨城縣新治郡土浦町下高津

栗山眞佐子

▲おなつかしき諸姉樣　私も愛讀者の一人なのよ、どうぞ以後は末長く御交際を願ひます返事は必ず上げますわ

○

能登輪島町和佐吉方

酒本利子

▲能登の一角より　親愛なる諸姉樣方へ御願ひ申ます　妾は能登の果に住む不束な田舍娘ですが何とぞ親しき御交りを御願ひ申ます　妾は幼少の時父をうしない今は一人の妹と　母上の實家に淋しく女子文壇を隨一の友として　暮して居ります何卒御情け深き諸姉樣方よ　永久にかわる事なく玉章を頂戴ねもと〳〵ならわぬ筆のかなしさ御見苦しう御座いますが　屹度御返事は致しますよ男子の方は御ことわり致します

○

神戸市楠町六丁目百十四

村田保子

▲誌友の姉樣方　私は不束者で御座いますが色色の小說や御玉章の交換を願ひます

○

越後柏崎在下宿閻王寺內

千代香

▲貴重なる本誌を拜借して　女子文壇愛讀者の皆々樣のお中にて、地方から東京に出ておらつしやる方もしくは　東京市內の御方でも或る一個の職業に就いて居られる女子の方と　虛僞なき眞面目の御交際を切に〳〵希望いたします。　いづれ委細は書面にて

○

千葉縣市瑳郡南條村小田部

土屋福子

▲新しく　誌友の御姉上樣よ私も先月から本誌愛讀者になりました未だ十七歲の少女で　不束者でございます　何卒末長く御交際を願ひます御手紙下すつた方には御返事差上ます　そうして御寫眞の交換もねがひます

○

德島縣勝浦郡小松島町

安宅貞子

▲お願ひ　おやさしい誌友の姉上さまお變りはなくって私も女子文壇の　愛讀者の一人なのですわけども何にも存じません　不束者で御座いますのよ　何卒妹とお思召してきつと〳〵とこしへに變らぬ御文通をおつゞけ下さいまし　お願ひいたします

○

神戸市奧平野村四百十九ノ一

中村君子

▲お手紙　誌友のお姉樣御手紙で御交際を願ひます又名所繪葉書雜誌など御送り下さい　御禮には好いものを差送りますから　又編物なども交換して頂戴ネ

○

上毛群馬郡上郊村

塚越和歌子

▲皆樣　だん〳〵寂しくなりますね思召しのある方はお手紙下さい

○

書籍交換

栃木縣芳賀郡山前村道祖土

高松妙

△讀みたい書。「女子文壇增刊婦人ノート」「紀念百號「新文章」「八月の婦人畫報」「人の兄後編」

▲持てる書。「女學世界」「婦人世界」「少女界」「煩悶」　と云ふ小說「新小說二三冊」「冒險談」右いづれにてもおのぞみの方は　葉書にて一應お問合せ下さい

○

北海道栗山局區內

蒲原照子

▲新聞と雜誌　北海タイムスの東宮行啓紀念號彩色美麗記事豐富な新聞を皆樣に御分ち致します地方繪葉書で御申込み下さい、尙ほ私の持つておる本は　自然と人生、マダム振り、嫁にゆく人へ手紙、女學世界、婦人世界、　古い本誌等ですからどれでも昨年の本誌か　文藝くらぶ已が罪の

下巻等で御交換を御願ひ致します

○　和歌山縣那賀郡粉河町字猪垣
　　　　　　　　　　都田操

△求む分。「青春(いづれの巻にてもよろし)」「郎興詩人」「ハムレット」及び哲學書「デカルト」のいづれから

▲所有の分。「日本及び日本人一月號現代諸家の俠的人物觀」「トルストイ敎訓小說集」「紀行文」「女子消息帖下」「初等オルガン敎科書」お望により二冊以上、又古るくて失禮なれど「明治才媛文集」三冊又「女學世界(但し增刊はなし)四月より八月まで。以上いづれかと交換下さいませんか御望みの方は一應おはがきにて御紹介を願ひます。

○　大阪府下泉南郡東鳥取村石田
　　　　　　　　　　中谷つぎ子

△皆樣の中に「菊地幽芳」の箏子の後編と孝女白氣の上下どちらでも御不用の方がありましたら何卒少らくの間御かし下さい　御禮には美しき名所繪はがき御送り申ます　又編物御送り下さつた御方にも繪はがきで御禮致します

○　兵庫縣有馬郡三田町　辻井方
　　　　　　　　　　酒井きく

△日本美文女子作文外小說　七冊雜誌二十冊ばかり御座います　故皆々樣の內でヴアイオリン又は手風琴御不用の方がありましたら　交換して下さいなゆづつて頂いてもよい事どう　お願ひ致します

○　茨城縣新治郡高濱町
　　　　　　　　　　立川武子

△洋畵講義錄全部十二巻　讓りたし私ヽ丁寧の性一點の損所も無しお望のお方は御一報あれ

○　東京府下大森入新井村根岸
　　　　　　　　　　美馬民野

△誌友の皆樣御手許に、晶子女史の歌集、夢二畵集を御持ちの方は何れの巻にてもよろしう御座います故御ゆづり下さいませ汚れのないのは外國繪はがきか又は編物の栞差し上げます御望みの方々は御一報を

○　下野今市町
　　　　　　　　　　手塚久子

△姉樣方のうちで今博文館發行になりました內藤千代子樣のスヰートホームを御持ちの方が御座いますかありますなれば私におゆづり下さいませんか一應はがきにて御問合せ下さいませ

○　廣島縣安藝郡矢野村
　　　　　　　　　　桑原しめ

△妾は本誌を唯一の樂しき友として日々佗しき生活をして居る者ですが誌友の諸孃方と親しく御交際をお願ひ致したいのですまた「福來博士の兒童心理學講義」「學校管理法」「裁縫秘術要綱」等もつてゐますから必要の方は御らん下さい

○　伊豫別子銅山通り土佐高藪局區內
　　　　　　　　　　山中春子

▲持つて居る書物。寄生木、一葉全集、妾の罪、小公子、不如歸、露子夫人、世界見物、秀才文壇、女學生、婦人世界、女學世界

△讀みたい書物　夢二畵集、小女の戀、思ひ出の記、紅葉全集、乙女の秘密日記

○　滋賀縣蒲生郡西大路村大字仁本木
　　　　　　　　　　增治浪江

△御姉上樣方の內でヴワイオリン御不用の御方がありましたら私に御讓り下さいませ御返禮として女子美文、箏の花美文短文紀行文、小品論文白玉姬、閑日月、膝栗毛　伯爵婦人、マアテルリンク物語作文辭書、數學辭書、和歌と俳句、作文獨習書日本地理日本歷史東洋歷史西洋歷史各辭典なほ他に小說や文壇の御好きな方にはいろく面白き本がありますから手製のひじつきも添へますどうぞ御不用の御方は御知らせ下さい

○　深川區東森下町三十五番地
　　　　　　　　　　林秋月

▲持つて居る書物。「夢二畵集」春夏秋花の巻、「枯木」「自然と人生」「荷風集」「ツルゲネフ散文詩集セニリア」「日蓮論」收穫、人間修養論、颶風戀風、前中後の三冊、不如歸の歌、天路歷程

△讀みたい書物。別離、寄生木、路上、欺かざるの記

他に不用書籍雜誌もあります　御希望に由つては交換致します

○　久留米市外掛赤村古賀樣方
　　　　　　　　　　兒崎勢香

▲所有の書籍。幽芳著二人娘新泉著故鄉を出づるの記、浪六著五人男、帝國文庫膝栗毛、小品文粲花紅葉、あられ酒、歸省、自然と人生、千代田文庫近松傑作集、秀文增刊、青風號、春風號、新進號、其他四三、九より四四、七に至る例號、女學雜誌、などでございます

△欲しいもの。ハーモニカ、琴、お禮はお送りの品の倍以上致します。皆さまどうぞ御交換下さいませ

○　熊本縣下益城郡豐田村　阿高校內

△誌友の皆樣手許に左の不用書がありますから晶子樣の歌集夢二畫集(何れもどの巻でも)その他詩集などゝ御交換下さいませ、但前以て御一報を願ひます

文學全書第四編、生學生訓、女子の修養、婦女家庭訓　その他婦人雜誌

秋月子

〇

群馬縣多野郡鬼石町樹生區九二

新井つま子

▲所有書籍。泉鏡花「愛の火」。春雨「紙果花」。花袋「小女の戀」。天外「草笛」。藤村「新片町より」。宙外「冷涙」。秋聲「焰」。天外「初姿」。等

△見たい書物。竹久夢二サヨナラ、同冬及び秋の巻、前田夕暮、收穫。尾上柴舟、靜夜。與謝野晶子小扇。ヴワイオリン

個人消息

▲松並紫花樣って何て御優し想なお方でせう御姿といひお作と言ひ、誌友の方々の内では一番好きな方、九月號の「田舍少女に金色夜叉をきかす」といふ所等、私は其時、先生と仰いで御やさしい御話しを伺つた少女が羨ましう御座います、何卒松並樣いつまでも女子文壇の投書家でおらしつて下さい。(神奈川、しゆん子)

▲白露さんあゝなつかしき御たより下さいまして有難とう貴女は先頃多度山へ御出で遊されたそうですが何故私の宅へ御立より下さいませんでした私は今もなほ妹とさびしく月日を送つてをりますから何卒末永く御玉章をよびエハガキにて御交際なし下さいそして貴女御さしつかへなくばどうぞ御住所及び御姓名御知せ下さい御願ひ致します(三重縣桑名郡野代村大字中須二四水谷瀾生)

▲皆樣美しい繪を御惠み下さいましてまことに有がとう存じます、其中に七月九日出の「高木たか子樣」ほんとに申譯も御ざいませぬがあの御住所を書いたうはづゝみがなくなりましてほんとうにすみませんが御返事も差上られませずどうぞもう一度御ハがきでも下さいませぬかどうか御願ひ申上ます(旭川にて後藤もと子)

▲赤羽の伊藤けい子樣、度々御手紙有難うございました、貴方は私を御存じですかは知りませんが、或る事情のため以後絶交致しますどうぞあしからず御ゆるし遊ばせ(王子町大浪勢い子)

編輯通信

誌友の噂

△山田邦枝子さんは前月初旬、中央新聞記者今井氏と婚約成り、日比谷太神宮に結婚式を擧げた、爾來麻布の新居に在り。

△長曾我部菊子さんは増澤出版社に入社した

△内藤千代子さんは其近作を集めて一冊となし『スヰートホーム』と題して出版した。

△舊い誌友の境遇が變化すると共に、新しい誌友が多くなつた、此頃は投稿家の中に新しい顔が非常に増加した。

△大阪　京都邊にも筆の立つ人が追々増加して行くやうな傾きが見える。

△丹後伊志子として詩歌を出して居た中澤いし子さんは先々月亡くなられたさうで友人の埋木さんから通知があつた。

△東京神田の川島直子さんも七月六日病氣の爲に死去された、九月號で同孃に返事を請求された方があるが右の次第で混雑中御しらせも出來なかつたと懇篤なる通知が直子さんの父君より本社に送られた。

▲賞品禮狀　紀念第百號及び六月號賞品發送に對し、御禮狀を送られた諸孃、確に拜見いたしました、御丁寧に。

雜報

豐年

今年は颶風が吹いたり、豪雨が降つたりしたけれど、全國一體の上から見れば被害は一部分で全國米作豫想高　豐作を報じてゐる、即ち收穫高は五千三百餘萬石とあつて、平年よりは約八步の增收を豫報してゐる。それは本年の夏より秋にかけて、氣溫一帶に高く、全國暑熱が烈しかつたから稻の成育よろしく、大厄日と稱せらるゝ二百十日も、二百二十日も全國を通じて殆んど平穩無事、而かも八月中、一日として華氏の七十七度以下に降つたことがないから斯く成育が宜かつたのださうだ。稻作の豐凶は地方の人氣に影響することが多大だから、豐年と聞くと欣ばしいのである。

枝柿

△我國學界の泰斗故總檢校塙保己一は先月正四位を贈られたが、九月十二日は物故後滿九十年に相當するので、四谷愛染院に於て神佛兩樣の祭典が執行された。

△大阪の『帝國新聞』は經營の方針か變つて主筆結城禮一郎氏を初め薄田泣菫氏など多くの記者は退社した。

△老優市川團藏は九月十二日　七十六歲を以て逝去した。

△島村抱月氏は　郊外戶塚村に新築中の邸宅へ近々移轉の筈。

△文藝委員會は前月十六日例會を開いた、長谷場文相も臨席した。

△大博覽會開設の曉には、會場附近の交通機關を敏活ならしめるため、一時間二萬人を運び得る設計をしてゐる。

△鳥取の片田舍に百〇七歲の老媼がある、四國順禮に出ること百二十九度、先月七日大阪天滿天神社に參拜した、此老媼の夫は醫を業とし先年百〇一歲で死去したさうだ。

△東京市中、畜犬の口綱が癈されて、犬どもは大よろこび。

△何ういふものか此節は男女の心中が多い。

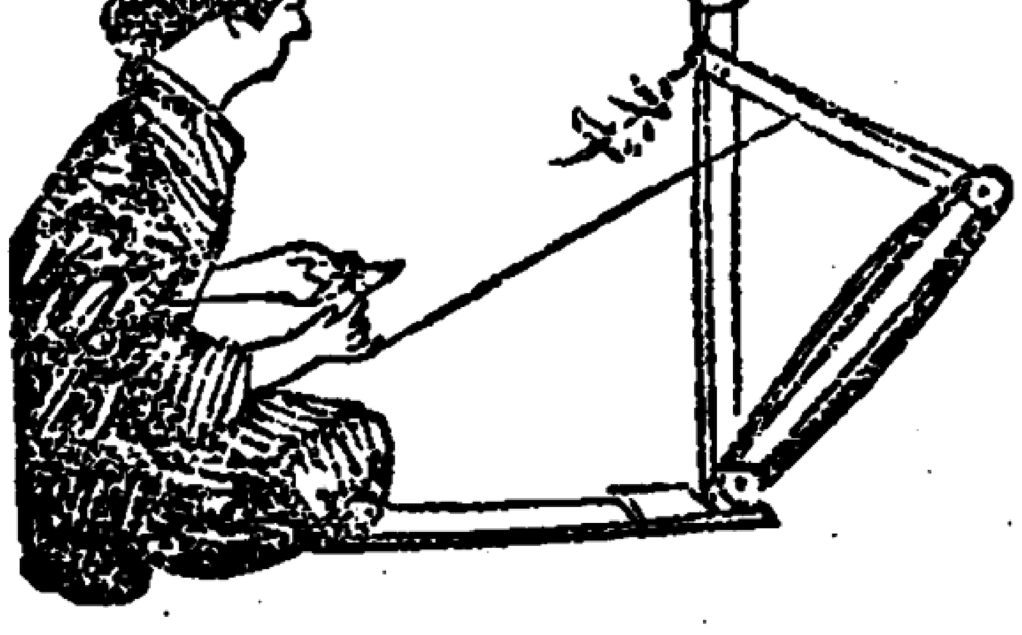
△今年は陰曆に閏があるので觀月が二度あるといふ人がある、旣に前月に仲秋觀月を濟ました人もあれば、本月六日(陰曆十五日)が仲秋だと待つてゐる人もある。何れにしても好いが只本年は殘暑が長かつたので、本月の月の方が仲秋らしいであらうと思ふ。

△日本畫家菱田春草氏は　前月十六日病を以て逝去した、氏は青年畫家中でも無線畫に新しい試みを爲し第一回の文部省展覽會に『落葉』を出品してから畫名夙に高くなつたが僅に三十八歲の弱齡を以て亡なつたのは惜むべきことだ。

△東京の道路に大革新が施された、未だ日本橋京橋間の大通りと、本鄕の大學前とで、全市の上から見て區面が一新したとは云へないが、追々は市內殷賑の通りに及ぼすであらう。新道路の路面はアスフアルト、又は木造であつて、堅牢に地盤をかためた上、改修したのだから此の圓滑にして平坦なる路面は、砥の如しと云ふ文字も嘘ならず思はれるやうになつた。

▲絲掛附絎臺

御婦人方が針仕事の時に、綛絲を絲巻に巻き取るには、一々人様の兩手を煩はし、其上に絲が亂れたり、よごれたりしまして、一方ならぬ不便ですが、此絎臺をお用ゐになりますと、圖の如く人手を煩はさず、獨りで絲巻へ自由に巻き取る事の出來る絲掛が附いて居ります。此絎臺は、其上絎臺のみの御用にお使ひになつても、少しの御不便もなく御使後は、折疊み自在ですし針差や、尺度を自由にしまふ事が出來る重寶な品です、尚此品の使ひ方は、圖にある二個の絲掛車を、絲の輪の長短に依つて、ネジ鋲で自由に締め、絲口を中央にある輪に通はして絲巻に巻きますと、二個の絲掛車は自由に廻轉りまして、人手を煩はさず、容易く絲巻に巻けます。發賣元は青山南町二の十六竹中商店



新刊

○路上　若山牧水著

若山牧水君の歌を集めた『路上』が出版された、君の歌は日本純粹の歌――乃ち奈良朝時代から明治の今に至るまでの歌人の血統――を繼承して、然うして現代の空氣に包まれてゐる作だと思ふ。甚だ漠然たる言ひ方だが、君の歌は新しい、新しいが其中に何となく素朴な、大ざっぱな、神經や官能の鋭敏でない山國的氣分が磅礴してゐると云ふやうなことだ、何れ折を見て詳しく批評してみたい、此處に『路上』より二首抜く（定價七十錢小石川竹早町博信堂出版）

長月のすゑともなればほろほろと落葉する木のなつかしきかな

かへるさにこゝろづきたる掌の中の河原の捨てられぬかな

○俳山水　泉鏡花編

これは珍しい方法で編輯された俳句集である、日本全國津々浦々の何處彼處と言はず、苟くも其地を歌つた俳句一切を集めて、之を國名地名に分類してある、名のある名所古蹟は勿論、名のない山水も亦此書出で、俳句の上から認められたことになる。袖珍本八百頁、天金つき函入の美本である、表裝萬端近頃凝つたもの だと思ふ（定價金九拾錢、本郷龍岡町聚精堂出版）

○女子文壇定期號投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること▲小說と、詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る、長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◎投稿は每月十五日到着を以て嚴に締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

▲小說と散文には、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し二頁以內の短きものは此限りにあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は郵替切符にて贈呈す。

▼女子文壇定價早見表　每月一日發刊、年四回增刊

冊數	定價前金	郵税	合計
一冊（一月分）	拾五錢	壹錢五厘	拾六錢五厘
三冊（三月分）	四十三錢五厘	四錢五厘	四拾八錢
六冊（半年分）	八拾四錢	九錢	九拾參錢
十二冊（壹ケ年分）	一圓五十六錢	拾八錢	壹圓七十四錢
定期及增刊號とも	定價前金	郵税	合計
增刊一冊	貳拾錢	壹錢五厘	貳拾一錢五厘
半年分（八冊）	一圓二十二錢	拾貳錢	壹圓三十四錢
壹年分（十六冊）	二圓二十八錢	貳拾四錢	貳圓五拾二錢

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金に込の時、必ず右誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと　用紙は最寄郵便局にて無料にて與れます。郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增のこと（收入印紙謝絕）。最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告掲載料

壹等	一頁參拾圓（半頁廿四字三十二行）	
貳等	一頁貳拾五圓（半行五號字二十四字詰）	
參等	一頁貳拾參圓　半頁十三圓	一行四拾錢

申込期限　發行前月十五日

取扱所　博報堂。電報通信社。弘報堂。文明廣告社

明治四十四年九月二十五日印刷納本
明治四十四年十月一日七年第拾貳號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社
電話　京六〇七番
振替貯金口座壹七壹九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、良明堂、其外全國書店